

# 直木賞受賞作

第2回(昭和10年下半年)受賞

吉野朝太平記

鷺尾雨工

第一卷 昭和10年7月・春秋社刊、松柏館発売

底本

昭和33年4月25日 東都書房刊『吉野朝太平記 第一巻』第一刷

入力日

平成14年1月20日

入力責任

Webサイト「直木賞のすべて」

URL <http://homepage1.nifty.com/naokiaward/>

Email [pelebo@nifty.com](mailto:pelebo@nifty.com)

目次

師直の放縦 <small>もろなお ほうしやう</small>	2	水分館 <small>みくまりやかた</small>	71
京の日野邸	8	四つの首 <small>くび</small>	78
水越峠 <small>みずこしとうげ</small>	11	咎の徴軽からず <small>とがめちやう</small>	84
吉野の日野邸	15	攀慕の愁腸 <small>はんぼ しゆうちやう</small>	89
弁内侍受難 <small>べんのないしじゆなん</small>	19	干戈動く <small>かんか</small>	93
追及 <small>ついききゆう</small>	25	瓜生野に腥風すさぶ <small>うりうの せいふう</small>	97
鹿路平の血烟 <small>ろくろ だいら ちけむり</small>	30	遠大なる抱負 <small>えんだい ほうふ</small>	102
准后への惘願 <small>じゆんこう こんがん</small>	36	師直出陣 <small>もろなおしゆつじん</small>	108
六本杉の怪異 <small>かいい</small>	43	往生院訣別 <small>おうじやういんけつべつ</small>	112
千早と新屋敷 <small>ちはや しんやしき</small>	51	四条畷合戦 <small>じやうなわてがっせん</small>	123
東条の城 <small>とうじやうしろ</small>	59	四条畷の敗報 <small>じやうなわて はいほう</small>	132
後室来訪 <small>こうしつらいほう</small>	65		

## もろなお ほうしよ 師直の放縦

「うふふふ、うい奴だ」

そう呟きつゝ、高師直は、几帳のかけから現われた。

白絹の布帛で、濃い胸毛の、ふとく縮れたのにたまつた汗のたまをぬぐいながら、つりあげてある半部の下まで出て、熱ぼつたい息をあらく吐きだしてから、ふかぶかと外気を吸つてほゝえんだ。

庭苑は桜花の夕ぐれだった。

西の対屋の廊の欄に、寵愛の側室——側室には違いないが、二条開白の妹姫だから、実にはやんごとなき高貴な身分なのである。だが師直の愛子五郎丸を心ならずも産まなければならなかった——その二条御前つきの女房たちのもたれているのが、花の隙間に、おぼろに見えた。

師直は、

「小渚——」

と、女の名を呼んだが、答えがなかった。

几帳のかけでは、小渚が装おいをなおしているらしく、桂のすそが、ほの暗い中でゆらいだ。

「どうじやな、三位卿よりも頼もしくはないか？」

師直は、脂ぎつた鼻と、厚い唇をゆがめた。小渚は、文章博士、日野三位行氏卿の愛妾だった。

「これさ、もはや恥じろうにも及ぶまいに、さあ出てまいれ」

袍も、表袴も、ぬぎすてて、下がさねの襟をほだけ、ながい石帯と、金蒔絵の太刀とを、床にほうりだして——。でも、頭には、巻纒の老懸をかぶつたまゝの師直であった。

きょうは、洛西の天童寺に、持明院法皇が、嵐山の花をみそなわした。

師直は、それに扈從し奉つた供奉の正装を、ふだんの狩衣に着かえる暇さえ惜しむほどに、あわたゞしく、こゝ一条今出川の、自分の館の東対屋の間へ、女をひき入れたのであった。

「小渚。まいれと申すに」

ふたゝび呼ばれて、女は羞恥をおびつゝ、師直のそばへ歩みよつた。その柔かな手くびを、ぎゅつと捉らえて、

「約束の品々を、とらずぞよ」

そういつて師直は、あかあかともう灯のはいった別室へ、小渚をつれてゆくと、

「おゝ！」

おもわず驚きの目をみはつたのも道理、台のうえにうず高く、まばゆいほどに見事な錦の綾が、女人のこころを惑わさずにはおかぬような絢爛さを、きらめかしつゝ積みかさねられてあつたのだ。

「なんとまあ、あでやかな綾錦！」

手を、胸に——。動悸をおさえて、

「あの——これを？」

「遣わすのじや」

「くださる？ くださるのでございますか？」

「その裏も取らずぞ。こなたの台の上のだ。それをあけてみい」

高脚の台のうえには、縫箔の布づつみが載つていた。

なかばは夢心地で小渚が、裏みをとくと、なかば、燦然とかどやく砂黄金——。

「あつ！」

あぶなく倒れかけて、ようやく肘で、軀をさゝえた小渚であった。目をつぶつて、額には八の字を刻んで、たしなみも、すっかり忘れて、あえいだ。

「なんと、嬉しがるう？ 師直は、偽りは申さぬぞ。遣わすと云つたら、

かならず遣わす」

と、こだわりなげに笑って、

「首尾よく、三位卿と北の方に因果をふくめて——納得をさせて、梅枝とかを囷につかつて、吉野の宮居から、このわしの、首ったけの——な、あらん限りの財宝にかえてもと——それほどに想いがれて

いるあの美女を、まんまとおびきだしたなら、ふんふん——」

目尻に、卑猥な皺を、ふかぶかと寄せて、  
「この懐に、しつぽりと、かい抱かせてくれさえすれば、成就の謝礼には、どんな褒美でも、およそ望みのまゝであろうぞ。なんの、これしきの、当座の引出物は、ほんの手附だ。ふとした出来心から、そなたをもせがんだ、その酬いは、また何ぞ別に考えよう。わしは女に、物吝みはせん」

四十代を、なかば過ぎたとは思われない師直の、壮んな顔顔を、いかにも靈験のあらたかな、福運の神でも仰ぐような気持で、小渚は見あげた。

「きつと頼んだぞ」

「はい」

女の肩に、大きな掌をかけて、片手が、黒髪をなでた。

「立ち戻って、申すべき筋道は、忘れはしまいな？ 先刻いゝ聞かせたとおり——よいか？」

「はい」

「師直に逆らわば、誰であろうと容赦はせぬぞ。顔世を出し渋ったために、身をほろぼしたのが塩谷判官だ。かんがみていましむべき前例だぞ。くつがえった車の轍は、心して踏まぬようにと——まず北の方に申せ」

「はい」

「わしの所望に、かぶりをふった菅宰相も——なんぼ菅原道実の子孫であろうと、いかに北野の長者であろうと、な、あの最後じゃ。公卿でも、殿上人でも、この師直に睨まれたら、いのちはなかるうと、三位卿を、

おどかすのじゃ」

「はい」

さすがに怖気だちながらも、小渚が、  
「わたくしに叶いまするかぎりは——」

と、答えたとき、襖へだてた彼方の廊で、

「師直、師直」

と呼ぶ、従弟の、播磨守師冬の声がきこえた。

## 二

頭にだけ、勿体らしく老懸をつけた、変妙な姿が目に入ると、

「な、なんでござる埒もない、その風態は！」

師冬が、いらだつた声で、とがめた。

だが、みだらな態を、一向はじめる気色もなしに、師直は落着きはらつて、

「用か？」

「師直」

あきれた眼で師冬は、従兄と、ついぞ見知らぬ女とを、見くらべて、  
太い眉をびくびくとしかめた。

すでに膏肓に入った悪癖ではあるし、師直ほどではなくても、師泰も、師秋も、また師冬自身にしても、決して女あさはり嫌いどころか、高の一家一族は、その道の達者ぞろいなのだが、いま、容易ならぬ噂を、聞きこんで駆けつけただけに、腹にすえかねた思いで、

「一大事が、起りかけておる」

と、叩きつけるようにいうと、

「ふうむ、一大事がの」

師直は、まるで他人ごとらしく呟いた。そして手を伸ばして、小渚が軀をさがらせていたのを、またも身近に引きよせて、

「あれ、武州さま！」

と小声でこぼむのを、小脇にかゝえて、白い頬にほつれる鬢の毛を、

まさぐつた。

「女を、女をはなたれい」

「大切な女だ。感心な心がけの者だぞ。和ぬしがせくなら、こゝで聞こうではないか。かまわん、申せ」

「細川、畠山、石堂、吉良など、十五六人の大名らが集っている」

「師冬が、髯のあつい顎を、つきだすと、」

「上杉の屋敷にか？」

「おう、御存じかもはや？」

「いや、知らん。話せ」

「上杉も、今日という今日は、堪忍袋の緒をきらしたと見える」

「連判でも、つくろうというのか？」

「お身の、毒舌のたゞりだ。のどかなるべきお花見の御遊に、月卿雲客のつらなる前で、あのように完膚なきまでに、のゝしられては上杉とて、無念骨髄、つね日ごろお身をうらむ宗徒の大名らを鳩合して、下御所へ弾劾の決議をつきつけるかも知れぬ。いや、きつとそいういたすであろう。下御所にとつても、お身は目の上の瘤じや。うっとうしゆうて、こらえかねてござるぞ」

下御所というのは、足利將軍尊氏の弟、直義のことである。

「ふゝゝゝ！」

と、師直は、あざけり笑つて、

「連判に、頭かすがそろわば、わしの地位、あやうしと和ぬしは申すのか」

「それはお身への、將軍の御信頼を疑いはせぬが」

「なら、案ずるな。執事の権能を、わしからうばう力が、直義どのにあるものか」

執事というと、名は軽そうにきこえるが、実は將軍の代理者ともいえる権力を、がっちり握っていた師直であつた。だから天下の副將軍とあがめられる直義にたいしてさえ、一歩もゆるろうとはしなかつた。

「しかし——」

と、師冬は、頭を横にゆすつて、

「国々に、戦雲うごきつゝある時ならばいざ知らず、吉野がたの、おもなる大名小名が、なかばは滅び、のこるは屏息、意気なえて、康永このかた、すでに五年の泰平つゞきだ。それゆえ、わしらの武力も、ひところほどには幅がきかぬ。世がおだやかでは、弱いやからの、人なみづらが通る。われわれ高の、兄弟従兄弟が、いかに戦つたかを、彼等はわすれて、たゞたゞお身の、権勢と、富を、にくみ、うらやんでゐる。しかるにお身は、強氣一図の自儘三昧——認識をかい豪奢のたらだら」

「はゝ、なにがたらだら」

「美邸に住むもよし、美女を蓄うるもあながち悪しくはなけれど、ほど、ほどがござるうぞ」

「いな。お許までが——」

「いや申す！」

百戦不撓の双肩を、ぐいとそびやかして、

「かくいう師冬、そもそもこの館が気に入らん」

「さようか。だが、わしには、かなり住み心地がよい。雑賀石の巨大なのを運ばせて、築山には、宇津の峠のおもむきを象どつたし、泉水には、難波の葦のながめをうつしたでの」

「そ、それがよくない。悪うござる」

「普請にも、念を入れたぞよ。寢殿、対屋——泉殿から渡殿まわり

——」

「武州っ！」

と、師冬はさえぎつて、

「武弁武士の棲家には、とんと似合わぬ構えじゃ。身どもが気に入くわんと申すのを、ふにおちぬげなしらじらしさが、よけい面白うござらん。將軍家の土御門東洞院御所をも、はるかにしのぐ結構ずくめは、分

をわすれた贅沢だ。榮耀だ。あの唐門のきらびやかさは、だいそれた潜上だ、下剋上だ。そしられても弁疏の辞はごさるまいぞ」

「あるある」

「え、なんと？」

「威圧のためじゃ」

せまらぬ声で、師直は、おどかに答えつゝ、女の黒髪の下で、頸窩をいろうた。

「あアれ殿、殿——」

小渚が身をくねらせた。

### 三

「のみならず」

と、師直は、ふたゝび肩を、そばだてゝ、

「前の関白、二条公の姫ぎみを、掠奪もひどい手段で閨にいたのを手はじめに、眉目うるわしとあれば、見さかいてもなく、およそ東武士とはつり合わぬ雲上、高貴の女性をもてあそぶゝは、お身の病いだ。師直、御辺の、うりようべき病患じゃ」

はげしい語気を、やはり軽く、

「ちがう、違う」

受け流して、膝のうえでもがく女を、抱きすくめながら、師直が、

「それも、これもだ——」

と、てらてら脂肪びかりのする自分の顔を、そむける女の頬さきへ、もって行つて、

「みんな、武将の威光というものを、かゞやかすのに役立つのじゃよ、

あやかれ、あやかれ」

臆面なしの頬ずりに、師直は、むかむかとなつて、

「つ、つける薬がないっ！」

たちかけると、

「まで。わしの薬味の、処方だけきいてゆけ。播磨、——末法墮落のいまの世に、なまじいな説法や掟で、人の統治がつくと思うか？ せんずるところ実力で、否応なしにおしつけるおしの一手じゃ」

「ほう！ 色におぼれ、榮華をすこすのが、世を治むる秘訣とは！ なるほど、こりやおしの一手かしれぬて」

師直が、皮肉に苦笑いしながら、座を立つと、師直はようやく真顔で、

「建武の乱れは、なぜ起つた？ 公家をのさばらせては、政治はとれん。殿上人の増長によつてもされた大乱をはずめたはわしの弾圧政治だ。大塔宮の御生母、民部卿三位局の旧御所を、こうして我が邸に造りかえたのも、ふかい所存があつてのことだ。わしは、ことさらに身分の高い姫たちに寢屋の伽をしいるのじゃ」

徒弟が、

（だめだ！ 病いは骨がらみ——）

そう思った時、

「見るがいゝ——」

と、師直は、おゝきな小鼻を、うごめかして、

「青公卿たちの、今日びの柔順さを。あだかも猫じゃ。いまの猫ども、かつては建武の虎であつたぞ」

小渚の、ふくらかな肩が、衣ごしに、なであげ、なでおろされた。

巖丈な腕に、さつきから抱えられつゞけているのだ。

「建武の乱は——」

師直は、徒弟の眸を、じつと見あげて、

「ひつきよう、尊氏の殿が、公家を甘やかしなされ過ぎたことに萌した。雲上人に、武の力を、分譲されたのが、間違いの因だった。護良親王のおんことは、申すまでもあるまい。親房、頭家両卿に、奥州の軍権をにぎられたがため、わしらは長い年月、いかに苦労したか？ 暦応のたしか元年、青野ガ原のいくさを、おぬし忘れはせぬだろう？」

鎌倉をおとしいれて、破竹のいきおいで上つてきた北畠顕家卿の大

軍と、美濃の青野方原で戦ったのが、師冬だった。奥州鎮守府の兵は、つよかった。

「命が、危うかったではないか」

師冬は、敗れた。そして追われた。鎮守府將軍顕家卿は、畿内に入った。

「わしは、安倍野と石津で、手いたい戦をしなければならなかった。あのときは、師泰も師秋も、必死だったぞ」

師直が負けたなら、京は保てなかつたにちがいない危機であった。しかし、高の主力軍と決戦した顕家卿は、武運にめぐまれずして堺浦の、乱闘のちまたの哀れ露と消えた。

「のう師冬、その後も東国で、親房卿は、なん年おぬしを手こずらせ  
たか——」

「昔話は、やめてほしい」

「健忘症でも、関城や、下妻城をかこんだ折に、なめた辛苦は舌のさ  
きに、こびりついておるはずだ」

奥州の武力が、常陸に抛った親房卿の城々を、後詰めした。楠  
は、湊川に死し、新田は越前に斃れたが、親房卿は、その嫡男、顕家  
を陣没させても、戟をおさめようとはしなかった。師冬はさんざんも  
てあましたのであったが、それはもはや過去の記憶というだけのもの  
で、いまや目前の敵はけつして南朝方ではなくて、味方の内部に、幕  
府のうち輪にあると、そう思わずにはいられたので、

「もし上杉が、非常手段に訴えなば、なんとなさる？ さあ、それ訊  
きにきたのだ」

「非常手段？ ばかな！」

膝の女を玩具あつかいに、ぐるり向き変えらすと、桂の裾が床にな  
びいた。

「あれ、ごめん遊ばして——」

と、軀をちぢめて、小渚がかこつと、師冬も、我慢できずに、  
「見苦しいっ！」

どなったが、師直は、傍若無人だった。

「やくな、やくな」

「ちえ、痴れ狂う時かつ！ 対策をきこう、対策を」

「上杉が、重能が——ふん！」

「そりや傲慢でござるぞ、武州っ！ 上杉は、將軍家の外戚だ」

「人を買いかぶる前に、おのが値打を知れ」

「おみは、弾効を怖れぬのかつ？」

「わからぬ男じや、帰れ！」

「後悔なさるな！」

「たわけめ。足利の天下にしたのは、この師直だ」

「よし！ あとで詫びさせてやるっ！」

師冬は、牀をけて、渡り廊へ出た。

あまりにも思いあがつた師直には手がつけれぬ。が、高一門の、  
浮沈の瀬戸は、近づいている。指図はなくとも、備えなくてはならん。  
師冬は、そう考えながら、ながい廊下をいそいだ。

#### 四

小渚と、引出物を、日野邸へ送りとどけるように、師直が郎従にい、  
つけたとき、老臣の益子弾正が、もうかなり老いしなびた顔を暗くして、  
対の屋へ入ってきた。

そのあとから、矢板将監がついて来て、弾正と共に入側の、簀の子  
の端にすわった。顔一ぱいの熊毛髭で名の通った、この将監は、戦場  
場数の勇士だった。

「殿——」

両人は諫めに伺候したのであった。

「お詫びごとの使者を、おたてなされませ」

「なに、詫びごと？」

師直は、元弘以来、自分のために犬馬の勞をおしまなかつた弾正入

道の、懸念顔をながめて、

「おれに、あやまれというのか？」

「重能の殿は、上杉家の御当主じゃ。將軍さまとは、お従兄弟どうし、院の昇殿をいの一におゆるされになった方でござります」

彈正が、そういうと、熊毛髭の將監も、

「建武の三年、正月の加茂川原合戦に、將軍家のおん身代りとして、討死されたは上杉の御先代、兵庫入道憲房どのでござりましたぞ。まった延元は三年、わか葉のはつ夏——」

と、述べかけるのを、

「風も、緑に、薫るころおいか」

そうさえぎって、師直は、狩衣の腰ひもをしめた。侍女たちが、礼服をたゝんで、装束筥におさめた。

「阿倍野の決戦には、憲藤、重行、御兄弟があつばれ奮闘、お命を捨てられました。上杉こそ、勲功随一のお家がらでござります」

熊毛髭が声をはげますと、

「將監——」

にやり微笑をうかべつゝ、師直は、黄帛縁のしとねに、どつかり坐つて、

「おれは、師冬にわめかれて、もう耳がつかれた。ほかの話ならいとわぬが、上杉の太鼓だけは、たゝくのをやめい」

「館——」

と、首をゆすぶりながら、彈正入道が膝をすゝめた。

師直は、

「言つてきかすが——」

と、かぶせて、侍女のはこんできた蘭の湯を、一口すゝつてから、

「その方らは、上杉をなにか大層な名門かのように考えているが、公家出といつてもたかの知れた故実有職の家筋でしかないぞ。わが高の家とて、惟頼が下野に土着して武士となるまでは、やはり京の公家仲間だ。御堂閑白の世の春宮亮、業遠、その子成佐、孫、惟章、みな学

業をもつて朝廷につかえたのだ。もとよりおれは、公家などを敬いせぬ。だが、家柄からいつても、上杉と劣る高ではないのだ」

「でも兵庫入道どのは、將軍家のおん母ぎみと御兄妹であらせられた」

「彈正——。おれの先祖は、將軍家の祖先、足利義国の弟じゃ。だが、そんな苦の下の詮議よりは、なまあたらしい武功だ、手柄だ。そして現在の腕が、ものをいう」

師直は、そういつてから、侍女をかえりみて、

「酒肴をもて」

と、命じた、彈正と將監は、目を見合わせた。

「この兩人にも、飲ますのじゃ」

侍女は、かしこまつて立つた。

「おれの心祝いを、その方らにも頒けてつかわす。じつに素晴らしくよいことがあるぞよ。まだ、ほんの前祝いだが、忪こらえ性のなくなるくらい嬉しいのだ、わははゝゝ！」

師直は、腹の底からわらつて、あきれいぶかる兩人へ、

「しかめ面を、すきな酒で洗いおとせ」

そういうと、將監が、

「お酒どころでは、ござりませぬ。すわといわば、間に合うよう、屋形を警固めなくてはなりません」

「馬鹿め！ 誰れが寄り合おうと、泣き寝入りだ。いらぬ心配は、あたまから追ん出して、飲め飲め。そちには、一骨折つてもらいたいことがあるぞ、將監」

「は。拙者に？」

「とても、大儀な務めだぞよ」

「はあ」

「仕おわたら、恩賞は莫大じゃ。しかと働いてくれ」

「殿、いかなるお役にござりませうか？」

熊毛髭が見上げると、



「飲みながら、申しつける」  
師直は、にこやかに答えた。

## 京の日野邸

一

「え、戻った？ あの、小渚が、も、もどったとや？」

日野行氏卿が、叫んだ。

もはや帰らないものと、かなしくも諦めきつていた鍾愛の女が、ふたゝび我が屋形に——と聞かぬが早い、死びとのように青ざめた顔に、さつと血の気がもどつたのである。

けれども、まだ疑ぐるように、

「まことか？ まことか？」

いとも仰山にわめく三位行氏卿は、文章博士で、大学頭だから、今の碩学に違いないが、いたつて小心の臆病もので、人からは一向すぐれていなかった。

「おみごとなお引出物を——」

そう、侍女の梅枝がつけると、

「な、なに、引出物？」

まず、自分の耳を信じなかったが、たちまち、

「おゝ！」

があと、不安にうたれて、

「小渚、小渚を、はよう！」

呼べといわれて、梅枝は、

「あの——たゞいま、北の方さまと、お話し中でございます。なに

やら、おひそやかに、人をお遠ざけになりました」

と、答えたので、ますます勘違いした三位は、またも血相を蒼白にかえて、北の対屋へと走つて行つた。

「おゝわが夫！」

北の方は、三位をみるなり訴え声で、

「高の執事どのが、御難題を——」

「引出物——引出物で、購おうと申すのであろう？ あゝ錦の山、綾

きんらん——」

と、はこびこまれた贈り物へ、目をすえて、

「むゝ砂黄金の、おゝづつみじやな。宝をつんで、小渚——小渚——」

愛妾を、ひしと抱えて、

「そもじを、買おうとは、憎いわ僧いわ、えゝなんとしよう？」

と、取乱して、女々しくうめく三位へ、北の方が、

「あれ、さようではございませぬぞえ、夫の卿」

「いや、そうじゃそうじゃ、蛇の前の蛙だ！」

「いゝえ、蛇は蛇でも、蛙は小渚とおもいきや、とおい吉野の——」

「おろちにねらわるゝ小兎だ、小渚だ。あゝ小渚だ！ のがれようと

て——」

三位は、北の方の言葉もきこえないらしく、そう歎きわびながら、愛妾の肩から牀にくずおれたまゝ、ぐつたりと俯伏したので、小渚が、のぞき込んで、

「もし、卿さまの、おぼし違いではございませぬか？ 館さま！ 武

蔵守どの、御執心なのは——」

「いやいや外道だ、鬼畜だ！ おそろしいのは魔性師直——」

むっくりと顔は、もたげたが、文章博士の魂は、ひらいた瞳から、ふらふらとぬけて出たかようであった。空虚になった。脳裡には、高武蔵守師直の所望を、にべもなくしりぞけたがために、無残にも、横死をとげた北野の長者、菅宰相のいたましが、たゞ一ばいにひろ

がった。

と、にわかにも目先が暗々となり、斬りおとされた自分の首と、真紅の血潮をふく胴体とが、まがまがしいまぼろしに描きだされた。

「あつ！」

恐怖のさけびと共に、むちゅうで頭上の冠を、両手でつかんで、仰に倒れたから、おどろいて北の方と小渚は、右と左から、介抱しつゝ、

「わが夫！」

「卿さま！」

「もうし、師直どの、懸想人は、吉野の宮居に住もう女でございませう」

「わたくしはただ、頼まれましたのみでございませう」

「のう、お気づよう、夫の卿！ 小渚は、なかだちを、橋わたしを、強いられたまでとございませう」

「お引出物は、申さば、お周旋の料の——お手附——。媒介を、首尾よう果たしたなら、お礼は望みのまゝ、館さまの思召し次第とございませう。さあ、おこゝろを確かと——」

小渚は、女子よりも弱い性根の行氏卿を、たすけおこして、背中をさすった。

と、どんより眼をひらいて、

「おゝ、そんなら懸想人は、小渚、そもじでは、あらざりしか？」

「はい」

「さらば——さらば誰れぞや」

「吉野に、宮仕えなされます、弁内侍さまでございませう」

「なに、弁内侍とや？」

しまりの失せた、三位の下顎を、小渚はいつになく、さげすむ気持で眺めるのだった。

——三位と師直！ こうも差別のあるものか？ 暴虐でも、理不尽でも、あれほど強い武家と、みやびやかがよいにしても、かくまで弱々しい公家と——いずれが、このもしい？

あくどい師直の移り香が、まだ消えずにいた。小渚のこゝろは、あやしく動いた。

## 二

日ごろは、どこまでも物やさしくて、学には秀で、詩歌の道にも堪能な、大宮びとの師表で、まことにいみじき文芸の長であり、経史の司であると仰ぎみていた自分のあるじに、今宵は思いがけもなく幻滅をおぼえた小渚であった。

「へだたる吉野の、内侍をば」

そう、三位はいつたが、小渚は答えなかつた。

心がまるで顛倒して、推理の力が、どこへかけしとんでしまつたらしい行氏卿を、今出川館での師直の、山がくずれてもおどろかぬ態度に、ひきくらべていたのだった。

（播磨守師冬どのほどの豪傑が、一大事といつてあわてるのを、ぐいとおさえて、言いまくるあの御胆力——そしてまあなんとという、きびきびとしたお頭の働きよう！）

三位へは、北の方が、

「内侍は、いとけない頃から珠をあざむく、顔かたちでございませう。

吉野へまいつて後、もはや十とせ、うるわしい荅がさぞ、あでやかに花咲いたこととございませう。噂によれば、俊業どのも、妹の内侍のために、よい婿がねを探しておらるゝとやら申します。——南山

の若公家たちは、われこそわれこそと競いたつておるとやら、街の童んべまでが取沙汰いたしまするものを、師直どのの白羽の矢がむいたとて——なんでそのように、わが夫には？」

と、きかれて、

「身が、いぶかるは、非道の高が強淫ではないぞよ。たゞ——」

いゝさして、太息とともに、うなだれつゝ、

「橋渡しを、まろの愛しむ小渚に、強いた心が——？」

「それとても、あきらかと、わらわは訝しみませぬ。内侍は、父ぎみ俊基朝臣なきのちは、この館にひきとられ、伯父ぎみなるわが夫をば、実の親とかわりのう、したわれつゝ育つた女でございます」

「お方、お身はそう云わるゝが、南山の賢所の掌侍をつとむる内侍を、まろが力で、なんとしよう？ 陣鐘矢叫び、さいわいやんで、こゝ

五六年、天下はからくも穏かだが、天竜寺の供養ごときで後醍醐の院の、おん尊霊が和まろうか？ 北畠の親房卿はなお健かだし——楠の一族は、ひそかに武をねり、戈をみかくとか聞く。吉野の鬱憤は、ふかいぞよ」

三位はやつと、どうやら文章博士らしく、そして五十という歳に手のとどいた中老相応な、分別がおを、夫人へ見せて、

「殊に、内侍の兄、俊業は亡父の志をうけて、南朝に忠勤をはげんでおる。幼少のころは、内侍ともども我が家にあつて、まろになつてはいたけれど、吉野へ走つてこのかた、雁のたよりも絶えてない、うとましさだ。北と南にわかれては、それも詮ないことではあるが、そうした兄をもつ内侍がもとへ、いかに、まろが言い送ろうと、とてもとても！ こりや、山を動かせよ、海をうずめよ、と強うるにもひとしい難題じゃ。無体じゃ」

そういゝおわつて、うち萎れると、

「そりや師直どのとて、やすきわざとは、おもわれませぬ。まともの手だてでは、おぼつかないとおつて、たばかり奪うたくらみを、彼方からお授けでございます。のう、小渚」

「はい」

「なんと？ いつわつて奪えと——？」

「北の方のおん文を、梅枝に携えさせて、吉野へつかかわせ、との事でございますました」

と、小渚はこたえて、いまはむしろ、師直に味方する気持で、

「このはかりごとが、成就のあかつきには三位の官位を進め、かつは所領をも、たんまりと参らそうが、もし諾げがわせ給わずば、おん

身の上、よもや安穩ではあるまい。先には塩谷判官、近くは菅宰相、在登の卿のためしもある。前のわだちは、ゆめ踏みたもうな、とございまして」

「おゝ、諾げがわずば、安穩ではあるまいと？」

「はい」

「申したか」

「はい」

まつさおな三位の顔が、ぎゅつとゆがんで、ひきつった。

「あゝゝ、まろは見こまれた！ まろは——北の方——どうしたら、大蛇に、よい智慧が、いやいやお身に、よい智慧がないか、大蛇の腰の、贅とならずに——」

と、三位は、頭も、舌も、しどろもどろに、

「どうじゃ、分別は？ 思案は、これさ思案は、小渚、そもじは——頼む。

まろは、まろはもう考える力がない、あゝ！ 目が、目がくらむ」

うめきつゝ、どつと倒れたのだった。

「北の方、小渚、う、う、う——」

「いたわしいけれど、内侍を贅に——」

三位卿夫人は、そう呟いた。

小渚が、

「梅枝を、お呼びなされませ」

と、いうと、北の方がうなずいた。

燭台の灯がゆれた。庭さきから、なまぬるい微風が入ってきたのである。待賢門外の春の宵は、もの静かにふけて行つた。

二十四年のむかし、後醍醐のみかどの、おん股肱として、正中の変の中心人物となつた日野俊基朝臣は、この館のあるじ行氏卿の弟だつた。まことに似つかない弟と兄であつた。弟は、討幕の志がならず、捕われて鎌倉へおくられた。そして飯粧坂で斬られた。公家にはまれな、胆のすわつた人となりであつた。ところが兄は、今、師直をおそれて、

婦女子までがさげすむほどに見苦しく、とりみだした。そして弟の遺した子、弁内侍は、師直という淫魔への贄にそなえられようとしているのだった。

## 水越峠

大和と河内の国さかい、水越峠のいたゞきが、峠路にけずられた崖の赭土を、あかるい春陽に反射させていた。ふかい溪谷は、白雲でうずまつたかとまがうばかりに、らんまん山桜を咲かせていたし、溪谷からそばだつ懸崖を、めぐりめぐり登る坂みちが、薄緑にもえでた喬木林の、榎、樺などの梢を、縫いつゞるかのように見えた。

峠の尾根は、北のほうへも、だんだん高まって、国境を蜿々と走るのであるが、南はすぐ急勾配で、その斜面は、千古斧鉞をいれない常緑の大森林を、おごそかに抱きつゝ、金剛山の峻しい峯へつらなつていた。

「虎夜叉——あの山のおかげで、ずいぶん遠廻りさせられるのう」

と、馬上で、次郎正時がいった。

おなじく馬上で、弟の虎夜叉正儀が笑った。

「はゝゝゝ。おかげで、千早の城は堅固なのだ。小言も、いわれますまい」

正時は、手綱をつめて、

「だがの、吉野がよいには、まこと邪魔だぞよ」

正儀の馬が、いなゝいた。

「なんの。馬にあるかせて。——山国そだちのくせに、次郎兄も案がい栄耀いわるゝよ」

そう、正儀がいうと、

「——虎夜叉」

と、正時は背後を、ちょいと振り返って、弟と視線を合わせたが、すぐ向き直った。

「お身は、あいかわらず籠城方能論らしいが、わしは別じや。山地の戦よりも、はなばなしい野戦を好む」

「次郎兄は、すつかりと兄上にかぶれめさつたな。あまり、ほめらるゝことではござらぬぞ」

「なに、ほめらるゝことではないと？」

とがめる語氣でいったが、こんどは背後を顧みずに、

「兄上正行にかぶれることが、悪いというのか？ かぶれるなどという言葉が、第一よくない。氣にいらん」

「かぶれたが悪いとは、決して申さぬ。また、あなたが、心から同感なされたとすれば、なおさら結構じや。たゞしかし、この虎夜叉は、ほめませぬぞ」

「ふゝゝ、お身らしい言い方をするわい」

正時は、そういつて口をつぐんだ。

弟の馬は、兄の馬の尾に、鼻をすりつけながら、坂を登って行った。

徒歩の郎従どもは、小半町もおくれていたし、恩智興武とその家来らは、その後からだつた。そして和田一家の人々は、すではるか目の下になった桜の林のふちから、また姿を現わさぬほど後れていた。

楠正行のふたりの弟、正時と虎夜叉正儀は、いま、吉野から河内へ帰る途中なのであつた。

## 二

登りが、急になった。

馬は、あえいだ。虎夜叉が、

「吉野に、兄上が居残られた理由を、次郎兄はなんと解さるゝ？」

と、いったので、あえぐ馬に一鞭くれた正時は、さもいぶかしげに振り返って、

「異なことをいうの」

「あなたには、異なことゝは覺さぬか？」

「なに——なにをさ？」

やゝ鈍重とさえ見える面持で、きゝかえした。

「謎でござるよ」

持ちまえの、批判めく薄わらいが、正儀の唇にうかんだ。

「謎——？」

「謎を、わたくしに解かすなら、恋のしわざと解く」

「え、恋のしわざ？」

「さよう」

「ばかな！ 兄上が——兄の殿が恋、わはゝゝゝ！」

鞍つぽに、笑いこける正時の、その笑い声のおさまるのを待つて、

「笑うのは御勝手ながら、わたくしの察見の矢、きつと凶星でござるうぞ」

「虎夜叉、お身はときおり、人をからかう。よからぬ癖じや」

「戯れ口は、気散じの妙葉だ。——妙にうつとうしい時や、緊張が、

度をこした折など、きゝめがあらたかだ。たゞし只今の話は、おゝ真面目でござるよ」

今年ようやく二十歳、とは、どうしても思えぬ熟成た口調だった。

いや、物の言いかたのみでなく、容貌といゝ、態度といゝ、三つ年上

の正時の方が、むしろ弟らしく見えた。現にいま、着ている小桜色ほ

かしの派手な狩衣が、だいぶ不似合なくらいだ。長兄の正行とくらべ

てさえ、若くはなかった。そして頭脳も、気持も、外貌よりまだ一段

と老成のおもむきがあった。

正時の狩衣は、萌黄だった。その袖を、自分の手でしっかりと掴みながら、やゝ厳しく、

「亡き父ぎみは、かりそめにも、椰揄冗談はつゝしまれたというぞ。

——おのが頭のよさを、虎夜叉お身は、悪用するのだ」

そう、正時がいったとき、白辛夷の花枝——ちようど崖から路へ、下さまに差してたのを、ぼきりと、虎夜叉は折った。

兄が、言葉をつづけた。

「逆賊足利を、いかにして討とうと、お心くたく以外、兄の殿正行に、なんで他意があるろう」

弟は白辛夷の、大輪の花弁の濃い香を、嗅ぎしめながら、

「次郎兄の、嗅ぐ鼻のうといこと！」

「なに、鼻が？」

とたんに、乗馬がまた、いなゝいた。

正時は、鎧のかゝとで、馬腹をうった。

虎夜叉が、

「ものゝ裏の匂いが、おわかりにならん」

「おれは、正路をふんで、けつして裏道は通らぬからな」

「通れるかぎりは、無論よろしかろう。しかし正路は往々、ふさがることがある」

しばらくして、正時が、

「兄上のこと、いさゝかは、根拠あつて申したのか？」

と、たずねた。

「さすがに、お気にはかゝると見える」

「お身とは、てんでお生れつきが異うぞ。早熟に女色をおぼえた自分の物差で、出鱈目におしはかったとて寸法が合うかよ」

それには答えずに、正儀は花枝を捨てゝ、手綱をしぼった。

頂上にちかづいて、坂の勾配が、ひどくなつた。二騎の馬は、汗だ

くだくで、あえぎをはげしくした。

「不憫じゃ。おりてやろうか」

と、いう兄へ、

「癖になる。山国の馬だ」

と、弟が答えた。

馬は、胸衝きの急坂を、からくも登りつめて、兄弟を国境に立たせた。金剛山脈の西斜面は、一しおふけた春景色を敷きひろげていた。

### 三

兄弟は、馬をやすませつゝ、眺めおろした。

青崩の大きな谷が、水分の盆地へ、傾きひらけていた。うららかな陽の光をあびて、紅、白、萌黄、真つ黄色——。わか葉の緑に花のいろを、ませてあげろ、この山峡こそ、兄弟がそこに生まれ、そこに育ち、湊川に尊王の大旆をかゝげて討死した父、正成の遺志をつぐべき長兄の、正行と共に成長し、今年にはもはやその父の壮烈きわまる戦死をとげた延元元年から、指折りかぞえると十二年目の正平二年、多聞正行は二十五歳、次郎正時は二十三歳、虎夜叉正儀は二十歳の春をむかえた楠氏、譜代の采邑であつたのだ。

累世の居邸の杜かげに、屋形の白壁が光っていた。すこし離れて、鎮守がみ建水分神社の朱の鳥居と、重臣の神宮寺正房の屋敷に年古る毬形の老杉とが、くんだり一里はんの麓にめだつた。

楠氏の邸館の杜は、扇の形をした盆地の、ちようど要の位置にあつた。盆地のまん中で、この青崩の谷の水をあつめた水分川が、金剛山から流れだす千早川を合流させているのが、あざやかに見えた。盆地の東のふちは、こゝ水越峠の尾根の支翼だつた。そして西の縁をかきつているのは、上赤坂、下赤坂、甘南備、東条の四つの丘で、それが、それぞれ城を擁した。つらなるその四つの城は、水分をまもる要害で、櫓のいらかに、墨の狭間に、寨の柵の石垣に、外郭めぐりの塹壕に、楠の武力の尋常でなさがあらわれているのであつた。

「虎夜叉」

と、正時は、盆地の春の粧いから、目を転じて、

「兄上が、吉野におとまりなされたは、近衛左大臣や花山院の内府なんどの、柔弱な、怯懦なお心持を、いくぶんでも骨のある考えかたに向けかえて、堂上にはびこる非戦論を一掃しようとの御存念、と、わしは思う」

そういつたが、弟はまだ、眺めつゞけていた。

水分川が、盆地を横ぎり、神山の山峡をぬって、富田林の北にぬけ、そこで石川の主流に出合い、南河内の平野をうるおしつゝ、丁字形に、大和川へぶつかる姿——それを見ていたのである。

「花ぐもりで、岸和田から堺うらの、海は霞にとけているし、大和川の川向うも、おゝ空と野原のけじめはつかぬ。だが我れわれの領土、南河内と、南和泉は、一望のもと、文字どおりじゃ」

正儀の目には、銀光をはなつ狭山池があつた。淡緑い和泉の山々があつた。一族和田の城と砦があつた。

「のう虎夜叉」

と、かさねて正時が、

「兄の殿は、こんどの御評定には、異常なお覚悟で御参加あつたものと思うがの、どうじゃ？」

「いかにも」

虎夜叉は、和田の本城である榎尾城から、目近の観心寺の三重の塔へ、視線をうつして、

「しかし、お宿を如意輪寺から、俊業朝臣の館にかえられた一事が、次郎兄の解釈を裏切る」

と、独りごとにもどきにいうと、

「わはゝゝゝ！」

兄は、豪放に、笑いごえを爆発させて、

「なんのこつだ！ そ、それがおぬしの、——はゝゝは！」

と、なおも笑いつゞけつゝ、

「そ、それが出鱈目の、あて推量の根拠か。なにかと思つたら、痴な！」

「埒もない！」

「なかなか」

首をふりながら、弟はやつと、眼を、兄の顔へむけて、

「北畠准后親房と、四条隆資卿、まったくこのお兩人ほか、ござるまいではないか？ 兄上が、まず動かそうとなさるゝならば——。な、北畠の館も、四条屋形も、所在はともに、如意輪寺の隣りじや。ところが兄上は、蔵王堂よりもお手前の、日野邸へ、わざわざお宿がえなされた」

「それが？」

「次郎兄」

「なにが訝しい？ 俊業どのゝ亡き父君、日野俊基朝臣は、われらが父上と肝胆相照らした仲であつたぞ」

「それはいうまでもなく、日野俊基は、正中の昔、いち早く尊王、討幕をとなえた人傑でござる。かしこくも先皇、後醍醐のみかどに、われらの父をば、結びつけまいらせし、建武維新の殊勲者だ。だが、いまの俊業は、不肖の子、むしろ父の名をはずかしむる凡庸の資でござるぞ」

「しかし、日野と楠——特別な間柄だ」

「いや、昔の誼みは、おろそかには思ひませぬが、われらが兄正行が、恢復の大業を、ともに語るべき友にはあらず」

「そういゝきつた正儀の眸には、明敏なかがやきがあつた。」

#### 四

顔立ちは、一見兄弟らしく似てはいた。だがよくみると、正時の顔の造作は間がのびていた。氣質は、胆汁質で一本気だった。

弟が、俊業を、不肖凡庸とあなどつたので、不快な色をうかべて、「お身は、秀才だ。万事に器用じや。だが一つ、珠に瑕瑾がある。惜しいかな、深い瑕瑾だ。重大な関点だ。それは、ほかでもない、父に

肖ていないという短所だ」

「とんだ傍道へ、おそれになつたな」

「えゝ聞け！」

と、たちまち語気はげしく、

「他人を、不肖の子とのゝしるまえに、おのれを顧みろ！ 神童が、たゞの才子に墮したは、その関点のせいだぞ。学問、武術、ゆくとして可ならざるはなしという、その英材が——と、おれはうらめしいのだ。お身のあらゆる長所でうずめても、うずめつくせぬ深い瑕瑾だぞ、虎夜叉つ！ わしは、うらめしくて涙が出る！」

声が、わなゝいた。そしてやゝ、黙して後、

「わしとて、決して俊業の朝臣を、お世辞にも俊髦の器とはいわん。しかし兄の殿は、純情の仁じや。道をとうとぶお方じや。器量おとればとて、ふるき誼みをすてゝかえりみぬお人ではない。そこがおぬしとは、人格の異るところだ」

「お言葉どおり」

と、会釈した正儀は、

「十日ほど、宮中から——」

云いさして、莞爾ほゝえんだ。

正時の瞳がひらいて、顎がすこし、前へ出た。

「禁裏から、十日ほど何が？」

「日野館におやど下り、なさるそうな」

「む？」

「うとい！」

「え？」

「内侍が、弁内侍が——」

「なに、内侍どのが？」

と、正時は、やゝ白眼をはだけて、

「お身に、そのようなことが、どこから？」

あやしんで訊くと、虎夜叉が、

「俊業朝臣から、承わった」

と、答えた。

「朝臣が、お身に——？」

正時は、半信半疑に、手をこまぬいた。

こくり頷いて、虎夜叉が、

「たしかに、恋慕のなやみが、兄の殿にあった」

そう呟くようにいうと、萌黄狩衣の袖を、ぱつと左右へあけて、大

きく首を、正時はゆすつた。

「なにを証拠に、申すのだ？」

「兄上のまなざしに、人知れず胸こがす者の、もだが、見えました

ゆえ」

「ふん！」

鼻で、あざわらつて、

「いつの間にやら、虎夜叉は読心術まで、おぼえたそうじゃ」

正儀は、真顔で、頭をさげて、

「こゝ半月ほど、専心に修業つかまつた」

そう応酬したとき、徒歩の郎従たちが、ようやく峠の頂上に現われた。

正時が、

「下ろう」

と、手綱をひいた。

正儀も、馬を、くだり坂の方へ、進めた。

兄は、やはり前行しつゝ、

「お顔色の、すぐれぬのは、肉体すこやかでないせいじゃ。わしと、

お身とは、ちと達者すぎるで——出来ることなら健康を、わけて差し

げたいが——まゝにならぬでう」

「憂鬱は、御病身のためもある。しかし」

と、弟は、ちよいとことばを保留してから、

「恋は、曲者じゃ」

やゝ皮肉に、だが自分に呟くようにいつて、鞍のうえで眼をつぶった。

## 吉野の日野邸

### 一

吉野の邑——たゞ修験道の霊場、蔵王堂と如意輪寺の名と共に、深山の桜の名所として知られただけの、僻南の山里も先帝、後醍醐の院がおそれおゝくも飯の宮居を、おかせられてから最早十年あまり、仕え奉る、公卿、朝臣たちが、それぞれ棲むべき屋敷を、こゝに設けるようになった今日びでは、いくぶんか行在所らしい趣きをそなえてきた。だが、なにぶんにもかりそめの土木のことだから、どの屋敷も、いたつてお粗末で、これが殿上人の屋形であろうかとうたがわれた。

日野俊業朝臣の住いも、もちろん、その例に洩れよう筈がなかった。

日野邸は、蔵王堂から西へまがつて、一目千本の桜の名所へ下る坂の、

そのおり口にあつたから、行宮のある如意輪寺からは、かなり離れて

いた。

気分がすぐれず、病いの気味合いということ、宿さがりを願つた

弁内侍は、輿で、兄俊業の邸に戻つた。めつきり長くなつた春陽の日

脚も、吉野山の西尾根に、ちかづく時刻だった。

わかき嫂の、俊業夫人は、内侍を西の対へむかえ入れて、いたわつた。

「まあ、おやつれあそばしたこと！」

嫂は、そういつて、いろいろ容態を気づかい尋ねた。

「五蔵の病いでは、ございませぬ。たゞ味気のうて味気のうて、遣る

せなさの、つのりつにつた気鬱の症でございまする」



と、内侍は答えた。

さながら妖桃の春をいたむる顔ばせ、垂柳の風にたえかねた物ごし——という、ふるい譬えが、ぴったりと当てはまるような容貌であった。嫂の言葉どおり、目の縁に、頬のほとりに、やつれは見えてはいたものの、なやめる美女の態には、また一種いうにいわれぬ魅力がふくまれていた。

「医師は、誰れでございましたか？」

「あの——医師には診せませぬ。ながらえたとて、かいない命でございするものを！」

「まあ、内侍さまのお言葉とも思われませぬ。かいない命など、どうした訳でございましょう？」

俊業夫人は、いぶかしそうに、見まもった。

浮線綾に、山吹の花を散らし織りにした唐衣を着た、若い嫂は、四糸大納言の息女で、眉目うつくしい女性だった。けれども山河へだた京童まで、国色無双と噂する弁内侍のうるわしさと並べてみると、朝の陽に光をうばわれる、残んの星のようにしか見えなかった。

「たぐいもないその美しさで——なぜ、そのように——この世をお儂なみなさるかのようにな？」

と、嫂は重ねていうと、

「嫂上さま！」

と、だけで、たちまち薄縁に突つ臥して、堪えがたそうに涙をながした。そして声をしのばせて、しめやかに啜り泣いた。

嫂は、いざり寄つて、濃香に緋の牡丹花の織りだされた内侍の唐衣の、背をそつとさすりながら、

「もし内侍さま。——躬らおもとめになった病いとやら、おきゝいたしては、なおさらのこと、わらわは心にかゝります。さあ、あたりをさいわい人はなし、お胸のうちのお秘めごとを、どうぞわらわにだけ、お洩らし下さいませ。わが夫はお兄上。のう、内侍さま、他人にはおつゝ

みなされましようとも、わらわへは、なんのお心おきがございませう。さあ仰しやつて下さいませ」

といった。

だが、答えは、堰き止めることの出来ない、涙だけがあった。

俊業夫人は、しかし根づよく、なだめたり、すかしたりして、ひそかにひめられた憂鬱の因を、さぐりあてようとつとめた。夫人は、聡明で、思慮ぶかく、それで勝ち気な質は、父隆資卿そっくりだった。先帝以来、南朝の重なる支柱の一本だった四糸大納言には、たしかにふさわしい息女であった。だが、俊業のつれあいとしては、かなりに過ぎた妻だったので、なにか事があると夫は、いつも夫人に、導かれていた。

「御遠慮あそばしては、却つてお恨めしゅう存じまするぞえ」

そういつて、夫人は、のぞき込んだ。そして、内侍の耳へ、自分の顔をよせて、何かさゝやこうとしたとき、

「内侍どの、それにか？」

俊業朝臣の音が、きこえた。

入側に立ちどまって、怪訝らしく、妹の様子をながめたが、

「所労のため、宿下りを願つた由、お身に病いがあるうとは、つい昨日まで、夢にも知らなかった。いかゞじやの？」

と、いゝながら入つて来て、坐つた。

俊業の端麗な顔には亡父俊基の面影がしのばれた。が、体格ははるかに劣つて、脆弱だった。

「桶どのと、話に身をいれて、つい遅くなった。当分は、日夜語りあえるものを、今日に限つたかのように、万事を忘れて——おん身をさえ、なおざりに致した。許されい」

俊業が、そう云いおわらぬうちに、内侍は、

「おゝ！」

と、おもわず叫ぶように声を立て、その凄艶な美貌をもたげた。

驚きと、歎びと、羞恥と、待望とが、内侍の表情のなかで、あやしくまじりあつた。

「あの——楠の——楠の殿には——この館に？」

と、訊く内侍へ、嫂が、

「昨夜から——こゝしばらくは、御滞留とのごことでございます」と答えた。

俊業夫人は、心の中で、たしかに——と首肯けるものをつかんだ。

敏感な若夫人は、

(楠どのに——内侍は恋している)

と、思った。だが、なぜ、ながらえても甲斐ないなどまで憊なむのであろう？

俊業夫人には、それが解せなかつた。

この吉野に住む公達が、いかに多く、内侍へ、胸をこがしたことだらう。けれども、そうした懸念は、すべて片想いに終つた。だれ一人、この麗人の心を、とらえ得たものはなかつた。内侍はあれほど美しくても、情知らずなのであろうか？ とさえ思われたのに——。

楠への恋——それは、ふさわしい恋だ。武家ではあるが、正行ほどの若人は、殿上の公達にも、あるかどうか？ ないともいえる。内侍は、ないと感じたにちがいない。けれども、何故の悲観であろう？ 身も世もないように？

夫人は、考えたが、わからなかつた。

俊業が、云つた。

「楠どののは、お宿を、我が館へうつされたのだ。次郎、虎夜叉、ふたりの御舎弟は、和田、恩智など宗徒の衆をはじめ、郎党たちを引き具して、今朝未明に如意輪寺の宿坊を發たれた。居残つた郎従たちは、わずか十人たらずゆえ、手狭いこの屋敷でも、事欠かぬのが、身どもの仕合わせであつた。——その昔、亡き父上、俊基が、正成の殿と回天の事業を、ひそかに談らわれたのにあやかつて、身どもも今や、

正行どのと、討幕の再挙について図ろうと思ふのじゃ。——内侍どの、よろこんでたもれ。亡き父上は、わしがこのたび、正行どのを我が家に迎えたことを、草葉の蔭で、どのくらい御満足におぼすであらう！」

そう云つて、眼をしばたゝいた。胸は、亢奮におどるのであつた。

だが、内侍の胸の高鳴りは、それに幾層倍か知れぬ輪をかけていた。

## 二

おさえてもおさえても、嬉しさが、はげしい戦慄となつて、からだじゆうを匍いまわつた。

「おゝ兄上、わらわは、うれしゅうございます！」

声も、情の熱にかされたように、わななく内侍へ、

「む、うれしいか。——おゝうれしうな！」

と、俊業は、たゞもう、自分の悲壯な気持へ、自分の忠と孝の至誠へ、同感しての内侍の歎びである、とばかり思い込んで、

「たんと、よろこんでほしい。身どももこれで、はじめて父尊霊の位牌の前に、自分を、さまで恥ずることなくぬかずける。また周囲の人々へも、顔むけがなる。——のう内侍どの。あまりに傑れた父をもつ子は、つらいものじゃ。心ひそかにしばしば泣けてくる。父俊基は、あの若さで、山伏姿に身をやつして、勤王の士を求めために、単身、雄々しくも、諸国の山河を跋涉したではないか。それが、どうじゃ。あれ俯甲斐なき子の態よ！ 父は勇敢にも大難に殉じた。鎌倉は化粧坂の露ときえても、名を後の世に遺したのに、あれあれあの子の、安きをぬすむにがにがしきよ！ 烈々たる父の気魄はいずくにかある、と蔭口をきかれ、後ろ指をさゝれる、そのつらさ。推量して欲しいぞよ、内侍どの！」

つらかつた、いろいろの記憶を、一遍に想いだしたかのよう、暗然となると、内侍もまた、それとはまるで異う理由から、一度は陽に照り映える花のようにかざやいた顔を、たちまち曇らせた。

内侍の恋うひとは、嫂の今感づいたとおり、楠多聞兵衛正行その人であった。如意輪寺の苑でふと相見た一目の恋が忘れられず、夜も、昼も、こがるゝ想いに、胸をむしばまれて、睡られなかつた。いても、立つても、面影が眼の先にこびりついて離れなかつた。そのやるせなさから、とうとう羞かしさを忘れて、如意輪寺の吉水法印に、切ない心のなかを告げて、ひそかに楠への、なかだちを依頼したのであった。吉水法印は、内侍を、まるで肉身の孫のようにいとしんでいた。で、老法印は、内侍のために、正行に会って、語った。だが、内侍の意中を告げられた正行は、にべもなく、それを拒んだのだ。とても、かなわぬ恋だ、あきらめるほかあるまいと、そういわれたとき内侍は、世の中が真つ暗くなつたように感じた。内侍のふかい悶えは、そこから生じた。

崇めなついていた老法印の言葉ではあつたけれど、こればかりは諦めらるゝ事柄ではなかつた。こぼまれたのだから、無ろん、諦めたいとは思つた。忘れようとは思つた。だが、そう思えば思うほど、いよいよつる恋であつた。ついに内侍は賢所のつとめがおるそかになるのを怖れて、宿下りを願つたのであつた。

ところが、兄の館に還つてみると、そこには恋う人、正行が、如意輪寺から宿を変えて、こゝしばらく滞在するといふのだ。内侍の心は、嵐のように動いた。

そして、たちまち堪らなく悲しくなつた。

恋い人は、この屋敷のなかに——と思うと、あさましくも心が、狂いそうに感じられてきた。

内侍は、心地苦しいからといって、この対の屋の寝所の、臥褥に入つたまゝ、食事もとらず、かしく女房たちにも顔をあわせなかつた。夜がきてても、そして人は寝静まつても、内侍は、とても睡れなかつた。

(こうして、気が——狂つてゆくのではなからうか?)

しかし、暁近くなつて、どうやらすこしは心が静まつてきた内侍

だつた。で、朝は、臥褥を離れて、朝餉の箸もとり、嫂と顔を合せて、語りあいもした。

嫂が、午後、ふたゝび姿を見せた。

きょうもまた、のどかな日和だつた。せまい庭ではあつたが、泉水、築山、植込みなど、ひと通りは設けられていた。その庭に咲く桜を、ながめつゝ、嫂は、

「一目千本は、ついそこでございますもの、お気散じにいかゞでございますか? こゝ両三日が見ごろの花ざかりを、御覽あそばしては?」

と、すゝめた。だが、

「心憂い折の花は、ひとしおこゝろを滅入らせませぬ」

内侍は、さびしげに、ほんのわずか微笑んだ。

「そんなら、いま少時お待ちあそばせ、おつけ、このさゝやな庭景色——なんの風情もない眺めが、きつとお心を晴らすであらう眺めに変わりますようぞえ」

「眺めの変るとおつしやるのは」

「申さぬが花——。さぞやお胸をときめかす花とだけ——。もし、内侍さま、今朝はやばやとわが夫は、わらわの実家の館へ、参られて、まだ帰られませぬ」

「四条館へ——あの、お一人で?」

「いえ、お二人で、仲むつまじげに——」

嫂が、そう答えたとき、この対屋から、あまり隔たつていない中門の扉があいた。

内侍は、兄俊業が庭に入つて来た姿を目にいった利那、

(お二人で——)

と、いう観念が、非常なはやさで、頭にきらめいたので、はつと感じたその途端に、

「あれい!」

自分を忘れて、おもわず叫んだまゝ、全身をこわばらせた。

恋う人！

楠多聞兵衛正行が、中門をくぐって、庭にあらわれたのであった。

## 弁内侍受難

### 一

前日の夕がたは、花曇り、というよりも、やゝ雨模様にくもった空が、今日はまた乳藍色もふかぶかと、うらゝかに晴れていた。

正午すこし前のことだった。

西の対屋へ、嫂が入ってきて、

「内侍さま。梅枝と申す女房が、たずねて参りました。お目もじいたしたいと申しまする」

「わらわに？」

梅枝という名は、ごくありふれた侍女名であった。現に、中宮御殿にも、女御のお召使いにも——。で、

「御所からでございませうか？」

「いえ、京の日野館の梅枝、と申しまする」

「あら、京の！」

驚いたのも道理だ。その梅枝なら、伯父三位卿の邸で、内侍があどけない時から、物心をおぼえた十四歳まで、十年あまり、ねんごろに侍いてくれた侍女だった。自分が、吉野の人となつてからは、まったく消息をきかなかつたが、だしぬけに、今おとずれて来ようとは！

「三位卿北の方の、お文をたずさえましたとやら」

「世話をかけた女でございます。お通し下さいませ」

恋さえなかつたら、どんなにか心が動いたであろう。

だが、命消えてもとまで、こがるゝその人に、昨日は、初めていろいと、言葉を交わすことが出来た！

（あゝなんという気高いお顔だろう！ なんとそのお姿のりゝしいことよ！ しかも情知る人の眼差しであった。そして、この胸に、ひしひしとせまるようなお声いろ！）

もう幾晩も、つゞきかさなつた睡り不足に、あたかも、心も疲れきつて、まどろむともなくまどろんだ夢は、恋うその人から許された夢であつた。

けれども、許されたのは、夢であつて、現実ではない。現実は、つれない拒絶である。こぼむ人をいつまで恋うて、大切なお勧めを怠るのか？ あきらめなくてはならぬ。あきらめるには、心をよそへ紛らさなければならぬ。

そう思いながら、内侍は、梅枝の入ってくるのを待った。

まもなく、俊業夫人の後ろについて、梅枝が現われた。——みまうほどに内侍をあでやかにした十年の歳月は、梅枝を四十女らしく老けさせていた。

「——搥子さま！」

と、呼びかけたなり、わつと泣き伏した梅枝を見ると、さすがに内侍も、「まあ、めずらしいこと、梅枝！ 伯父ぎみにも、北の方にも、お変わりにはあらせられぬか？」

と、なつかしげに尋ねた。

梅枝は、涙にぬれさせた顔をあげて、「はしたない嬉し涙、お許しくださりませ。——うるわしい御気色を、十年ぶりでお見上げいたします。京のお邸ではお二方様はじめ、皆様がおすこやかで、搥子さまの——おゝわたくしとしたことが、不調法な——もうもう絶えず内侍さまの、お噂ばかり。なにくれとなくお不自由がちな深山のお住まい、さぞかし——と思いまいらせても、都と吉野、北と南のおん仲たがいでは、なかなか、お音信をいたそ

うにも、便<sup>よすが</sup>とてもございませぬゆえ——」

「それは、こなたとて、おなじ思ひじや。お二方の御恩を、わすれはせぬけれど——」

「おなつかしさが、弥<sup>い</sup>ませば、わが子ども思うのに、逢うよしもない心憂<sup>うれ</sup>さよ、と袂<sup>たもと</sup>をおぬらしあそばす北の方さまでございまする」

「お、伯母<sup>い</sup>ぎみに、わらわのことを、それほどまでにか——」

「ほんにうらめしい世の中じゃと、それはそれはお痛<sup>いた</sup>わしいお歎<sup>なげ</sup>きでございまする」

詞藻<sup>しそ</sup>に御堪<sup>ごたん</sup>能<sup>のう</sup>な持明院朝の寵臣<sup>しやうしん</sup>として、文芸の府の長<sup>おき</sup>に任<sup>ま</sup>ずる文章博士<sup>もんじやうはかせ</sup>の邸<sup>てい</sup>に召<sup>め</sup>しつかわるゝ女房<sup>にようぼう</sup>だけあつて、梅枝<sup>うめえだ</sup>は、言<sup>い</sup>いまわしが、ひどくうまかつた。

「産<sup>う</sup>みの親<sup>おや</sup>よりも、育ての親<sup>おや</sup>に、いつくしみの深<sup>ふか</sup>いためしも、まゝございまする」

と、またも泪<sup>なみだ</sup>を、こぼしてみせた。

内侍<sup>うちじ</sup>も、つい引き入れられて、

「ほんに産<sup>う</sup>みの恩<sup>おん</sup>より、育ての恩<sup>おん</sup>！ 襦袢<sup>じゆばん</sup>のおりに、両親<sup>ふたおや</sup>に死<sup>し</sup>にわかれたわらわは、伯父<sup>おやじ</sup>ぎみと伯母<sup>おば</sup>ぎみの、御養育<sup>ごやういく</sup>の御恩<sup>おん</sup>に、むくいる術<sup>すべ</sup>の今<sup>いま</sup>はないのが、心苦<sup>こころくる</sup>しい」

「内侍<sup>うちじ</sup>さま。これは——北<sup>きた</sup>の方<sup>かた</sup>のお文<sup>ぶん</sup>でございまする」

持<sup>も</sup>つて来た<sup>きた</sup>文管<sup>ぶんくわん</sup>を、出<sup>で</sup>して、

「そのお筆<sup>ふで</sup>にもございませうが、北<sup>きた</sup>の方<sup>かた</sup>さまには、このたび、住吉<sup>すむぎ</sup>に御参詣<sup>ごさんぎ</sup>を、よいしおに、河内<sup>かわち</sup>の高安<sup>たかやす</sup>まで、お輿<sup>こし</sup>をはこばれました」

「なに、高安<sup>たかやす</sup>まで？」

文管<sup>ぶんくわん</sup>をひらきながら、内侍<sup>うちじ</sup>がきゝかえした。

高安<sup>たかやす</sup>は、内侍<sup>うちじ</sup>の乳母<sup>ちちのぼ</sup>の在所<sup>しよ</sup>なのであつた。それが、記憶<sup>きおく</sup>にのこつていた。

「はい。彼所<sup>かしこ</sup>には、あなたさまに、お乳<sup>ちちのぼ</sup>まいらせました安岡<sup>やすおか</sup>が、百姓<sup>ひやくしやう</sup>の賤<sup>しず</sup>が家<sup>いへ</sup>ながらも、ゆたかに暮<sup>く</sup>しておりまするので——」

「お、彼女<sup>あれ</sup>も、つゝがなくて——」

「はい。その安岡<sup>やすおか</sup>の家<sup>いへ</sup>で内侍<sup>うちじ</sup>さまを、お待ちなされてござります」

「北<sup>きた</sup>の方が、わらわを？」

「はい、高安<sup>たかやす</sup>まで、おはこびを、ぜひぜひお願いいたせと申しつかりました」

梅枝<sup>うめえだ</sup>は、こゝだと思<sup>おも</sup>つたから、

「まあそのお文<sup>ぶん</sup>を、御覽<sup>ごらん</sup>下さいませ。はかない世の中といふ、ましてお互<sup>たがひ</sup>に聞<sup>き</sup>きあう南<sup>なん</sup>と北<sup>きた</sup>にわかれて離<sup>はな</sup>るゝ身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>ゆえ、このたびでなくは——この機<sup>き</sup>をのがしては、もうもう逢<sup>あ</sup>い見るおりは来<sup>き</sup>ぬやも知<sup>し</sup>れぬと、そう申し上げよという、お言葉<sup>ことば</sup>でございました」

内侍<sup>うちじ</sup>は、三位<sup>さんい</sup>卿<sup>けい</sup>夫人<sup>ふじん</sup>の手紙<sup>てがみ</sup>を読<sup>よ</sup>んだ。

こまごまと、思慕<sup>しぼ</sup>の情<sup>なさけ</sup>を述<sup>の</sup>べて、

「乱<sup>みだ</sup>れがましき世<sup>よ</sup>に待<sup>まち</sup>れば、こたびをおいて、いかでか相見<sup>まみ</sup>え参<sup>ま</sup>らせん」と、あつた。そして、その奥<sup>おく</sup>に、

『逢見<sup>あひま</sup>んとおもふ心を先<sup>ま</sup>だてゝ、袖<sup>そで</sup>にしられぬ道芝<sup>みちしば</sup>の露<sup>つゆ</sup>』

と、一首<sup>いっしゆ</sup>の歌<sup>うた</sup>が、書<sup>か</sup>きそえられていた。

「嫂<sup>あね</sup>うえ——」

内侍<sup>うちじ</sup>は、俊業<sup>しゆんごう</sup>夫人<sup>ふじん</sup>へ、

「いかゞ致<sup>いた</sup>したもので、ございませう？」

と、いうと、

「高安<sup>たかやす</sup>とやらまで、お越<sup>こ</sup>しなされませ」

嫂<sup>あね</sup>は、そう答<sup>こた</sup>えたが、すぐつけたした。

「でも、わが夫<sup>つま</sup>は、なんと申<sup>ま</sup>されますか、わらわから訊<sup>たず</sup>ねてみましよう」

北<sup>きた</sup>の対<sup>たい</sup>へ立ち去<sup>さ</sup>る嫂<sup>あね</sup>の後<sup>あと</sup>姿<sup>すがた</sup>を見<sup>み</sup>おくつて、内侍<sup>うちじ</sup>はむしろ正行<sup>せいぎやう</sup>のそばから離<sup>はな</sup>れる方がいゝと思<sup>おも</sup>つた。

## 二

供<sup>たも</sup>は、女房<sup>にようぼう</sup>二人<sup>ふたり</sup>、青侍<sup>あおざむらい</sup>三人<sup>さんにん</sup>。

梅枝のつれてきた迎えの人数は、青侍四人と輿丁六名。

弁内侍は、もたらせの塗輿に乗った。

輿わきに附添った梅枝が、

「音にきこえた吉野山、盛りの花に、ちようど参りあわせたわたくしは、果報ものでございました。あゝ美しいこと！ 見晴らすかぎり、花また花でございますものう！ このあたりが、一目千本、とやら申すのでございましょうか？」

などと、しきりに口をきいた。

一目千本は、やゝ散りかけていた。

折りからわたる山風が、花吹雪となつて、路へ、人の肩へ、簾をかざげた輿の中へ、花びらをまいた。

「さきほどは、胸にゆとりがございませぬので、眺め残していそぎましたが、もうお使いを果たしたも同様な今は、心もかるく、深山の春に酔いまする」

陽は、すこし西にまわつて、乳をとかしたような青空が、かぐわしい霞のようにたなびく桜が、そして陽炎いたつ嫩草が——春愁を感じさせるほどに駘蕩とした山路を、輿がくだつて行つた。

くだるにつれて、路が白く、そして、ぼうつと薄紅く、散つた花卉でうずまつていた。

「高安までは、よほどの道のりであろうの」

と、内侍がたずねると、

「おおよそ十四五里がほどは、ございましょう。朝まだきに発ちましても、女の足がまじりましてはどうせ中一泊り。——北の方さまは、さぞお待ちわびて、おわしましょう」

梅枝は、そう答えたが、やがて言葉を ついで、

「でも、内侍さまは、またとないようなよい折に、おやどさがり！ 思えばこれも、北の方が日ごろ御信心のあつて、住吉神の、御利やくでもございましょうか」

「——そんなら途中で、どこぞに宿るのであるの？」

内侍はやゝ、不安げにいった。すると、宿はとらねばならぬけれど、せいぜい、路をいそいで、行けるところまで行くつもりだと、梅枝が答えた。輿でゆられるにつれて内侍は、そうはげしくはないけれども眩暈をおぼえて、胸もどが、なんとなく気味わるくなつた。梅枝はなお能弁に話しかけたが、内侍は口をつぐんでしまった。

まどつた揚句に、やつと心をきめて高安へ、行くことにした内侍であつた。嫂がまずすゝめたし、兄の俊業も、でかけた方がよからうと云つたのだ。

俊業は、妻から、内侍の病いの気は気鬱のせいだ、——じつは恋わずらいであること、そして恋いびとは誰れあろう楠正行であることを告げられた。これまで身分の尊い殿上人の公達から、どんなに熱心に言い寄られても、ういた心を微塵も動かさなかつた内侍は、兄から見れば、むしろはがゆいくらいだつた。十七八ならばともかくも、内侍はもう二十はとうに越していた。妙齡はすでに過ぎていたともいえた。どんなに美しくても、女には年頃というものがあるのに、こゝろ固いにもほどほどがあると——そう思うと、兄は気もめてならなかつたのであつたが、——だから、恋い人が楠と聞いた刹那、やれうれしや、それは実によかつたと感じたのであつたが、意外にも楠が、内侍の恋を拒絶したと知つた時、

（あゝ、人の世はまゝにならぬ！）

と、おぼえずも嘆声をもらさずにはいられなかつた俊業であつた。（ほんとうに、似合らしい男女であるのに！）

今の誼みからいっても、今の関係から考えても——まったく、これ以上にふさわしい夫婦はなかるうに、さりとて楠も、かたくなく！

俊業は正行の心がうらめしなかつた。けれども、朝敵討伐に余念のない、忠孝一途に凝りに凝つた精神は、内侍の恋をさえ容れる余裕をもたぬのだと思うと、うらむよりは、雄々しくも、健気にもそびえ立つ高さ

の前に、頭をさげなくてはならなかった。不憫でも、妹を、断念させなければならぬ。思いきらすには、心をできるだけ他事へ、そらしてやらなくてはならぬ。それには丁度いゝ伯母の使者だった。

そう考えた俊業は、ためらう内侍をうながすために、京の日野家と自分兄妹の關係について、いろいろと語り聞かせたのであった。

——そもそも日野家は、宗家の日野南家も、分家の日野北家も、持明院（北朝の統）御譜代のおん寵あつてい昵近であった。北畠親房卿の書いた「職原抄」に、「今に至り日野南家、儒は納言に昇る。日野俊光卿、始めて大納言に任じ畢んぬ」

と、ある。すなわち俊光は、大納言となつて、伏見上皇の院執權という頭職に任じたのだ。そして分家の種範も、三位、文章博士にのぼつた。それまでは、文章博士は宗家の日野南家の任で、分家は代々、正四位下大内記を出世のとまりにしていたのである。で、宗家の三人の子、資名、資朝、資明、それから分家の二子、行氏、俊基、いずれもみな伏見院から愛された。ところがそうした生粹の持明院閥の家にうまれた俊基が、宗家の次男の資朝と共に、後醍醐の帝の、歴史の御研究に公然と参与しまいらせて、大覚寺統の文学興張に首となつて働いたのだ、世間は奇異の眼をみはつた。しかも、それどころか秘かに、おん機密を託されて、画策につとめた。

資朝はもつばら、帝の御帷幄に加わつたし、俊基は偽籠居してその間に、外をうけ持った。修験者に身をやつして水分の楠正成を訪ねたり、吉野、熊野の衆徒や郷土を、説いて廻つたりしたのだ。その結果が、正中の変となつて、建武維新のさきがけをしたから、二人の周囲は、あつとおどろかさされた。資朝は、佐渡へ流されてのち斬られたし、俊基は、すぐ鎌倉へ護送されて、扇谷の飯糰坂で、

古 来 一 句 無 死 無 生  
万 里 雲 尽 長 江 水 清

と、辞世の頌をのこして首を刎ねられた。青侍の後藤助光は死骸を

茶毘に附し、むなしい遺骨を抱いて、京に帰つたので、北の方は悲しみに堪えかねて、稚い二歳の俊業と、生れたばかりの搦子（弁内侍）を、ふり捨てた。亡き夫の四十九日に、濃い墨染の法体と態を変えたのだ。そして嵯峨野の奥の、柴戸のなかで、菩提をとむらつた。が、間もなく夫のあと追つて、この世を去つてしまった。

旧記に、  
「俊基は、累葉の儒業を継ぎて才学優長なりしかば、頭職に召仕われて、官、蘭台に至り、職、職事を司どれり」  
と、ある。

蘭台は、蔵人頭だし、職事は右少弁だ。たしかに重要な地位だった。また資朝も、中納言としてときめいていたのだ。この二人が悲惨な最後をとげたから、日野一門はふるえあがつた。戦々兢兢々として、北朝に従順を誓つた。俊基と資朝は、当時の公家には出色、稀有な人物だった。だが、日野家の一族からいわせると異端者であった。その後、俊業は、亡父俊基のころを自分の心として、敢然と吉野へ走つて南朝につかえたが、伯父の行氏が北朝の文章博士でいることに對しては従来の關係からいって、特にいきどおりを感じるといったようなことはなかつた。むしろ、平安朝型の伯父の典雅さを、意気地なしと小馬鹿にしてはいたものゝ、格別、憎しみの感情はもたず、自分兄妹が養育された恩誼は、ありがたく思つていた。

で、俊業は、内侍に、  
「高安へ参らぬとあつては、情誼にそむく、人でなしとも、そしられよう」  
と、いった。

正行は朝から外出していた。たぶん北畠館へ行ったのだらう、と嫂が、内侍に告げた。なにか——虫の知らせか、妙に後ろ髪をひかれるように感じた内侍だったが、やつと決心して迎への輿に乗つたのであった。

梅枝が、

「内侍さま——」

と、呼んだ。

受け応えがなかった。内侍は、美しい額を、悲しそうにひそめながら、睫毛を白い下脛にくっつけていた。

背後の、山の上に残してきた人の引力に、なやむのだった。そして躰の疲労も、にわかにはげしく感じられた。

輿は、桜の山を、麓までおりつくした。

そこは、吉野川の峽谷で、路は、谷の崖ぶちに沿い、崖は、絶壁となつて、六田の奔瀨に裾をあらわれていた。

涑々と流れる川瀨の音を聞いても、やゝしばらく眼をひらかなかつた内侍が、

「陽のあるうちに、河内の国境を、越せるであろうか、もう梅枝。

——水分の、楠館——の傍を、この輿は、通るであろうの？」

そう、いゝながら見ひらいた目で、眺めるともなく川面を見て、

（おや？）

と、思った。

### 三

吉野川が、逆に流れている。

（おかしい！）

いや、路が、川の流れと、逆行している。

（でも、やはり奇異じゃ！）

内侍は、輿が川上の方へ進んでゆくのを、心でたしかめてから、

「あれ、路が、ちがいはせぬか？」

といった。

「いえいえちがいません。一里ほど上りますれば、上市でございませぬ」

梅枝が、そう返辞すると、内侍はいぶかしげに、

「あれ、上市へ？——河内へまいるには、吉野川の縁を下市まで下

つて、それから山路へかゝると、わらわは聞いておつたに、げせぬことをお云いじやのう」

と、たゞしたが、梅枝はほゝえんだ。

「内侍さまは、地理をおわきまなさいませぬ。南河内の水分へなら、さよう参るが順路でございませぬが、高安は、おなじ河内と申しまして、大和川をこえて北。中河内でございませぬ、この谷をくだつて下市へまいつては、かえつて遠まわりに相成りませぬ。やはり上市から、竜在峠をこえまして、三輪、大安寺とまいる方が、近くもあれば、路もよろしゅうございませぬ」

内侍に、道のりの遠いか近いかの判断がつくわけもなかった。

梅枝は、京の西、嵐山のもとに、天竜寺が建立されたこと、その天竜寺は、後醍醐の帝の御冥福をいのるために、尊氏將軍が、あらゆる費えをおしまずに建てた一大伽藍であること、そこで行われた「天竜寺供養」が、どんなに盛大だったか、その折の結縁に、行幸あそばした上皇のおん行列が、どんなに立派だったか、ということなどを口きらずに内侍の耳へ入れた。

「かしこくも、上皇には、御簾を、おかけあそばしましてな、路々につどう老若貴賤の見物どもを、みそなわしたのでございませぬ。ありがたく、わたくしも拝みました。黄練貫のおん衣に、おん直衣は雲立涌の織物でございました。お指貫は、たしか薄色でございました。お供は西園寺大納言公重の卿はじめ、宰相中将忠季卿——頭左中弁宗光朝臣——御本家の資明中納言さまも、わが館さま行氏卿も、さらびやかな御装束でございました」

梅枝の言葉は、のべつに続いた。

輿が半里ばかり進んだ頃、——

上市の邑はずれには、髭髯が頬一面、眼の下まで、真っ黒ぐると、すさまじく生えはびこつた、筋骨のたくましい武士が、強そうな馬にまたがって、ぎらぎら眸をひからせていた。



それは、熊毛髭の将監——高師直の家臣にその人ありと知られた豪  
勇の士、矢板将監であった。

脇楯、籠手、臍当にがちり身をかためた小具足いでたちで、おそろ  
しく長い刀をおびていた。そばには、おなじような装束の騎馬武者が  
数騎と、三十人あまりの郎従が、立ちほだかっていた。

そこは、吉野川の北岸で、路が追分になつていて、一方は六田へ、  
岸に沿うてくだる街道、一方は、あぶなげな釣り橋で川を越えて、細  
い溪川づたいに、吉野の邑の後ろ手へ、のぼつてゆける近道だった。  
しかし、この近道の方は、輿の通れるような路ではなかった。

「あゝくたびれた！」

郎従の一人が、路ばたの草原に尻をついて、腰をさすると、二人、  
三人と、ばたばたとまねて、たちまち十人ほどが、可憐な山慈姑の花を、  
尻の下にしきつぶした。

「むゝう眠い！ おれは睡つとつて、たまらん」

「まさか、くたびれ儲けになりあしまいな」

「なつてたまるか、昨夜はねずの峠越しだ」

「慾得なしに、寝転びたいの」

「ぐつすりと一睡せんことには、どうもならん」

「弱音をはくな。いゝ女のそばになら、二晩三晩は、まんじりともせ  
ず喰い下つておるくせに！」

「馬鹿を申せ、そなたとは違うぞ」

「心許ないて、ちと」

「こう、ひまどつてはの」

「心配御無用、出来ばえは保証するわい！」

「ふん、お前の知つたことか？」

「ふくれるなよ。うんとこさ御褒美が、待っているわさ」

「気どられたのでは、ないか知ら？」

「猫の子を、盗つてくるのとは、事がちがう。訳が異なる」

「鄙びたれども、雲居に近い、九重のおく深い場所からおびき出すのだ。  
そう、おいそれと参るものか」

「そうともそうとも。気どられるはずが、ないではないか？」

「いや、ないとはいわれん」

「いや、ない！」

「いや、なくはない！」

「こう、そりやなくはないの。今の甚五が口真似ではないけれど、雲  
井に近い上藤をおびき出すのに、輿をかついで行つたのは——大きな  
声では云えないが、ちいっと念が入りすぎて、過ぎたるはなお及ばざ  
るのではないかのう？」

「須野左。みょうなことをいう。相手が貴い上藤だからこそ、輿も昇  
いて迎えに行つたのじゃ」

「だからこそ、尻尾をつかまればせぬかと、かく申す須野左門、案じ  
ている」

「な、なぜさ？」

「相手が、輿のない女かよ？」

一人が「なるほど」と、感心して、

「はゝゝ梅枝それで腰くだけか！」

と、笑うと、一人が、

「なあにあの腰は、二枚腰じゃ」

と、首をゆすぶつた。

「ほい、いつ検めた？」

「誰れが、たゞで聞かすか。だが塗輿の件は、八幡大丈夫、と思う」

「大丈夫、気どられる氣遣いはないと、この甚五も思うの。さきが  
天眼通ではあるまいし、まあ考えても見るがいゝ、京の街が、寝静ま  
つてから、今出川のお邸を出て、奈良、櫛本、柳本、三輪と——大和  
路へ入つてからは、伊賀は名張の佐々木殿館へまいる一行という触れ  
込みゆえ、たれも、われわれを吉野へ行く者とは考えまいさ。な。三

輪の宿で、きのう一日逗留して、楠の主従が河内へ、のこらず帰った  
ということな、ごく内密にたしかめてさ。の、それから昨夜、急に夜  
中発ちだ。初瀬へ曲ったものと思わせて、まっすぐに、多武峯をこし  
て竜在峠、松明たよりの山路の暗闇を、寝不足の眼を皿にして、足は  
播粉木——らくではなかつたよ、なあ！ 峠をおりて、朝からずつと、  
この追分で立ちん棒、棒のように相成つた脚腰を、ふんばつて、上市  
の邑から吉野の方へは、人っ子は論ないこと、犬一疋、鹿一疋もまだ  
おろか、蛇一本、蜥蜴一本、通きなんだ。塩焼飯で、腹をもたせて、  
見張っている目は、だいぶかすむが、熊髭どのに頑張られては、臉を  
相談させるわけにもゆかぬので、のう——われわれを怪しいと注進に、  
走つて行つた人間の、ないことだけは、たしかにわかる。と、すればだ、  
どうじゃ？」

「いかにも！」

と、皆が、うなずいた。

「お互に、恩賞にあぶれるおそれは、およそないのう」

そう、甚五がいったとき、騎馬の士の一人が、

「起てっ！」

と、どなった。

街道に、輿が見えたのである。

「やあ、来た来た！」

「ごきつた！」

「おいでなすつた！」

山慈姑の花咲く草原から、郎従らは、尻をあげて、往還へかけ戻つた。

「どうとう畷に、しめこの内侍じゃ！」

「てへ、かたじけないぞ！」

「おやおや？ あたじけない供だ、たつた二三人らしいぞ」

「ちえ、張合いがないのう！」

「ぶ。おれたちの、働き場所がふつとんだわい」

「ふつとばした梅枝婆アめ、おぼえていろ！」

「婆アはなかるう、脂ぎっている」

「二枚腰どころか、十二枚腰じゃ」

「腰か、腕かは知らんが、すごいての」

「そりや脛じゃよ、口じゃよ」

「あの口で、手柄を総なめ、総なめ！」

「ちえちえ、いまましいいなあ！」

「これさ、さもし根性、出すまい出すまい！」

輿の脇で、梅枝が、手をふつた。

熊毛髭の将監が、

「御苦労っ！」

と、馬上で大声をはなつた。

## 追及

### 一

正行は今朝、北畠館をおとすれた。

それは、親房卿の心をうごかして、朝議の再開をねがうつもりだった。

こゝ両三年は現状維持、なお形勢をみてから——という、先日の

決議が、なんとしても不服だったのである。正行は、一日も早く、戦

いたかった。決して軽々しくはやって、無謀に功をいそぐのではない。

間諜は京都からしきりに、高師直と、上杉重能との不和、軋擦をしら

せて来る。執事武蔵守師直、越後守師泰、播磨守師冬、刑部大輔師秋、

伊豫守重成などの高一族と——伊豆守重能、弾正少弼朝定、左馬助

朝房たちの上杉一門との争いは、足利幕府の勢力が、まっ二つに分裂

することを意味するのだ。だから時機は、すでに熟している。そう正行は考えたのであった。

（北島の准后は、先帝以来の補弼の棟梁でおわす。その親房卿が、戦機熟せり、戦わなければならぬ、と一言、みかどの御前において仰せあつて下さりさえすれば——鶴の一声。群卿は、さながら群鶏のごとく——おれは、すぐにも開戦が、できるのだが——）

きのう、俊業と一緒に、四条大納言の館をたずねたのは、大納言隆資卿をまず説いて、隆資卿から北島准后の心を、開戦論の方へかたむくように語らつてもらうためだった。俊業も、正行のために、口をそえて、岳父の大納言へ極力、申しのべた。

だが、大納言は、正行と俊業の言葉を、とりあげなかった。

「よしや、鷹が、いかに申そうと、准后の御心、なんとして動こう。北島の卿は、東西に征戦をお重ねになつて、多年、兵馬の間に起臥あそばされたお方じや。帝業補佐の尊きおん身でありながら、同時にまた三軍に將たるべき器ゆえ、おん躬ずから戦機をみるの明をそなえておられる。なんで他人の言によつて、御自身の御判断を、右左されようぞ」

そういわれては、正行は直接に、親房卿にぶつかつてみる外なかった。で、今日、北島館に伺候したのであつたが、親房卿は、昨夜らい、風邪の気味で、なお臥所にあつたので、謁することが出来なかつた。館の門をでると、正行は少時たゞずんでいたが、南へ歩きだした。

供の郎従、橋内が、

「いずれへ？」

と、伺うと、

「御陵へ」

と、答えた。

しばらく歩いて、左へわかれる木下路を、はいってゆくと、そこには、先帝、後醍醐院の御陵があつた。

おそれおゝくも仮の宮居、おんわびしき行在と定められた吉野寺、

吉水院如意輪寺の客殿の、裏手の築地ぎわから高まる丘陵の一端に、常盤の緑と、年ごとにめぐむ嫩葉の、濃淡に、いとも翳鬱と、おゝわれつゝ、かんさびてある御陵の御まえに、正行は、ひれふして、黙禱に時をうつした。

そして、頭を、もたげてからも、容易に目をひらかなかつた。

「——身は南山にうずむと雖も、神はつねに北闕を望む」

正行の唇から、低くもれるのは、おん傷わしき、先帝の御辞世のみぎりの、御詠の句であつた。

瞼の間から、滂沱として、涙がわいた。涙は、青白い頬を、つたい流れた。

やがて御陵前を辞した正行は、木下路を戻つたが、邑の方へはかえらずに、足を山路へむけた。

橋内が、また、

「いずれへ、お越しなされますか？」

と、云つた。

「奥の社へ」

と、正行は答えた。

## 二

十町ほど、登ると、山路は奥の千本の、さくら林のなかに入った。

橋内が、うしろから、

「下の千本は、もう昨日あたりから散りはじめましたし、鎮守のお社、蔵王権現うらの、中の千本も、どうやら色があせかけたようでござりますが、奥は、ちようど七八分——山の深いせいでもござりましようが、花は満開よりも、半開からこのくらいが、眺めどころでござりましような」

そういつたが、正行はだまつたまゝ登つて行つた。

ほんのりと紅をとかした白雲のなかを、わけのぼるようで、花は申

分なくめでられたけれど、主の殿のうしろ姿が、なぜかしらひどく淋しげに見えるのが、橋内には気にかゝった。

桜花の中を、五六町のぼると、金峰神社の社頭だ。そこは、吉野連峯ちゆうでは、最も高い場所だった。

正行は、神前にぬかずいてから、眺望のきく地点へ行つて、腰をおろした。社の附近には、青侍をつれた公家が二三人、吉水院の衆徒や里人の間にまじつて歩いてしたが、このあたりは、ちょうど人影が絶えていた。

吉野川の大きな峡谷が、正行の目の下の、如意輪寺の森や、蔵王堂のいらかなどの彼方に蜿々と横たわっていた。

正行は、その峡谷をへだてた西の空に、自分の領土の標識をなす金剛山の、峯をながめた。

金剛山は、葛城、信貴、生駒とつらなる金剛山脈と、紀伊見峠、槇尾山、牛滝、根来の峯をつなぐ紀伊山脈とを、左右の両翼に従えて、こゝ吉野金峰の、すぐ背後からそばだち重なる大峰の峻嶺と、相對峙して、おごそかに南朝の皇居をまもっていた。

橋内が、わきから、  
「じつに金剛山は、どこから眺めましても、頼もしい姿でござりまするなあ！」  
と、いった。

だが正行は、やはり答えなかつた。

橋内は、金剛山の頂ぎと、主君の眸とを、ときどき見くらべたが、いつまで待つても、主君の視線は、山頂とつながれたまゝだった。

(妙だ。どうなされたのだろうか?)

橋内は、自分も樹の根に尻を落ちつけて、さて——と、腕組みをした。考えてみると、いぶかしいのは、今日にかぎったことではなかつた。近頃は、ずっと、いぶかしいといえ、いぶかしいことばかりなのである。

橋内は、正行のごく気に入りの郎従の一人であった。延元元年五月

二十二日の払曉、桜井の駅はずれで、正成の胡床の前に、正行の座をつくるために楯板をしいた男は、この橋内だった。爾来、ほとんど一日も、傍らから離れたことのないほどの、忠実ぶり——。歳は正行よりも、十ばかり多かつた。

——しかし、いぶかしいことばかり、といつても、  
(どこが? なにが? どうしたというのだ?)

と、橋内は自分の心にきいてみた。  
わからなかつた。——では、いつ頃からおかしく感じられたか、それを考えてみたが、おもい出せない。

(困つたな!)

橋内は、当惑した。

極端な主人思いと同時に、盲目的な正行びいきで、依怙地というほかない正行信者だつたから、いわば、もし正行に痘痕があつたならば、えくぼに見えたであろうし、正行が顔をしかめれば、よしんば食あたりの腹痛のせいでも、それが崇高に感じられた。

そうした橋内に、どうして正行の眼が今、金剛山の頂にこびりつきながら、そこに、女人の——美しい弁内侍の面影を、まぼろしに見ていようなどと想像が出来よう。もし、出来たら、突嗟にあつと、腰をぬかすか、眼をまわすかした橋内だったかもしれない。

やゝ小半時も、正行はその幻影の甘美のなかに、じいっとひたつていた。その間じゆう、これもまた、じいっと驚くべき辛抱づよきで、主君の高遠な思索をさまたげまいと思う一心から、神妙に身動きもせぬよう努めていた橋内が、あまりに根をつめた機勢に、ふと喉をつまらせて、不覚にも大きく咳入つたので、正行は、はっと我れにかえつて、  
「おゝ!」

と、うなるように呟いたが、すぐ、

「ちえゝ痴愚め!」

突つ立ちざまに、そう、おのれを叱咤したのであつた。

が、橋内は、自分が叱られたものと思ひ込んで、顔色をかえつゝ草のなかへ、両手をつけて平伏した。

「と、とんでもない不調法——ひらに、ひらに御容赦下さりませ」

「橋内、なにを申す？」

「はあ。真つ平——」

「なにを詫びるのじゃ？」

「まことに、不調法に咳入りまして——」

「なあんのこと！ そちの咳か」

正行も、さすがに微笑をうかべたが、たちまち鬱鬱となつて、草の上を、歩くともなく歩きつゝ、

（おれは、なんのために山へ？）

と、自問して、

（内侍を避けるために！）

そう、自ら答えた。

（だが、内侍の宿下りを知つて、日野邸へ、寺内の宿坊から移つた自分ではないか。——避けずとも、わが心を、毅然、毅然持て！）

### 三

倒れそうにあえぐ汗馬から、跳び下りざまに日野邸の門内へ、かけ

こんだ野田四郎が、大音に、

「率爾ながら物申さん。当館にお宿りある楠の殿へ、葛の砦の野田四郎、御注進にまいって候ぞ。お取次ぎ頼もう」

と、呼ばわつた。

雑舎の中の青侍が、おどろいて、一人が、

「河辺どの、河辺どの！」

と、楠の家臣、河辺石掬丸をよびたてる間に、一人が廊を、対の屋へ走つて行つた。

車宿を、仮りの厩にして、主君正行の馬と、石掬丸宗連の馬に、秣

を喰ませていた郎従が、とび出してきて、心配顔で、

「四郎どの、——？」

と、問うようにいうと、

「わが殿は、おわすか？」

四郎は、中門の方を指さしつゝ、きいた。

「御他行でござる」

「御他行とは、いずこへ？」

「北畠准后さま館とか承わつた。お供は、橋内でござる」

雑舎から、

「野田どの！」

「なんぞ異変でも——？」

と、郎従たちが現われた。

邸の下部、婢女たちが、窓からのぞいた。

河辺石掬丸が、走り出た。

「野田！」

「おゝ石掬丸！ 御注進じゃ」

「わどの自身で——徒事ではあるまい？ 殿のお留守、それがし承わろう」

「申そう。京の執事、高師直が臣、矢板将監——きこえた剛者じゃ」

「む、矢板将監が？」

「逞兵およそ三四十人を従えて、一昨日未明に京をたち、大和路くだつて昨日は終日、三輪にとどまつていたが、伊賀の名張へ行くのだといつわつて夜路を、竜在峠へ向つたのだ」

「すると？」

「今朝ひき明けには上市に、ついた筈じゃ」

「と？」

「目ざすは、こゝ吉野ほかあるまい」

「はて？」

と、石搦丸は解せぬげに、

「わどの、三四十人と云われたの？」

「小勢ながら、屈々な郎党らしい。まだ、上市にひそんでおるのだ。あゝ、間に合うてよかった」

と、野田四郎が、この邸の様子に安堵をおぼえて、そうひとりごとのように云った。

石搦丸が、

「禁裡の御警衛には青屋どの、吉野衆、五百はあるうし、北畠館にも伊勢、熊野の兵がおる。屈竟とはいえそれしきの小人数で、なにが出来よう？ こけな、愚かしい振舞でござるのう」

「あいや、油断は禁物。矢板将監は、老獺師直が股肱じゃ。京の密偵はみな、東条の虎夜又どの御奉行ゆえ、細作の諜報は、けさ河内へまいった。で、虎夜又さまより、それがしが皆へ、急報がござったのと、上街道と中街道を、みはらせておいた拙者が手先の報せとが、びつたり符合いたしたので——こりや暫しも猶予はならんと、まっしぐらに、馬をとばせて、かくの通り。郎党どもは後から参ろう」

「これさ、矢板将監勇ありとも、三四百ならば、ともかくも——」

「いや、真つ面ならあえて、おそろゝには足らんが、なんらかしごとき詐謀がありそうじゃ。特に当日野館を警戒せよと、虎夜又さまよりお申し越された」

「なに、当館を警戒せよとは？ む、わかった。刺客に備えよとじゃな」

「あいや違う。矢板が一行には、京の日野家の女房らしき者が一人、加わっていて、あやしい空輿を、昇かせたる由——」

「えっ？ な、なんと？」

石搦丸が、叫んだ。さっと、面色が変わっていた。

だが、おどろいたのは、野田四郎の方も同断——。たちまち叫びかえした。

「やあ！ そ、その驚きは心得ず——？」

「おう、しからは三位家の、女房梅枝が——」

「おう、その梅枝が？」

「あゝ遅かった、遅かった、こりや何としよう、一大事じゃ大事じゃあ！ 館の衆つ、内侍さまはかどわかされた！ 奪われましたぞ！」

と、石搦丸は、声張りあげた。

雑舎のなかゝら、叫びごえと、人の走る足音が聞えた。四郎が、

「ちえゝつ遅なわつたか後れたか！ 搦丸、遠くは行くまい、奪われたは何時じゃ？」

と、いうと、

「殿へ、准后館へ走れ」

石搦丸はそう、郎従の一人に命じてから、

「半响ほど前じゃ」

「追わずばなるまい？」

「もちろん。だが待たれい、殿が——」

「殿のお言葉は明らかだ」

郎従が門外へ、かけ出した。

「とは思うが、人数がたりぬ。いずれへか、助力、もとめずばなるまい」

「青屋どのへ、誰れか——」

と、野田四郎がいうと、石搦丸が、

「伍平太、走れ」

「は。青屋どのお邸へでござるか？」

「速いところを三三十人、頼んで参れ」

言いつかつた郎従が、邸外へ走り去ったとき、対の屋から、血相をかえたこの館のあるじと夫人とが、中門の門ぐちへ、現われた。

「わらわが、わるうございました」

「いやいや鷹が、わるかった」

「わが夫、なんと致しましょう」

「北の方、なんと致そうのう？」

「禁裡へ、なんともおん申訳けが——」

「ない、ない、ない！」

石掬丸が、

「朝臣！」

と、叫んだ。

「おゝ石掬っ！」

そう呼ぶ、俊業朝臣の聲が、絶望的にのおのゝいた。

野田四郎が、

「まことに不慮の御災厄——いかばかりか御心痛！ 拝察つかまつる。

いま一刻、諜報早くばと憾まれますが、すでにかくなる上は、われ

ら楠主従が能うかぎりは働きましようほどに、その努力お俟ち下され

い」

心は、あせりながらも、つよい語調でいうと、俊業朝臣は、感せま

つた声音で、

「おゝいみじくも雄々しき、その心——俊業いふべき言葉をもたぬ！」

と、そう答えたとき、郎従が一斉に、

「殿——」

石掬丸も、一緒に、

「殿っ！」

と、叫んだ。

満面蒼白な正行が、門のところで、

「馬ひけつ」

あかく逆上させた顔の橋内が、馳せ入って、主君の乗馬を、車宿から

曳き出した。

野田四郎と石掬丸が、

「殿っ！ 追わせらるゝか？」

と、走り寄った。

正行は、すでに馬上の人となっていた。

石掬丸は、おのが乗馬へ——四郎も、門外に乗りすてゝおいた馬へ——。そして郎従らは、主君の馬をめぐつてあつまった。橋内が、轡をとつた。

朝臣と夫人が、表門の外まで走りでた時はもう、正行の馬と七人の

郎従とが、一塊りとなつて濛々と土けむりあげつゝ、坂を下つていた。

そのあとを、四郎の馬と、石掬丸の馬が、追つて行った。

門ぐちには、青侍と女房たちも、つどい立つて、眺め送つていた。

見る見るうちに、人と馬は、下の千本の花蔭に没した。

誰れの馬か、一声、高いいなゝいた。

## 鹿路平の血烟

「おれは、有卦に入ったのだ！」

熊毛髭の将監は、小躍りするほど嬉しかったので、

「神ほとけの御冥護があつたのだ」

と、いったが、なお言いたらないように、

「おれは、神仏の思召しにかなつたのだ」

そう、つけたすと、一人が、

「御大、もう楠殿の首を、とつたような！」

と、笑うと、

「もはや、とつたも同然じゃ、わはゝゝ！」

熊毛髭が、ふとく哄笑を、傍へあびせた。

敵も横列、味方も横列。

まだ距離はあるけれど、敵も味方も、ことごとく刃の鞘をはらって、睨み合いつゝ近づくのだ。

春陽の光が、刃影に反射した。

「これほど大きな獲物は、ないぞっ！」

と、矢板将監、銅羅めいた声をひびかせた。

「天下無双の手柄首っ！」

と、応ずる者があつた。

「うて、うて、討てっ！」

と、はやす者があつた。

味方は、多武峰を背負っていた。敵の後ろには、竜門岳がそびえた。

そこは、鹿路平——。

吉野から奈良へ通じる大和路の、いわゆる上街道は、上市の邑から、竜門岳の中腹をよぎる竜在峠をこえると、多武峰のふもとまでは、十町ばかり平坦な高原をとおる。この原は、大職冠鎌足公の廟所である談所ガ森と、古歌に知られた音羽山の裾とで、一度くびれてから、ふたゝび倉梯宮址の旧跡へひろがっているのだが、宮址の方は鹿路平とは呼ばれない。

まんまと、弁内侍を、たばかり奪った矢板将監は、この鹿路平で、正行に追いつかれたのであつたが、追手はわずか十人、それも平常着のまゝなのに、我が方は四十人に近い人数でみな小具足を鏝う、粒選りの兵だ、と思うとせゝら笑いが出た。ところが意外にも、楠多聞兵衛正行こゝにあり、その輿、もどせ！ とよばわれたので、俄然射倅心がめらめらと燃えさかり、勇氣は、とみに百倍、という形になつて、馬からとび下りた。楠——と聞くまでは、鞍からはなれる気など毛頭なかつた将監であつたが、いまや勃々と功名にあふられて、刃渡り四尺もある長剣をぬき放ち、六尺有余の巨躰を、どしりどしりと運びつゝ、塵殺しの陣をおのが左右に張つて、敵正行とその郎従に迫りゆくのであつた。

内侍の輿は、蒲公英の咲く草のなかに、据わっていた。内侍の女房と、青侍は、まるで生きた気もなく輿わきで、ふるえるのみだつた。代わり昇きとも六名の輿昇きは、固唾をのみながら、立っていた。

緑の毛氈をしきつめたような高原には、さんさんと照る日光の下に、山うつぎ、やま牛蒡、山あらゝぎ、岩ざくら草、蘭、すみれ、山慈姑など、春の草花が燎らんと咲いていたが、あわや薫風は一じんのなまぐさい風と変じて、凄惨な修羅の巷が、この平和な緑いろの上に、この色とりどりの花の上に、まさに現れようとしているのだった。

「かゝれっ！」

と、熊毛髭がさげんだ。

## 二

た、た、た、うしろに、正行はさがつた。

たしかに、刃の鉞から柄へ戻ってきた圧力を、感じると一しよに、血しぶきも見たのだ。

だが敵は、刀をふりかぶつたまゝ、のめずるばかりに迫つた。と、思う利那、その敵は、片手を柄から放して、おのが腹をかゝえた。そして手を、腕を、赤くそめて、草のなかへ、本当にのめずり倒れた。

正行の感覚に、手応えが、よみがえつた。

いま、最初の敵へ、片手突きに、剣を突込んだのである。

(実戦——血闘——なんの、雑作ないぞ！)

そう感じたとき、第二の敵の鉞が左の肩の上に光つた。

正行は、だが、間を見切つたから、かわさずに、とび込んで、皮鞆で蹴りのけつゝ、第三の敵の手許を、横なぐりにはらつた。

悲鳴とゝもに、敵の、刀をにぎつた拳が、手くびから切断されて、第四の敵の横面へとんで、頬を傷つけて地べたに落ちた。

た、た、た、うしろへ、その隙に正行は、再びさがつた。

将監が、



「突込めッ！」

と、どなった。

正行は、第三の敵から、もろてづ 双手突きにおそ 襲われた。

左腕に、熱感をおぼえて、

(かすられた！)

そう思った時は、すでに正行の剣が、敵の頸部けいぶをふかく割っていた。

「殿っ！」

と、石掬丸が、闘いつゝ叫んだ。

一人を斃して、二人と渡り合っているのだ。

と、野田四郎も、

「殿——。将監しょうげんは、それがしが——」

刃を鳴らしながら、

「引受け申すぞっ！」

と、よばわった。

「わはゝゝ、楠殿、どうじゃ？」

そう呼びかけた敵将、矢板将監と、正行の距離きょりは、およそ五間ほど

であった。

「四郎——。案ずるに及ばぬぞっ！」

と、正行が、よばわり返した。

そして血ぬられた剣を、第四の敵に対して構えた。

味方の刃で顔に負傷した男は、須野左門すのさもんだった。須野左は、手負い

猪じのように、たけついていた。

石掬丸が、ふたゝび、

「殿っ！ それがしと、お代わりあれい！ 将監へは、掬丸が向いま

するぞっ！」

と、叫んだ。

熊毛髭は、まだ動かずに突っ立っていたが、やがて正行へむか 対うこと

は明らかだった。

「えゝ、邪魔じやまなっ！」

と、石掬丸は気をいらつて、さらに一人を、から竹わりに斬り斃たおした。

けれども新手あらてがふたり加わって、敵はまたも三人になったばかりでな

く、将監へかゝるのを遮さへきるために、四五人の郎徒がひかえているのだ。

「ちえゝっ！」

石掬丸は、うなつた。

主君の剣技を、決して危ぶむわけではない。湊川みなとがわにおける先君の

没後ぼつご、五六年に亘るはげしい切磋鍛錬せつそによって、主君の剣技は、疑い

もなくはるか超凡ちやうはんの域に達していた。おそらく、いかなる強豪と白刃

をまじえても、後おくれはとらぬであろう。主君も、自分も、実戦の経験

はもたない。真剣をふるって闘うのは、今日が始めてだ。しかし、主

君はたちまち三人を、自分も二人を斬り伏せた。熊髭の将監しょうげんの豪勇ごうゆう

といえども、主君としては怖おそるゝに足らぬかも知れぬ。否いや、主君の敵

ではあるまい。多聞丸たもんまるの剣は、幼時からほとんど入神にゆうしんの凄すこさがあつた。

多聞兵衛正行の今の鈍どんの鋭えいさは、たしかに無敵だ。——が、然しながら、

万一？ 万が一？

と、思う石掬丸は、ぎりぎり歯はぎしりして、

「白癩びやくらいっ！」

袈裟けさがけ。

また一人、血煙りあげてのけぞつた。

### 三

おもいは同じい野田四郎。

「えゝ青蠅あおばえども、失せろっ！」

叱咤しつたの声もろとも、刃が、敵の只中で、きらめいた。

四郎が突進したあとに、二人の敵が、骸むくろになつて斃たおれた。

自分が頭を割られでもしたかのように、返り血で真っ赤になつた四

郎は、息つくが早いか、

「とう！」

一人の高腿をはらって、熊毛の将監めがけつゝ走りだそうとした時、背中に何か重い物が、ぶつかつたのを感じた。

と、その瞬間、肩骨の下に灼熱をおぼえた。

(やられた！)

そう思いながらも、ふりむきざまにふるつた刃が、さいわいにも敵の肋骨を裂いたので、この太刀は肩におろされたものゝ、深くは入らなかつた。

(傷は浅い、これしきの——)

四郎は、奮然と起ち直つたが、五人の敵の刃でかこまれている自分を意識して、将監へいどうとすることは——それをあせるのは、無謀に近いと感じた。

(殿？ だが、殿は？)

正行の姿は、前の方には見えなかつた。

(後ろをみては、危いが——)

しかし、顧りみずにはいられなかつた。

すでに正行は、小山のような将監の巨軀と相對して刃をかざしていた。四郎は、太刀風を感じた間一髪、からくもかわしたが、危機は果然——。

かわした側から浴びせられたのである。

刃が鳴つた。がきり、鏢もとで受けたには受けたが、のびた鋭で、鬢を薙がれた。

もはや四郎は、血まみれだつた。

さすがに、正行の郎従は、橋内はじめいずれも、一人よく十人に当り得る猛者であつた。寡をもつて、おびたゞしい衆に敵抗することは、いうまでもなく楠の伝統だ。

けれども、敵も強かつた。高師直がすぐりにすぐつて、将監に配属させた精兵だけあつて、命知らずの精悍ぶりが、ふるう刃の火花と散

るので、橋内以下は、二人ずつ相手に闘うのが精一ぱいだつた。

「えゝつ！」

「おうつ！」

雄叫びの声々——。

鏘然と鳴る剣刃のひびき——。

斬りつ斬られつ、しぶく血、ほとばしる血、ながるる血！

すでに息絶れた骸。なおうごめく骸。——骸の周囲の草は、赤黒く染まつた。

#### 四

「参れつ！」

正行は、剣を、片手上段にかざしていた。

「——楠殿。この刃、鋭うござるぞ」

将監は、平正眼に構えていた。

しばし睨みあいつゝ、待機したが、乗すべき隙は、どちらにもなかつた。

だが、平押しに、じり、じりと、将監が進みだした。

「えゝつ！」

正行が、はげしく気合を入れた。

けれども、撃ち込めなかつた。

(手剛い！)

たいがいの者なら、正行のいまの氣勢——空声にこもる剣気の凄じさに、圧倒されて、そこに、多少とも隙が生じるのである。現に、須野左門が、この一喝を喰らつて、ひるむところを斃されたのだ。が、矢板将監には、効かなかつた。

肉迫は、ますますつゞけられた。

——一尺、五寸、三寸、一寸——あわや、間が見切れなくなる。見切れないなら躲すか、受けるか、しからずば相討ちに、薄紙一枚の機先を争うか？ 正行の心頭には惑いの旋風がおこつた。

——躲すのは、破綻のもと。おそるべきは第二襲だ。受ければ、あの巨躰で、躰当り。あきらかに不利だ。が、受けて、捨身の——？

(否！ 襲う位置に立たねばならん！)

高くかざした剣が、ふるえた。

正行は渾身の気鋭をこめて、

「えっ！」

と、おめいた。

だが、その意図は、むなしく、依然、守勢に立ちつづけなければならなかった。しかも、いま、すべての気力をかたむけて叫んだ直後、正行は、ふしぎな乱れを、わが呼吸に感じた。と、ついぞ覚えぬ種類の、深刻な疲労を意識した。——はて？

(あやしき胸苦しさを？)

熊毛髭のなかで、らんらんと眼が、光りを増した。

「楠殿——。そりゃ、剣法の型でござるか？ お若いにしては、あつぱれ、あつぱれ！」

正行の顔色は、さながら死人のように蒼かった。

将監は、やゝ微笑をうかべつゝ、

「お疲れの体と、見たは僻目か？ 返り血とばかり思いしに、どこぞ傷手など負われたか。さあまっこの通り、隙だらけじゃ」

と、誘いの隙、ひろびろと見せて、

「いざ、尋常に勝負いそごう。——楠殿。この将監は果報者じゃ。南朝武士の棟梁たる、おん身のお首、いたゞかば、天下無双のいさおしと、それがしの名はとどろいて、鹿路方原の大手柄、後の世までもかゞやき敷かん。さあ！ さあ参られい！」

ふとぶとゝいう敵将を、

「えゝ鳥澁がまし！」

と、睨む正行。だが、呼吸はいよいよ不調。流汗りんり。

——鼠賊四人を斬ったのみ。傷といつても、左の腕と腿、わずかに

かすただけ。それで、これほどの疲労は？ なぜだろう？

そう、正行が自分をいぶかつて、

(実戦になれぬ所為か？)

と、思ったとき、

「たあう！」

四尺の大刀と、六尺の巨体とが、きらめきつゝ、圧倒的に躍り込んだ。

## 五

ぱつと、火花が散った。

戛然と、刃と刃が、合つて鳴った。

術と力が、せめいだ。

鏢と、鏢が、せり合うた。

声と、声が高、高く、太く、互いにはげしく、叫び交わした。

と、たちまち、両体はなれた。正行の体は、燕のように流れた。将監の大刀が、鉦ぶかく地べたへ斬り込まれた。

「あつ！」

熊毛髭の片方の手が、長い柄から、脇腹へ移った。おさえた手が、見る間に、朱にそんだ。斬られた横腹から鮮血が、ふきだしたのである。そのとき、正行は、剣を杖に、草地について、危く昏倒しそうな躰を、さゝえ止めていた。気力のありたけを、いまの一撃に、そゝいだったのであった。技は、力をしのいだ。しかし正行の胸は鉛でもつまつたかのように、ふさがって、氣息が、えんえんとなった。と、咳嗽——ときならぬ咳が、いとも苦しく、咽喉のおく、氣道の奥から、込み上げてきた。

正行が、咳にむせんでいる間に、将監は、脾腹をおさえながら近寄った。

「楠殿は、風邪つびきか？」

熊毛髭は、もの凄く、にたりとした。

腹の傷はかなりの深傷だったけれど、あまたの戦場で不死身といわ

れた豪氣の將監、

「覚悟っ！」

と、叫ぶと共に、脾腹の片手を、柄へ戻して、大上段にふりかぶった。正行は、なお咳入りつゝも、防ぎの刃を青眼につけた。が、今度こそ危いと感じた。

(斬れる！)

と、將監は信じた。

射伴食婪の輔、その輔に煽られる灼赤な鉄——。

だが、あまりにも乱れた対者の太刀先は、かえって無気味であった。前にも増して鋭い切返しという懸念が、將監を、ためらわせた。

この躊躇の下で、正行は、いわば晩夏の夕空にわく雲の峰のように、むくむくと、心の表面にふくれ上るものを感じた。

それは、きれぎれの断想だった。——父、正成と叔父正季——湊川、炎暑うだるような日、辰の時から申の時まで、三晌六刻の長い時間——重い武装——百倍の敵——幾十台の血戦——腑甲斐なき我が身、不肖の子——いま斬られて、命おとさば、かゝる死？ 一期の不覚！ 分別もなく——内侍——内侍を救うためとはいえ——討幕の重い責任をにのう身が——。

「おゝっ！」

と、正行は叫んだ。

最後の断想——討幕の重責という觀念が、疲労困憊の底から、猛然とふるい起したたのである。

蓮華草の黄白の花叢を蹴って——。

一閃の鎧が、紫電となつて、ぱつと血潮の飛沫を散らした。

「うわあっ！」

將監は、熊毛の顔面を顎から斜めに薙ぎあげられて、左の眼球をさえ真つ二つに劈かれたので、楠の脳天へ微塵と撃ちこむ大刀も、とつさに空で力を失い、わめきともるとも、たじたと、よろめくところを、

「どう！」

薙ぎ上げた余勢一ぱいに、返す刃で正行は、横鬢からこめかみをたきわった。

「ぎやあッ！」

悲鳴が、血煙りのなかで、ひびいた。頭蓋骨のくだけた手ごたえに、

(充分！)

と、感じた途端、気のゆるみから、正行はべたべたと横倒しに、軀を伏せた。

斬った方が倒れたのに、斬られた方は、まだ立っていた。梟剛な矢板將監は、致命の重傷に意識を、昏濁させ、もはや全身を硬直らせながらも、仁王立ちに、大刀を握ったまゝ立っていた。

「殿っ！ 殿っ！」

血達磨がころげるように、橋内が、痛手も忘れて、走ってきた。

主君の危急！ 敵に見せた背後を、浅かったが四五寸、斬られたけれども構わず馳せつけたのである。

正行が斬られたと思つたのは、橋内だけではなかった。野田四郎も石掬丸も、はつとばかり胆を氷らせた。

だが正行は、むっくりと起きて、

「將監をしとめたぞっ！」

と、よばわった。

ちようどその機みのように、將監の大きな躰が、死骸になって、地べたへ倒れた。

「橋内——。予に怪我はない！ 闘ってくれ」

正行は、そういゝながら、橋内を追って来た敵の鼻づらへ、ばさり一刀をあびせた。

「おう、殿う！」

と、歡喜の声を、橋内があげた。

そのとき、どつと鬨のひびき、人馬の出現！ 高原の一端にあらわれたのは、郎従伍平太の報せによつて馳せつけた吉野衆、青屋刑部の僧兵たちと、野田四郎の郎党をませた、およそ五十人の一隊であつた。

## 准后への惘願

親房卿は、痛そうに、顔をしかめて、

「御無礼」

と、中啓を、左に持ちかえ、軀を海老のようにかどめて、

「ゆるされませ。——寄る年波でな」

そう云いつゝ、わが腰をさすつた。

客の、大納言、四条隆資卿は、げにも道理——と、同情の面持で、

「幾春秋を関東で、あるいは野戦に、あるいは長き御籠城に、み軀を酷使あそばしてはのう！」

と、いった。

「六十を超えては、まこと意くじ無う相成る。一昨々日から臥せつて、医師の円性入道が、ほんの苟且の風氣と診てくれましても、いつかな枕あがらず、足腰、背骨のふしぶしの疼き痛むを、わずろうて、つい先刻まで、いぶせく臥所にこもつておつた始末でござる」

「それはそれは！ 御加養の、きついお妨げをつかまつて——」

「いやいや、なんの御遠慮——。自分もかようなことでは、上への御奉公がおろそかになる。こゝ三、五年は、真に重大な時期じやで」

みずから励ますごとく、頭をふつた従一位准后、親房卿の、老いた顔には、不撓不屈の気魄が見えた。肉体は衰えても、けいけいたる眼

光には、さかんだつた往年の面影が、まだありありと偲ばれた。

こゝは、如意輪寺前の准后館、その客殿であつた。行宮に奉仕する飯の棲家だから、むろん輪奐の美どころか、板もろくろく磨いてない粗普請ではあるが、場所に不足のないだけに、南面の庭苑はひろびろとつくられていたし、中門墻と、邸の外郭の築地との、中間には、多くの武士を屯させておく雑舎造りの建物、屋根を並べて、はなはだ殺風景に庭苑をとり巻いていた。

客殿の簾はかゝげてあつた。垂れた壁代の隙から、苑樹の、あざやかな、若葉の芽ぐみが見えた。

大納言が、

「で——その歌は？ と、おたずねでござりましたな？」

そういうと、准后はうなずいて、

「なんと？」

「逢見んとおもう心を先立てゝ、そでにしられぬ道芝の露」

——その歌と、文の筆蹟に疑いのうてはのう。——三位と北の方をおびやかしての、師直が憎むべき詐謀——。楠なかりせば、内侍はむごたらしゅう淫魔の餌食、その薄倅は申すに及ばず、俊業どのにも責が残りに、縁につながる大納言、おん身も安からぬ想いなされたでもあろうに！」

「まこと、仰せのとおり。楠へは、感謝の言葉に苦しみまする」

「九人の家采、いづれも重傷。うち四人は、ついに絶命、とのことでごさつたの？」

「いかにも」

「貴卿からねんごろに、ねぎらわるゝよう」

「それは、御意までものう、身どもにかないまする限りは」

「どうぞ」

北畠准后は、そういつてから、少時あつて、  
「叡聞にも——達したことで、ござらうな？」

と、たずねた。

「おん覚えあさからぬ内侍がことにござりますゆえ、昨日、畏きあたりへ——」

「貴卿が？」

「はい。拙身、奏聞に及びました」

「恐れながら竜顔も、さぞかし——？」

「竜顔ともうるわしく、ことに楠への、御感斜めならず、正行まいり合わざりせば、内侍は憂たてや辛き目に逢いつらんに、いみじくも探り知り、かつは健気にも闘うて、よくも奪い返しつるものかなとて、忝けなくも内侍を、准後の卿よ、内侍を——」

「内侍を？」

「正行に、賜わらむとの、勅諭でござりました」

「ほう、内侍をば、楠に？」

親房卿が眼を見はると、大納言が、

「楠に、いまだ定まれる妻ありとも聞かずと、畏くも宣わせ給うて、御恩賞として——」

と、答えた。

「定めし、有難く拝受の旨、奉答つかまつて、聖恩に感泣いたした  
であるう」

そういう准后へ、

「親房卿。世には、意外なことも候ぞや」

と、四条大納言は、じつと目をすえて、

「随喜の涙に、むせぶことゝ存ぜしに——」

「ほう？ いかゞつかまつた？ いとも忝けなき天恩を——」

准后は、いぶかしげに訊ねた。

## 二

「それを、なんと案に相違——」

「なに——？」

「いなみ奉った」

「おゝ、いなみ参らせたと？」

准后が、おもわず瞠目した。

大納言は、直衣の襟に、笏をあてゝ、

「心得がとう思召すであろう」

「げにも、のう」

「准後の卿——。楠は、一首の歌を詠進して、勅諭に奉答いたしたの

でござります」

「ほう。いかなる歌を？」

「——とても世に長らふべくもあらぬ身の、かりの契をいかで結はん

——」

と、大納言は、正行詠進の歌をつげた。

親房卿は、

「——とても世に——」

と、その歌を口ずさんでみて、

「大納言」

と、呼んだ。顔は、とみに緊張を加えていた。

隆資卿が、

「楠は、いよいよ戟を——」

と、いうと、准后はうなずいて、

「成敗を一戦に賭ける覚悟の——」

中啓で、胸をたゝいて、

「ほぞを、かためたとみえる」

吉野の朝の冢宰である両卿が、しばし眸を合わせつつ、言葉をとぎ

らせた。

四条隆資卿は、愛姫が内侍の嫂である関係から、内侍の恋についても、ひそかに聞いていたのであった。

准后が、

「楠とても、青春の齡、藤たき内侍の美貌へは、心ときめかぬこともなかるうに、さりとは、のう隆資の卿」

と、事をうらむように云った。

「そのことでござる」

大納言は、纏綱縁の上置から、やゝ乗り出すような態で、

「後顧の種は、蒔きとうないという存念でもござりましようが、開戦をいそぐは、いまにはじめぬ多聞兵衛が——」

と、いゝかけて、ふと気づいたらしく、

「申し忘れました。今度の御恩賞として、なお楠は、従四位下、左衛門督に任叙あつて、昇殿を許されましたぞ」

「それは重畳。いや、そうなくてはかのうまい——楠家の当主じゃ。が、それをも拝辞は、いたさなかつたでござらうな？」

「まさかに！」

と、隆資卿は微笑したが、すぐ新しい官名を呼称にして、

「彼、左衛門督の持説は、すみやかなる開戦。湊川の二戦この方すでに十有二年、ひたすら蓄積して参つた楠家の武力、その精銳をもつて戦わば、なんでむざとは敗れましようや。よしや一旦の利を失うとも、河泉、紀和の天陰にたのまは、首将の生命を、なんで危殆にさらす怖れがござりましようぞ？ されば、詠進の歌にあらわれた、決死の覚悟なるものが、拙身には——」

「そりや身どもにも、解しかねる。たとい、今たごちに戦端をひらくにしても、なにが、さまざまに突きつめた心構えに、楠を？」

准后は、眉根をひそめて、直衣の袖を重ねた。

覽に博く、識に達し、「職原抄」を著した北畠卿であつた。覇業へ

の足利の異図を、いち早く看破つて、奥州の鎮守府で鎌倉に対抗した親房卿であつた。坂東の孤城に拠り、高師冬の太軍に囲まれつゝも、帝王の傳たるの身をわすれず、吉野の今上の帝のおんために「神皇正統記」を書いて奉つたほどの准后であつた。が、しかしながら、

（——人のこころの、陰影は、さても探りにくいものじゃ！）

と、口のなかで、つぶやいた。

大納言も、

「せまきに過ぐる、心の持ち方！」

と、独りごとのように云つた

准后は、建武の維新以来、ほとんど武士のなかで暮してきたといつてよかつた。武家武士の氣持というものに対して、だから、いわゆる長袖公卿たちとはまるでちがう関心なり、認識なりを持つていた。それだけに、正行の、心のおきどころが、よけい気にかゝつた。

だが、楠の武の力こそ、吉野の朝廷の、最もたのませらるゝ藩屏であるのに、その力を駆使すべき若き武將が、戦わざるにはやくも前途を悲觀した、とみるほかはないような、正行の態度への疑問は、四条大納言にしても、親房卿に劣らず深まつていたのであつた。

「准后の卿——、この館に、楠を召されて、貴卿より——」

と、大納言がいう時、渡殿から廊に、雑掌の青侍が、参入して、

「楠左衛門督の朝臣、参られてござりまする」

と、報じた。

雑掌は、すでに、正行が左衛門督兼行河内守に昇任したことを、知つていたのである。

「中門より、これへ」

准后は、そういつた。

かしこまつて、雑掌がさがつた。

やがて、正行の狩衣姿が、庭苑を横ぎった。

寝殿に近づいて、南面の階段をのぼると、正行はすぐ廊に坐った。そして、慇懃に色代した。

「そこは端近じゃ。進まれい」

「は」

「殿上人と、なられた和殿。さあ」

准后は、まねいた。

正行が、客殿の入側に入って、坐ろうとすると、

「いや、これへ」

「は」

正寝の間へ、正行は進んだ。初めて、准后や正二位大納言というよ  
うな尊い雲上人と、席を同じゅうすることが出来たのである。だが、  
むろん両卿は上畳のしとね、正行は薄縁さえ敷かぬ板敷に坐ったのだ。

「よくこそ。——左衛門督に昇叙、まことにめでとう存ずる」

「聖恩の鴻大。身にあまる光榮にござりまする」

「弁内侍の危難、救われしお手柄の次第は、只今、四条の大納言より  
事つぶさに、承わった。あたら郎党を四人まで喪われた遺憾はござろ  
うが、梟勇の聞え久しき矢板将監を、みごと討ちとめし剣のさえ——  
和殿、御自身にも、さぞや満悦のこととお察し申す」

准后は、正行の蒼白な顔を、ながめつゝ言いついで、

「微傷、おわれたとか、庇口はいかゞでござるか？ 手当てに如才は  
なかるうが、破傷風は、あながち傷の深淺によらずと聞く、お顔いろ、  
すぐれぬようだが——」

「御配慮、かたじけのう存じまする」

と、正行は頭をさげた。

四条大納言が、

「左衛門督どの」

と、呼んで、

「一品の卿も、和殿詠進の和歌のこゝろには、お首をお傾けあそば  
された。武将の覚悟、げにも壮烈な覚悟ではあれど、旌旗うごかず、  
鉦鼓ひびかざる限りは、妻をむかえ、家をとゝのうるがまず当然な儀  
ではござらぬかのう？」

准后も、

「それが常理と、親房も思う。——恩賜拜辞の件について、この親房  
が率直にいうならば、第一に、綸言に悖り、有難き恩賜をいなみ奉つ  
たは、おそれおゝい極みじや。第二には、故正成どの、嫡孫うまれ出  
でぬ前に、和殿がもしも、戦場で討死さるゝがごときことあらば、孝  
の道にそうまい。——すくなくとも、この二つの点では、不忠不孝の  
誇りをも招くであろう。——再考を要しはせぬか、のう左衛門督？」

そう、論すようにいうと、大納言が、さらにつけ添えて、  
「畏きあたりでは、そこもとの拜辞にもかゝわらず、重ねての御沙汰  
あるやに洩れ承わった。内侍が、わりなくも正行を恋うと、やんごと  
なき御耳にきこえつるためとかや申す。されば考慮を、あらたむる余  
地は、充分にござらうぞよ」

正行は、つゝましい声で、

「綸言に悖りしは、まこと恐懼に堪えませぬ。勅諭は、是非の彼岸に  
あり——」

と、准后をじいつと見て、

「帝は即ち至善なり、とは、亡き父正成の教訓でござりました。それ  
がしが罪、万死に当りまする。さりながら、おん諭示の第二段につき  
ましては、正行に異見がござりまする。正行にとりましては、桜井駅  
の遺言まもるが専一の孝、と存じまする」

そういう顔には、鋼のごとき意志がほのめいた。

「左衛門督——」



准后は、老熟な語気で、

「桜井の駅の遺訓には、ひたむきに死ぬよとばかりござったか？ 一死、かならずしも大義をのぶる所以ではあり得まい。かくいう親房は、おのが嫡男頭家を、堺浦の石津において陣没させてより、いくたびとなく戦いに打ち敗れ、ある時は、荒野の闇にひそみ、あるいは海洋の、すさまじき波濤の水底に、のまれんとしつゝも生きながらえて、見らるゝとおりの老いよるぼうだが、大君への忠、神ながらの御国、正統の朝廷への御奉公にかけては、あえて人後におちたとは存ぜぬ。——和どのに、勘考を望むのは、そこじや」

そういゝ終った時、正行はだまって頭をさげた。そして、准后へは答えずに、四条大納言の方へ顔をあげて、

「たとい重ねての、御沙汰あらばとて、所詮は拝辞のほかござりませぬ」と、いった。

大納言が、

「玉の緒も絶えなんばかりの、切なる恋じや。むごたらしゆう踏みしだくは、あまりにも情け知らぬ業でござろうぞ」

なじるように云うと、

「大納言のお言葉とおおぼえず。討幕の旗じるしを高くかゝげて、大義に殉ずる道より、わきへ、心をうつろわす正行と思召すか」

切なる恋は内侍のみではなかった。われと我が燃ゆる想いを打ち消して、からくも情を殺した心の痛さ、その痛さにふられたので、正行の言辞は、つい刺を含んだ。

青白い頬が、かすかにふるえ、声も、やゝおのゝいて、

「一人の女人の胸の線が、よしや悲恋に破れきずつくとも、それにかゝわり泥むそれがしではござりませぬ」

そういゝきつたとき、北畠准后が、

「楠——」

と、おさえるように呼んだ。

#### 四

「親房が申すことを、きかれよ。——兵を動かすにはなお早い。いきおいをながめつゝ待てば待つほど、利勢はわが方へ、めぐり来る気配が見ゆるでの。ひと頃は、あるかなきかに屏息せる味方の諸国武士にも、ようやく恢復の意図が、みちてまいつたのに、京都は内紛の兆しをやゝ現わして、つとに闘志はあせ、人氣は懈怠、増長するものもあれば、また虚脱するものもある——」

「准后の卿——」

と、正行が、ささぎつて、

「さればこそ、誅伐の兵を挙げべき好機が、いまや熟せりと、それがしは考えます。お言葉の腰折るは恐縮ながら、正行が申条に、しばし御耳を、かされませ」

「む、申されよ」

「京都に内紛の兆ありと仰せられました、幕府の各勢力、それぞれ徒党して、内にせめぐは、事すでに久しゅうござりまするぞ。將軍尊氏は、積悪の報い到つて、悔悟の魑魅につかれしかのよう、政務を捨て、兵馬をかえりみず、たゞ後醍醐院証真常の、仏事供養をいとむばかり。副將軍直義は、執事の師直と、また外戚上杉は、高の一族と、鼎立のかたちにて拮抗するのみならず、尊氏が庶子直冬は、嫡男義詮と仲むつまじからず、内訌が乱とならぬは、互いに牽制しあうがため、均衡のかるうじて保たるゝが故にほかなりませぬ。しかしながら、その均衡さえも、師直が驕慢、乱行、飽くを知らず、漁色に京を荒らしつくして、このたびのごとき暴虐をなすにおいては、もはや破綻は目の前でござりまする。されば、——一品の卿へ、正行ひとえに、お願いつかまつる。希わくは、先日、の廟議の決に、御変更これあるよう、准后のお力をもちまして、おん取計らわせ賜わりませ」

惘願の面には、ことせめて思いつめた者の表情があった。

親房卿は、

(なぜか、開戦を、あせつておる！)

と、思った。

「和どのの希望は、よくわかった。なれど、待たれい——今しばらく待たれい。——薩摩の谷山にある征西府が、肥後に首尾よう移るまで、時機でない」

そういった親房卿の語を敷衍するように大納言が、

「西国のみか、奥州にても、また近くは熊野、十津川、南伊勢、いまだ充分には準備が、ととのわぬ。もし、はやまつて事をあげなば、准後の卿御苦心の、東西近畿ならび起つという、おん画策も、惜しや画餅にも帰さんおそれ、決してなしとせずとは思われぬか？」

と、いった。

だが正行は、首をふつて、

「四条卿、御杞憂なされません。——帰順の腹はきめながらも、表面になお鮮明な義旗を樹てぬ肥後の阿蘇家も、正行たゝかいを京都にいとめりと聞かば、かならず菊地どのと手を握り、征西の宮、懐良の親王を、決然とお迎えまいらすでござりましょうし、また東北の霊山におわす顕信卿と、伊勢は大湊なる顕能卿とは、准後の御愛子、なにとて義戦におくれを取られましようや」

そういったから、親房卿へ、

「准后のお声には、廟堂の諸卿がた、こそつて唱和あられます。なにぞ御評定の御変改を、御考慮くださりませ」

と、牀へさげた烏帽子を、ゆらめかしつゝ、

「それがしは戦いとうござりまする。正行一期のお願い！ 菊水の旗を、京都へ、押し進ましむるようお捌きのほどこそ、願わしゅう、願わしゅう存じまする」

声涙ともに下る熱請に、親房卿も、われ知らずつりこまれた。

(おゝ、さまでに！)

が、たちまち、深い瀕のような心境に立ち戻つて、

「いそがば、まわれという。待たばきつと内乱を、かもすであろう粉糾、軋轢も、戦雲が一たび動いたならば、あるいは解けて、消えるかも知れぬ。兵馬を統ぶる高兄弟の權威は、戦いの開始とともに、俄然、強まるであろう。足利の諸兵を操縦することにかけては、なんと

いうても師直は、第一人者じや」

面をもたげた正行の瞳を、見入つて、

「思い、外にあれば、内部は団結する。ふだんは白眼をむいて視かわす輩も、さて、戦時ともならば、みな師直に服するでもあろうからのう」

師直の戦時における統制力のために、多年、苦しめられてきた北畠准后は、波瀾重畳の過去になめた自分の経験から、そう、おもんばかりのであつた。

しかし正行は、勝たんがためにのみ戦いを、希いねごうではなかつた。にわかにかわいた正行の悲痛な心もちは、准後の叡智、明察をもつてしても、とうてい感得は出来なかつた。だから二人の心と心は、しつくり合うところまでは、まだよほどへだたりがあつた。

(必勝と誤算して——と、そう思われておるに違いない)

と、感じると、正行は、

(いっそ、すべてを、打ち明けようか——?)

とも、思われた。けれども、自身にもなおよくつかめない何物かど、ありのまゝに言うことを、ためらわせた。

そして、たゞ、

「親房卿へ。それがしが、一期の悃願、お聞き届け下さりませっ！」

と、ふたゝび牀にぬかずいた。

泪が、板敷に、はふり落ちた。

庭苑の嫩葉がぐれに、老鶯が一声ないた。

## 五

(なぜであろう?)

親房卿の不審は、にわかには深まった。

鶯が、また一声――。

そのとき、正行は、

(あゝ、咳が――)

と、感じた。とたんに、胸もとの圧迫が、空虚に低く、よわく、だが執拗くつゞく咳嗽を、いざない出した。

狩衣の袖のかげで、そっと自脈の搏動をうかがいつつ、苦しそうに咳入っていた正行は、やがてその咳嗽がやむと、

「ゆるされませ」

と、汗を手帛で、ぬぐった。

顔は、傍の両卿をおどろかすほど、蒼かった。准后は、またも、

(破傷風――?)

と、懸念しながら、たずねた。

「医師は?」

「典薬頭、円性先生をわざわざしました」

そう、正行が答えた。

「少納言入道ならば安心じゃ。しかし――」

何か言いかけて、准后は口をつぐんだ。

(たゞならぬ顔色――負傷のせいではないとすれば?)

しばらくして、

「左衛門督は、何故さまでに、戦うことをあせらるゝのじゃ?」

准后の語気は、改まっていた。

正行は、返答に窮した。

「現状では、まったく勝味のなき戦を、たゞかわんとする理由を訊こう」

「――」

「熊野においての、兵船建造は、なんのためぞ? 和殿も、橋本正高を遣わして、工事を督励させてはおるものゝ、明後年ならでは、輸送、海戦に堪うるだけの数はそろわぬであろうに、さあ、なぜにあせらるゝ?」

「理由なくてはかのうまい!」

「さあ、なんと?」

答えることの出来ない、告げることの出来ない理由なのである。

正行は、弁内侍を奪い返そうとして、鹿路平で矢板将監と血闘の刃をまじえた時、実に意外な疲労と、困憊をおぼえ、あやうく将監のために討たれかけた。ほとんど昏倒しそうになったからであった。ふと脳裡にひらめいた、湊川の血戦についての観念が、さながら冥々の加護であったかのように正行を奮起させて、将監を斬らせたには斬らせられど、正行は、はじめて自分の肉体が、ひどく衰弱していることをはつきりと自覚して、天をあおいで歎いた。あまり健かでないこと、はかねて知っていた。が、かくまで病弱とは? たしかに病魔、疑いもなく胸の患い、いつしか我が身体はむしろままれていたのである、と、思うと口惜しかった。父の遺訓を執行する前に、もしこの病身が斃れたら? たゞの一度も朝敵誅伐の戦場にのぞまずして病死せば? なんの顔ばせあつて黄泉の父に見えられよう! そうだ、勝算はなくとも、湊川に倣つて、たゞかえるだけたゞかつて、義のため、道のために、討死しなければならぬ。ぜひと開戦の勅許を、いたゞかなくてはならぬ。そう心を決した上で、おのが疾患の真相と、病いによる、およその死期とを、たしかめるために、宮廷医少納言入道円性の診断を仰いだのであった。特別の思召しをもって宮廷医が、日野邸へ差遣されたことが俵いだった。負傷の手当てをうけた時、正行は、ひそか

に診察を乞うた。自分の予想は的中した。病いは労咳、それもかるからぬ喀血の症とあった。だが、典薬頭は、死期に關しては予言を避けた。正行は、自身の病いを、どこまでも秘密にしておきたかった。その悲壯な心境に感激した典薬頭は、診断のことについては決して他人にもらさぬと、かたく約束した。(正行病むと聞かば、周囲の者は、いよいよ戦うことを遮り止めるだろう)——そう考えたので、正行はあくまで匿す覚悟をきめていた。で、いま、准后への返辞にまつたのであった。(しかし、理由を告げずに、いかに願ったとて、准后のお心の動こうはずがない)

親房卿が、

「なぜか？」

と、さらに鋭く問いつめた。

「病弱ゆえ。——ほかに理由はござりませぬ」

と、正行はたゞ、そう答えた。

「病弱？」

親房卿は、汗ばんだ蒼い顔を、じつと見直した。

「病弱とて——」

と、四条大納言が、言葉をはさんで、

「格別、名のつくいたずきの床につかれたとも聞かぬに——」。

首を、かしげるように、眉根をよせると、

「隆資の卿」

と、親房准后が、なにか容易ならぬことに思いあたったかのような

面持ちで、

「左衛門督は——正成どの、後継者だ」

そう、意味ありげに呟いた。

「楠の——当主であることが——？」

大納言は、准后の顔をながめた。

「いそがなくてはならぬ——かも知れぬ」

と、准后は独りごとのように云った。

「え、なんと仰せある？」

と、大納言が、訊き返した。

## 六本杉の怪異

### 一

こゝは京都——。

一条は堀川、村雲の反橋の橋だもとにある、足利直冬の屋形うちの、遠侍と廊下でつゞいていた雑舎の一室であつた。

はげしい雨の音を聞きながら、人待ち顔でいたのは、堺浦の商人、唐土屋伽羅作——年ごろは三十がらみであつた。

商人といつても、近畿随一の要津、堺の港の目貫の場所に、軒を並べる大手筋のうちでも、指折りの分限者の後継だから、人品も賤しくなかつたし、眼鼻立ちのりゝしいことは、並みだいていの武士よりも、むしろ立ち勝つていた。

(あつらえ向きの暴風雨だつたわい！)

口のなかで呟いた。

屋内の燈火までも吹き消して、建物をふるいゆるがした烈風と、大雷とは、もはや、やんだけれど、雨は、車軸を流すほどに降りしきつていた。

この館の臣、横溝平馬が、入ってきて、

「きつい暴れようでござつたな。舜髓どのは、おゝかた途中で雷にあわれたであろうが、どこに雨宿りしてござるやら、この分では容易には歩けますまい。昼間ならば、ともかくも——嵯峨野の闇のまん中では、

思いやられる。途方にくれておられるかも知れん」

そういうと、伽羅作も、

「そのことでございます。こうと知れたら何も今晚、あわずともでございますましたに——」

と、心配顔を見せた。

「天竜寺御衆徒のお一人ゆえ、嵯峨野路は、なれてござろうが——。どうにも、ひよんな俄か荒れだ。花が散つたばかりだというのに、時違いの大雷。こりやいよいよ物騒にならねばよいが、のう唐土屋どの」

「そのことでございます。陰陽寮の卜部の宿禰さまがおっしゃったとやら——犯星とかいう星が、客星とやらにどうぞしたとか、太白と、辰星と、歳星とかいう三つの星が、合つたか、続いたか致しまして、またしても世の中が、とんでもなく乱れるのだと申します。ほんとうに怖ろしいことでございますのう」

「陰陽寮の占卜は、まことに的中いたしましたので」

「この春は、いやな話ばかり聞きますので、気がくさりします。天竜寺が、建つて後醍醐院さまの御供養はあれほど御鄭重に、前代未聞とやらの御行事でございましたが、まだまだ南朝方のお怒みは消えぬかして、今年はまだ不思議つゞきで——」

「凶々しいことだらけでござる。なかでも気味の悪かったのは、仙洞御所の大牀の上に、犬が二歳か三歳かくらいの童子の生首を、くわえあげて、三声ほえたという話と、同じ御所の、中門廊の屋根の上を、緋の袴をはいた怪しい女房が、つたい歩いたという、あの話でござるよ」

「仙洞御所でのお気に入り朝臣、隆邦の中將さまが御発狂なさいまして、天竜寺からのお戻りがけのお馬を、御所のお苑から、御殿のなかまで、お乗り入れになったという噂も、堺の浦で知らぬ者が、ないほどでございます」

伽羅作が、そういうと、平馬は、ふいっと思いついたように、不安げな顔つきで、

「舜髓どのも天竜寺から来られるのだ。——ちようど仁和寺の六本杉あたりで、落雷にでもあつて——？」

と、いゝさした。

「そのことでございます。八つぎきにでも、されはしなかつたかと、先ほどから、案じておるのでございます。なにしろ、妹が、御勿体もない御寵愛を、館さまから頂いておりますゆえ、血を分けた兄の一人の舜髓に、なにか崇りがあつたとて、不思議つゞきの今日びのこと、それも因果とあきらめるよりほかでございますまいが、私にとつては大切な弟、逢いたいなどと沙汰せねば、こうした荒れには遭わずとも、なにやら自分が手にかけて、殺してもしたように思われてなりませぬ」

伽羅作は、すつかりしおれてしまった。

と、平馬が、急に笑い出した。

「これさ、唐土屋どのでもあるまい。縁起でもないことを云いだして、現実、雷に裂かれた死骸でも見てきたように！ いまにも舜髓どのが、参られたら、それこそ大笑いでござろう」

「そうならまことに嬉しゅうございますけれど、弟は私とは違つたていそう学問好きでございましたが、きつとひとかどの名僧になつてみせるなどと申しておりましたが、とんだ厄日に、嵯峨野路を——」

「それ、またしても！ 不吉な話は、もう止めじや。のう伽羅作どの、おぬしのお土産の、生一本の酒のおかげで、遠侍は先刻から、いやもうえらい上機嫌でござるぞ。天変地異も糞くらえで、あれあれ、あの通り——この大雨の音にも負けずに、ひゞくでござろう、な、さかな笑いごえが。——若侍どもの、仲間入りでも、致そうではござらぬか？」

平馬が、誘うと、伽羅作も、やつとその気になつたらしく、

「さようでございますな。館さまの御機嫌うかゞいに堺浦から上つて参つて、ふさぎ込むなどは、以つてのほかでございますました」

そう答えて、平馬の後について遠侍へ、出て行つた。

宮内大輔直冬は、將軍尊氏の庶子だった。尊氏がまだ北条登子を娶らぬ以前に朝日局に産ませた竹若丸、それがこの直冬であった。直冬は、今年二十三歳。まだ正室を迎えずに、愛妾の敷妙が、専房の寵をうけていた。この敷妙は、唐土屋伽羅作の妹だったが、去年の秋、侍女としてこの館に召使われることになって間もなく、直冬の鬨をなくさめた。そして、その美貌と聡明とで、直冬の心を、すぐさま緊ととらまえてしまった。敷妙よりも前に寵を得た女も二三あったのだが、直冬の愛のすべてが、たちまちのうちに、この新らしくて美しい妾へ、吸収されたのであった。

「有難う頂戴に及んでおる」

「忝けのうござる」

「男山の吟醸、伊丹池田の菰冠り、一夜や二夜で飲みつくせぬところが、特に気に入りました」

「かような次第なら、今後はしばしば、足しげくおいでください」

「決して御遠慮には及ばん。また我々も決して御遠慮はつかまつらん」

「さあ、おもたせの銘酒、いかゞでござるな」

「拙者から一献、けんじよう」

「この方も一献」

「身どもも一献」

「いや手前は三献まいろう」

若侍たちは、たちまち唐土屋をとりまいた。

主君の寵女の兄ではあり、町人ながらもふところは福々、看板にいつわりのない唐土屋で、渡宋、渡元の大船までもつ伽羅作だったから、侍どもはしきりに頭をへこへこことさげたが、もう呂律のまわらぬほど酔いぐずれていた。

一人が、

「こう、平馬どのっ！」

と、さげんだ。

「なんだ？」

「今出川の狒々館で、当館の敷妙さまを、ねらつとるそうではござらぬか？」

「馬鹿を申せ！」

「なに、馬鹿？ 馬鹿とはなんだ、平馬どの、ばかとはなんでござるっ！」

「ばかとは鹿が、馬を乗せたことじゃ」

「へ、なあるほど？ 鹿が、平馬を乗つけたな、平ら馬を。こう、平ら馬どん」

「た、平ら馬？ 無礼なことを申すなっ！ その方、酩酊しておるぞっ」

「ほい、飲んだ酒なら酔わずばなるまい、米の水だ、げえーぶ、は、かなながら、大狒々屋敷、師直館へ、謀者に入込んでるあの如月は、かく申す丹那市之進の乳兄妹じゃ。今出川のことなら、箸のころんだまでも知っておる、この方だ。あんまり安くふまぬように願いたい！」

「は、御大層に並べおった！」

と、横溝平馬も仕方なしに笑つて、

「だが、また何ぞ、新規に聞きこんだことでも、あるのか市之進？」

「兜をぬいでおいでなされた、えひゝゝ！」

「人の物、わが物の、見境のない高さまのことだ。なにをしでかすか、わかつたものではないからな」

「お氣にかゝるとみえる」

「すこしは、形のある話か？」

「形がのうて、かようなことが、御当人さまの兄御もおられるこの場所、いえるものではござらん」

「と、申すと？」

「御承知のとおり、つい先日、吉野の宮から弁内侍をかすめそこねて、熊髭どのを斬死させ、さんざんにどちをふまれた狒々様だ、齒ぐきをむいていがまれたが六日の菖蒲じゃ。送り返された日野家の女房梅枝

から、弱そうに見えても滅法界、楠の若大将がすごいという話を、聞かされたが落ちでは高きまも、業腹じや。なんぞお代わりを召上らんことには、どうにもお腹がおさまらぬとあつて、そこで白羽の矢番いが、こんどはこなたの館の敷妙さまへ——」

「む、向けられたのか？ 市之進！」

平馬は、顔色をかえた。

いつか、若侍たちも、さかずきの献酬をやめて、耳をかたむけていた。一人が、叫んだ。

「やあ市之進つ、それほどの一大事を、なぜ早うつげなんだつ？」

また一人が、

「もし真実なら、大変じや、館の御安危にもかゝわることじやぞつ！と、どなり出した。

「やい、大きな声を出すな。拙者も、日が暮れてから聞いて来たのだ」

そう、丹那市之進は答えて、大杯を、ぐういと乾して、

「かくなる上は、酒で英気をやしうて、いざといわば闘うだけだ。

一旦むけた白羽の矢、放たずに納うような師直さまでもなし、といつて、むざと敷妙どのお渡しになる館でもあるまい。なら闘いじや、腕ずくじや。のめのめつ！」

「よしっ！ のむ、のむ。各々、のもうではないか？」

と、一人がわめくと、

「のまう」

「のむぞつ」

声が、そろつた。

## 二

平馬は、じつと、考えていたが、

「市之進、たしかであるうな？」

と、念をおした。

「弓矢八幡、男山！」

と、市之進が答えた。

「唐土屋どの。手前は、このこと、殿のお耳に入れて参る」

平馬は、そういつて、遠侍から出て行つた。

「もし」

と、伽羅作は、わなわなふるえる声で、

「どう致したら——私はもう、怖ろしゅうてなりませぬ。今出川のお屋敷は、將軍様の高倉館よりも、何層倍かお広いようございます。

侍衆も、何百人とおられますように、失礼ながら当お館は御無人ゆえ、私はもう、生きてるような気がいたしませぬ！」

「はゝゝゝ、唐土屋どのも苦勞性じや」

「なんぼ、お狒々さまの横車でも、のう」

「こちらは將軍家の公達じや」

「闇から棒に寄せては参らん」

「そりや何千人でも、立ちどころに、今出川へは集まるじやろうが、こなたにも大きな後楯がござるでの」

「そうともそうとも。三条武衛館の直義のとの、天下の副將軍が、だまつては在さぬわい」

若侍が、口々に、伽羅作をすかした。

篠つく雨は、なお頻っているらしく、孫廂をたゞいた。その音を、

いきなり、圧するような、けたましい声が、入口の沓脱でひゞいたかと思ふ途端、

「あつ！」

なにか、えたいの知れぬ物——とにかく真つ黒い物が、遠侍の広敷へ、ころげ込んできた。

「おゝっ！」

真つ黒い物が、さげんだ。

手もあり、足もあり、頭もあつた。

「や、舜髓つ！ 舜、舜髓ではないかっ！」

と、さすがに兄弟、いち早く認めて、唐土屋が、よばわった。

まるで、溝川の水底からでも這い上ったような態で、黒い法衣から滴と泥を、したゝらせながら、天竜寺の所化、舜髓が、はげしく呼吸をはずませ、眼を精一ぱいはだけて、牀の上に半身を起した。

「舜髓どの、しつかり！」

「気をたしかに！」

若侍が、両三人、走りよって介抱した。

「あゝ、やつと、やつと来た！」

と、舜髓は、はじめて人声を聞かせた。

「どうされた？」

「いかゞなされた？」

「苦しい！ 水、水！」

「それ、水、水つ」

「酒、酒——酒をやれつ」

さかすきの酒と、茶碗の水が、舜髓の口へはこぼれた。一人が、背中を、さすってやった。目を白黒させながら舜髓は、まず酒と、それから水を飲みほして、ほつと太息を吐いた。

伽羅作が、

「舜髓！」

と、肩に双手をかけた。

「兄者！ わしは、天狗さまを見てきた」

「なに、天狗？」

「天狗さまじゃ！ おそろしい天狗さまじゃ！ 見たばかりか、天狗さま方の、お話声もすっかり聞いて参った！ あだやおろかの天狗方ではないのだ！」

「これき、おぬしは正気なのか？」

「正気でなくば、このように怯えはせぬ。灼きつくような雷光——耳

も聾になりそうな雷鳴に、どつと降りだす驟雨だ——こりやたまらんと、仁和寺の、六本杉の樹蔭へしばし雨宿りを、しておる間に出逢ったのが天狗評定だ！ 身の毛もよだつようなおそろしさに、逃げようとしたが躰がなえて、脚がすくんで動けないのだ！」

「へーえ、不思議なことも、あればあるものだなあ！」

唐土屋が、そういうと、

「ほう、天狗評議！」

「天狗評定とはきたいじやのう！」

と、若侍たちが、引きこまれた。

「どんな格好の天狗でござった？」

「どんな声でござった？」

「どんな評定でござった？」

舜髓が、

「天下の安危にかゝわった御評定ゆえ、まずもって、館さまのお耳に達して、それからじゃ」

と、答えた。

「え？ 天下の安危を——天狗どもが？」

と、兄、伽羅作がいうと、

「あ、滅相もない！ 天狗ども、などと云つたら、罰があたる。なまやさしい天狗方ではござらん。大塔宮さまの御外戚、峯の僧正春雅さまだの、浄土寺の忠円僧正だのという、南朝の大天狗方の御評定じゃ」と、弟、舜髓が答えた。

「え、南朝の！」

「大塔宮さまの御外戚の！」

「峯の僧正！」

### 三

そばには、すゞしの衣に、木蓮の花をおいた浮線綾仕立ての唐衣を、



さながら北の方もどきにまとった愛妾、敷妙がいた。

僧、舜髓と、平馬は、室内に入つて坐つたが、唐土屋伽羅作は、侍女と一緒に入側に残つた。だが、いくつもおかれた切燈台のともし灯は、あかあかと、入側まで照らしていた。

直冬は、茜いろの地に黒模様の、若々しい狩衣を着て、薄縁の円座を敷いていた。烏帽子はもう、ぬいでいたのであつたが、容易ならぬ怪異をみて来たときいて、いま、対の屋の居間に、舜髓をよび入れたのだ。「ぬれたまゝの衣、着心地が悪かるうの？」

「いえ、それどころではござりませぬ」

「さようか。さらば、聞こう」

「早速、みたまゝ聞いたまゝを申し上げます。——沛然という豪雨の間空が、不思議や、あかるく見え澄んだのでござります。あつともう暇もなく、愛宕の山や、比叡の峯の天空から、虚空を飛行してまいった四方輿のかず、六本杉の梢に引きめぐらした幔幕の内に、あつまったと見えました時、さつと吹く一陣の風に、幕張りがまくれあがりました。と、そこにつらなる方々の容貌が、ありありと現じたのでござります。一段と高い座にある方々が、上座から順に名乗られました。まず第一番が、峯の僧正さま——」

「おゝ、峯の僧正！」

「濃い香の衣に、御袈裟——水晶の珠数つまぐられ、眼を月のようにかざやかせて、われこそは、大塔の宮のおん外戚、峯の僧正春雅なり、とござりました。で、その次は、南都の知教上人——」

「む、知教上人」

「第三番は、浄土寺の忠円僧正——」

「おう忠円僧正」

「その次ぎ次ぎ、いづれも、正中、元弘、建武、延元と、後醍醐の帝のおんために命を捨てられた方々でござります。やがて、銀のお銚子に金のお盃で、お酒宴——お酌は、鳶のようなくちばしの、脇の下か

ら翅のはえた天狗たちが、致したのでござります。やがて、峯の僧正さまがお声も高らかに、さてもこの足利の世の中を、いかにして騒動さすべきやと、そう仰せられますと、浄土寺の忠円僧正が、それはいとも易きことにて候。まず、副將軍直義は、女犯戒を持して、俗人において自身ほど禁戒を犯さぬものなし、と思う我慢心が、強く候。そこがかくいう忠円の附目、すでに去年九月の一日の夜、身ども直義に憑り移りて、彼の北の方を犯し、その腹に懐胎させおき候ゆえ——」

「えゝつ！ な、なんと？」

さつと、顔色を変えて、直冬がさげんだ。

「おそろしいこととござります！」

と、舜髓の声音が、おのゝいた。

愛妾、敷妙は、一面を蔽うてふるえだし、平馬は、口をひらいたまゝ、恐怖の目をみはつた。入側では侍女が、唐土屋にしがみついて、おびえた。

「——その腹に懐胎させおき候ゆえ、峯の僧正には、その腹の子に、憑り移り給うて、男の子となつて生れさせ給うべし」

「おゝ舜髓つ、なんとという物凄うことを！」

と、直冬は、ほとんど座にたえぬように、またさげんだ。が、舜髓は、語りついだ。

「また、天竜寺の夢窓国師が法眷に、妙吉侍者という僧あり。道行とも足らずして、おのれほど学解の人はなしと思えり。この慢心こそ窺うべきところにて候ぞ。されば、峯の僧正には、その心にも憑りかわり給いて、政道に容喙し、難をば起させ給うべし。なお、知教上人は、上杉伊豆守重能、畠山大蔵少直宗が心に入りかわり、師直、師泰兄弟を討たんと謀らわせ給え。この忠円は、たゞちに高兄弟が胸に喰い入りて、上杉畠山を滅ぼし候わん」

「あゝ凶々しい！ 舜髓！」

「忠円僧正のお言葉は、それで尽きたのでござります。峯の僧正が、おゝ、いみじくも計りしよなど、仰せられたかと思うと、たちまちに、

まぼろしは消えて真の闇——杉の梢が、雨風に、鳴りはためくだけでござりました」

舜髓は、そう語り終って、ほっと吐息をついた。表情に刻まれた畏怖は、まだ深かった。

直冬は、顔も軀もこわばって、すぐには物を言えなかった。敷妙が、ふるえながら、

「わが殿——」  
と、寄り添った。

#### 四

夜は、雨のなかを、ふけて行つた。

館は、あらゆる部屋々々に、廊の端々にまで、凄しい気分を籠らせていた。

直冬は、閨の間に入つたが、狩衣を、白ねり褌衣の小袖に着かえても、短檠のほのかな燈し灯のそばに坐つたまゝ、几帳の奥の臥褥へ行こうとはしなかった。

「のう敷妙」

「はい」

敷妙も、薄紅梅いろの臥褥着をまとつて、しずやかに、ぬぎすてられた狩衣を、おりたゝんでいた。

「そなた——は、あの叔父上館の——北の方御懐胎の件について、なにか舜髓にもらしたことが、ありはせぬか？」

「父尊氏の若かりし日の面影そのまゝの顔をくもらせて、直冬はひくい声音でたずねた。

「あれ、——わたくしが？」

「そなたが——」

「なんで、まあ！」

「舜髓は、およそ千人にも近いという天童寺所化の一人、いわば末の

末の法眷じや。寺内でも、秘密を知るは、おそらく、夢窓国師のほかには志玄御坊と、妙吉侍者どのくらしいものであるうに、——そなたがもらさねば、舜髓の知るはずがないとも思われるので」

「あら、——異なことをおっしゃいまする」

と、敷妙は、美しい顔をうらむがように仰がせて、

「そのおうたぐり、わたくしにはとんと解せませぬ。兄舜髓はたゞ、みたまゝ、聞きましたまゝを申し上げたのでございましょうに？」

「それはそうじゃが——なれど、人はわが心に露、型のないことを幻にみるものでない」

そういつて、直冬は、じいっと目を閉じた。生れつきの俊敏が、新興の宋学の泰斗、独清軒玄惠法印に師事して、学ぶところの浅くなかつた直冬であつた。だから、かるがるしく怪異を信じ、みだりに妖言にまどわされるような人物ではなかつた。

敷妙が、

「でも——」

と、短檠の灯の脇へ、いざり寄つて、

「舜髓は、——去年九月の一日の夜、などと申したではございませぬか。わたくし、そこまでは殿より、うかゞつた覚え、ございませぬものを」

と、いつた。

「むゝ、そこまでは——」と、眼みひらいて、

「そなたにも語らなかつた」

直冬は、そういつたが、やゝあつて、

「——懐胎日——懐胎日——」

つぶやきが、なやましげに聞えた。

むろん敷妙を、ふかく疑つて言いだしたわけではなかつたのだ。たゞ、あまりにも不思議な、奇怪な感じの、持つて行き場所が、どこにもほかに見つからぬためであつた。

（たしかに、九月一日の夜半！）

——こうした妖怪事が起らなくても、充分に不思議といえはいえる  
懐胎くわいたいだったのである。

——副將軍、參議、左兵衛督、足利直義は、女犯戒にょはんかいを心ひそかに立て、その戒律かいりつをかたく守りつゞけて来たのが、去年の九月一日の夜半、どうした惑いか、ふらふらと北の方の寢室ねむやを、ちようど十三年ぶりでおとされた。直義が、なぜそうした心の誓ちかいを立てたかという、それは大塔宮への畏怖おそれからであった。建武二年の七月二十三日、直義の臣、淵辺伊賀は、鎌倉は薬師堂谷、東光寺の御所でもつたいなくも、護良親王に対して大逆を犯した。その大逆の伊賀は、すぐに狂うて死んだが、責めは到底とちういまぬかれぬ直義自身も、悔いと恐懼きようくにさいなまれ、堪えがたい苦しさから遁れる路を、この心の誓いに求めたのであった。以来、北の方は、獨聞ひとりねをつゞけなければならなかった。北の方は、吉良氏、渋川の貞頼さだよりの女むすめだったが、嫁とついて数年、まだ身ごもらぬうちに、この夫の女犯戒に出逢つて、空聞くうげをかこつことになった。そして去年はすでに四十歳に達していた。それが、たゞ一夜の語り、あやしくも受胎じゅたいした。考えてみると、新婚後の幾年かのあいだにも妊はらまず、その後は禁慾きんよくの十三年をすごして、四十歳に老いた女が、こつねんとして、腹に異状をおぼえたのだから、北の方その人も、また直義みずからも、ことの外、驚きもし、いぶかりもして、ふかく事柄を秘した。たゞならぬ身とはいえ、果してそれが懐胎かどうか、ひそかにたしかめるために、和氣、丹波両流の医事の博士、本道外科一代の名医を、三条坊門の館にまねいた。直義の坊門邸にあつまった専門家は、かわるがわる北の方の躰からだを診て、

「おもうに、これは、労いたわりの風気が因の症と存ずる。労風を治する薬として、午黄金虎丹、辰沙、ならびに天麻円を配して、御治療まいらせよう」

と、いう博士があつた。また、  
「やつがれの診断は、気によって生じたる腹臓の問え。されば氣を収

むる薬餌には、愈山人と降気湯、それへ神仙沈麝香をも加えて配剤なつかまつろう」

と、いった名医もあつた。また、  
「身どもは、これ、純乎たる腹痛と診察申した。よつて、金鎖正元丹、さらに秘伝の玉鎖円、この両劑をもつて、御療治にあたる所存でござる」と、そう述べた典藥もあつた。だが、たゞひとり、典藥頭、和氣仲成だけは、しばらく首をひねつて後、  
「なんとしても、御懷妊ごかいにんとしか診られませぬぞ」と、断じた。

この仲成の診断は、いろいろに診た名医たちにも秘された。だんだん月が重なるにつれて、北の方は、仲成の診たてのあたつたことを自覚した。年が翌けると、あきらかに、胎動をおぼえたからであつた。そして、今月、七月目で、しのびやかに著帯ちやくたいをおこなつた。それは、つい昨日のことなのである。

「大塔宮さまの亡き御靈魂への——」

と、敷妙が、直冬の眸をながめつゝ、

「お慎しみから、と、——いっぞやのお寝物がたりに——」

そう云いかけるのを、

「もう、よい」

「でも——」

「もう、よい」

さえぎつて、

「だが、解ときたいは、怪異の謎じや。——幻象が、仁和寺の六本杉で、それも舜髓しゆんずいのような、はるか局外の者に、なぜ現われたか——という謎じや」

直冬は、目をつぶつて、うなだれた。

その瞬間、いぶかしや美女の双眸は、いきいきと、むしろ嬉しげにかざやいたではないか。

はて、何故であろう？

## 千早と新屋敷

### 一

「与茂——。暗くなつたな」

「日が暮れれば暗くなるわさ」

「みごとに夕映だったが、月の初めの朔日だから、今夜は闇夜の、ちようどまん中じや」

「それほど解つていたら、こぼすな」

「こぼしはせんが、足許が見えん。——与茂。富山の砦から、松明をかりて来るのだつたな」

「松明なら、麓村の間に合う」

与茂平と度々平は、虎夜又正儀と、近習梶丸とが乗った馬の前、十間ほどを、小声で話しながら歩いてた。

「度々——。こんな時刻に——気になるの。御急用にちがいないが」

「吉野から、安西九八郎どのが戻つた」

「む。そして、殿の御相伴をして、飲み食いされた」

「おれたち二人も、はやばやと夕飯をたべた」

「そんなことは、どうでもよい」

「よいものか。腹がへつては、お供がでkindぞ」

「弱虫め！」

「お互いにな！」

「だが、どうも気になるて」

「それもお互いさまじや」

馬上の虎夜又と梶丸は、黙々としていたが、やがて麓村に入ると、梶丸が、

「与茂平——。佐々良の家から、松明をとつて参れ」

と、書いつけた。

与茂平は、路に沿う一構えの、小じんまりした屋敷のなかへ、入つて行つて、百姓家ふうの萱葺の、だが武士の住居には相違ない家の玄関に立つて、

「——東条の、虎夜又の殿たゞいま、千早の城まで参らせらるゝ。松明、二挺、所望いたす」

大きな声で、そういうと、奥から、主の佐々良大蔵が、もうかなり曲つた腰を、右、左にゆすりながら走り出て、屋外の闇をすかしつゝ、

「おやすい御用じや。何挺なりとお持ちなされ。して、乙の殿は、いづれにおわす？」

と、いったとき、くらがりから虎夜又の声がきこえた。

「健康か大蔵翁。——馬をあずけて行く。登らすのは、ちと無理じや」

柴垣の門口から、前庭へ、虎夜又と梶丸があらわれて、下馬した。

「乙の殿、久瀾でお目にかゝります。夜分の御登山とは、なんぞ早急なる事態など、出来いたしたのでござりますか」

「いや、かくべつ急くという用ではない。そゝろに青葉の匂い嗅ぎに来て、翁の無事な顔見たようなものじや」

「お戯れ口を——。いよいよお用い合戦が、はじまるのではござりませぬか？ そのための、お打合せに、お山の御留守居、神宮寺どのの許へ、成らせらるゝとお察し申すが——？」

「翁。相変わらずの性急じやの。まだまだそうは運ばぬよ」

「はてな。翁はまた、お山の侍たちの噂どおり、吉野におわす館の殿が、弁内侍さまをお救助あそばしたで、頭から湯煙りたてた高師直、大軍を狩り催うして押寄せるを、ござんなれとばかり迎え撃つ、それきつかけに湊川の御無念、はらすべき大戦が、さては間近と存じたのに

「なるほどな。爺の考えそんなことじゃ。こんどこそ、腰は梓の弓形でも、兵庫へお供できなかつた埋め合わせ、第一線にとitudarouが、その意気で、せつかく養生してくれ」

大蔵爺は、そういわれて、白髪あたまをふつた。

「養生なぞは御免蒙る。とんでもない。この上いつまで辛抱は、なり申さん！」

半農生活——各自の采邑に、大なり小なりの家屋敷を構えて、ふだんは家人や従僕に、鋤鋤をとらせて、農業にいそしむが、一旦、事あれば、農具を武器にかえ、家人を兵に、下僕を卒に仕立て、駒に鞭うちつ最寄々の城や砦へ、馳せつける——それが楠の家臣一般の生活だった。この佐々良大蔵も、むろん、その一人なのである。

大蔵の悴、大助が、松明を二挺もつて、家の下口から出て来て、

「虎夜又さまには、お山のお城に、御一泊なされましような」

と、いゝながら与茂平と度々平へ、その照明を渡した。家僕らが、乗りすてられた馬の方へ行つたとき、

「爺や、行つて来るぞ。」

正儀は、大助へも、

「泊るかも知れん。また帰るかも知れん」

そういつて、前庭から表へ、松明に照らされながら出て行つた。

## 二

麓村から、山路が二筋に分れて、「胸衝き」とよばれる急坂は、城の大手へ、「肩衝き」とよばれる急坂は、城の搦手へ通じていた。「お山」とは、金剛山だ。その中腹にたつのが、千早の城であった。

そこは十五年の昔、元弘の三年、勤王の旗をかたくまもつて正成が、北条幕府の、雲霞の大軍を、なやましぬいた古戦場だった。敵はまず、峨々として近よれそりもなくそびえる金剛の陰嶽を、あおがなくては

ならなかつた。千早城のそのまた上、峯の頂辺にそばたつ国見の砦を、おどろきの眼でながめなくてはならなかつた。登るべき路は、二人とは並べぬほど細かつたので、雑木の枝にすがったり、岩のかどをつかんだりして、刀は背に負い、弓は頸にかけ、槍や長巻や薙刀は、束ねて縄で吊りあげながら、大石だの、丸太だの、樹の根株だのが、地響きもろともに落ちてくるのを怖れつゝ、よじ登らなければならなかつた。この山の名、この城の名は、楠の名とともに、たちまち天下にとどろき敷いたのであつた。そして四方に義軍が起り、北条幕府が倒れて、建武の維新となつたが、足利の反逆のために、その中興の業やぶれてこゝに十二年——山と城とは、さながら再挙を待つかのように、水分の盆地の初夏を、じつと見おろしているのだった。

だが、盆地の翠色は、夜の闇に没し、城は、山腹の寂莫に眠ろうとしていたとき、留守居の神宮寺正房は、

「なに、乙子——虎夜又どのが？」

と、驚いていつた。

正房は、水越峠下の自分の屋敷に妻子をのこして、この大切な城をあずかっているのである。

木戸が、中庭へあいて、松明がかゞやいた。

「正房、夏になつたのう」

虎夜又は、無造作に、縁へ腰かけた。

「これは乙殿、御機嫌うるわしゅう」

正房は、広い肩が、がくりがくりかしがるほどの、ひどい跛を引きながら、縁ばたへ出た。湊川激戦の生紀念だった。

負傷の痕は、そのみでなく、指は三本とれていたし、顔はいたましくひきつっていた。

「お呼びくだされば、参つたものを。わざ／＼」

「九八郎が、きよう吉野から戻つた」

「ほう。して、館は、なお御滞留かな？ 御母堂様にはどんなにか、

お待ちかねでござろうに」

「もう近々に、戻らせらるゝ」

「石掬、野田、その他の手負いも、おゝ方、傷が癒えたとみえまするな。おゝ、申し後れた。このたびは、館御名譽の御昇任——かたじけなく昇殿をもお許され——恭悦至極に存じ上げる」

「正房。——開戦の勅許が、下るかも知れぬぞ」

「え！ そりや、ま、真実でござるかっ？」

「親房卿も、お根負けの形じゃという」

「あゝ有難や！ 弁内侍をという忝けない思召まで、御辞退申して願わせられた、その甲斐が、あつたのじゃ！ 有難いことじゃ！ 乙どの。

——乙殿っ！」

「なんじゃ？」

「えゝ、なんじゃとは！ 乙殿っ！」

「どうした？」

「ど、ど、どうもこうもないわいっ！」

「ぴしやりっ、縁の牀板を、正房は平手でたゝいた。

「お身さまの、その顔、その顔は？」

「この面が？」

「えゝ、そのお面が、気に入らん！」

「困ったな。だが生れつきなら詮なからう」

「乙殿っ！ 詮ないではすまん。先殿御精霊に、この神宮寺が相すまん！ 乙殿——乙殿っ！」

「乙殿が、へってしまふ。」

「うれしくはござらぬか、うれしくは！」

「うれしいどころか、大憎気じゃ」

「なにっ！」

「泣きたいくらいだ」

「ばかっ！」

こつりっ、拳で、正房は、縁をたゝきつけた。虎夜叉は、うすらに笑いつゝ、

「指の古疵を、ちといたわるがいゝ」

「ちえっ、わしはもう厭じゃ！ 還つてほしい。帰らせられい」

「せつかく、来たのだ。そういうな」

「虎夜叉どのは、そも何のため来られたんじゃ」

「そりや相当の目的なしには、夜路を、とほとぼ参りはせぬよ」

「前置きは迷惑じゃ」

「すこし人並みな声になったの」

「あ、よけいなことを！」

「開戦と聞かば、さぞかし神宮寺が亢奮するであろうと、そう思つて、あらかじめ、火の手を消しに来たのだ。一月がかりで喰いさがられては、北畠の准后も土俵を割るかもしれん。いや、割りそうじゃ。兄上が、颯爽と御帰館になる、勅許を得てじゃ。正房、そこでお身の火の手が、兄上の熱をおおつた日には、河内、和泉は丸焼けにならう。わしはそれが心配で——」

「乙殿っ。さてもさても見下げはてた御根性じゃわい。戦うことを、大びらに、さゝえようとされるのか？」

「そうだ。あくまで、両三年、待つて貰うのだ。待たばかならず、勝てるのだ」

「あゝ、不肖の乙子、不肖の弟！ 正成の殿は、敵を都にひきいれて、河尻ふさいで叡山から、瀬田、宇治をつなぐ味方の軍と、北、南より挟みうたば、勝つべき戦さを、闘わで、兵庫へ下られまいぞ」

「場合がちがう。いまとは形勢もちがう」

「中陣は弟御、正季どの。先陣はお従弟弥四郎正種どの。敵の大将直義が旗本めがけて、切つて入り、突撃、短兵、白鬪戦。高兄弟と卿律師、細川の軍、駆けなびけ、上杉吉良の諸隊とも血戦して、七百人が総討死じゃ。生きて河内へもどつたは、この正房たった一人じゃ。

いかに湊川の戦いが激しかりしかを、語りつたえんがためにござつた。殿の厳命もだがたく、死すべかりし生命を拙者がならえたのは、乙殿——お身さまのような人を、楠の御家門から出すまいがため、それがためにござつたぞつ！」

「十八番が出たの。尊い生紀念、楠の家宝じゃよ、おぬしは。だから兄上も、おぬしのいうことなら、一番よくお聴きなされる。そこでじゃ、不惑をこえた年甲斐に、ちと落ちついて物事を考えてほしい」

「何、落着いて——？」

「長老株ではないか」

「——」

「わめくだけが能でもなからう。この虎夜叉を、ほめよなぞとは決して云わん。たゞ兄の殿の、ありがたい恩賜を拝辞してまで、妙におあせりになるお心を、この上、そゝりたてぬよう気をつけて貰いたい。それを申しに参つたのだ」

虎夜叉正儀は、縁から腰をあげた。そして仄暗い中で、神宮寺の傷痕でゆがんだ顔を見入って、

「おぬしも大分、あきれたらしいが、わしもまことにあきれかえつた。まさかに、これほどとも思わなかつた。のう生紀念、お身は一体、いまゝでにたゞの一度も、なぜ館が戦いを、さまでにあせらるゝかという疑いを、胸にわかつたことが、あるのか」

と、なおしばし、ながめていたが、

「今晚は、これで帰る。——ようく、考えてくれ」

いいすてゝ、梶丸と、松明の方へ、中庭を過ぎつて行つた。

### 三

神宮寺正房は、とうとう睡れなかつた。

虎夜叉め言葉が苦になつたのだ。いゝ歳をして、よく考えて見ろ、といわれた。たゞの一度も疑問が起きぬのか、ともいわれた。東条か

ら夜おとずれた理由も、一言、聞かされたには聞かされた。けれども、どう考えても、すべてがわからなかつた。しまいには、五里霧中をさまよう気持になつて、額の古疵がいたむようにも感じられて心が、いらだつた。

搔巻を蹴りやつて、窓をあげると、かすかに東がしらんで見えた。

（新屋敷へ——行こう）

何べんも考えたことを、ついに決心した。

水分の新屋敷——それは、楠の三兄弟の、仲の次郎正時の住邸だった。思い立てば、待てもしばしもない性分だから、いきなり郎従が三人、たゞき起された。

郎従は、睡りたらぬ目をこすりながら、厩舎から、正房の乗馬をひきだして、二人はそれを麓まで、夜明け前の暗い急坂を、谷へはまらぬように心をくばりながらつれて行かねばならなかつたし、また一人は、大跛の主人の下坂を安全にするために、はなはだ骨の折れる杖の役目を果たさなければならなかつた。

千早川の谷からわく払曉の霧は、まるで雨のように人と馬をぬらした。

麓村はどの百姓家も、佐々良大蔵の家も、まだ寝静まつていた。そこから新屋敷までは、およそ一里半。

門前についても、まだ朝陽はのぼらず、門扉はかたくとざされていた。

郎従の声は、役にたゞなかつた。正房自身の音声をやつと門番の曉

きの夢をやぶつた。

屋敷は、下赤坂の城を、間近にながめる位置にあつて、濠と築地をめぐらし、川の水をひいた濠が明けきらぬ空と、かゞやかぬ翠とをうつしていた。

この屋敷は、故正成が弟正季のために工事を起し、半ばにして湊川の陣没となつた思い出のからまる屋敷で、やはり同じ運命をみた観心寺の五重塔と共に、人人の泪をさそう種であつたが、基礎と一重しか出来てない塔の方は後まわしとして、ほんのもうすこしで兎も角

も住める館になる、というので、かなり手をぬいてこしらえあげられた。で、こゝには、次郎正時が、叔父正季の遺児の庄五郎正氏を、手許に引き取ってすんでいた。正氏は今年、十五歳だった。正時は、再従弟の正忠をも同居させていた。この正忠は、湊川で最もはげしく挺進して、まさに敵帥直義を斬ろうとまでした二門随一の驍将、楠弥四郎正種の子で、いまはもはや二十歳だった。

まだ薄ぐらい客間へ、神宮寺は案内された。

「驚かすのう、わは、ハ、ハ、ハ」

と、わらいながら屋敷の主が、あらわれた。

「ゆるささい、次郎の殿」

「まるで夜中発ちではないか。若い者には真似ができません。父上にきたえられた士は、ちがったものじゃ。あたまが下る」

「お賞めは、痛みいる。じつは、思案にあまって、お智慧を拝借にまいった」

「はて、思案にあまって」

「はい」

「そりやお門ちがいじや。東条になら、あまっておる智慧はいくらもあろうが、わしには生憎と持ちあわせが、いたって乏しい」

「いえいえ、その東条が来られたのじゃ」

「え、来られた？ どこへ？」

「昨晚、拙者がもとへ」

「ほう。虎夜又が、千早の城へ」

「開戦の勅許が、下るだろうと云って来られた」

「なかなか。下るものか」

「安西九八郎が東条に戻つての報告では、たぶん下るといので、とにかくそうあった場合、館の殿を、戦をあそばさぬように、お支え申せと、この正房におっしゃった」

「おぬしに、虎夜又が——」

「さよう。その乙殿の云われたことが、たゞの一つも手前には解せませなんだ」

「あれの頭悩はちと、いや大いに我々のと、構造がちがうから、どうも調子が合わぬて」

「合うの合わんの喋舌ではござらん」

「人もあろうに、おぬしにのう、非戦論の味方になれなどと——」

「なさない御根性だと、縁をたゝいて諫めれば、指のもげた古疵をいたわれなぞと、はぐらかし、乙殿乙殿と呼べば呼ぶで、乙殿がへつてしまうという御返辞じや。ひとのことは頭から、愚弄するに事欠いて、のう生紀念とおいでなざる。おまえは楠家のたつとい家宝じやと申されたその唇のかわかぬ間に、それがしの湊川戦ものがたりを、十八番が出たなと嘲りわらう。ありや御家門のお面汚しじや。ありや、なんとしても——」

「わは、ハ、ハ、ハ」

わだかまりのない笑いごえが、神宮寺の言葉が消した。

「太郎兵衛、なにかと思つたら、益体もない！ 湊川の懐古談は、おぬしの十八番。また唯一の生存者、激戦の生紀念に相違はなし、手の指の古疵をいたわれも、あえて侮辱ともいえまいがの」

「ほ。次郎の殿まで！」

神宮寺は二指足りない右手でたゞくかわりに、こんどは投げ出しの足の踵で、牀をたゝいた。

「お身さままでが、そ、そのようなこと言わつしやるなら、太郎兵衛正房、皺腹を切らねばならぬ」

「はは、四十を幾つも越さで、まだ皺腹でもあるまい。」

「ほ、それだ。虎夜又どのを——口真似なさるか？」

「神宮寺——。一酷すぎるぞ」

「先との御依託に対して、申訳がござらん！ 御後室に、顔向けが成り申さん！ 腹切つてお詫びいたすほかござらん！」



「それぞれ。それがよくない」

「あん？」

「わしら兄弟の少年時代なら、それで結構。だが、虎夜叉さえ、すでに二十歳。いや、彼の二十歳は、他の三十にも勝さろう。たしかに、稀有な秀才じゃでの」

「ぶ！ 邪智慧は、そりやあまるほどあろう。読み書き諸芸に達者でも、人間がうそならば楠のお人ではない」

「むろん、父上のような完全な人間ではない。人格において欠点はあろう」

「なに、あろう？ はゝゝゝ！」

さげすむように笑って、

「こりや可笑しい。太郎兵衛、お尋ね申す」

「なんじゃ？」

「そもいつから、邪宗へ、宗旨がえなされた」

「宗旨がえはせぬよ」

「新屋敷どの——」

膝関節のまがらぬ脚で、ふたゝび牀をたゝいて、

「亡きお父上をおそれず、母ぎみの、きびしい御訓戒をも尻に聞かせて、稚児輪の頃より、女子にたわむれ、侍女をもてあそぶ乱痴気沙汰、沙汰のかぎりへ走かけて、うすつぺらな態度、人を人とも思わぬ口ぶり、虫唾もはしれば、癩にもこたえる！ さあ、あの横邪を、あの碌でなしを、な、なんでかばわれるのじゃ？」

ひきつった頬へ、急に泪が、ぼろぼろとこぼれ出した。

#### 四

男泣きに、泣きじやくつて、

「楠を、枯らそうとする毒虫じゃ！ 悪魔の夜叉じゃっ！」

と、神宮寺はさげんで、

「あの夜叉を、あの夜叉を——お身さまが、お身さまが——」

声を、ふるわせると、

「これさ。太郎兵衛」

正時は、さゝえて、

「元奮がすぎる！ そう一閃に思い迫っては困る」

「えゝ、なにが過ぎる！ なにが困るっ！」

「さげばずとも、話は出来よう」

「出来ん、相ならんっ！」

「しずかに！」

「地声だっ！」

と、一層荒くさげぶので、おもわず正時も、

「だまれっ！」

と、さげびかえした。

「いやじゃっ！」

「えゝわめくなど申すにつ！」

と、正時自身もわめいた。

廊下から入側へ、驚いた顔で庄五郎正氏が走ってきた。

元服したばかり。薄香——黄ばんだ薄赤い色の水干を着ていた。亡

き父親の正季の面影よりもむしろ従兄たちによく似た顔立ちで、さな

がら東条の虎夜叉の下に、もう一人、弟があるかのように感じられる

のであった。

「おゝ、庄五郎」

と、正時はよんで、

「いゝところへ来た。そなたの臍負な虎夜叉を、神宮寺が、悪魔の夜

叉だとわめきたって、手こずらせている」

と、いった。

神宮寺も、するどく正時にどなられた途端に、庄五郎に走りこまれて、

氣勢がくじけた。

正時が、庄五郎へ、

「そこへ——坐れ」

と、神宮寺の脇に敷いてある薄縁うすべりを指さした。太郎兵衛も薄縁を敷いていた。家臣の身分で、正時の前で敷物しきものに坐るほど重んじられていたのである。

だんだんあかるくなつた室内へ、さわやかな朝日が、さつと射し入つて、神宮寺の睫毛まつげにのこる涙の粒を光らせた。

「泪をぬぐえ」

と、正時がいった。

指の足らぬ手が、眼瞼まぶたをこすつた。

「太郎兵衛——。その庄五郎などは、わしにときどき叱られるくらい、東条に心酔しんすいしているぞよ」

「にきびの出るお歳じや。おゝかた女でもほしゅうなつたのであろう。

——館の殿は、弁内侍べんのないしさまをも、いらぬとおつしやつたに。やれ、やれ、とんだことじや」

と、皮肉ひにくに、神宮寺は、庄五郎を尻目しりめにかけた。

「兵衛どの！」

と、庄五郎正氏が、きつとなつて、

「手前が崇めるのは、虎夜又どの、長所ながどころでござるぞ。近づきがとう高くそびゆる、識見しきけん、卓見たくけん——海のような胆略たんりやく——おそろしいほどの博覧はくらん、強記きやうきと、かぞえたてれば限りのない才能さいのうに対してこそ心酔しんすいもいたせ、女色にじよくにふけるといふ噂うわさがもし真実まことなら、この庄五郎、なんでさような不身持ふみもちに賛同さんどうしよう」

と、いゝなじつた。正時も、

「神宮寺——。十五歳の庄五郎にむかつて、いふべき言辭ごんごではなかつたぞ。おぬしとて、そうまで心ひがめなくとも、よいではないか」

「ひがめさせたのは誰れだ？」

と、太郎兵衛がうそぶいた。

「わしだというのか？」

「論ろんないこと」

「おぬしが、あまり頑かたくなゆえ、わしも虎夜又をほめた。どなりもした。しかし、庄五郎にも始終いゝきかせておることじやが、わしは、虎夜又にいろんな欠点をみとめる。女色にじよくのことも無論だが、それよりも才を弄たの、能のうを待たのみすぎて、自分をほこる気持がわがまゝとなつて、兄の殿の統制とうせいに服たのさないことゝ、亡き父上ちちのうへに対してさえ、時たまには、とんでもものう不遜ふそんな考えかたをして、きゝずてにならぬような口を利くこととが、あたら惜たしい珠たまに、珠の値打ねうちを零ひにも等ひとしゆうする瑕瑾きざとなつてゐるのだ」

正時のいうことを、ほとんど、うわの空そらできいていた神宮寺は、庄五郎へ、

「あの世で、正季まさすえの殿は、よい息子を遺のこした、これで兄の館にも肩身がひろいと、な、どんなにか鼻、たかだかでおわそう！」と、いった。

たちまち、庄五郎が気色けしきばんだとき、正時が、

「まあ聞け。聞いてくれ、太郎兵衛」

なだめるような調子で、さえぎつた。

近習が三人、現われた。茶をもつてきたのであつた。

## 五

「神宮寺へ、朝餉あさぐを進すすぜよ」

正時は、そう近習にいつてから、

「こんど虎夜又が、兄の殿の御統制ごとうせいを由々ゆづしくやぶるようなことあらば、わしも断乎たんととして赦ゆるさぬだろう。すなわち、兄上の衷情しんじやうが、禁裡きんりに達し、かしこきあたりを動かし奉たてまつつて、開戦かいせんの勅許ちやくきよくだるとせばじや、そして、虎夜又がなおかつ戦うことに非を唱となうるならば、それこそ違勅いちやくの不臣ふしん、兇悍きやうかんゆるすべからざる不逞ふてい——かくいう正時、きつとその罪を糾弾きうたんせずにはおかぬ。のう太郎兵衛、安んじてくれ。おぬしも、

わしの口から今の言葉を吐かすために、夜中起きて見えたのであるうが？」

じつと見つめながら、返答をうながすと、

「あん、違う」

神宮寺が、肩をそらした。

「なんと？」

「あたりまえじゃ。承わらずとも解つておる」

「ほう。では、なんのために？」

かなり意外な面持ちで、正時がきゝかえした。

「太郎兵衛は妙にきがかかりでな、昨夜は、一睡もとれませなんだ」

「きがかりととは、なにが？」

「乙殿にいわれたことが——」

「はて、おかしいの。おぬしに云わすと人外な、あの虎夜又がなんと

いおうと——？」

「ところが、そうではござらん」

「変だな」

「まったく変でござる——どう考えてもな」

「これさ、なにを申す」

「てまえは、こう云われた——のう生紀念、お身は一体、いままでにした

の一度も——なぜに館が、戦いをさまざまにあせらるゝか、という疑いを、

胸にわかったことがあるのか？」

「む——なぜあせらるゝかの疑い——」

正時は、そう呟いた。なにか、ぎくりと、心をついたものがあつた

のである。

「わからん」

と、神宮寺は、ゆがんだ眼を、かつとみはつた。

「あせるもあせらぬもないではござらぬか？ 一意専念、湊川のお申

らい合戦へ、精進あそばす館の殿じゃに！」

わきから庄五郎が、

「次郎さま」

と、かしこげな顔で、よびかけた。

「——」

正時が、やゝ暗い表情で、かえりみると、

「差出ぐちと、おぼすかも知れませぬが、館の殿の、ひたすら開戦を

いそぎたまう御心のうちには、ひよつとしたら——みずからの御健康

にかゝわる御懸念が——ふくまれておるのではなかるうかと、なんと

のう気になつてなりませぬ」

そういう庄五郎へ、正時がまだ口をひらかぬ前に、とがった声で神

宮寺が、

「なんの——賢しげに？ お健かでないようにいう者もござろうが、

お顔色、白いは御性分じゃ。お健かでないお躰に、あれだけはげしい

戦の御演習や、武技の鍛錬やが、どうして出来申そう。さあ、いつ、

館が、どのようなお患いをなされた？ 太郎兵衛の耳は遠くはないは

ずじやが、ついぞ我が殿が、病いの衾まとわれたと、聞いたおぼえが

ござらん。坂東一の大剛といわれた矢板将監を、弱いお躰で、斃せる

ものか？」

と、かぶりを、ぶるぶるとふつた。

だが、それには答えずに、庄五郎が、

「次郎さま」

と、ふたゝび呼んで、

「京都に、内乱が起るだろうという、虎夜又どの、お言葉は、ほとん

ど確実と信じてよいものとそれがしは考えまするが——？」

と、いった。

けれども、正時は、もくねんと、何か思案にしずんでいた。

「笑止々々、はゝゝゝ！」

と、太郎兵衛はわらつた。

「神通力ではあるまいし、空の星の二つや三つやが出逢ったとて、なにが解るう？」

しかし、あざけってはみたものゝ、ふと正時の暗い面つきを見ると、おや？——と、自分もなにかしら得体のしれぬ不安——それは昨夜来つづいていて不思議な気持なのであったが、その不安のまん中へ、突きもどされたように感じられた。

「次郎さま」

と、庄五郎は、三たび呼んだ。

「弁内侍の奪われますることを、あらかじめ探り知ることの出来た、虎夜又どのゝお力は——たゞもう、驚くのほかはない——実に、素晴らしいものと、それがしは思いまするが？」

「うむ」

と、次郎正時がうなずいた。

そのとき、朝飯の膳が、太郎兵衛のために運ばれた。

## 東条の城

### 一

水分盆地の北の端にわだかまる東条の丘のうえに、城が築かれたのは、三年ほど前だった。

この東条の丘は、寛弘寺の鼻とよばれた丘陵の尖端を、石川平野へつきだして、富田林の邑を見おろし、さらに大和川の流域にひろがる撰、河、泉の広漠たる大平原が、おゝ空につらなるのを、一目で見はらすことのできる位置にあつて、背後は、下赤坂、上赤坂、甘南備の三つの丘とつゞきあい、その甘南備の丘は、和泉山脈のふかい褶に、つゝ

まれるように抱かれて、天野山金剛寺の山と相對していた。

（敵に勝たんがためには、この丘に、堅固な城を築かなくてはならん）  
そう考えたのは、虎夜又が十六歳の頃だった。

虎夜又は、仲兄の次郎正時と一しよに、二千貫ずつの知行を、長兄から分けてもらつた時、さつそく、この東条の丘に、まず自分の住むべき屋敷をもうけた。

十七歳の春、虎夜又は、正行にいつた。

「兄上——東条の丘に、築城なされませぬか？ ただ防ぐだけならば、千早の城でも事足りましようが——攻防をかねる城のないことが、遺憾でござる。出撃に便のうては、兵機をつかみそこねましよう。敵を千早に引きつけておいて、東条から長駆、八幡、大渡り、山崎を扼すことは、もつとも望ましい戦略かと存ずるが、それには東条に城がいる。城なくしては、そうした作戦が出来ませぬ」

この言葉をいれて、正行は、東条の城を築かせた。虎夜又正儀の屋敷は、築城を見越して、丘のうえでも一ばん枢要な場所に構えられてあつた。で、城が出来あがつた時には、この屋敷は、いきおい、城の中核に包みいれられてしまつた。つまり屋敷の周囲に、墨石がめぐらされ、そのまた周囲を、やゝ低い胸壁と、ふかい空濠とがめぐることになったのだつた。墨の上には、いくつも櫓が建ち、墨の内側にも、墨と胸壁との中間にも、相当がっちりした兵舎が造られた。城の門は、四方にあつて、空濠には、はね橋が、籠城の場合には、すぐ門の扉口へつりあげられるような装置でかかつていた。

広さも、堅固さも、赤坂の二つの城などとは、とても比較にならなかつた。千早のような天険を背負つてはいないが、代わりに四通八達ともいえる要衝に拠つているこの城が築かれたため、楠の武力は、たしかに、その幾割かを強めたにちがひなかつた。

「乙殿のみが、結構なお城におさまつて——」  
などと、いう者もおゝかつた。

正行が、母堂とともに棲む水分館も、正時の新屋敷も、水堀と築地をめぐらすだけで、なんら防備がなかった。いってみれば、ほんの普通の住邸でしかないから、兵舎なぞの設けもあろう筈なく、従って、そこにおける家臣や郎従の頭かずも知れたものだった。ところが、東条の城が出来たとき、楠の、いわば常備兵ともいべき家来どもの半分以上が、そこに駐屯することになった。ほかの城や、所々の砦にも、むろん、散らばっていたし、千早城をあずかる神宮寺太郎兵衛のもとにも、三百人くらいはいたようだ。が、東条こそ、兵備の中心となった。「変なものよ、のう。東条のお城は、あれは館正行の殿のお城で、なにも乙殿のものではあるまいに！」

「いかにもな。内部にあるお住邸だけは、正真正銘、虎夜又どの、館であろうが、お城は預りものよ」

「とはいうものゝ、妙な形じゃ」

「妙とも。まるで乙殿のために出来た城のようじゃ」

いろんなふうに噂されたが、それから三年たつ間に、誰れがなんといおうと、虎夜又は実質的に東条城の主としてふるまうようになっていた。正行は、一族や重臣の口から聞える虎夜又潜越という非難の声に、すこしも耳をかさずに、東条の城と兵とについては、すべてを、末の弟に委せきっていたのだった。

## 二

「駕籠のまゝ、これへ通せ」

と、虎夜又がいった。暗い夜だった。

「は」梶丸は、せまい中庭の墻のそとへ、去った。

木戸のある高い墻と、武器庫の背中の黒い壁と、一棟の隔離した建物とが中庭をかこむ形になっていた。「玄々寮」と名づけられた、この建物は、築山と築山の谷あいのような場所を通る長い廊下で、屋形の母屋へも、対屋へも、つながれていたが、その廊下の両端には、妻戸

があつて、掛金の戸締りも嚴重だった。だから、この一郭は、いわば秘密の別天地で、東条の城内の他の部分とは、まるでかけ離れた場所ともいえるのだった。

建物は、がんじょうな書院造りで、そう広くない幾つかの室に劃られていた。平常の居間は、寝殿造りの対屋の方にあつたが、なにか秘事にかゝると、虎夜又は、きつとこゝに匿れる。そして匿れたら最後、ごく少数の人以外には、まったく動静がわからなくなってしまう。

墻の外に、また墻があつて、城内の士卒さえ知らない間道を、一筋かくしていた。間道は、馬も通れるだけの構造に出来あがつた地下の抜け道となつて、城の墨下をよぎり、搦手の丘の、横腹のある地点へと通じていた。この秘密の通路は、虎夜又が非常に工夫をこらしてこしらえたもので、人知れず城からぬけ出して、また密かに城へもどることが出来た。地下道の出口は、厚い扉でふさがれていて、特別な方法によらなければ、その扉はあかなかつた。だから、搦手そとの丘の中腹で、よしんば抜け道の出口が見つかったにしても、扉を破壊せぬかぎりには、内部がうかゞえない。しかも、大きな岩石を利用して構築された扉は、容易なことで破りうるものではなかつた。

それはとにかく、今この間道から、町人風の男が一人、つき添った、ふたり昇きの駕籠が一挺はいつて来たのだった。

肩替りの駕籠昇きが、短い脂燭で、闇を照らした。墻の間で、駕籠がとまった。附添いの男が中庭へ、木戸をあけて入つて行つて、玄々寮の一室から現われた梶丸と会つて、ほんの二こと三こと話し合つただけで、梶丸はすぐ、奥の間の虎夜又に取次いだし、その男は、駕籠のそばへ戻つた。で、梶丸は、通せと云われて、木戸から出て行つたのであつた。

まもなく、駕籠が、中庭へ昇きこまれた。

町方や邑人でも用いる、ごく粗末な綱代の駕籠ではあつたが——虎夜又の郎従、度々平と与茂平とが、庭におり立つて迎えたし、回廊へは、

昵近の侍女の幾波が出て、膝まずいた。

駕籠の中からあらわれて、濡縁にあがったのは——その粗末な綱代とはおよそ不均合いな、一見、名ある館の、わかき北の方とも思われる、うるわしい上臈——。うすくれないに、青鈍で浮紋した衣と、杜若を経にむらさきに、緯燕脂の段に織った唐衣とが、室内のあかるいともしびに、あでやかに照らされた。

お、この麗人、この忍びやかな訪れびとこそ、誰れあろう——それは、敷妙であった。足利直冬の愛妾、敷妙であった。

京は一条堀川、村雲の反橋ぎわの館で、直冬から、またない寵女といとしまれている敷妙——それが、いぶかしくもこつねんと、こゝ隠密の玄々寮に出現したのだった。

さても、この敷妙と——虎夜又とは？

### 三

玄々寮には、附属の屋舎が、既や、輿轎の置場までそなえていた。綱代駕籠の昇き夫らは、与茂平に案内されて、舎内の一室へ入ったし、附添いの男——それは堺浦の、唐土屋の手代で、萩二郎という、あるじ伽羅作の腹心の若者だったが、度々平と一緒に別室に入って、休息した。

奥の間では、虎夜又が、

「美しゆうなつたの」

と、会釈をすました敷妙に云った。

「あら——」

とばかり、怨ずるような流し目へ、

「敷妙——」

と、仄えみを見せて、

「心の苦勞は、察しておるぞよ」

すぐ、真顔になって、じいっと眺めいりつゝ、

「よくも、いみじく働いてくれた。正儀、礼のいゝようもないぞ！」

そう、しんみり云われると、たちまち溢れるような嬉しさをおぼえて、「お、わが殿！ そのおひと言が、承りたさの一念から——」

とても抑えきれぬよろこびに、こみあげる感動に、躰じゆうが、わなわなとふるいだした。敷妙は、ついに感きわまつたのだろう、わっと、嗜みをわすれて泣きくずれた。

「お、無理ないぞ、泣け、泣け！ たんと泣け！」

しばし、泣くがまゝにまかせて、

「そなた」

と、やがて虎夜又がいうと、

「殿——」

うれし涙に泣きぬれた顔を、あげて、

「お側をはなれて、半歳あまり——まあ、どのような今日の日が、待たれたこととございませう！ 御推量くださいませ」

「待たれたであろう。推量は致す。だが敷妙、そなたが今宵、こゝに見えようとは、虎夜又は思いもよらなかつたぞ、危き橋を、なぜ渡ってきたのじゃ？」

「お叱りは、覚悟のうえでございました」

「そなたほどの気性、よもやこれぎり、堀川の館へ還らぬつもりでもあるまいに」

「還りとうないは山々ながら、還らずともよいというお許しの出ませぬのに、なんでまあわたくしが——？」

「これ。情を殺し、想いを撓め、操をもすて、身をすてゝと、決心のほど、かたく定めて足利館へ、入り込んだそなたではないか？」

そう、毅々といわれて、敷妙は、なやましげな面持ちで、

「もし。あやうい橋と——仰せではございまするが、兄、伽羅作の急な病いと偽りまして、堺の実家より駕籠のむかえ。ゆめ悟られますような氣づかいはございませぬ」

「いや、それは浅はかだ。そなたに似合わぬ心のゆるみじや。事のやぶれは、そうしたゆるみから起る」

虎夜又は、そういつてから、手をたゝいた。

「はあ」

蔭で、答えがあつて、幾波が襖をあけて入つてきた。

「茶を入れい」

「はい」

「そして折鶴をよんで、夕餉の仕度させい。敷妙はまだ食べてはいまい。供の者にも、とらせよ」

幾波は、心得てさがつた。

「虎夜又さま」

と、切なそうな声で、敷妙がよんだ。

「ゆるみじや」

と、正儀は、それへかぶせて、

「直冬が、人を唐土屋へつかわさば、なんとする？」

「兄は、仮病の床にふせておりまする」

「だが、そなたの不在を、どう云いくるめる？」

「岸和田の伯母も病いと申すことに——」

「痴な！」

「でも、万に一つも、人の参るような心配はございませぬものを。あの——堀川では、露ほども疑われてはおりませぬ」

「そう思うのが、即ちゆるみじや。——そりや恐らく、堀川の邸から人は参るまい。しかし、もし参つたら？」

「たとい参りましても、病気見舞の品、とゞくだけのこととございませぬ。岸和田までもおとずれる憂えは——」

「敷妙」

と、虎夜又が、さえぎつて、

「伽羅作の病い、重からずと知るだけでも、直冬の胸に、疑念の黒雲が、

わかずにいようか？ それを疑わずにおるような、直冬と思うのか？

——そなたは接している。わしは聞くだけだ。だが、聞くところを、いろいろ、綴ぎあわせてみると、年は若い、あの直冬、足利一門じゆう随一の男じや。おそるべき人物じや。それだけに、こなたの操作には、身も入れば、張りも出る。わしが、つけた目星に、あやまりはなかつた。な、——そなたに、辛きおもいさせておる甲斐も、あろうというものじや。しかしまた、それなればこそ、心にみじんも、たるみ油断があつてはかなわぬぞ。去年の秋——わすれもしまい九月の一夜、あれほどそなたを歎かせて、やつと得心させたわしだ。また納得してくれたそなたでもあるぞよ。わしとて、未練は残つた。虎夜又は悲しかつた。なぐさみに弄あそんだそなたではなかつたからだ。虎夜又は、そなたを愛していたのだ。つらい思いをさせたのは、たゞたゞ朝敵調略の悲願からじや。のう、敷妙、わしのいうことを、心の底にきざんでくれ。直冬にわずかでも、そなたを疑う氣持が、きざしたなら、これまでの辛苦が水の泡になる。企みに企んだ、あの仁和寺の——六本杉の怨霊評議なども、そなたが信じられておればこそじや。伽羅作が参つての話には、直冬は、首かたむけて、そうした幻ろしがなんの由縁もない舜髓にあらわれたのが不思議だと、いったという。さすがに敏感じや。直冬の慧しい眼の光は、ほんの間一髪、きわどいところまで届いたのだ。疑ぐらぬまでも、信ずることが浅かつたなら、せつかく仕組んだ怪異の種もわけて、この虎夜又の工夫が、伽羅作と舜髓の大骨折とともに、徒勞になったやも知れなかつたぞ。いや、なるかも知れぬ。そなたが、すこしでも訝られたら最後、きつとなる」

じつと神妙にきいていた敷妙は、うつくしい顔を、悲しげに、もたげて、「かずかずのお言葉、いたらぬ心にも、ひしひしと応えました。どうぞ、わたくしの浅はか、お赦しなされて下さりませ」

そういう時、次の間から、茶を、幾波がはこび入れた。

#### 四

虎夜又は、茶を飲んで、

「どうじゃ、一服」

「はい」

敷妙が、飲みおわると、侍女の幾波は、もとの朋輩でもあり、かつ、それよりも自分とは従姉妹あいという近親でもある敷妙を、さもなつかしそくに眺めて、

「もし敷妙どの。——弁内侍さまは、まことに危険いことで——でもあのように御厄難からおのがれあそばしたのは、館の殿のおはたらきとは申せ、そもじどのより逸早う、こなたさまへ、お知らせがあったればこそでございます」

と、いったが、敷妙はたゞ、

「ほんに、ともかくもお間に合うて、何よりでございますました」

と、答えた。それは自分の大きな手柄だった。師直の今出川館へ、入れておいた間諜から、偶然に聞きこんだ手柄を、この東条へしらせのために、弁内侍の災厄は救われたのであった。けれども、そんな手柄ばなしをする心の余裕を持たなかつたから、すぐ、虎夜又へ、

「あの——お赦され、いたゞけましようか？」

そう、伺いをたてると、

「すんだことは、今さら詮ない。向後は、直冬がそばを去らぬようにな。じかに逢わずとも、伽羅作を通して、どんなに詳しい話も出来よう。つれないようだが、虎夜又のため、辛抱してほしいぞよ。よいか」

「はい」

声が、ふるえた。

「夕餉たべたら、すぐと帰れよ」

「えゝっ？」

「今夜のうちに、堺に戻って、明朝は、いそいで京へ立ち帰れ。」

「——」

「やつとの思いで参ったものを、すぐ帰れといわれては、そりや本意なかるう。——わしとて、そなたの口から、直冬の話のみならず、將軍や副將軍の噂、師直や上杉の評判など、聞きとうなくはない。だが、大事の前の小事じゃ」

「——わが殿！」

「な。あきらめて、帰れ」

「もし！ そりやあんまりでございます。せめて、せめて今宵は一夜だけ——」

「ならぬ。戻れ」

「どの。お慈悲でございまする！」

「聞きわけのないことじゃ」

「では、なんとしても——」

「帰つてくれ」

「おゝ！」

敷妙は、こらえられずに泣き伏した。

そばから、幾波が、

「わが殿へ。それではあまり、おつれのうはございませぬか？ 朝まだきにお発ちなら、今宵の帰りと、どれほどの違いもございませまい！ いえ、丑三つ過ぎて堺におつきでは、却って訝しゅうございませう。どうぞ、今宵一夜はお許しあそばして、つもるおもしろい物語に、お耳をかしてあげてくださいませ」

と、真情をこめて、とりなした。

しばし、虎夜又は考えていた。

幾波のいうとおり、丑三つ過ぎての堺着は、一こう気の利いたことではなかつた。また、せめて一夜をという願いを容れてやることは、敷妙の心をどのくらい励ますかわからない、とも思われた。帰らすなら、わが郎徒どもに衛らせて——と、すでに決めていた思案ではあつたが、



虎夜叉は、たちまちそれを翻して、  
(泊めてやろう)

と、思った。

## 五

「——静かでございますこと。——物音ひとついたしませぬ」  
うっとりした眼ざしで、敷妙がいった。

まだ、さほど夜もふけぬのに、四辺の室々は、しんと、人のいな  
い家のように、ひそまっていた。

幸福に酔う敷妙であった。

「宿直のもの二三人のこして、皆、この玄々寮から引き退ったのじゃ。  
そなたの供だけは、雑舎におる筈じゃが、酒のおかげで、もう白河の  
夜舟だろう」

「萩二郎は、酔いつぶれるような男では、ございませぬぞえ」

「む、あれは役に立つ。もう何遍か、修験者姿で、伽羅作の手紙を届  
けに参ったが、頼もしい奴じゃ」

「兄は、よい手代を、たくさんに持っておりますので、まことに心づ  
ようございます」

「唐土屋一家の、上下協力、団結のまごころは、虎夜叉ふかく恩にきる。  
そなたの家というものがなかったとしたら、わしの隠密のはかりごと  
も、あたまには考え得たかも知れぬけれど、行うことは、とても出来  
なかったにちがいないぞよ」

「あれ、そのようにおっしゃっていただきましては、勿体のうござい  
ます。亡くなりました父は、水分の先館さまから、海山の御恩を頂戴  
いたしました。兄は父の遺言をまもりまして、およばずながらも力の  
かぎりには、お役の端にも立ちたいと、たゞ一心なのでございますものを、  
血をかけた弟の舜髓、妹のわたくしが、どうして苟且におもわれまし  
よう。ましてや殿にはわたくしへ、おいとしみの情けまでくださりま

したその上に、従妹の幾波さえもお目かけらるゝ、ひとかたならぬ御  
鴻恩——身を粉にしてもその御恩報じに、つくさずにはおられませぬ  
私どもでございまする」

「敷妙。——建武の御一新に、堺浦の商人で、楠の庇護を蒙らぬもの  
は、一人もない筈じゃ。そなたの家のみが、特に恩顧をえたという話を、  
わしは聞かぬぞ。ひつきよう、この虎夜叉正儀が恵まれたのだ。なん  
という偉いか、唐土屋一家——そなた達を、おのが手足にすることが  
出来た。わしは、わが運のよさと、そしてそなた達とに、感謝しなく  
てはならぬ。わけても、そなたの、すぐれた美しさと、すぐれた賢さ  
とには、いま改めて礼を述べるぞよ」

「あらもう、おそれ入りまする」

「今後はますますそなたの才と美貌とに、たのむ事が多くなろう。

——敷妙。はたらいてくれ」

「はい。足らわぬながらも——」

感激に、ぼうつと目のふちを、うすくれないに染める敷妙であった。  
この殿のためならば、命もいらぬ。すべてを、あらゆるものを捧げた  
とて、なんで惜しかろう、そう思わずにはいられぬ敷妙であった。

こゝは、隠避な玄々寮の内部でも、ことに隠微な密房で、外界から  
はまるで窺いしることの出来ない場所だった。こゝは、虎夜叉正儀の  
側ちかく召使われる侍女侍童でさえ、特定の者以外は、近よること  
を許されない場所だった。こゝは、虎夜叉の閨でもあれば、また沈思  
瞑想の茵をしく部屋でもあった。酔うべき室であったと同時に、醒む  
べき室であった。謂ってみれば、虎夜叉正儀は、酔いながらも醒めつゝ  
あることも出来るし、醒めている間にも酔うことも出来る人であった。  
こゝは、虎夜叉によつて、「衆妙房」と名づけられた部屋で、楣間にかゝ  
げられた扁額には、その三つの文字が、自筆でかゝられていた。老子の  
いわゆる玄之又玄「衆妙の門」という句からとった玄々寮であり、衆  
妙房でもあったのだ。

「敷妙。——話は逆もどりだがの」

と、虎夜叉がいった。

「それから、直冬はどうした？」

きかれて、敷妙は、直冬が六本杉の怪異を叔父の直義に告げて以後、どんな気持でいたかについて語った。

「うむ。では、むしろ予想外に憂鬱だな？」

「はい」

敷妙という名も、この部屋、衆妙房に因んだものだった。敷妙は、直冬館の侍女に住みこむ時は、むろん本名のお舟であったが、自分の希望として同じ源氏名で呼ばれることになった。（せめては名だけでも——）と、虎夜叉からつけてもらった敷妙という名を、変えるに忍びなかったのである。

「直冬は、父尊氏に会ったか？」

「いゝえ」

「相変わらず、父を恨んでいると見えるな？」

「ますます酷うございまする」

「だが、將軍へも、師直からすぐ、話は伝わったであろうの？」

「はい」

「師直へは、誰れが伝えた？」

「畠山からでございました」

「ほう、畠山が」

「副將軍も、上杉も、師直へは洩らさぬつもりでおられたらしゆうございませけれど、畠山が、細川顯氏に会いましたとき、浄土寺の忠円僧正にのりうつられたあの師直、師泰と、南都の知教上人に憑かれたこの畠山、上杉とは、いずれが勝つか、どの途、血を流して勝負をきめねばなるまいと、そう申したのでございます。すると細川が、妙なことをいわれるがどうした訳かと、いろいろ訊きたゞしまして、それをそのまゝ師直へ告げたのでございまする」

「なるほど。細川がの」

「細川が、師直に心寄せていようとは、畠山も意外だったと申しまする」

「む。おもしろくなって来たぞ」

「高の師泰と師冬とが、具足に長巻や槍というものものしい郎従たちを引きつれまして、師直の今出川館へ集まりました」

「いつ？」

「つい四日ほど前のこと。何か聞きがちがいからでございましたが、一時は大騒ぎで、いまにも戦さが始まりそうでございました」

「ふうむ。よほど心が、おびえたと見える」

虎夜叉はほゝえんだ。

（思う——つぼ！）

そう感じたのだ。

六本杉の怪異は、所期のごとく、着々と京都をおびやかしていた。虎夜叉の苦心の謀計は、まさしく図にあたりつゝあったのである。

## 後室来訪

### 一

近習の梶丸が、膝まずいた。

虎夜叉が、

「何か？」

と、訊くと、

「これを——」

梶丸のさしだす一通の手紙を、受取って、幾波が取次ぐと、虎夜叉は、さかずきを、蒔絵の高坏の上において、その手紙をひらいた。

読みおえると、まるめて、折鶴の膝へ、  
「焼きすてよ」

と、投げた。そして梶丸へは、

「使いは、萩か？」

「はい。——御返辞は？」

「いらん」

そういつて、手をさかずきへ戻した。

梶丸はこゝろえて、立ち去った。

「何事ものう——？」

と、幾波がうかざうと、

「そう」

虎夜又はうなずいた。

（よかつた）

と、安堵したように、幾波と折鶴とが、顔みあわせて、ほゝえんだ。

それは、無事に足利直冬の館に戻ったことを、敷妙から知らせてきた手紙だったのである。

「つげ」

「はい」

折鶴が、酌をした。

二人の美しい侍女を、右と左に坐らせて、夕餉の膳にむかっている虎夜又だった。

そこは、玄々寮の一室ではなくて、西の対屋の常の居間で、入側と廊の先には、かなり広やかな庭がひろがっていた。

初夏にめずらしく夕焼けた空の下で、たそがれてゆく庭の青葉を、ながめながら幾波が、

「寮とはちがい、こちらは晴々しゅうございますこと」

といったとき、廊へ、あわたゞしく、近習の一人が現われた。

「——水分の館より、御後室さまが見えさせられました」

「なに、母者びとのお成りと？」

「は。いともお急ぎの御気色にて、もはやそれへ、お渡りでござりま  
する」

「さようか」

近習が去ると、幾波と折鶴とは、両側からやゝ腰をうかしつゝ、

「殿——？」

「わたくしどもは——？」

と、うかざうと、

「いや、退るには及ばぬ」

虎夜又は、そういつて、大床と自分の座の中間を指さした。

「それへ、厚茵をもて」

「はい」

幾波は、入側の衝立のかげから、厚い円座をはこんで、席を設けた。

そのとき、近習と侍童に導かれて、後室入子の方が、南江朝隆をつれて入ってきた。いうまでもなく故正成の未亡人で、正行、正時、正儀の三兄弟の実母だった。

「ともし灯を入れさせい」

そう、折鶴にいゝつけて、虎夜又正儀は母堂を座に迎えた。そして会釈の顔をあげて、

「母上には、かような夕餉時刻に、わざわざのお出まし。お召し下ればよかつたに、恐縮でござる」

と、いうと、後室はじろじろ食膳の高坏、酒の瓶子、入側まで下がって坐わっている二人の美しい侍女などを、見まわしてから、

「恐縮ではのうて、きつい迷惑なのであろうかの」

わが末子の顔をながめたが、庭の薄明に背をくられて大床の方をむいているので、その表情は、暗がりから識別がつかなかった。

けれども、室はすぐ明々となった。侍童たちが燭台をはこび込んだのである。内部の造作だけは書院風のこの室の装置や調度類には、

水分の館では見られぬ贅沢さがあつた。

「母上」

と、虎夜又は微笑して、

「まず、御用むきを仰せられい」

と、うながした。久子の方は、入側へふたゝび目をやった。南江朝隆が、そこに控えている幾波、折鶴と並ぶように、坐っていた。朝隆は、久子の方の甥だった。

後室が、まねいた。

「朝隆、進むがよいぞ」

南江は、入側から、闕をこえた。

久子の方の生家、南江の家は、楠譜代の家臣のうちではおよそ中どころの家で、神宮寺や、恩智や、大塚などとは家柄がちがっていたから、朝隆は、父の朝忠が湊川で正成とともに自刃し、叔母は現在、主君の母堂ではあつても、それを誇るような挙動は、かたく慎しんでいたのだった。

後室が、

「——虎夜又。水分では、殿みずからが曲物と土器の膳で、召しておらるゝぞや」

と、いった。正儀は、また微笑して、

「蒔絵の高坏にのせますと、おなじ食べものでも、味を添えまするでな」と、答えた。

「正儀。先殿は、橡粥にさえ、舌鼓うたれました」

「舌鼓は、どうかと存ずる。それがし稚心に、不味そうなお顔で召上がる、と思つたことをおぼえておりまする」

「これ、またそのような！」

後室は、表情の曇りをふかめて、

「そなたはまあ、あれほど母が申したに、酒と色の慾、どうあつても慎しめぬのか？ 妻を定めて娶るまでは、そばに女子は近づけませぬ

と——酒も平素はたしなまぬと、口きれいに言うた者が、この体裁は、なんとしたことじゃ？ よくもわたしを欺きましたぞ！」

そう、なじられても、平気でうすわらいをたゝえている虎夜又の面には、微酔さえ、ほとんど出ていなかった。だが、すでに瓶子は、高坏の膳わきに、幾つも並んでいたのであつた。

「毎度のお小言やら、お叱りやら、うつとうしさに辟易つかまつてな。——ほどよく、そら言で、お氣やすめを申した。たゞし、酒にも色にも決して、乱れは致さぬ。母者びとの御懸念は御無用じや」

「なに、みだれはいたさぬ？ 底なしの狸々飲み。酒には酔いつぶれはせぬかも知れぬが、それその女子どもは？」

「商人なにがしの妹と、町人それがしの娘、たゞの召使いでござりまする」  
虎夜又は、さらさらつと答えた。

「たゞの召使い？」

後室は、唾を呑んでから、

「正儀！」

と、声をいらだてた。

## 二

「たゞの召使いに、なんで生絹の小袖など着せます？ わたしの若かつた頃など、生絹は晴着にしか纏わなかつた。そなたを産んでからも平素着は、絹布とはいえ土地の手織じや。色合いも、ほんの単色。——のう虎夜又。そのように素性いやしき女に、けばけばしい装させて、この大切な東条の城あずかる身が——これ、うわの空で聞きながらさせはせぬぞえ——おのが年齢もおもわず、てかけ、めかけと露わには——いえいと呼ぶか呼ばぬか知らぬけれど、あられもない慰みをたのしむとは、ほんに浅ましい心柄じや。謹厳な兄たちに、ちと憚かつてもらわのうては、亡きわが夫の殿、羽林中将正成のおん位牌に、お申しわけがないで、わたしはこの顔むけられませぬぞ」

「御尤も」

「な、なに、御尤も？」

「母上としては、さも在られましょう」

「え、そなたのことを、いうておるのじや」

と、さもいまいまげに、首をふつて、

「虎夜叉。お身とても、正成の殿とわたしの間にうまれた子ではないか？ 天下に双びのないお美しさと、噂きかぬ者はなかるうあの弁内侍さまを、かしこくも賜わろうという御誂を、いなみまいらせた正行どのへは、わが子ながらも母は、額ずかずにはおられぬ気がする。そうあつてこそ天晴れ、楠の後つぎじや。のう、そうした館と、お種も腹も、おなじい弟とうまれながら、あゝれ、あの態と、うしろ指、そなたは差されたいのか？」

つめよるような気配の母堂へ、

「指さすものは差せ、でござります。しかし虎夜叉は、兄弟、長幼の序は、わきまえておりますぞ。二人の兄、めとらざる前に、それがし、妾はたくわえませぬ。あの女は、どちらも下嬢、たゞ身のまわりの雑用を使うだけ。男手よりは便宜でござる」

「などと云いくるめても——臥所に伽させて、いとしがれば、妾じや、愛妾じや」

「ちがいまする。寢屋のことは仰せあるな。ふたりとも、侍女に過ぎませぬ」

「そりや詭弁とやらじや。ひそめたとて、あらわれずにはいぬ不行跡は、これ——」

「母上——」

虎夜叉正儀は支えて、

「まさか、それがしが臥所あらためるに、世は泰平無聊に苦しむという今日びでもござらぬに、夜かけて水分の館から——な、そのためお越しなされたわけでもござりますまい。さあ、どのような御用談か、そ

れ承わろう」

と、そういった顔は、にわかに真顔になっていた。

(お！)

後室は、おぼえずぎくりとする感じにうたれて、乙子の眸を見直した。

### 三

考えるまでもなく、急に自分を責め嘲む気持ちに変わった後室だった。なぜかなら——なにも虎夜叉の、今にはじめぬ素行を、事新らしく詮議だてに來たわけでないことは、その虎夜叉からの射られたおりにあつて、そんなことよりはもつと、否、どのくらい差迫っているかわからぬ緊急の相談に、とるものもとりあえず興をいそがせて、こゝ東条の城をおとずれた後室だったのである。

それも、相談というよりは、頼みに來たのであつた。子を見ること親に如かずという言葉がある。むろんあたらぬことも多いが、およそは一半の真理だ。久子の方は、正成にとって良妻であつたと同時に、正行兄弟にとっては賢母であつた。という月並にきこえるでもあろうが、事実、夫への内助と、夫なき後の三子への訓育とは、傍の見る目に涙がわかずにはいかなかったのである。末の子の虎夜叉が、父にも兄にも似ぬ鬼子にうまれついたことを、誰れよりも深く慨きかなしんだのは、この母であつた。けれども、また虎夜叉が、鬼子ながらも實際おどろくべき麒麟児だつたことを、みとめ喜ぶことの深さにおいて、おそらくこの母の右にでる者はなかつたであらうと思われる。だから、口に出しては如何にも憎々しうに叱りも責めもするけれど、一面内心ではいつも何かしら頼もしいような気がして、時には自分の感情のなかに含まれた矛盾に、われながら訝かるといふ風な久子の方でもあつた。

「虎夜叉——。そなたに頼みたいことが出来して、それで参つたのじや」と、後室は、がらり調子をかえて、

「けっして、責めに出向いたわけではない」

わびるように云ってから、

「実は、今日、館が吉野から——つい一晌ほど前に帰られての、それで——」

「おゝ兄の殿が、御帰館か」

「で、明日、一門宗徒の人々を、水分に召しあつめ、今度いよいよ開戦の勅許を、賜わった旨、お申渡しがあるとの事じゃ」

「ほう、開戦の勅許を——」

虎夜叉の顔には、とっさに、複雑な表情がうごいた。

後室が、つゞけて、

「まず出陣の支度、お申しつけの上、先殿十三回忌御法要をば、一年くりあげてこの五月二十五日にいとなむべき由、いゝ聞けらるゝというお話を、わたしは聞くと一緒に胸さわぎが、ふしぎなくらい昂まつて、どうしたことやらひとりでは、居ても立ってもいられぬほど気もめてのう、明朝がまたれず、今宵のうちに、そなたに逢つて相談もし、頼みことも聞いて貰おうと、そう思つて——」

と、まだ云いおわらぬうち、虎夜叉が、

「いや、お胸さわぎは不思議ではない」

まるで別人のように、重々しくいつてから、

「来年の正当忌御法要を、お繰りあげなさるなどは、もつてのほかだ」

と、母の双眸を、力づよい目の光で、やゝしばし静かに見入った。

「おゝ、その言葉、そなたのその言葉、聞きとつて参つたのじゃ」

「母上。お心安う——」

「あゝ、そう云うておくれか！」

「正儀が、あくまでお諫めたそう」

「それで、わたしも一安堵じゃ」

「母者びと！」

「正儀、頼んだぞや！」

すこし間をおいて、

「新屋敷にはまだ逢わぬけれど、逢つたとて、こうした場合、邪魔にこそなれ役には立たず、恩智の左近老が達者でいたなら、よい分別もかしましようが、それも冥土の人になつたし、恩智ばかりか、館のおために生き残つた老臣たちは、揃いも揃つて病死したゆえ、いまでは諫めてもらおうにも、その人がない。せめて観心寺の滝覚御坊が、今年まで、も長らえて在したらう」

「愚痴をおっしゃること。黴のはえたのや苔むした石頭が、そろつていた日には、なおさら厄介じゃ、はゝはゝ」

低く笑うと、

「そなたはお笑いだけれど、館の戻られたお顔つきを——ほんに思いせまつて決死の面を——まだ見ぬによつて笑つてもおられようが、それはそれは怖いような、なんともいへぬ凄味じゃぞえ」

後室は、くすんだ色の衣の襟を、手でおさえた。その指先が、ほとんど恐怖に近い感じのよみがえりのために、ふるぶるとふるえた。

(はてな?)

虎夜叉は、心でつぶやいた。めざとくも、母の指さきの戦慄をみとめたからである。だが、

(行つてみればわかる)

と、思われたから、

「とても世に長ろうべくものお歌もござるし、御法事さえ繰りあぐるお心とあれば、お面さまなどは、見ずともじゃ」

「——先殿は、ついぞ一度も、あのようなお顔つきはお見せにならなかつた。——」

後室の心の窓に、たちまち、桜井駅の、夫正成の容貌の大映しがあらわれた。

#### 四

後室久子の方は、追憶の淵へ、ずるずると引込まれた。

(あの時は——)

——延元は元年、五月二十一日の味爽の川霧がまだ、ふかぶかと立ちこめて、朝陽ののぼる時刻へは、かなり間があつた。久子の方は、夜ひと夜、輿をいそがせて、やつと淀川を渡ったとき、さいわいにも湊川への出陣の行軍にであうことが出来たのであつた。尊氏が、九州四国中国をこぞつた海陸十万の大軍で、都へせめのぼると聞いて、久子は、驚いて在京の夫をおとずれるために、水分から出てきたことが、神仏の冥助か、正成の決死の首途にまにあつて、今生一度の訣別の言葉をかましうの際どい機会を、つくつてくれたのだつた。

——松林のなかで、松明が、未だ明けぬ夜の闇をてらした。男山も天王山も宝寺の塔も、真つ暗い寂莫のなかで睡つていた。正成は、鍬形の兜に大鎧を着て、牀几にかけていた。弟正季と従弟の弥四郎正種、それから和田正遠、その三人だけが立つていた。恩智左近、神宮寺正師、正房の父子、和田正遠、貴志左衛門、矢尾の別当顕幸、子の正春、宇佐美正安、久子の方の実兄である南江朝忠、その他の部将たちは、草の上に坐つていた。だが、兵はみんな立つたまゝだつた。楯の上に、多聞丸正行と、久子の方が坐つた。

——正行が「どうしても、兵庫へお供かないませぬか?」といった。「ならぬ。還れ」と正成がいった。そして、「万事は左近に託しておいた。左近を頼め。——昨夜いゝきかせた父が言葉、そちは覚えておるか?」「はい」「云うてみい」「はい。——大義は必らずしも我が今生一生のうちに行われ得なくともよい。大義を行う志そのものが千載不朽なのである。父がこの志を抱いて討死せば、精神は子に、孫に、曾孫に生き残り、さらに広く世の人の心にも生き残つて、つねに大義の道を示すであらう。父の志はそこで未来永劫に滅びないであらう。父は死所を

得て死ぬのだ。死んで、わが一族を、そして永く後人を鼓舞して、人臣の嚮うべき方向を指示しようと思ふのだ。父が死んだ後、楠の一族は逆賊と戦つて闘いぬくだろう。よしや我が一族が全滅の悲運をみようとも、楠の精神は、きつと生生と躍動をつづけて決してほろびることなく、天下が、国家が、非常時に出あうたびごとに、心ある人々の胸に宿つて、敢然たる奮起をうながすだろう。と、おつしやつたと思ひます」……

(わが夫の、その時のお顔つきは、ほとんど平常と変りはなかつた)

と、後室は、口のなかでつぶやいた。

「母上——」

と、虎夜叉が呼んで、

「桜井の駅の御追想でござるか?」

「おゝ! そうじゃ、つい想い出にふけたぞや」

「それがしは、御免蒙つて夕餉をすませます」

正儀は、高坏へむきなおつて、箸をとつた。幾波は、手招きされて、入側から食膳のそばに戻つた。そして飯をよそつた。

その間に、後室はふたゝび目をつぶつて、十二年まへの幻像に追いついた。

——正成は、正行にむかつて云つた。「その通りじゃ。このたびの戦さばかりは、万死あつて一生涯しがたいのだ。わが献策、容れられずんば、河内に退いて後図をなせ。それが却つて大君への忠だ。という言葉にも無論、一理はあるう。しかし正成は、大義に殉ずることに一死を捧げて、末代までも不滅な生命に生きたいのだ。正季、弥四郎、和田以下七百人をも、わしと共に死なせて、またわしと共に生かしたいのだ。わかつたか?」「はい」と正行が答えた。正成はなお諄々と訓えて、最後に、「水分に帰つて、父の志を継げよ」といった。東が白み、世にも悲壮な情景は、やがて旭の光りをあびた。正行も、久子の方も、橋本の渡しまでついて行つて、そこで永久のわかれに切なる涙をなが

したのであったが、正成の眼は潤みもせず、まことに清らけく澄み透っていたし、面色も、桜井駅においてそうであったと同様に、自若として動きを見せなかった。……

（あの顔色の蒼さ！）

と、後室は、現在へ一とびに戻って、

（あの顔色のちがいでだけ、わが子は父に劣っているのだろうか？）

と、考えた。

飯はすでに食べ終ったが、虎夜又は、瓶子に残った酒を、幾波につがせて飲んでいた。

「――母者びと。好きな酒なら、こうして飲みながら――」

「おや、また酒か！」

「酒をのみつゝ母上と語るもよし」

「虎夜又」

「それがし兄の殿なりせば、恩賜の弁内侍、ありがたく頂戴におよぶ」

「あれ。そなたは――酔いが出たのかや」

「来年の正当忌のいとなみが、おぼつかないほど不利、困難な戦さなら、なぜ此方から挑むぞ」

「これさ、ほんに酔うたのか？」

「いゝえ」

と、さかずきを乾して、

「さあ、お供いたそう」

「え？」

「水分へ」

「おゝ、そんなら今晚――」

「吉野の朝廷の御安危にもかゝわる。明日を待たれませぬ」

虎夜又は、座を立った。

「梶丸――。馬をひかせよ」

「はあ」

玄々寮から入側に戻っていた梶丸が、心得てさがつた。

## 水分館

### 一

屋敷のうらの、おゝきな森を、杜鵑が啼いて渡った。

上弦の月のあかりが、初夏の水分の夜を、ひとときわ緑かぐわしいものにしていた。

幅はそう広くない濠のそとを、濠に浴うて屋敷をぐるりとめぐる土手には、かなり遅咲きのつゝじが、緋と、紅と、白と、茜むらさきの色綾を、みごとに敷きのべているのであったが、満月へはまだ夜かずのある月光は、おしいかな光力に乏しくて、ごくほのやかにその美観を照らしただけだった。けれども土手のそとべりに、杉や、松や、樅の常緑樹と枝をまじえている銀杏、橡、榎、樺というような木々の、さわやかな緑は、いかにもはや夏という感触を、目よりもすぐに鼻へ、または肌へ、じかに訴えさせていた。

濠の内がわの、築地にかこまれた邸内では、あとから次ぎ次ぎと建て増されたことが、一目みてもわかるような格好の棟々の窓や、明り障子などが、ともし灯のいろも、あかるあかる、鄙びてはいるけれども、どこことなく充実した富裕さ、満ちあふれる気魄、とでもいえそうな趣きをたゞよわせていた。

屋敷の、おもて門は、萱ぶき屋根をのせて、ひどく古びていたが、柱は太かった。間口も狭くなかった。武骨な筋鉄と、さびた鋳のついた扉は、まだ閉まらずにいた。

門のすぐ内側に、二本の、何百年も樹の齢を重ねたにちがいない楠



の大木が、藜々と枝葉しげらせつゝ、いとも蟠然と立っていた。

この楠の老木こそ、由緒ふかい樹であった。

正成から五代前の祖は、名を成綱とよばれた。成綱は、遠い先祖以来、伝え継いできた金剛山麓七郷の地を領して、こゝ水分の館にすんでいた。うまれつき、非常に楠が好きだった。で、館の大手先の馬場をはじめ、菩提寺の観心寺その他いたるところに、この樹を植えさせた。あまり楠樹を愛すので、誰れいとうなく、楠どの、楠どの。――やがて世人一般がそう呼ぶことになったから、自分の楠の姓を、楠に改めてしまった。成綱は、どんな気持からこの樹を熱愛したかという、自ら人にむかつて、次ぎのように語った。

地上に生ずる木の種類は多いが、世の人が一ばん愛すのは、桜、梅、藤などであろう。これは、春陽の気をうけて花をひらき、紅、白、紫と色をきそい、その芳香を四方に薫じさせる。だから、折にふれ、あるいは景色を賞でて、詩や歌を詠するものは、大体これらの花木を愛するのだ。けれども詩歌、題詠は、公家のもてあそぶところで、地方に土着した武士の家のもでない。むろん詩歌文芸、あながちこれを捨てるわけではないけれど、行つて余力あればすなわち文を学ぶのでなければならぬ。なおまた柳を愛し、松を好む者も、すくなくならずあるが、柳は、嫋々たる風情ばかりで、まったく氣力に欠けた点は、まるで怯懦の人に似ている。それにくらべるなら、松ははるかに自分としても好ましい。十八公色は雪中に深く、春秋を知らずして露霜にも衰えない。しかしながら、その松さえも、楠には較ぶべくもないと思う。なぜかなら、世に楠ほど木情の剛強なものはない。楠ほどの大木になり得る樹は、どう探そうとありうべくもない。一旦、亭々と聳えたならば、その毅さはまったく言葉で形容が出来ないほどで、後にはほとんど磐石となつて、不朽に伝わり、永世に至りおよぶのである。さながら天地と共に長久を保つもの、これ楠でなくて何であろう。自分が最も楠を愛すわけは、これだ。

成綱の植えた楠のうちで、特にすばらしく大きくなったのは、この門内の二本だった。

門番の小舎は、その楠の大木の根もとにあった。小舎の前に、さゝやかな篝火がたかれていて、話こえが聞えた。

多くの馬をいれることの出来る厩舎が、低く、黒く、門内の広場の一方につぶいていた。その辺は、成綱の頃の馬場の跡だった。それほど屋敷は、正成の代になつてひろがつたのである。また広場の一方は、中門を設けた中築地で、それが厩舎と対き合っていた。そして正面には、館の玄関と、遠侍の入口が見え、玄関は暗かったけれども、遠侍の方からは、あかるく灯影がもれていた。

広場は、人寄せの法螺貝なり、鐘なりが一度なれば、たちどころに五百や千の兵を、楽に集め入れるだけの広さがあつた。

「お帰りーいつ」

と、番人がさげんだ。

門から、この広場へ、二人昇きの塗輿が入つてきたのである。

門番は、後室の輿が帰つたものとばかり思ったが、違つた。供の一人が、大きな声で、番小舎へ、

「これは吉野より、御当家楠の殿のおあとを追い参らせて、弁内侍が見えて候う。お取次ぎ頼もう」

と、云つた。

## 二

番小舎から一人、遠侍へ走つて行つた。

玄関に灯が見え、人が見えた。

輿と供は、広場を玄関へすゝんだ。

供がしらの青侍が、式台に近づいて、

「内侍は、いたづきに臥せりし身を起して、はるけき山路を日ねもす輿にゆられつゝ参つた次第、あわれ痛痛しさを何とぞ館の殿へ、聞え

あげ下されい」

そう云うと、式台に膝まずいている二人の士は、顔を見合わせたか、  
「しばらく、お待ちを願う」

一人が奥へ去った。

供頭の青侍は、ずいぶん待ったが、なかなか取次ぎの士が戻らぬので、心もとなさそうに周囲を見まわしたり、躰をゆすつたりしていたが、やがて奥のわきへ行つて簾ごしに、なにか囁いたりした。

式台に居残った士は、手を膝に、肘を張つて、無表情な顔をよそおつた。奥の従者たちは、みんな不安な面持ちで、供頭をとりまいた。そしてひそひそ話しあつた。

かなり待ちくたびれたとき、遠侍の土間から、下部が、供頭のためらしい洗足の水だらいを運んできた。と、取次ぎの士が、玄関へ戻つて、「どうぞ、お上り—」

と、いった。

供頭は、奥わきの従者を、すこし待てというように手で制して、まず自分が洗足をすましてから、主を奥からおろした。

濃い群青の羅物へ、朝顔の花を白銀いろに抜き模様した唐衣。下は、水色うすもの、裳は、白生絹に銀の波をおどらし、被衣をぬぐと、うばたまの黒髪が、たわゝにゆれた。

弁内侍は、たおれそうであつた。供がしらの老本由有が、それをたすけて、みちびかれた。

失つた恋にやせおとろえながらも、なお諦めかねて、一縷の望みをたどりつゝ、やつとこゝまでたどりついた内侍は、客殿のうちの一室に案内された。

「お目もじ、かのうであろうか？」

かぼそい声で、内侍がいうと、由有は、

「お案じあそばすな」

と、なぐさめた。

だが、うれわしげな溜息がもれた。

これがわずらつた美姫の面ざしは、ものにたとえようもないほどに凄艶だった。案内した士は、一種のまぶしさを感じて眼をふせた。そして不思議な肌ざむさをおぼえた。

(こゝもあてやかな上臈を——殿は木か、石かのように——)

士が、心のなかで歎ちながらさざると、内侍は、たよたよと体をまげて、支えるにさえ堪えがたそうに、上半身の重みをようやく手でさへながら、ふるび煤けた格天井を見るともなしに見上げた。燭の灯は、天井の隅々へまでとゞくほど明るくなかつた。内侍の心はますます暗くなりまさつた。

(身うちにあるかぎりの力を、ふるいたゞせて、こゝまでは——こゝまでは来たものゝ——)

たとえて云うなら、わたるに舟のない、離れ小島に捨てられて、その荒ら磯に歎きつゝ、怒れる濤のさかまき狂う大海原でへだてられた陸地をば、たゞひたすらにあこがれる人のように、かぎりもなく悲惨な気持ちにさいなまれるのであつた。

「のう由有」

「は」

「そなたならば、いくたび繰り返そうと、聞いてたもるであろう？」

「はい」

由有は、日野家の雑掌だつた。

「もそつと、近う寄りや」

「承りまする」

「かけまくもありがたき思召しの、もれた折のうれしさが、おゝきかつただけ悲しさが遺瀨ないぞや。あのお歌を、知つた刹那の切なさ、苦しきは、まのあたり我が玉の緒が絶えきれて、たちまち五体が逆さまに、奈落の底へおちるような——」

「おゝ、内侍さま！」

「のう！ 忝けない重ねての御誼さえ、かないしとあれば、いかに辛かろうと諦めるよりないことながら、拒まるれば拒まるゝほど、うたてや胸の炎はもえさかる。思いきろうと、あせる気持は泪となつても、妖しい光りをきらめかす想いの火は、消えるどころか、泪は油——油をそえた炎の熱さ！」

「おゝ、御道理でござりまする！」

「由有——。わらわは、その火に焼かれて焦げて、死ぬより詮はないとおもうぞや。これほどに恋う楠の殿が、あだし女子と契らせらるゝをどうまあ生きて見ておれようぞえ！」

「おことわり！ もうもう挺でも、お身動きなされませぬ。この館から金輪際、はなれぬというお覚悟で——」

由有は、はげました。しかし、動かぬ、離れとうないと云つたとて、追い出されたら何としよう？ そう思うと内侍は、また今さらのように泣けて来た。

涙で、ともし灯が曇つた。

檜扇をすてゝ、内侍は唐衣の群青の袖に、白い顔を埋めた。

由有は、すかすように、

「お嫂ぎみ北の方の仰せには、水分館の御後室は、賢婦賢母のきこえあるお方ゆえ、内侍さまのお父上、俊基朝臣と、楠家との昔の誼みを楯にして、まげても割りなくおすがりあそばさば、かならず悪しくはなされませぬ、との事でござりました」

そういつたとき、廊に足音がした。由有は声を落して、

「正行の殿の、お頑固も、あるいは御母堂のお肝煎りで——」

と、あわたゞしく云いさしたまゝ、そばから離れた。そして固唾をのんだ。

だが、由有の期待は、がらりはずれた。あらわれたのは、さつきの上より軽い身柄の数人が、食物を盛つた器を、高坏と、それから曲物にのせて持つてきたのであった。

「お空腹におわそう。なんの風情とてもござりませぬが——」  
高坏は、内侍の前に、そして曲物は供頭の前にすえられた。

### 三

正行は、狩衣も烏帽子もぬぎ、小袖に、搔卷をはおつて、脇息にもたれていた。

頬づえの手くびにも、指の先のふれている顛顛にも、際だつて瘦せがみえた。蒼白な顔には、さびしげな陰影が、ともし灯のためにくまどられていた。

居室は、附書院を思いきり大きくとり、入側へ一間半ほど、せり出させて、そのために出来た凹所に、机と書架を置くようになっていた。畳が高麗ベリので敷きつめられたことゝ、床の懸軸と楣間の扁額とが別のものであることゝを除ければ、この室のすべてがみな、亡父正成からの伝承であつた。だから、壁には罫がおり、天井はいまでもなく、板戸も、襖も、黒ずんでいたし、側床の棚がいくぶんかは歪み、先代の在當時から、本箱の内に外に、本棚の上に下に、あるいは壁のわきに、つみ重ねられたまゝになつて、虫干しや掃除されても元の位置はほとんど変えられずにいる、おびたゞしい書物が、かなり黴臭い紙のにおいを、室一ぱいに——廊下にまでたゞよわせていた。

そこは、戸外からの見かけは、ちよつと泉殿に似た構築だつた。というの、水分川の水をあげた池に臨んでいたし、背後には築山を負っていたし、渡り廊下で母屋に通じてもいたからである。だが内部は、まったく枯淡な造作で、自然木とあまりちがわぬ木材と、壁ばかりともいへそうな粗朴さだつた。机と書棚以外には、調度らしい調度は一つも置いてなかつた。

居間の奥には、寢室があつた。居間は次ぎの間につづいていて、入側は鉤の手についていた。この建物のうちには、今、正行のほかに誰れもないのであつた。だから深い寂莫をかすかにやぶるのはたゞ、

正行自身の引く息、吐く息だけだった。

正行は、しばらくの間、おのが呼吸を聞いていたらしかつたが、やがて頬づえを除つて、拇指と人差指で左の手頸をはさんだ。

自脈を、うかざつたのである。

脈は、思ったよりなお速かつた。

右手が、額をおさえてみた。それから襟へ、ふところへ、腋窩へ、指先がとどいた。

一文字の、濃い眉が、ひそんだ。

(いつもの微熱が、今夜は高い。——吉野から並足の馬で、山路といつても、やゝ険しいのは水越峠ひとつ。それで疲れるとは！)

脇毛がべつとり、汗にぬれていた。

(寝汗のみか、さめていても——)

厚い搔卷をまとっているのだから、初夏とはいへ、相当な温気に、汗ばむのもさして訝しくもないのだが、病いが病いだけに、ひどく神経がたかぶる。

(少納言入道ほどの医師が、およその死期について予測の、つかない筈はなからう。それを言おうとしないのは——)

そう考え始めたとき、渡り廊下から聞えて来る足音が、思案の糸を他事に、もつれさせた。

石掬丸が、入側へあらわれた。鹿路平での負傷は重かつたが、もはやすつかり治つていた。しかし顛顛から頬へ三寸ほど、なまなましい傷痕が残つて、その時の奮闘を物語るのだった。

正行から先に、

「掬丸——」

と、いった。石掬丸は、鬨ぎわに膝まずいて、

「賓客が、待ちあぐんでおわすに、——成らせられい」

「いや」

「しかし、ともあれ——」

「先刻、いうたではないか、わしは逢わぬと」

「それは承わかりました。なれど——」

「助氏に、まかせた筈じゃ」

「それが、老巧な助氏どのも、持てあましましてな、殿に、所詮一度は、お顔出しを願うほかない、と申しておられます」

「わしが逢うては、なお悪い。断じて逢わん。助氏に、そう申せ」

「しからば、殿には、どうあつても——」

「くだい。そう申せ」

「は」

石掬丸は、廊へ去つた。

正行も心のうちでは、

(助氏とて、困るだろう)

と、思ったが、ほかに智慧もうかばなかつた。——和田助氏は、湊川で陣没した和泉守正遠の季の弟で、その母は、正成の叔母だった。がんらい和田の家は、楠にとつて第一の重臣というよりは、むしろ同族関係であつた。つまり家来筋ではないのである。ちよとど用件があつたため、和泉の岸和田の屋敷から出かけて来て、滞在していたのだつた。で、正行からいうと、亡父の従弟ではあり、建武以来の宿将や老臣たちが死に絶えた今日では、四十歳をいくつも越えていなくても、随一の長老に相違なかつた。ほかに神宮寺の正房が、千早の城にいたが、和田と神宮寺では、太郎兵衛正房がいかに湊川の生記念でも、同列どころか、やはり主従関係の方に近かつた。

(だが、困つても仕方がない)

正行は、どうにかして助氏が、厄介千万な押し掛け客を、どこか一間に寝かしつけるであろう、夜さえ明けたら、有無をいわせず帰らさるう、と、あくまで邪慳に考えようとした。

すると、妙なことには、できるだけ苛酷にならうと思えば思うほど、その努力が、あべこべの結果をうんでゆくのだつた。

石掬丸が、最初に内侍の見たことを告げに来たときは、驚きはしたがまず腹がたつた、二度目に来たときは、追払い方を助氏に託させて、自分では自分のことだけを、すぐに考えることが出来た。ところが、今度はそうは行かなかつた。

(不治の病いとはいうものゝ、養生次第、劳咳の人でも、五十歳、六十歳まで生きられぬことはない、円性医師が——)

と、おのが体のことを、考えようとしたが、頭のなかに、すでに内侍が入っていた。

(吉野から、後追つて来たからには——)

#### 四

手燭をもつた侍童をさきを立てゝ、和田助氏が、石掬丸と一緒に入つて来た。

「館——。手をあげ申した」

「おむずかりか？」

「さよう。——事面倒じや」

「なんと？」

「吉野川の淵へ、身を投げる——」

「といわれるのか？」

「と、おつしやいます」

「困つたの」

「まことにな」

「どう致す？」

「いかゞなされる？」

「なにか和殿に智慧は？」

「ござらん。こればかりはな」

「智慧までなくとも、術はないか、術は？」

「あるほどならば、こゝへは参りませぬ」

「母上に、どうぞ御分別はあるまいかの？」

「困じ果てゝ、正行がそういうと、」

「生憎と、御後室はお外出じや」

と、助氏が答えた。

「なに、在さぬ？」

「おゝかた新屋敷でもござろうかと存じて、人を遣りましたところ、お見えにならぬとのこと」

「ほう。では、観心寺か」

「あるいは、東条かも知れませぬ」

「東条？ ではなからう」

正行は、そうは云つたものゝ、ふとある懸念がわいた。で、観心寺であつてほしいと思つた。正当忌繰上げの話をしたから、それで行かれたとすれば、格別のことはないけれど、もし寺でなくて東条の城だとすると——？ 日ごろ、足を向けられたこともない東条へ、今夜——？

「御後室にも、よい御分別のありようがない」

と、助氏が云つた。

「なにか、思案が——」

と、正行がつぶやいた、なにしろ内侍のことは、当面の急なのである。「館——。みずからお逢いなされて、御裁量とげらるるほかは、ござるまいな」

「いや。わしが逢つては、悩乱をつのらすだけだ。和殿から、しかと断りを言うて貰つて、あとは成行きに委そうぞ」

「なら、御自身、仰せられい」

「いや」

たちまち正行に、困つたという面差しが消えて、決意が眼にひらめいた。

「わしは可厭じや」

## 五

和田助氏は、こゝでもまた手を焼いた、というよりも俄かに、異様な不気味さを感じて、表の館へ戻って行つた。正行の決断の表情に氣を配されたことよりも、その顔のいろの、なんともいぬ蒼白さに、怖れをおぼえたからであつた。

ひとりになると、正行はふたゝび、脇息に寄りかゝつて、じつとり汗ばんだ前額へ、掌をおしあてた。ひやつこい皮膚の下面の肉には、依然、厭な熱ぼつたさがあつた。脈膊の速いことは、じつとしていてもわかつた。

(母上は、なんで東条へ?——)

吉野から帰つて、開戦のこと、法要繰上げを母に告げた今日の今夜だ。来年の正当忌をこの五月にいとむといふことは、それに一言半句を加えずとも、たゞそれだけで、万事を説明している。毅しくはあつても、さすがに女性、母は正行の生命の半年でも一年でも長からんことを希つている。そうでなければ今宵、虎夜叉のもとへ行くはずがない。たしかに母は——

(虎夜叉に、加勢をお頼みにちがいない)

そんな具合に考えているうちに、いつの間にか、尼僧の衣のような感じの後室の小袖が、頭のなかで、心の眼の先で、色彩きらびやかな五衣と唐衣とにおきかえられていた。そして後室の、さゝやかな切り髪——すでにやゝ霜をまじえ、光沢のうせてしまつた頭髪は、内侍のさながら蠱惑を陽炎いたゞせるかと思われような黒髪に變つて、あやしくもかぐわしい肌のぬくもりの籠つた蘭奢の薫りが、嗅覚によみがえつた。

かぐわしい、ときめき! それは千本上の日野の館で——対屋の庭先で、はじめて内侍と言葉をかわした時に、おぼえずも正行がひきつけられた薫りだつた。

巫山の夢をはらむ黛なめらかな白肌。情けの泉を秘むる双眸、朱い唇。人の世の悦楽の、象のような、その姿態。

(ちえつ!)

おそいかゝる、それらの記憶を、正行は払いのけるためにもがいた。だが、末梢の感覚を、そうした記憶の方へ、と同時に、現に今わが邸内にある内侍の方へ、引きずつてゆくものゝ力は、意外にもなんと強かつたことだろうか?

(えゝ愚か!)

いふかりつゝ自分を憤る、声なき叫びをほとばしらせて、茵を起つたのである。

搔卷の裾を、畳にひきながら、正行は、室のなかをあちこちと歩いた。やがて、歩いている間に、その漠然とした視野のうちへ、ふいつと入つてきたのは、

天理人欲交戦機

という七文字であつた。

眸は、鉄片が磁石にひかれるように、床の壁にかゝつた掛軸の上に吸いよせられた。亡父正成の莊重にして雄渾な筆蹟だつた。天理人欲交戦機の七字は、「朱子語類鈔鐸」の中の文字であつた。

「おゝ、人欲、人欲!」

おもわずも叫んで、正行は眼をとじ、

「是はこれ天理、非はこれ人欲。是は即ち守つて失うことなかれ。非は即ち去つて留むることなかれ」

「朱子語類」の一節を、口ずさんだのである。そして静かに茵へ戻つて、脇息にもたれた。

## 四つの首

—

(どうにか、始末をつけたのだらう)

何ともいつて来ないから、たぶん助氏がほどよくあしらったものと、正行は思った。

(早く睡つて、疲労を癒そう)

明日は一族、宗徒の家臣が、こぞつて集まる。きっと虎夜叉が——素直には出まい。彼れのことだ、大風呂敷をひろげて悠々と論じるかも知れぬし、あるいは無手勝流に、面もふらず端的に、まつしぐらに迫ってくるか、とにかく、ちよつと端倪がでせん。が、手こずらすことだけは明らかだ。多ぜいの中には、煙にまかれるものもあるうし、感心させられるものもあるう。だから自分は骨が折れる。早く睡りについて、明日にそなえよう。母上とても、明日は厄介な母者びとかも知れぬ。

——と、そう思いつつ、寢室の臥褥のなかで、睡りをいそいだ。

けれども、目は冴えきつていた。

(内侍は、ほんとうに死ぬかしら?)

吉野で、准后館で、女人のひとりや二人、たとい悲恋に死なすとも、それにこだわるような自分ではないといったようにおぼえている。しかも、内侍の家とは姻戚の四条大納言の前で、そうだったのだ。だが

(死ぬかも知れん)

吉野川の淵へ、身を沈めるかもしれぬ。俊基朝臣の遺した姫が、あわれはかなく——

「誰れか?」

と、正行はつぶやいた。廊下に幾人かの足音がしたのである。

襖の外で、

「館——」

助氏の声であった。

正行は、枕から頭を、やゝもたげて、

「また参ったのか」

「東条より、虎夜叉どのが参じられた」

「おゝ、正儀が」

「只今これへ。御後室にもともども」

その時、虎夜叉の声がきこえた。

「兄のどの。正儀に申し条がござる。臥所を出でさしめ」

## 二

虎夜叉は、暗い入側の遣戸を、二三枚、繰りあげた。濡縁ごしに、庭から月明りがさした。池のおもては、さやかに光り、青葉から微風が、さわさわと渡ってきた。

助氏が、ついてきた侍童に、

「ともし灯。」

と、いった。

手燭の火が、燭台に移された。

助氏は、自分で次の間から円座をはこんで、居間の正行の茵と向き合った場所に、後室のために座をもうけた。だが、後室はまだ姿をみせなかった。それに、おかしいのは、助氏が円座を二つ持ってきたことだった。虎夜叉はそれを敷かず坐った。助氏は、敷けとも云わなかった。そして自分は、虎夜叉の後ろ側に坐ったのである。侍童が、次の間へさがった。

寢室から、正行が現われた。

白綸子の寝間着のうえに、搔卷をまどつていた。

居間の茵にすわると、咳が出てきた。正行はうつむいて、やゝ少時、

苦しそうにそれ続けた。虎夜又が、一礼して、

「お咳が——いけませぬの」

案じ顔をあげて、そういつたけれども、兄は答えなかった。

「それがしが許へ、母者びとが見えられて——」

と、あとを云わずに、じいつと見まもると、正行はやはり無言のまゝながめ返した。

その沈黙がなお継続しているうちに、静やかな、女らしい足音が、近づいて、後室久子の方が居間へ入ってきた時、

(あつ！)

ぎくりとなった正行であった。母の背後から、よろよろと、内侍がよろめきつゝ現われようとは、まるで思いがけなかったからである。

群青に銀朝顔の唐衣のそでが、ゆらいで、まろぶがように、恋人の膝へ、

「正行の——との！」

人目も、羞耻もなんのその、わが身をわすれて、

「もし！」

と、ひたすかりに、

「無慈悲、無慈悲！ お恨めしゅうございまする！」

言葉のすえが泣く音にとけ、れんれんと泪は白紙のように頬をつたつて、思わずも掻い抱くにも似た形になった正行の手へ、ながれ落ちた。

後室が、おもむろに坐つて、

「お怨みは、ことわりじゃ、お道理じゃ。委細は内侍さまより、お物語りがあつた。のう館、木目の堅いは楠木の本性とはいえ、勿体ない御詫までも頂きながら——おん身のように酷いのは人の情けにもとる。みずからも種蒔いておいて、刈りとりぬとは、そりやお卑怯じゃ」

と、とがめるようにいふと、

「たれが種蒔いた。母上」

正行は、青ざめた顔で、

「なにを酷いとおっしゃる？」

「まあ、たれがとは——おん身とおぼえぬお言葉じゃぞえ。——みずから内侍さまに想いをかけ——」

「いや」

と、さえぎつて、

「恋慕など、いたした覚えはござらぬぞ」

きつぱり云つた正行は、その語気とはそぐわぬようにふるえる手で、内侍を膝からおしへだて、

「やよ内侍どの。申すべきことは、すでに吉野において、申し尽した。今、繰返したとて、詮はなし」

まともに深く、眸を見入つて、

「畏怖をも顧みずに御詫をさえも、いなみ奉つた正行でござる。いかに——いかに怨ち、歎かるゝとも、なんでこの心、ひるがえしましうぞ。縁なきは、宿世のさだめごと、お諦め下されい」

「諦めらるゝほどならば、慕うてこゝまで、此方まで、参りはいたしませぬ。のう左衛門督の殿——おこゝろ動かずば——」

「内侍どの！」

「わらわは命すてまする！」

「——」

「死にまする！」

「死なばとて、わが心は不動、鉄石——何条ゆるごう。ひとたび干戈、北に向えば、いくばくも存生せぬ正行でござる」

「戦場にむかうとき、生きて還るをのぞまぬは、武将の恒とやら承わりまする。討死あそばすお覚悟と、わらわが願いをかなえてたまわることゝは、ならび立たぬでございましょうか？ 殿」

正行が、目をそらしたので、内侍はすゝりあげた。

そのとき、虎夜又が、

「ならび立たぬ事柄ではござらぬ」

と、言葉をはさんだ。



「兄上——。決死は兵家、武臣にとつては、格別のことでもござるまい。戦場の死ということにかゝらずらつては、乱世の武士に婚姻はできぬはずじゃ。つま娶らばとて、心がら次第、あえて死に後れようとも存せぬに、御思案がせまずぎる」

そう虎夜叉がいうと、後室も、

「正儀の申すことに、のう館、いまの言葉に、誤りはないと思ひますぞや」

と、口をそえて、

「朝敵征伐のいくさとても、首將の生死を、たゞ一戦に賭けるような存亡一期のたいせつな日は、そうそう急にはまいますまい。かりそめな、名もない戦さとは事ちがい、湊川の甲合戦とあらば、天下の目をみはらせましように、十二分の支度がのうてはかないませぬぞえ。仮の契りを、いかで結ばんと、館は詠まれたけれど、その支度の暇にも重ねうる契りが、なんで仮の契りであろう。わたしは早う初孫の顔みたい」

「兄の殿——。母者びとは初孫を、早く見たいとおつしやる。——忠とともに孝、孝とともに情知る人となられませ」

「虎夜叉、おぬしの申し条とは、それか？」

「いやいや。今宵の推参——余の儀にあらざ」

と、正儀は、膝をすゝめて、

「父上の十三回忌御法要を、来月の御命日にいとなまるゝ趣き、まことに心得がたい」

長兄の視線を、がっちり受けとめ、

「開戦の勅許ありたればとて、速戦して決をあせるは、拙の拙なるもの、敵を知らず、己を知らざること、甚だしいと考えます。よつて、正当忌お繰上げは、たしかに無用の儀と存ずるゆえ、断じてお諫めつ

かまつる」

正行の、やゝ険しくなつた眼に、陰鬱な暈がかゝつた。

しずんだ声音で、

「己を知ればこそ、速戦の決をいそぐのだ」

青白い腕が、白綸子の胸でくまれた。

虎夜叉が、

「いそぐべき理由、あらば承わろう」

と、いった。そして答えを待った。

しかし、兄がだまつているので、

「承わろう」

と、くり返した。

だが、沈黙は破れなかつた。正行は、どこまでも自分の病いを、秘めたいと思つた。

「仰せられい」

「——」

「兄者——」

「——」

「では、虎夜叉が言葉お聞きあれ。——敵を知らずと申したは、待たば京都で、人の和が、破綻せんこと必定なるがゆえでござる。尊氏は、先帝後醍醐の院が、鳳輦に召して龜山の離宮に入らせたまうと夢みたと、夢窓禪師から告げられて、おのれもまた、先帝が金竜に駕したまいつゝ、嵐山の川畔を、逍遙しおわしますのを夢にみた。それ以来心はすくみ、気は萎えばんで、もはや昔の覇気は、いずこへやら、消えて失せたにもかゝらず、師直と師泰兄弟を、たよりもし庇いもする心だけは、あいも変わらずじゃ。されば、師直らが傍若無人は、ますますつのるばかり。それを憎しとおもう上杉、畠山の輩は、尊氏への面当もあれば、また各々の打算からでもござらうが、直義と直冬をかつぎあげております。対立は、まさに五分と五分。いずれへか、

なにか一つ拍車がかゝらば、たちまち乱れる。攻める。防ぐ」

「虎夜叉——。それしきの事、おぬしから聞かずともじや」

「いやいや。それがしでなくば、確的には申せぬことぞござるぞ」

「癖が出た」

「いや。この虎夜叉なればこそ、言いうることじや」

「高言をはくな！」

「きわめて内輪に、申しておる。足利幕府の内情に関するかぎり、それがしのいうことは、信じられてよい理由、確乎たる根拠をもつております。兄者、己を知らずとも申したが、これはそれがしでなくとも、いや誰れでも容易く言いうることぞござる。即ち、征西宮を奉ずる五条勘解由次官と、筑後の菊池どの、画策、みのらんとして、いまだみのらず——」

「やめい」

「申す。東も、靈山の準備最中——」

「え、親房卿から聞き飽かされた」

「すくなくも、大和川、淀川の川尻から、兵庫までを、まもるに足る船の数が、そろろう日を——」

「待てぬ。待てぬ」

「待つべきでござる」

「正儀っ！」

「鞍をひそめ、馬を休めて、お美しき内侍へ、お心くつろげて——」

「え、何を！ おのが好みを引きのべて、不埒なこと申すな」

「不埒とは、心得ず」

虎夜叉が、微笑したので、

「うすら笑ったな！」

と、正行は、眼に陰しさを加えた。

だが虎夜叉は、ほくえみを納めずに、

「これこそ、よくない癖でござる」

「愚弄するかつ」

正行は、茵を立った。そして、後室へ、

「母上——。気色がすぐれませぬ。御免あれ、内侍どのにも、許されい」

と、会釈して、寝室へ戻るつもりで、足をはこびかけた時、はっとして、

おもわず立ちどまった。

胸の深部に、なにかしら異状を——無気味な圧迫に似たものを、感じたのであった。

#### 四

(はて?)

正行が、手を胸にあてたとき、

「わっ！」

と、内侍はこらえかねて、泣きくずれた。

和田助氏が、

「館——」

掌ろをあげて、呼びとめた。そして、

「乙殿のお口には、棘もあろう。しかし七情、錯落として、ふれざる

ところなしでござるぞ」

と、いった。

「兄上——」

虎夜叉も、呼んだ。

「茵へ、もどらせられい」

だが、正行は、後ろを見せたまゝで、

「正儀！ 床にかゝった文字を、改めて読め」

「朱子の鉄縛りから、遁れしめよ」

「朱子は、人倫道義の鉄則。一步たりとも、わしは、ふみ超えようとは思わぬ」

「しかれども小路に、箇の物事ありて引著せられ、知らず、おぼえず、

走って小路に従い去り——」

と、虎夜又は『語類』から引用したが、たちまちそれに絡めて、  
「大路を行くべきを、兄上は、お忘れになったことがある」

「なに？」

正行は、ぐるりふり向き直った。

「わしが何時、どこで？」

「鹿路方原で——」

「おゝ！」

「大君のおんために、足利を討つべき、その重責にある身を思わず、  
竜在峠こえて将監を追われた」

「む！」

「吉野朝武臣の旗がしらが、矢板某の刃に、もし斃れなば、それこそ  
不忠不臣、あわれ不孝、不肖」

「あゝ、それ云うな！ 正行の不覚じや」

「よしんば剣に、入神の技あればとて、名将かならずしも、否むしろ  
剣戟の雄であつてはならない。鼠賊を追わずには人があるろう。自ら危  
きを冒すは、大きな誤り——。その誤りに兄上を走らせたは、何か？」

「む！」

「すなわち、弁内侍への、つよき恋ごころ」

「——」

「さ、恋慕のおぼえ、なしなどと、兄者はなぜにお匿しあるか？ な  
ぜ没義道に、内侍どのゝお情けを拒まるゝか？」

そう畳みかけられては、正行も窮した。返辞に困つたのである。

「いざ、その訳は？」

「——」

癒しがたい病いとは、母にも弟にも告げたくなかつた。——それと  
知つたなら、虎夜又は、出陣などは烏漣の沙汰だ、寝衾かぶつて臥褥  
から、一步も出るな、というかも知れぬ。そう言いはられては、いよ

いよ面倒だ。しかし告げなくては、理詰め頭に、納得はさせ得まい。が、  
告げたらたちまち、知れわたる。郎党、卒伍、百姓のすべてが知らば、  
士気、民心にもかゝわるだろう。

（明かすべきではない）

正行は、そう考えたので、

「弟。——わしは体熱がたかぶつて来た。風邪を、こじらしたらしい。  
頭も痛むし、いやな寒気がする」

と、いった。

虎夜又が、じいっと見て、

「お顔色が、わるいと思つた」

と、眉をひそめた。

正行は

「話は、明日だ」

そう、いゝすてゝ、寝室へ入つて行つた。

その後ろ姿を、ながめる虎夜又の、頭のなかを、ふと凶々しいもの  
ががすめた。

まだ歔り泣きをつづけていた内侍へ、後室が、

「明朝のことに——」

と、さゝやいた。

## 五

後室は、内侍をいたわりながら、廊をわたつて行つた。

虎夜又は、廊の途中で、助氏に、

「一言、いゝ忘れたことがある」

そういつて、足をとめた。そして侍童に、

「手燭を」

と、手を出した。

「館に？」

助氏が訊くと、うなずいて、灯を受取った。

「では、お先に」

助氏と侍童は、虎夜叉をのこして母屋へ去った。

だが、しばらく虎夜叉は動かなかつた。

（なぜ、宿直を遠ざけておられるのだろうか？ 悪寒をおぼえて、頭が

痛むくらい熱が、おありなのにな？）

——もともと次郎兄や自分とは、体の出来が、違っていた。それを  
烈しすぎる鍛錬。——蒲柳の質が、気魄と鍛錬のおかげで、あれまで  
になられた、とも思えたが、やはり——正成の嫡男という気持ちにと  
らわれたがための、過激な錬磨が、ついに——そうだ、体をこわしか  
けたのだ。しかし、どの程度に？

そう考えたとき、またも、さっきの凶々しさが、心に戻った。胸騒  
ぎがしてきた。

（咳。いやな咳！）

——あるいは？

虎夜叉の鼓動は、たかまった。

（不吉な予感でなければよいが！）

そろそろと廊下を、離れ屋に近づいて、入側から、居間の明り障子  
のそばまで、静かに歩いて行ったとき、

（——？）

刹那に、（あつ！）と、感じた。

叫びとも、呻きとも、唸り声とも太息とも判断のつかぬひと声が、

寝室からもれたのである。虎夜叉は、はげしい切迫をおぼえて、

「兄上っ！」

と、呼びながら、襖へ走った。だが、答えはなくて、疑いもない呻  
きごえが聞えたので、引く手もあわたしく、入口の襖をあけて、寝  
所へ片足いれかけたが、その瞬間に、ぐざりと、刃物で刺されたかの  
ように、内部の光景にうたれたのであった。

「あゝっ！」

血、血、鮮血！

おぼろな紙行燈の灯かげでも、みまごうべくもない鮮紅の血が、  
白綸子の寝間衣の、襟から袖をべつとり染めて——正行は、仰向けに  
臥褥と畳に、半がかりに倒れていた。喰いしばった口からは、どす黒  
いねばった後血が、はみ出て、頬へも、顎へも、臥褥の上へもたれていた。  
「兄者っ！」

かけよって、のぞき込むと、まるで死人のような顔の、眼だけがま  
ず動いて、それから血みどろな口が動いた。

「騒ぐな」

「おゝっ！」

「おぬしだけか？」

「はい。誰れも——」

「労咳の咯血じゃ」

「労咳！」

虎夜叉は、嗟歎したが、すぐ、

「お苦しくは？」

「ない。——紙」

「あ、お静かに」

懐紙で、虎夜叉は、兄の口の端をぬぐった。紙の上へ、正行が、黒  
赤い血痰を、べつと両三度はいた。

「もうよい。楽になった」

「いや、仰向けのまゝ、じつとお身体を、兄者、動いてはお悪かろう」  
かつておぼえない感情が、心一ぱいにぐるぐる回して、もの事  
に狼狽することのない虎夜叉も、異常な亢奮へ没入せずにはいられな  
かった。常には油をたたえたような深潭も、暴風雨にあえば波立ちも  
する。ふたゝび紙で、唇のあたりをふいてやる正儀の指の先が、かす  
かにふるえた。やゝかすれた声で、

「労咳の咯血は、肺の臓腑の、血管の破れからと聞きます。二度目の咯血が来なければよいが！」

と、いうと、正行は仰臥のまゝで、

「当分は来ないだろう。円性先生がそう云われた」

「おゝ、吉野の典薬頭が——？」

「ひそかに診てもらった。一回や二回の咯血では、死なぬという。わしは、病いでは斃れん。戦って死ぬのだ」

「兄者！」

「虎夜叉！」

「戦われよ！」

「む！」

「己れを知って戦いをいそぐお心——」

目がしらが熱くなるのを感じつつ、

「お察し申すぞ！」

と、虎夜叉が云った。そして自分の手を、兄の手へ重ねて、おもわずしっかりと握りしめるのだった。

「わかったか？」

「すべて！」

内侍をこぼんだのも、病いを亢進させたくないからであつたか、と  
思うと、虎夜叉は悲壯を感じた。正成の長男として、桜井駅の受訓者  
として、たといどうあるうと、病いの臥褥では死ねない兄なのである。  
そう考えた時、一度も経験したことのない熱涙が、あふれ落ちた。そ  
して戦いをいそぐことを非とする理窟が、兄への深刻な同情のまえに、  
低く頭をたれた。

「うがいの水をくれ」

ひどい貧血にもかゝわらず、精神はれつれつと、さかんなる意  
気で、ふるい起つつを感じている正行であつた。咯血の量は、おび  
たゞしかつた。だが来るべきところへ来たという、一種の落ちつきが、

不惜身命のひたむきな心を、朝敵と戦うことに専らならしめたのであ  
つた。

虎夜叉が、次ぎの間へ、うがいの器をとりについた時、正行は眼を  
つぶつた。

と、閉じられた目のさき、現われたのは四つの首であつた。

並んだその四つの首は、尊氏の首と、直義の首と、それから師直の  
それと、もう一つは、正行自身の首であつた。

## とがめちよう 咎の徴軽からず

—

「暑い、暑い」

直冬は、びっしょりぬれた狩衣をぬいで、敷妙から、手拭いを受取  
つて、流れる汗をふいた。

「直垂になされますか？」

扇で、風をおくりながら、敷妙が云った。

「うむ。だが少し涼まぬことにはな」

「ほんに、どういたした暑さなのでございませう」

「戸外は、やけるようじゃ。路に、犬が斃れていた。人死にもありそ  
うな日照りだ」

「日蔭にいてさへ、息がつまりそうでございませう」

「生れて初めてじゃ」

肌着の胸をはだけて、直冬は、どっかり坐つて、  
「湊川の戦さの日も、無上に暑かつたというが、わしはあの頃、武蔵  
の東勝寺におつたので、それに小児ごころ、一向おぼえてはいないが、

こんな日だったかも知れぬて」

「わたくしにも憶えはございませぬけれど、関東と上方では、暑さが異つておつたのかも知れませぬ」

敷妙がそういつた時、直冬が、

「一向肖ておらんぞ」

と、唐突に云つたので、

「——？」

敷妙は、眼で訊き返すと、

「叔父上にも、北の方にも——」

「まあ、さようでございまするか！」

さも、ぎよつとしたらしく、仰山に云つた愛妾へ、

「うまれたお子が、男と聞いた時——深くは氣にかくべきことではな  
いと、思いながらも、やはりひやりと心が寒氣立つたが、親に肖ぬ子  
の顔を、いま見てまいつた。——どうにも厭な氣鬱がとれぬ」

「お道理でございます。せめて、姫さまが、おうまれあそばせば、あ  
のことも——お笑い話にもなつたでございませぬように！」

「そうじゃよ。——まったく、訝しな事になつてしまった。ないも  
のと思つていたお子が儲かり、お夫妻とも四十歳を超されての初子が、  
男子とあれば、こんなめでたい儀はない筈じゃ、それを喜べぬとい  
うのは、のう。叔父上は、来て見ようともなさらぬ」

「あら！ ではあの、左武衛さまは、若君をまだ、御覽あそばさぬの  
でございまするか？」

「そりや、御無理ないぞ、大塔宮の御外戚、峰の僧正の生れ変わりとい  
うお子ではな」

直冬は、重苦しい憂鬱へ、沈んで行つた。その横顔を、敷妙が、じ  
いっと眺めた。

きのう——六月八日の午刻に、足利副將軍直義の北の方が、男の児  
を無事に産みおとした。産室は、二条京極の吉良邸——北の方の実家

にあつた。伏見院からはその日、院使を賜わつて、御剣をくだされた。

副將軍の初児というのだから、源氏の一門、譜代外様の諸大名は、い  
ずれも黙つてはられない。高師直をいたゞく、反直義党の人々まで  
が、あるいは太刀、鎧、あるいは金銀、綾羅の類を、祝儀に運んだ。で、  
吉良邸は、ごつたかえした。直冬もいま、お祝いに行つてきたのだった。  
「でも、それでは北の方がさまが——」

敷妙は、うつくしい顔を、暑さのために上気させて、なめらかな肌  
に汗をたらたら流しながらも、扇の手をやすめずに、直冬をあおぎつゞ  
けていた。

「お可哀そうではございませぬか？」

「だが叔父上は、六本杉の怪異には、お気をくさらせきつてござる。  
昨夜お訪ねした折なぞ、ほとんど恐怖におびえておられたと云つてよ  
いくらいだ。世の中には恐ろしいこともあるものだ、そうおつしや  
つた時の、お顔つきといつたら、こちらが怖いようであつたぞ」

「まあ！」

敷妙は、あおぐ手をとめて、無氣味そうにつぶやいた。

「お眼のいろが、なんとなく、狂おしいように光つたのだ」

「あれもう！ わたくしは恐ろしゅうございまする」

と、敷妙は、身をふるわせるのであつた。

ちようどその時、使番が、入側にひざまずいた。

「は、只今、副將軍館より、火急、お出ましあられたしと、おん申越  
しでござりまするが、いかゞ御返辞？」

直冬は、やゝ不安げに、

「火急と申したな？」

「はい」

「さつそく参上と答えよ」

副將軍直義の、三条坊門館では、六間の客殿の三方を開けはらつて、上座には、直義。脇座には、上杉、畠山。下座には、栗飯原下総、斎藤五郎左衛門入道などというごく腹心の小名連が坐っていた。なにしろ氣遣いじみた暑さなので、密閉した室で相談することは、どうにも我慢が出来そうもなかった。だが、非常な機密に関する評議であつたから、むしろ客殿の広間ならば、最も凌ぎよいと同時に、秘密もれる怖れも却つてあるまいと思われた。そこで密議が、館じゆうで一番広潤な場所、行われたのだつた。むろん、要所要所には、見張りが立つていて、人を近づけなかつたから、密議といつても、普通とあまり違わない音声で話すことが出来た。酷烈な暑気のために、神経がひどく鈍つたせいも、いくぶん手伝つたのかも知れぬが、ほとんど異議なしで話が、とんとん運んだ。いわば評議の体裁をなさなかつたのである。まるで、すでに定つた事柄について、ほんの一通り語りあつたようなものだった。密議の題目について話し合つた言葉の数よりも、きよの暑さに関して驚いたり、呪つたり、歎じたりした言葉の方が多かつた。それほど暑くもあつたが、とにかく一座の気持は、まことによく一致していた。

直冬の見えた時は、だから、はやくも評議がまとまつて、皆が、衣服を汗で濡れしおたらせながらも、そして苦しげにあえぎながらも、一大事をいよいよ決行するという意気で、互いに鼓舞しあつていた。

副將軍が、

「ほかでもないが——」

と、いった。直冬は、一座の顔ぶれから、すぐ悟つて、

「高どのが、どうかされましたか？」

と、訊くと、

「明日、こゝへ、師直が来る」

「ほう、めずらしいことで」

「ついぞないことだ」

「楠への対策に関してどうござらうかな？」

「そうじゃ」

「お招きなされたのか？」

「いや。先方から」

と、副將軍が云つた。

直冬は、さすが師直は豪物だ、と思つた。いかに平素は横暴でも、いざという場合には、為すべきことはする。先月二十五日に、河内の観心寺で、楠正成の十三回忌が、来年の正当をくりあげて営まれた。これは誰れが見ても楠一族が、異常な覚悟で、戦いを準備している証拠だった。楠が単独で事をあげる筈はないから、河泉の兵が起つときは、諸国の吉野方が並び動くものと、考えなくてはならない。とすれば、幕府にとつてもまさしく非常時だ。高が、副將軍の意見を訊きに、自分で出掛けて来るというのは、理窟からは当然でも、内輪もめが昂じて、いつ、どんなことのないとも限らぬ昨今の情態では、師直ほどの剛胆さがなければ、出来ない。そう直冬は、感じたのであつた。

「絶好の機会じゃということに、今——」

「叔父上、なにがでござりますか？」

「まあ、聞け。今、相談が決つたところだ。五郎左入道も栗飯原も、腕力では人に負けない。兩人を合わせたら何十人力じゃ。この兩人を組み手にして、左右から師直の双手の自由を、うばうのを合図に、完戸安芸が、抜く手もみせず真つ向を浴びせる。若党、中間どもは、遠侍か大庭かにおる。中門の唐垣うちへついて来るのは四五人ゆえ、押し隔つて斬りふせる」

「ひよんなこと。思いも寄らぬ」

と、直冬が手をふつた。

「なに？ おぬしは不賛か？」

「申すまでもなし」

「それは訝しい」

副將軍は、汗をぬぐいつゝ、眉根を寄せた。

「訝しいのは叔父上、あなたの御心裡じや」

「異なことを云うぞ、幕府の癌腫は、あの師直だと、申したのは誰れだ？」

「この直冬でござる。療治の致しようがないから、癌腫だと申した」

わきから、上杉重能が、

「竹若どの」

と、直冬を呼んで、

「その癌腫を、下御所が御療治なさろうとおっしゃるのだ」

そういうと、直冬は、

「以つての外。荒療治は、腫物を悪くつものらすのみでござろう」

と、答えて、

「叔父上の、御分別とも存ぜず」

むき直られて、

「荒療治ほか術なかるう。わしとしては、母の生家、上杉が、師直のために滅びるのを、とても傍観は出来ぬからな」

副將軍が、そういつた時、畠山直宗が口をいれた。

「直冬の殿は、寵妾をねらわれておると、申しますぞ」

それには返辞をせず、

「高一族の全勢力を、一挙にくつがえすことが可能なら、なにも癌腫などとは申しませぬ。たとい、師直殿を屠つたとて、一万の兵をもつ師泰、師冬、師秋がのこつては、どうなると思召す？ 師直、亡くば、形勢が変わると仰せあるかも知れませぬが、勢いをつくるものは人であつても、また同時に、人をつくるものは勢いでござります。かならずや師直殿に代つて高一族の力を、指揮する人が出て、下御所と上杉殿を打倒すべく闘いましょう。さあ、その場合の御成算があるか？」

暑そうに、ほつと一息いれてから、

「若年のそれがし、口幅ひろすぎるようにはござれど、高一族は、濟々多士じや。上杉畠山兩殿の武力を、けつしてあなどろうといたす

竹若ではござらぬが、將の數、兵の量において、及びがたいは論ない

こと。のみならず、南方が微々として屏息するときならば、ともかくも、十二年の間、ねりに錬つた精銳をひっさげて、強敵、楠はこの秋、決

然と戦いをいどんでくることは明らかだ。そうした際に、われわれが牆に閱ぎ合うことは、何を意味するか？」

直冬は、ぐるりと一座を見まわした眼を、叔父の顔でとめて、

「それがしごときに、教えらるゝような叔父上では在さぬはずながら、昨日の、御出産以来、ちとお心が、みだれたかに、お見あげ申す」

「黙れっ」

と、副將軍は、思わず叫んだ。

日ごろは、この甥に対しては、丁寧すぎるぐらゐの叔父だったが、まさしく甥がいゝあてたとおり、昨日から心の平衡が、俄然、失われたのである。

六本杉の怪異は、峰の僧正春雅が男子となって北の方の腹から産れ出たことを、予言した。副將軍直義も昨日までは、男か女か、わかるものかと、ある程度までは多寡をくゝっていたのであつたが、午刻に男の子が分娩されて、しかも自分にすこしも肖ていない、と聞いた刹那のおどろきは、あぶなく昏倒しそうだった。一夜で懐胎させた、去年の九月一日のことを、怪異が知っていたことも、断じて偶然の一致や、いゝ加減な暗合ではなかつたと、そう思うと、体じゆうが栗立った。そして、もう一つ悪いことには、先月の十七日の宵に、馬が一疋、この邸へ表門から走り入つて、吐血して斃れたのを、卜筮わせたところが、大変な凶とあつたことが、今や新しい恐怖となつて、大塔宮の御怨霊にむすびつけられた。

決して人一倍の迷信家というわけでもなかつたが、護良の親王をあ



やめまいらせたという心の苛責は、直義に、いとも困難な女犯戒を誓わせましたし、八万四千基の利生の石塔をもつくらせた。

だから、昨日から今日にかけての稀有な暑さまでが、一つの凶兆であるかのように思われて、気が顛倒していたのだ。

「直冬つ、おぬしは恩知らずだ」

「御恩をおもえばこそ、お諫めいたす」

「なにおつ！」

眼が、凄くきらめいた。

直冬は、

（これは困ったことに——）

そう、感じながら、

「お軽はずみは、あくまでお抑え申すぞ」

と、いった。その時、

「竹若どのっ！」と、上杉が叫んだ。

### 三

征夷大將軍、源氏の長者、正二位大納言という、武臣としては極位のぼつている尊氏は、氣にいりの侍童、饗庭命鶴丸に、書物を読ませていた。

そこは、土御門東洞院御所とよばれる、將軍の居館の間だった。

読ませているのは、つい近ごろ、世の中に流布されたばかりの、「太平記卷二十一」であった。

著者はたゞ、小島法師とばかりで、何処の、誰れか解らなかつたが、数年前から、こつねんと出現して、読書人の驚異と讚嘆の坩堝をたぎらせた。そして巻を重ねるにつれて、だんだん広く世にもはやされた。吉野朝の側に立って書かれてはいたが、持明院統へも、足利へも、ことさらな反感は含まれていなかった。事実にはあまたの誤りはあつても、その流麗な文章が、読むものを魅惑したのだった。

日盛りの殺人的な暑熱が、雷も鳴らず、夕立も来ないのに、不思議にも急にどこへか行つてしまつて、夏も終りらしい入道雲が、よきよき西の空にわきたつた。そしてむしろ涼しいほどの夜の帳がおりた。尊氏は、居間先の濡縁へ、燭をはこぼせ、柱にもたれ寛ろぎながら、新らしい写本「卷二十一」を読む命鶴丸の声に、耳をかたむけているのであつた。

だが、寵童が、

「——『先帝崩御の事』——」

と、読んだ時、

「待て、お鶴」

そう支えとめて、尊氏は居ずまいを正した。そして、

「読め」

と、いった。命鶴丸は、

「——『南朝の年号延元四年八月九日より』——」そう読み始めて、

「委細に論言を遺されて、左の御手——」というところまで行つたとき、ふたゝび、

「待て！」

「——」

尊氏は、改めて襟を正して、両手をついて、うやうやしく、頭を垂れた。

「読め」

額ずいたまゝ云つた。

『左の御手に、法華經の五の巻を持たせ給ひ、右の御手には御劍を按じて、八月十六日の丑の刻に、遂に崩御なりにけり。悲しいかな北辰位高くして、百官星の如くに列なると雖も、九泉の旅の路には、供奉仕る臣一人もなし。奈何せん、南山の地僻にして、万卒雲の如くに集ると雖も、無常の敵の来るをば、禦ぎ止むる兵更になし。只中流に船を覆して一壺の浪に漂い、暗夜に灯消えて五更の雨に向ふが如し。葬礼の御事かねて遺勅ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺郭を厚く

し御座を正しうして、吉野山の麓、蔵王堂の良なる林の奥に、田丘を高く築いて、北向に葬り奉る。寂寞たる空山の裏、鳥啼き日すでに暮れぬ。土墳数尺の草、一径涙尽きて愁ひ未だ尽きず。旧臣后妃、泣く泣く鼎湖の雲を瞻望して、恨みを天辺の月にそへ、霸陵の風に夙夜して、別れを夢裡の花に慕ふ。哀れなりし御事なり。天下久しく乱に向ふ』

「待て！ 待て！」

尊氏は、声をふるわせた。明らかに泣いていたのである。

やつともたげた顔には、泪の雫が、灯がけを映した。命鶴が、

「続けましょうか？」

と、きいた。

「少時、待て」

尊氏は、瞑目した。

源氏の嫡流らしい端麗な輪廓だけは、容貌から消える訳はなかったけれど、かつては寛潤のうちに霸氣と果断とがつままれ、俊敏な理性を悠々たる情緒でやわらげているといったような、いわば円満そのものにも近かった顔の肉づけは、いまや陰惨な痛々しい面相に、場所を譲らねばならなくなっていた。つまり暗澹とした表情が、昔の明朗さに取って代わったのである。

後醍醐の帝がお崩れになったのは、尊氏の三十四歳のときだった。それから、ちょうど二年に二つずつも歳老ったかのように、十年目の今年、四十三歳の尊氏は、初老に入ったばかりなのに五十歳を、とつくに越したらしくさえ見えた。

眼をつぶったなりに、

「一径涙尽きて、愁ひ未だ尽きず」

と、尊氏が、いま聞きとった文章の一句を、低く口ずさんだ。

青ざめた頬を、泪の流れが匍った。

しばらくして、

「はやくも十年！」

今さらのように呟かずにはおれなかった。呟くと、眼をみひらいて、「お鶴——。この間、河内で、正成どのの年忌法要があったそうじゃ。——楠は、湊川で討死したとき、四十三歳であった。ちょうど今年の、わしの年齢じゃ」

かぎりなく寂しげな声色であった。

## 攀慕の愁腸

命鶴丸が、読みつづけた。

「——先帝程の聖主神武の君は、未だ坐きざりしかば、何となくとも聖徳一たび開けて、拜趨忠功の望みを達せぬ事はあらじと、人皆憑みをなしけるが、君の崩御なりぬるを見進らせて、今は御裳灌河の流れの末も絶えはて、築波山の陰に寄る人もなくて、天下皆魔魅の掌握に落つる世にならんずらんと、あぢきなく覚えければ——」

「少時」

尊氏は、入側へ目をやった。

そこには、御台、登子の方が膝まずいていた。

「何か？」

「あの——たゞいま、竹若どのより使いの者が参じました。お目もじかないましようか？」

「竹若から、使い？」

「はい。なにやら、容易ならぬことを、聞えあげねばならぬと申します」

「み台。お身は、会えとわしにいうのか？」

「下御所で、一大事が、起りかけておると申しまするものを」

「誰人か、使いは？」

「竹若どの秘蔵の妾とやら、敷妙と申す女でございまする」

「わしは、会いたくない」

「そう云いすて、命鶴丸へ、」

「続けい」

「は」

だが、躊躇うあいだに、登子の方が、

「もし。高の執事どのに、かゝわったことらしゅうございますけれど」

「——」

といったが、尊氏は、再び顧みようもしないで、

「いやじゃ。彼等の諍いに、かゝずらう気になれぬのだ」

「上——」

「——」

尊氏は、直衣の袖を、うるさいという言葉がわりに、後ろへ払った。

御台は、うれわしげな面ざしで、起った。

この登子の方は、北条十代最後の執権、守時の妹で、尊氏に嫁いで千寿丸義詮と、光丸基氏の二子をもうけていた。北条の女に生れて足利の室となったのだから、武家の女性としては、この上もない名流にちがひなかった。元弘の末、帝のお味方に、尊氏が馳せさんじたとき、わずか四歳の千寿丸を擁して鎌倉を、攻めなければならなかったのは、登子としては世にも悲痛な事柄だった。わが夫のために、わが父と兄とを攻め殺した事は、若かりし心に癒しがたい痛傷をおわせた。しかも登子にそれほど大きな犠牲を払わせた夫尊氏の勤王は、薬師堂谷の夜嵐が狂おしくも大塔の灯を吹きつけたことを偶機に、まるで空から落ちるように、帝への叛逆となった。帝が南山に神去りましてから、夫の心が暗くなればなるほど、この妻の心の陰影も

また濃さをました。登子にとって、この世は決して楽しいものではなかった。けれども登子は、彼女の遠い祖先が生んだ政子（北条時政の女源頼朝の室）に、かなり肖かよったところのある女であった。明眸の才媛で、良き妻であった点、政治的にも才幹がめくまれていた点など。いやそればかりでなく、嫉妬深かった点までが、よく似ていた。政子がそうであったように、登子もまた夫が他の女を愛すことを、かたく拒んだ。彼女は自分が、夫の愛を、独占するに充分な資格をもっていると信じた。だから尊氏は、竹若という子まで産ませた愛妾、朝日局を追わねばならなかった。そして庶長子である竹若をも、東勝寺の喝食にするというような、すこぶる邪慳な仕打ちをしてみせる必要にせまられた。だが登子は、そうした情痴のわずらいにおいてだけは、彼女の偉大な先人政子よりも幸福だったといえる。なぜなら、頼朝は生涯、いろんな女のこと政子を悩ました。ところが尊氏は、先帝への恐懼からすつかり気が萎えむすぼれた。

（諍いなどに、こたわるのは厭じゃとおっしゃる。自分で裁量するほがあるまい）

そう、思いながら御台は、敷妙の待つている室へ、もどって行った。（心にそまぬ竹若どのではあるけれど、どうした風向きの変わりやら、いつになく高の執事のためをおもつての使いらしいが——）

## 二

「海山もたゞならぬ御恩をくださった、下御所さまのおん身に、もしものことがあつてはと——」

「これ、敷妙」

と、御台がさえぎった。

「異なことを申すぞや。そもじの主人、直冬は、下御所には恩を着たけれど、御所の恩は蒙らぬといわぬばかり！」

「あれまあ、御台さま。御所さまは、おん血をお頒けくださいました

実のお父君、わが館とてなんでお疎略に思われましよう」

敷妙は、こゝぞとばかりに、わざと実の父という言葉に力をこめた。その効目は、たちまち現われた。

「まあ！ そなたは、故意にそのようなことを云いやるのか？ わらわは継母じや。生さぬ仲じや。その知れきつたことをあてこすつて！」

御台は、師直暗殺の企みを聞くことが出来て、あゝよかつたと思うと同時に、神経が不思議にいらだつてきたのであつた。

いかに聡明でも、嫉妬ぶかい女の常として、時と場合で妙に物の感じかた、考えかたが、発作的に偏してくる。

「わらわは礼などは申さぬぞ。大それた陰謀を知つて、それを告げるのは当然じや！」

御台は、まだ三十五歳の若々しい声を、癪だかくふるえさせた。登子の方の、感情のたかぶりを、心理的に解剖するならば、なかなか複雑だ。——自分は、生家北条を贄にしてまでつくした足利の家は、あくまで衛り、栄えさせなくてはならぬ。それがためには、いかに乱姪でも傲慢でも、師直はなくてはかなわぬ人物だ。それを殺そうとする下御所は、憎い朝日局の腹からでた竹若を、ひどく愛し庇つてい

る。竹若は秀才だ。末おそろしい器量人だ。源氏は由来、兄弟喧嘩の家柄である。すると、自分が産んだ千寿王と光王丸にとっては、まことに気味のわるい庶兄だ。将来が案じられる。密告したのも、あるいは、遠大な腹黒さからかもしれぬ。

かぞえ立てたら、きりが無い。とにかく御台は、今夜はじめて逢つた敷妙が、噂以上にも美しいことさえが気に入らなかつた。

「わが館なぞと、北の方気取りは身のほど知らずじや。つゝしむがよい！」

「あれ、御台さまのお言葉とおぼえませぬ。まこと、わが館ゆえ、わが館と申すのが無様けとは——」

「えゝもうあきれた女子じや。帰れ！」

御台は、青い顔で座をたつた。

(思いどおり！)

と、敷妙は心のなかで、ほくそえんだ。

こうほくそえむまでの、敷妙の気持ちも、またずいぶん入りこんだ働きかたをしたのであつた。

まず、直冬が、三条坊門の下御所から戻つて、諫めたが聴かれなから、不本意でも密告すると云つた時、敷妙は、せつかくそこまで運べたのに、残念至極——と、ひそかに歯がみをしたが、密告をさえぎる手段はなかつた。しかし、あの六本杉の贗怪異が、こゝも大きな魔力をふるうものかと、驚かれるにつけても、東条の虎夜叉が、

「御怨霊が、男子となつて生れることにした方が、凄味がある。間違つて、女子が生れたにしても、懐胎の夜を云いあてゝおるから、ひとたび根をおろした恐怖が、そう容易と消えるわけではない。で、もし的中して男子が分娩された場合、どれほど直義が恐れ、おのゝくか。一時は、気も変になるだろう。こりやどうしても、予言しておいて、男子が産れた時の妻さをねらわずばなるまい」

そう、伽羅作にむかつて云つたことが、思い出された。敷妙は、密告するなら、自分が將軍御所へ使用に行こうと考えて、許しを得たのであつた。ころんでもたゞは起きないという覚悟だつた。

三

「小座敷に灯をとませ」

と、尊氏がいった。

命鶴丸は、対屋とは別棟の小書院に、ともし灯を入れてもどつた。

尊氏は、鬱々と歩みを運んだ。命鶴丸は、あるじの気持をおし測つて、

ついては行かずに廊にとどまつた。夏も老けた六月九日の月が、赤銅いろに中空でかゞやいていた。その焦げたような色には、きょうの未

の尅過ぎまでつゞいた酷烈な暑さがしのばれたけれど、しつとりとぬ

れた夜露の庭はやくも秋がおとずれたかのように感じられた。月あかりを浴びている樹々の葉むらは、どれもこれも緑がすでに疲れたように黒ずんでいた。夏草はもう大方、花を凋ませて、萩や、月見草がそれに代ろうとしている閑寂な苑のすがたであった。

小書院は、塵ひとつないように、清掃されていた。濡縁と入側にかこまれた小さな座敷には、縹緗縁の厚畳を敷きつめてあった。床と脇棚は、築山と植樹でしきられた小苑にのぞんで南面していた。座敷うちにも入側にも、一つも調度品が置いてなかった。というのは、こゝは尊氏にとつて特別な場所であったからだ。

たゞ床に軸一幅、棚に観世音菩薩の小形の金銅像一基。

懸軸には尊氏の自筆で、

倩かに顧るに微質の鷹揚は

先皇の鴻漸に起る

溫柔の歡旨

猶お耳底に留る

攀慕の愁腸

心端を尽し難し

恩恵極みなく

報謝何ぞ疎なる

と、書かれてあった。

倩かに自分というものをふりかえつてみると、一治部大輔にすぎぬ微賤な身をもって、建武維新の功の首勲に賞され、御諱の一字、尊を賜わつて、雲上につらなることができたのは、ひとえにこれ先皇後醍醐帝の鴻大無辺の聖恩によるのである。禁裡の御座ちかきほとりにまでお召しをいたゞいて、和歌の御会やお歌合わせのお席をも汚し、かしこくも温かき、そして忝けなくも柔かき、おん言葉のかずかずは、かくある今もお耳の底にふかくふかく刻まれ残っている。しかるに事は、心とゆきちがい、齟齬はついに大逆へ自分をおし落してしまつ

た。あまつさえ恐れおゝくも主上におかせられては、南山雲白き彼方で崩れさせたまい、おん現し身は永久に、北闕に還らせたまう由もなし。ああ悲しきことよ、攀慕まいらする想いのみ徒らに募つて、愁いは腸臓を断つようである。うらむらくは自分の心情は、いかなる表現によるも尽しがたいことだ。先帝の御恩恵は、実に極みないのである。按えば、疎かなことだ、あゝ、報謝し奉つることの、なんと疎かなことであるう。

軸に書かれてある文字の意味は、そうであった。

尊氏は、小座敷のまん中に端座して、この文字を、しばらく見入つた。やがて直衣の襟や、指貫の褶を正し、南の小苑、すなわち吉野の方へむかつて、敬虔な面持ちでお辞儀をした。

両手をついたまゝ、

「臣節を誤つた尊氏でござります。諭えてはならぬ辱を諭えてしまつた尊氏でござります。廃立の大逆を犯しました私でござります。今日は、炎天に身装をくずしましたため、いまだ一度もおん詫び仕らなかつた次第、恐懼にたえませぬ」

さながら、おわしますごとく、尊氏はうやうやしかつた。

「等持院に曼荼羅供を修めましたこと、南禅寺には千僧供養を行いましたること、洛西嵐山のふもと、保津川畔のおん聖跡に、天竜寺を、私のあらんかぎりの力を傾けまして、たゞたゞ御冥福を祈るために建立いたし、これを勅願寺として証真常の一切経供養を相営みましたること、それらは御照覧あらせられたとおりにござりまする」

と、自らの報謝の業蹟をならべたが、さらに言葉をつゞけて、

「さりながら、一たん犯しました私の大罪は、なにをもつてしても償いがたいのでござりまする。私もひとたびは、鎌倉の浄光明寺において、また再び目には尾道の浄土寺におきまして、落飾、遁世を志ざしましたものゝ、周囲の勢いが、つよく私を阻み、腑甲斐なくも私は順逆を過つたのでござりまする。されど私が尾道で、仏門に入りましたに

せよ、天下の武士どもはやはり武家政治を、再興仕つたであらうことは、疑うべくもござりませぬ。この点におきましては、悲しくも尊氏一箇の力は、じつに微々たるものにすぎませぬ。武家政治、幕府政治は、由つて来たるところ遠くして、根柢、牢として抜くべからず、畢竟すれば武士土着、封建の必然でござりました。延喜天曆の藤原氏全盛の公家政治によつて、醸しいだされたところの諸国、地方の形勢が、私の本家、頼朝をしてついに幕府を開基いたさせてより以来、源氏三代、北条十代の長い因襲は、あまねく天下の土に、田に畠に、山に川に、浸みおりました、一旦には到底、得抜けないのでござります。もとよりこの皇ら御国は、一天万乗の大君の知ろし召すところ、政治もまた、おん親しく知ろし召すべきは、理の当然でござります。不肖私も、率先、御親政に参じまいらせました。さりながら奈何せん、呪わしくも歪められたる現実は、源氏の分家たる私を有無を云わせず強いに強ひまして、幕府の帳のなかに押し据えたる頼朝、並びにその後の模様は、いま御照覧もあらうごとくにござりまする」

息を凝らして、尊氏は、しばらく眼をじていたが、

「不正なる現実を、匡正すべき力を欠いたがために、心憂わしくも順逆を踏みちがえましたる尊氏、死して限りなき罪をおん詫び仕るは、いと易きことながら、それよりも命のかぎり生きて、生きてあるかぎり苦しみを続け、懺悔をつづけ、御冥福のおんための報謝にいそむが本義とこそ存じあげます。——ひとたび絶たば再び続かず、ひとたび懺えば永く再び造らず、これ仏の懺悔の意なりと申します。日に悔いて懈怠なければ、罪業ながく抜くべしとあるを、せめてもの頼みの灯といたしまして、苦悩の暗夜を、尊氏は辿りつづけまする」

そう云い終わつて、静かに額ずいた。

燭の灯が、淋しく、懺悔者のやつれた顔へ、まばたいた。

## 干戈動く

### 一

旗が、白く幾流も、月の光で、黒い杜の前に浮きだしていた。侵入第一軍の大将、細川頼朝の本陣は、菅田八幡社の境内に宿つて、一夜明けたら、さらに前進することになつていった。ぬいだ腹巻を、草の上において、楯へ、脛当と籠手を、枕にするつもりで重ねた兵が、

「このまゝ、寝てしまふには、もつたない月だのう」

と、云つた。石を枕にしていた兵が、

「すこし歩こうか」

と、云いながら、起きた。

「む。お月見と洒落るかの。よかろう」

「瓢箪に、枝豆が欲しいな」

「贅沢いくなつ！」

と、朋輩の腹を枕に借用していた兵が、どなった。

「明日、富田林まで行けば、酒屋ぐらいあらうぞ。それ当てことに、飲んだ気でお月様をおがんで来い」

と、明朝の朝食として渡された握り飯を、はやくも半分に分けて、片方へかじりついた兵が、口をもぐもぐさせながら、他には何を云うのか解らぬように云つた。

「や、食い意地の張つた奴じや」

「明朝の吠え面、おれは知らんぞ」

二人は、社うらの森の下から、草原の径へ出た。夜露のなかで、虫が、やかましいほど鳴いていた。あたりは、昼間のように明るかつた。

「いゝ月だのう」

「十五夜じゃもの」

「月見る月は、この月の月か」

「あかるき月は仲秋の月だ」

「なんじゃよ、それは」

「歌だ。下の句だ」

「上の句は？」

「ちよいとは出ないな。つけてくれ」

「よし。えゝと——望の月、あゝ望の月、望の月」

「おいおい、自作か？ 人真似ではないのか？」

「懸け値なし。自作じゃ」

「今年の十五夜に、河内で逢おうとは、思わなかった」

「これが十五夜の、見納めかもしれん」

「陰気くさい声を出さぬことだ」

「あそこに、水が光っている。なんという池かしら？」

「ありや池ではない、濠だ。いや、お濠だ」

「濠？ なら城か？」

「脱け！ あんなどころに城があつてみる、こうはしておれんわい」

「大きにな」

「城のように見えても、実はみさゝぎじゃ」

「みさゝぎ？」

「罰あたりめ！ みさゝぎを知らんのか、みさゝぎを？」

「はての？」

「応神天皇様の御陵だ」

「あゝ、陵か。だが、えらい物知りじゃのう」

「さつき、殿にうかゞつたのだ」

「殿に？ 道理で！——だけど素晴らしい御陵じゃなあ」

「この辺は、御陵ばかりじゃ、おれはもう、みさゝぎにかけては、大したものだぞ。とんでもない通の、また通の大通じゃ」

「ふうむ。話十分一としても相当なものだの」

「度胆を引っこ抜いてやるぞ。ほれ、あの川原の、佐々木六角判官どの御陣の真うえに、黒うくまるっこく見える、あれが、えゝと、なんだっけな、えゝと——」

「こう、早く驚ろかしてくれ」

「はてな？ 胴忘れしたかな」

「馬鹿めが」

「あ、わかつた。允恭天皇さま御陵だ。そのすこし手前の森が、仲姫

皇后のみさゝぎだ」

「どなた様の、お后さまじゃ？」

「そんなことを知るものか。拙者は御陵専門じゃ。それからと——あの原つばの向うの、赤松殿御陣と藤井寺の村の間に、やつぱりまるっこい岡が見えるだろう。周囲のお濠の水もちよいと見えるだろう」

「む、見える、見える」

「あれが三韓征伐の、仲哀天皇さまの御陵だ」

「へえゝ。だが三韓征伐は、神功皇后だ」

「その、また向うの森が、えゝとその——むゝ、雄略天皇様のみさゝぎだ」

「ほう。みんな殿から、承わたったのか？」

「知れたことよ。えゝ、それからと——」

「え？ まだあるのか、まだ？」

「まだまだ。宇都宮入道どの旗差し物が立っているだろう、あそこに。あのうしろの小高いところが、ええとその、仁賢天皇の御陵だし、長どの陣所の裏が、日本武尊の御陵だし、松田次郎左衛門どの旗のうしろが、清寧天皇さまのみさゝぎだ」

「ひゃあ！ 驚ろいたな！」

「そのまた東の、川つぶちに近い陣所、誰れのだっけ、目賀田か、安保か、旗じるしがよく見えないけれど、あのそばの小山が、はてな——あゝ

「ほう！ 驚ろいたのう！」

「えと、それから——」

「あゝもう結構じゃ！ 結構じゃ！」

「わはゝゝゝ！ どうじゃ参つたか？」

「参つた！ 恐れ入った。なんのことはない、みさゝぎの御番に来たようなものだ」

「これさ、おれの物おぼえの達者なところも、すこしは感心しろよ」

「いや、感心々々！ そりやそうと、ばかに簞が暗いじゃないか、どこの陣でも」

「お月様に顔負けしたんじゃ」

「そりあ顔負けもあるうが、一体に吝なのだ」

「相済んません、以後はきつと気をつけます。だが何も、今晚あたり達筆に簞火を、焚くという術はなかるうさ」

「念を入れて損はせん」

「得にもならん。考えても見さつしやれだ、今日、楠兵が五六百、石川むこうの山根腰を、こそこそと駆け抜けたときあ、てつきり挟み討ちの寸法と、思いきや当てことゝ禪、向うがはずして、なんのこともだ、飯盛山をさして、ひた走りではないか。敵は、天王寺から八尾へ出た我が第二軍が、飯盛の城を攻めるものとばかり思いこんで、それで援けに行つたのだ」

「おいおい、どうやらそれも、受売りらしいぞ」

「云うにや及ぶ。だが聞くがいゝ。敵はたゞもう籠城の一術だ。東条の城は、われわれの殿頭氏さまの第一軍を引受けるし、飯盛の城では清氏さまの第二軍をくい止める、という寸法なんだとさ」

「敵の腹のなかを、のぞいてきたようだな」

「そもそも昔から楠は、平場の戦に勝つた例がないんだ」

「うそをつけ」

「うそなもんか。湊川でも俺たちの卿律師定禪さまに、敗けている。われわれ細川兵の強さが、身にしてみている」

「強かつたのはわれわれの、親たちだろう」

「まぜつかえずなよ。とにかく籠城さ。籠つたとなりあ野方図もなく腰のすわる奴だ。楠はかたつむりの生れ替りだ」

「はゝゝ巧いことをいうの。どこから仕入れた？」

「馬鹿にするな。これこそ自作じゃ。だが待てよ、何の話だつたつけ？」

「えゝ？」

「汝がまぜつかえずもんだから、話の続きが迷い子になつた」

「おい、冗談ではないぞ、簞火が吝だつて話からだ」

「そういつた時、」

「やつ、あの音つ！」

と、相手が叫んだ。

「おゝ、鬨、鬨！ 鬨の声だつ！」

と、一人も棒立ちになつた。

どつと挙がつた鬨の聲は、まさしく菅田八幡社の杜の方からひびいた。

「と、と、と、鬨だ、敵だつ！」

「夜討ちだ、夜討ちだつ！」

わあーつ、という声が、喚きが、続けざまに起つて、それが、丘に、

原に、森に、木霊にひびきわたつた。

## 二

仁賢帝御陵と日本武尊御陵との間、ちようど宇都宮隊の夜営地からも、長隊の陣からも見えない隘地を、縦列で、将も、部将も、みな徒歩で蕭々と通りぬけた楠勢であつた。東条の城から、山伝いの間道を、強行軍で、小平尾、墳生と進み、来目皇子の御墓のわきから、この隘地にでたのだ。そして長、宇都宮の両隊へは目もくれずに、隘地から原へ出るとすぐ横列に展開して、薙刀や、長巻や、太刀を、さやか



な十五夜の月光にひらめかしつゝ、幅三町ほどの原を走り越え、敵の大將頭氏の本陣の宿った蒼田の杜へせまるが否や、わあーつ、わあーつ、と鬨をつくって夜営の場所へ、幕張りのなかへ、楯のかげへ、まるで猛獣のむれが餌食をねらつておどろこむように、おそいかゝつた。

楠勢の将は、虎夜又正儀であつた。部将は、香月権太、安西九八郎、生方庄助、夜襲の奇兵五百は、すべて虎夜又の手兵だつた。

「頭氏を遁すなつ！ 定禪を斬れつ！」

と、八幡社殿の鳥居の下で、正儀が叫ぶと、香月の兵が、おめきながら、禰宜の家へ乱入した。

「さわぐなつ！」

と、陸奥守頭氏が、隣室へどなつたが、自分も鎧を、肩にはかけたものゝ、上帯を締める暇がないから、太刀が佩けない。籠手ははめたけれど、脛当では断念して、刃を鞘から払つた。

「兄者！ 逃げるほかないつ！」

と、律師定禪が云つた。

驍将、細川卿律師も、こう寝込みをおそわれては、あわてゝ鬨う不利を感じたのだ。からくも小具足だけつけて、鎧は捨てた。そして、長い太刀を押取つて、

「馬引けつ！」

と、叫びつゝ庭へ、走り出た。

「馬、馬あ！」

と、総師の頭氏も、素足に履だけひっかけて、草摺なしの鎧で外へとび出て行つた。

「律師定禪か、覚悟つ！」

はやくも挺進してきた兵が、薙刀をふるつたが、

「推参つ！」

律師の太刀が、月に光つて、兵の腕が、長い得物と一所に地べたへ落ちた。

半裸体の郎従が、銜をとつた馬の背へ、血刀もつたまゝとび乗つて、「兄者、速うつ！」

と、定禪が呼ばわつた時、抜身の郎党十人ほどが、

「どの！ 両どのつ！」

と、危急を叫びつゝ駆けつけた。家のなかも外も、はげしい喚きと、足音と、衝撃のひびきと、よろけてぶつかり、すべて転び、斬られて倒れ、呻きつゝ絶え入る、人と物のざわめきで埋められた。

安西九八郎が、社殿の廻廊に突つ立つた。

「そうれ、馬で逃ぐるぞつ！」

森の中から、馬が二頭、頭氏と定禪を乗せて西へ走り出した。一塊りの兵が、それを衛つて、路のない原を、長九郎左衛門の陣を目的に駆けわたつた。

「続けつ！」

と、虎夜又が、馬上で叫んだ。敵の馬を、奪つたのである。すでに境内の乱闘は、さながら海嘯の引いた跡のように静まつていた。そして、いわば大きな組板の上の膾でも見るように、武装まとう暇のなかつた細川兵が、何百人も悲惨な死屍を横たえていた。

「追撃つ！」

と、生方庄助が、兵を顧みた。兵は、一気に敵の本営を潰乱させて、いよいよ勇みたつていた。香月が、

「味方の死傷は、わずかだぞつ！」

と、大きな声で鼓舞した。

「わあ！」

歓声がわいた。だがそのどよめきには、なお一倍の緊張がこもつていた。細川兵の過半は、鬨わずに四方の友陣へむかつて逃散したのであつたが、追うとすれば、むろん、頭氏と定禪だつた。目ざすは、長の陣——宇都宮の陣であつた。香月、生方、安西、そのほか重立つた士が、みんな敵の遺棄した馬を利用した。虎夜又が、鞭をあげた。馬

がいなくいた。晃々と照りわたる月明の原を、武器と躰に雄々しく血ぬった東条の精兵が、将と部将を擁しつつ、疾風のように猛然と、追撃にうつった。

### 三

馬を、颯氏の馬へ、追いつかせて、

「兄者！ 闇夜なら、命がなかった」と定禪が云った。

と定禪が云った。

「楠は、今夜の将は誰か知ら？」

「わからん。誰れ一人、名乗もあげん。ばかされたようじゃ」

「おぬしほどの豪傑も、あれではのう」

「出直すより、ござらん」

長も、宇都宮も、松田も、総くずれだった。本陣一千の兵が潰えたと聞いては、踏み止って拒ごうという者はなかった。佐々木も、赤松兄弟も、色をうしなつて各自の陣をはらった。深夜の竹内街道は、たちまち兵で、なだれあふれた。闘つて傷ついた兵が、闘わずに逃げて来た卒のなかにまじりあい、肩を貸してもらつたり、かゝえてもらつたり、押合い、ひしめき合い、馬のために路から田圃へ落されたり、蹠の足を踏まれたりして、今朝未明に発つてきた住吉へ、逆戻りの総退却をいそいだ。

## 瓜生野に腥風すさぶ

### 一

天王寺の細川の軍營から、部将、小笠原入道浄齋が、法衣に小具足

兵は十四五人、自分は馬上で、紀州街道へ出てきた。

路は、雪が降つたように、霜で真つ白だった。碧い朝空の下に、阿部野と、その先の大きな瓜生野が、白茶けてひろがっていた。茶臼山の丘腹が、あざやかな紅葉をまとうていた時は、この広野も、もつとふつくらと黄ばんで見えたのだが、もはやそこには晩秋が名残なく冬景色に、入替わられていた。痛いように澄んだ空気のなかで、呼吸が白く凝つた。

小笠原入道は、帝塚山の丘裾までくると、馬をとめて、

「告げて参れ」

と、云つた時、丘の坂に、騎馬と兵が現われた。

「おゝ見えたぞ」

と、駆け出そうとした兵をとどめた。

帝塚山は、赤松信濃守範資の陣所だった。

「や、筑前どのじゃ」

範資の弟、筑前守貞範が、坂から下りてきた。

「これはこれは。筑前守どの御自身にて」

と、入道は、赤松貞範の馬側へ、自分の馬を近寄せた。

「わしらの身内には、入道ほどの人物が見えたらぬでの」

「お戯れごとを、はゝゝゝ」

「丁寧に越したことはなかるう、とも存じてな」

「いや、御尤も」

入道は、貞範と馬を並べて、街道を南の方へ進んで行った。赤松の従兵も、二十人を出なかつた。街道の右は、住吉浦の磯馴松が、堺浦の浜まで延々とつゞいて、凧いだ海と、茶色の陸を限っていた。そして左は、住吉の邑だった。民家が、路ばたに断続し、近在の百姓、物売り、旅人、修験者、商人、荷車、牛、馬、手押し車などが路上に動いていて、関西近畿にならびない要津堺港の近いことを思わせた。

貞範と入道は、やがて、堺の街に入つて、一ばん富裕そうな通りへ

曲って行つた。街の両側には、大きな商人の店と、家が、ならんでいた。乗馬のとまったのは、唐土屋伽羅作の店の前であつた。

## 二

「ほう、あのような所に、お城を！」

わざと、とほけて、伽羅作は内心の驚きをおし匿すために、仰山にいぶかつてみせた。

「不思議におもうは無理もないが——」

と、赤松貞範は、床柱をかついだ上座から、附書院の前に坐つた入道浄齋へ目をやつた。入道は心得て、

「のう唐土屋。大手筋とやらいうても商人、裕福でも町人のそなたにすれば、さぞ馬鹿らしいことゝ思うであらうが、武家大名に特別な利害なり、意地合いなりからはじく算盤では、ぜひと彼処に堅固な城があるのじや」

「へーえ。それはまた何故でござりまする？」

「訳か？ それはこうじや」

浄齋入道は、火鉢に手をかざした。唐土屋の奥座敷は、ちいさな寺院の書院くらいには立派だつた。四人ほど徒士が並んだその下座にすわつている伽羅作は、腹のなかで、

（さつそく、東条へ報げなくては——）

と、思つた。だが同時に、なんのために赤松の弟殿と、細川の老臣が、自ら突然出かけてきたのか？ そう怪しみつゝ、入道を眺めた。

「唐土屋、そなたも勿論、知らぬはずもなかるうが、さんぬる八月十五日の夜、我等が殿、細川陸奥守殿、ならびにそれにおわす赤松の殿御兄弟は、御武運にめぐまれずして楠の奇計におち、不意の夜討を防ぐに術がなく、三千七百の侵入軍も、かるからぬ痛手を蒙つて退却のやむなきに至つたが、元弘以来、名譽のお家柄、おめおめと京へはもとより、御領国へも帰られず、天王寺の茶臼山と、住吉の帝塚山に

御陣構えあつて、すでに二カ月、この冬は御陣中で年を越さねばならぬ、と申すのは、楠の、武備、兵力、さぐればさぐるほど侮りがたく、容易には攻めがたいからじや。再三督促をかさねたものゝ、京都では、高の殿と、下御所のおん折合いが、面白うないために、山名時氏の殿の大軍も、さて何時、京発か、見込みが立たぬでの、せつかく、飯盛城をかこんだ第二軍も引揚げさせて、いよいよ永陣、ということになれば城じや。この堺浦から浪速の川尻を、楠兵の手にゆだねたら、それこそ一大事だ。ついでのは——」

「もし」

と、伽羅作が、

「肝腎な、石と、材木を、どうなされますか？」

と、たずねた。小笠原入道は、

「それぞれ、そのことじや。城造りに必要な石材と、木材。のう唐土屋、そなたの持ち船で、紀州から運んでは貰えまいか？」

そう云つたが、伽羅作は答えなかつた。

「どうじや？」

「——」

「この赤松からも、頼む」

と、筑前守貞範が、商人に会釈した。

「ひと肌、ぬいでくれまいか？ 費りに糸目は、つけぬ」

「しがなない町人へ、御歴々が、いかゞなされた儀でござりましょう。船にも、人にも、御不足があるうとも存じませぬ」

「いやいや、それに不足はないけれど——」

と、入道が、

「熊野の海賊船が厄介じや。あれは吉野方の味方ゆえ、商人の船は襲わぬが、われわれの船なら見遁しはせん。岸和田の、和田が兵船と謀しあわせて、川尻から兵庫までも荒らし廻る。とても危うて、四国からも、播磨からも、船をよう出せぬのじや」

と、云った。

阿波は細川の領国だったし、また播磨には赤松の所領があったのである。

「唐土屋——。赤松貞範が、頭を下ぐるぞ」

「あゝ恐れ入りまする」

「解つてくれたか？」

「赤松の殿——。細川の御重役へも、申し上げます。当、堺港には、船持ちの商人も数ござります。どうぞ餘人に仰せつけ下さりまするよう——」

「なに？」

と、入道が思わず叫んだ。

「は。私には、御用相勤まりかねまする」

「なんと？」

貞範も、きつとなった。

「細川家、赤松家の御用命は、承わる訳に参りませぬ」

伽羅作は臆せず、きつぱり云つて退けた。

「だまれ唐土屋っ」

「おのれ楠に心寄するかっ」

入道と貞範が、同時に膝を立てた。士の一人が、

「南朝方とあれば、容赦なされますなっ！」

と、叫んで突つ起つた。

「お勘違い」

と、伽羅作は、なお落着いたまゝ云つたので、浄齋入道がかつとなつた。

「えゝふてぶてしい！ 刃の錆になりたいたのかっ？」

「お勘違い」

伽羅作は、手をあげて、

「南朝方とは、思いもよらぬこと」

「えゝ、黙れ、黙れ！」

「私こそ生粋の下御所方」

「あ！」

「副将軍のお味方でござりまする」

「む！」

「お仕置あえて怖れませぬ。かく申す唐土屋めには、足利直冬さまの御恩が深くござります。お目かけさせらるゝ敷妙は、私の妹にござります。直冬さまの館より、細川・赤松御両家は、高執事さまのお仲間ゆえ、堺港で御便宜を計つては相成らぬと、お達しが、参つておりまするぞ」

「おゝ！」

「されば私、町人とは申せ、人間の皮、着ておりまするからには、命ばかりを惜しんではおられませぬ。さあ、御存分に遊ばせ！」

伽羅作は、磐石のような覚悟をみせた。

浄齋と、貞範が、眼を見合わせた。

「入道！」

「赤松の殿！」

### 三

京都へは、朝、昼、晩と、それも毎日、諸国の兵が集まつてきた。幕府の執事、高師直の命令によるのだつた。

師直、師泰、師冬、師秋、師世、師夏、師兼、豊前五郎師重、遠江次郎師繼、高備前、大高重成、小高重長——という高一族十二大名の所領、采地は、ほとんど全国にひろがり、ちらばっていた。で、他の大名の兵も上洛したにはしたが、洛中洛外の寺社、在家に、集まつた兵の半分ちかくは、高の兵であつた。

もう一月ほど前から待機していた山名時氏の四千の兵に、やつと天王寺、住吉方面への出動命令がくだつた。

それは高一族の大軍が、京都への集結を終わったからであつた。師

直は、自分の兵を集めてしまうまでは、安心して山名の兵を動かすことが出来なかった。師直と下御所直義の仲は、それほどに険悪になっていたのである。師直の敵は、楠だけではなかったのだ。してみると、虎夜叉正儀の、暗中所ける秘策の効は、じつに大きかったといわなければならぬ。

山名時氏は、幕府の侍所の要職にあつただけ、その兵勢はさかんだつた。嫡男、師義、弟、兼義、時義、時盛の三人を先、前、中陣の将に配し、原四郎太郎、四郎次郎、四郎三郎の三兄弟、綿貫下野、箕浦実俊、同藤六、大甘六郎、少松原刑部左衛門尉、野木与一兵衛、猪野七郎、小林利益、高山三郎右衛門などを部将としての陣容は、淀の川畔を圧しつゝ下つて、住吉に着いた。

#### 四

西の空と海を、うす茜いろにそめて、十一月二十五日の陽が沈むころ、富田林街道を堺に近づいた正行は、

「伝令つ」

と、よばわつた。

伝令兵が馬を、首將の乗馬へ駆けよせた。

「虎夜叉に、とまれと伝えよ」

伝令の馬は、土煙りを蹴上げつゝ、隊伍の騎馬と兵をぬいて、前へ駆けて行った。そしてたちまち中陣に迫いつき、それを駆けぬこうとする時、正時が、声をかけた。

「前進をとめるのか？」

「さようつ」

と、答えつゝも、速度をゆるめずに、中陣をぬいて、前陣に追及した伝令が、

「行進、停止つ」

と、叫ぶと、前陣の將、正儀は、馬側を歩く唐土屋伽羅作との話を

打ちきつて、

「とまれつ」

前行の部将へ、そう声をかけて、自分の馬をとめると、部将がまた、前の部将へ、とまれつ、と次ぎ次ぎによばわり伝えた。正儀は、伽羅作に、

「山名の先陣の將は？ 聞き落した」

と、云つた。

「三河守兼義でござります」

「む」

虎夜叉正儀は、伝令のあとを追うように、自分の馬を本陣の方へ、走らせた。

「次郎兄、ござれ」

そういう弟のあとを追つて、次郎正時も本陣へ戻つた。

本陣が行進をとめている場所は、富田林街道が、竹内街道と出合ふところで、仁徳帝御陵の、宏壮な段丘がすぐそばに仰がれた。

正行は、竜がしらの兜に、緘しの緋色のあざやかな鎧を着て、乗馬は白かった。正時の馬は葦毛だった。鎧は、黄緘し。兜の鉢には置物のない、だが、前立ての鍔形は、思いきり細長いのかぶつていた。正儀の馬は黒かった。紫裾濃の鎧をきて、兜の前立は銀の月形で、鉢にも銀の虎を載せていた。

白い馬の鼻づらへ、葦毛と黒が、頭を寄せた。

「斥候を、待たねばならん」

と、正行が云つた。

「いや。敵情は、街の唐土屋が、さぐつてくれたので判明いたした」

そう、虎夜叉がいうと、正行はにっこりした。

「む。それはよかつた。我々の近づいたこと、無論、もう知れたであらうな？」

「勿論。敵はすでに、戦闘陣形をとっております」

「夜襲は、覚束ないの？」

「明日、合戦で勝てましょう」

「ましよう、でなくて勝てますと云え」

と、正時が笑った。虎夜叉も微笑した。

「そう、断言してもよろうござる。しかし、この次ぎの戦さは、むずかしい。まともに戦を交えたら、きつと敗れる」

「この次ぎとは？」

と、正行が訊くと、

「師直自身が出馬するとき」

と、虎夜叉が答えた。

「その時こそ、正行は決戦するぞ」

「それは不可ませぬ。お躰は、夏の熱さをしのいだ。ながい秋雨の湿陰にも堪えた。冬に入ってから、お咳さえ出ぬほどの、回復ぶりじゃ。危きを冒さるゝいわれは、いずこにござろうぞ」

正時が、手をふった。

「論は、あとにせい。敵の陣形を聞こう」

「虎夜叉——。山名と細川、いずれが先か？」

「細川はまだ天王寺を動きませぬ」

「山名の兵の数はいく？」

「およそ、四千。赤松が一千。佐々木が五百。宇都宮が三百」

「六千たらずか」

「さよう。山名の先陣は、兼義、二陣が時義、三陣が時盛。時氏の本陣の左に赤松、右に佐々木と宇都宮でござる」

「鶴翼に備えたな」

「先陣は、遠里小野まで出ております」

「ほう、近いの」

「明日は、午までに、渡辺の川へ追い落せましよう」

「よし。——次郎、併進突破がよくはないか？」

正行が、めつさり丈夫そうになった顔を、次弟の方へむけた。正時は、

「どうじゃ虎夜叉は？」

と、顧みた。

「よろしかろう」

正儀が、そう答えると、正行は、

「頭の者を、みな集めろ」

と、伝令の騎馬兵に命じた。

## 五

手が、かざまるほど寒い朝だったが、堺の町人どもが寝ずで焚出しをして、鮮魚の味噌汁の熱いのと、蓄えの塩漬の瓶や樽を空にして、猪やら貉やら、雉子だの鶏だのという獣鳥肉の美味しいのを、少しづつでももれなく振舞ってくれた朝飯で、一層元気づいた兵たちは、把手の鉤のついた楯をかざして、白刃をひっさげつゝ、長い長い一文字の横列に並んで進んだ。それが第一線だった。敵の矢が、横なぐりの雨のようにとんで来たけれど、楯兵は、矢は一本も放たなかった。弓と矢を捨てゝ、たゞ楯と、抜いた刀とをつらねて、最前線をつくったのであった。

第二線は、薙刀と長巻をもった兵たちが、おなじく横に並んで、だこれが一列ではなく、五列にも六列にも重なって、前に進む楯のかけになるように、みな腰をかざめて走った。楯をこえた矢は、霜で白くなった枯草の上に落ちたり、土に刺さって霜柱をくだいたりした。第三線は、騎馬武者だった。鼻づら列ねて、鞍上の士と気持をそろえて勇み立った、その馬の尾に、郎従の兵と卒とが、思いおもいの得物を持ってついて行く。その後が、第四線の兵で薙刀。第五線が槍。槍の兵のあとが、ふたゝび騎馬武者の横列。この横列のなかに、正行、正時、正儀の三人が、馬を進めた。最後列は、旗侍と、鼓鉦の役と、太刀の兵だった。横に七線をえがいての突進だった。

猛烈な突進だった。

「わあーっ」

一線が一斉に楯をすけると、背後から薙刀が、敵の中へ閃きこんだ。長巻が血煙りを上げた。楯をすてた兵の刀も、そのあとから、おくれじと敵を斬るとき、おどろこんで行った騎馬が、敵の腰を、膝を、胸を、蹄で蹴って、倒れた頭を、顔を、腹を、蹄で踏むと、郎従が滅多斬りに叩き斬った。つゞく薙刀と槍がきらめき、将と部将が、叫び、兵が太刀をかざして、驚き惑う敵を、なぎたて、突き倒し、斬り伏せつゝ、またたくうちに、山名の先陣を突破して、二陣のなかへ、殺到したかと思えるまに、あわてゝ押し出して来た両翼の、赤松隊と佐々木隊をも引つくるめて蹴散らした物凄さ。息をも入れずに第三陣と宇都宮隊を、またも一気に突破して、大将時氏の本陣一千へ迫った楠の精銳は、その兵数も三千だから、そうなるに数においても圧倒した。時氏の旗本は、かなり頑強に闘ったが、これもしばらく拒いただけで潰乱した時、正行が、叫んだ。

「鉦を鳴らせつ」

鉦の役が、そろって鉦を鳴らすと、敵を追うことをやめて兵が戻つて来た。

「水があるぞつ」

と、どなったのは、正行兄弟とは再従弟の正忠であった。

「水つ」「水つ」と、たちまち声が、声を生んで行った。敵の死骸の間に、水樽がいくつとなく転がっていたが、半分ぐらいしか開かないのが多かった。冬とはいえ、闘うには水がなくてはいけぬから、楠兵はみんな竹筒の水筒をさげていたが、いまの奮戦で斬り落されたか、ふり落したかしたものも相当あったので、それに水樽があれば、なにも自分の竹筒のを、へらすことはないから、この山名の本陣あとの水樽には、すぐさま人がたかった。だが、飲みたいものが未だ、ありつかぬうちに、ふたゝび鉦が鳴った。それは二度目の突進を告げる鉦だった。前と同様な陣形がとゝのうと、楠兵は、打撃を倍加させるために、

こんどは逆に南へむかって、さつき斃しもらした敵を、塵殺しにもする勢いで、第二次の突撃に移った。

おびたゞしい死傷を出した山名兵も、どうやら陣立てを、半ばは立て直していた。

## 六

楠兵は、突撃を三度くりかえした。

瓜生野の霜は、陽にあたってとける前に、流れた血でとがされた。

山名の大將、時氏は、傷ついて危かったが、からくも遁れることが出来て、街道を北へ走った。馬の鞍へ結わかれて逃げたのである。嫡男師義も痛手を負うて、これは住吉の民家にかくれた。動けなかったからだ。時氏の弟、兼義、時義、時盛は三人とも、乱闘の中で討死したし、四十幾人かの部将も、ほとんど斃れた。山名方の死体は、楠兵の死体の十倍ほどはあつたろうが、その、無数の死体が、まだ死にきれずにいる重傷者の、唸り声と、蠢めきの間に、折れた薙刀や、切れた鎧の袖や草摺や、腕や、兜や、片脚や、烏帽子やの間に、弓や、生首や、刀や槍の間に、並んだり、重なったりして転がっている広い原は、血の臭いと屍臭とでなまぐさかった。楠兵は、死骸を踏みこえ、とびこえ、追撃しつゝ北へ、さらに細川の兵と戦うために、天王寺をさして走り出した。

菊水の旗が、風をきって靡いた。

## 遠大なる抱負

十二月も半ば過ぎた十八日の、極寒の宵だった。

火鉢には、あかあかと火が入っていた。

「のう虎夜叉。今の間に、わたしは聴いておかねばなりませんぞや」と、後室久子の方がいった。

「今の間にとは？」

「親房卿のおん入浴、おすみあそばさぬうちに」

「ほう、何事でござるかな？」

と、虎夜叉は、薄笑いをたゝえながら母を眺めた。

「つい四五日前までは、とても容易くは動けぬと聞いていた師直、師泰の大軍が、どうして急に？」

「急に、動けるように相成ったので、近日、京都を発つまでござる」

「これさ。その訳をたずねておるのじゃ」

「その訳を申すと、長うござる。御勘弁を願いたい」

「長うても、わたしは聴きたい」

「准後の御入浴中には、語りつくせませぬ」

「さまで詳しくうなくとも、かいつまんで」

「かいつまんで、筋がとおりますまい」

「正儀——。そなたは、またお匿しか？」

「またとは？」

「弁内侍の御受難を、あらかじめ、どうして探り知ったかと、いかに問うても、この母に明かしてはくれなかつた」

後室が、うらめしげにいうと、虎夜叉は、

「だいぶ旧いことを」

と、かるやかに笑った。

「母者びと。謀計は、密なるをよし、と申す」

「そりや敵を謀るものは、味方をも、謀るとかいうけれど——ごく広

い意味での味方であろうぞや」

「狭いものも、集まれば広くなる」

「でも、そなたと、わたし、母ひとり子ひとり、たった二人きりの間に、秘密があつてよろしかろうか？」

「母ひとり、子三人でござる」

「あれ！ わたしは真面目にいうておるのじゃ」

「それがしも真面目に申しておる。母上に対して、お匿しいたしたばかりでなく、両人の兄者にも、明かしてはおりませぬ」

「なぜじゃ？ なぜお匿しか？」

「母者への場合は——いらざる御心労を、おかけ致したくないからでござる」

「とは——？」

「虎夜叉の手段は、母者びとのお心には副わない」

「なに？ 敵を探るために、そなたの用いた手段が、わたしの氣にいらぬとは？」

と、後室は、腑に落ちぬらしい面持で、きゝかえた。

「それだけで、およろしかろう。瞭然と、つぶさに申さば、さような謀計は一たびも用いられなかつた父上であつたと、そうおっしゃるにちがいない」

と、正儀が答えた。

「おゝ、では何か、正路から外れた、道ならぬ詐謀を？」

「それぞれ、それが無益な御心配じゃ。——亡き父上とて、一面、謀略の人でおわした。薰人形も使われた。煮えたぎった人糞、人尿をも用いられた。泣き男をさえ、考え出された。謀略は要するに、すべて詐謀でござる」

「でも虎夜叉。正路にたがった御計略などは、たゞの一つもなかつた。さればこそ、先館には、妻のわたしへなり、また宗徒の人々へなり、なんの御秘密もお構えにならなかつたぞえ」



「その筈。そうあるべき筈だった。元弘建武の父上は、お齡は四十、家に目上をもたれぬ当主でおわした。しかも、いずれかと申せば、その謀計はみな、規模が大きくはなかった。目的が消極的であつたからでござる。ところが、それがしは家の三男に生れて、年齢わずかに二十。一族、家臣からも兎や角と、批判さるゝ立場におりますのみならず、それがしが目的は、極めて積極的でござる——足利を、強大なる現在の足利を、かならず破つて、京都を占領せずにはおかぬという——。目的が目的だけに、規模が入りくんでもおれば、性質が辛辣でもある謀計ゆえ、とても父上を真似るわけには参りませぬ。いやでも秘密を、構えなくてはならぬ虎夜叉でござる」

「朝敵を、かならず破つて——京都を？」

「そう、後室がいったとき、北畠准后親房卿が、和田助氏にみちびかれて、現われた。こゝは、和泉、槇尾城内の、奥の書院だった。」

## 二

「まことに手狭な、むさくるしい場所でございます。それを、おといもなく——」

と、いう後室を、さえぎつて親房卿が、

「なんのなんの。結構な城じゃ。勿体ない位じゃ」

と、心地よげに微笑して、杯を干した。

後室は、鄭重に酌をして、

「せめて、東条でございますれば——」

「ほう、こゝより立派とあらば、東条は大層なものでござるの」

と、親房卿は、虎夜叉の顔をながめた。

虎夜叉は、この賓客の陪食をしていたのである。北畠准后は、吉野から、こゝ槇尾の和田の城へ、きよう迎え入れられた。水分からは、後室が、そして東条からは、虎夜叉が出掛けてきて、接待につとめた。親房卿は、伊勢と熊野の兵、千五百を従えて入城したのだから、広か

らぬこの城は、兵で一ぱいになった。助氏の兵は、半分以上、はみ出して、岸和田の砦へ行くことになったが、それだけ和泉の防備は充実したのであつた。

虎夜叉が、

「万一を、おもんばかりまして、東条は構築やら、造作やらに、いさゝか念を入れおいたつもりでござります」

と、答えた。

「万一とは？」

親房卿は、あかるい燈火の光りで、虎夜叉の眸を凝視した。親しく語るのは、今度が初めてだった。

「恐れ多い申条ではござりますが、万が一にも、やんごとないあたりへ、御動座を仰ぐがごときこと、出来いたした場合を、考慮つかまつった」

「不吉な言葉は、つゝしむがよからうぞ」

と、たちまち准后が、こゝろよからぬ表情に変わつて、

「行在とは申せ。吉野はすでに十年あまりの宮居じゃ、みだりに御遷幸などを、奏請し得らるゝものではない」

「准后の卿、吉野は、防備の要害を欠いております。不逞なる朝敵が、もし来り犯さば？」

「まさか、それほどの冒瀆は、ようせまい」

「いえいえ。京都の宮闕をすら犯した逆賊どもが、いかで行宮をおそれましようや？ つらつら愚考仕るに、朝敵を大いに破つて北闕を、大君のおん為めに回復しまいらせんとせば、行宮をも不敗の地に移し奉つて然る後に戦うべきではござりますまいか。かゝること、准后の卿の御英邁、御聡明を存じあげればこそ、憚ることも知らぬげに、申し上げるのでござりまする」

「正義——」

そう云つただけで、親房卿は、たゞ眼を見はつた。虎夜叉につ

いての噂は、聞いていた。だが、あまりにも端的な、かほどまでの  
単刀直入は、まったく予想できなかったのだ。さすがの親房卿が、す  
くなくならず面喰らった形だった。

(初対面にもひとしい麿に対して、いきなり！)

後室と、そばに坐っていた助氏とは、

(あゝ、とんでもないことを云い出して！)

はらはらしながら、そう思つて、恐る恐る親房卿の顔色をうかごう  
のであつた。

京都の大軍が、近いうちに動くであろう、と聞いて、自ら兵を率い  
て出馬した親房卿ではあつた。河内よりも、まず危いのは和泉だ、和  
田の衛りを援けなければならぬというので、西方防禦の第一線へ乗り  
出してきた親房卿ではあつた。だが、そうした軽快な行動は、卿の精  
忠の至誠と、建武以来の環境なり、経験なりがあつたからこそとれた  
ので、位は准后、身は、かしくも、皇弟興良親王の御外戚という尊  
さにあるのだ。

將軍官と申しあぐる興良親王は、先帝の第八皇子にましまして、御  
生母は、この親房卿の姫ぎみであつた。だから、万機の補弼に任ずる  
大臣であると同時に、金枝玉葉にちかい身の上でもあるのだつた。

しばらく無言でいた親房卿が、

「行宮を東条の城へ、移し奉ろうというのか？」

と、たずねた。

「いえいえ、御遷幸をまず仰ぐとせば、穴生の地よりほかにはなしと  
存ぜられまする」

と、虎夜又が答えた。

「穴生？ 五条の奥地の——？」

「さよう。黒滝川の上流の地でござります。かしこは金剛の南嶺と相  
対する、峻嶮の要害でもあり、かつは楠の所領が、十津川の水源をな  
す峰々に接する場所でございまするゆえ、衛るには至つて便宜に富ん

でおりまする」

親房卿はうなずいて、

「不敗の地に立つて、戦うこと——いかにも一理はある。その見地を  
とらば、東条とて悪くはあるまい」

「東条のすぐ近くには、天野山金剛寺がござります。笠置寺の前例  
を想えば、場合によつては穴生より、さらに御動座を奏請仕ることも、  
許されようか、と考えられます。東条の城と申し上げたのは、その  
間の、ほんの臨機の、もしくは最も困難なる、最悪の場合をも、念慮  
にいられてのこととござりまする。無様なる言語の端々は、礼にならわ  
ざる未熟者の、足らわぬところと思召し下さりませ」

と、虎夜又は、丁寧に会釈した。

「あゝ、頭を上げられい」

不快な表情は、いつの間にか、すっかりぬぐわれていた。

「未熟者どころか。親房は教えられたぞ、正儀」

「恐れ入りまする」

「予は、御遷幸に関する意見を、初めて聞くことが出来た。むろん、  
思ひきつた論議ではある。吉野の公卿たちが聞かば、顔色を失うでも  
あろう。しかし予にとつては、傾聴に値いたぞよ。さりながら、お  
許の意見は、衛るに易いことにはのみ、重きをおきすぎはせぬか？」

親房卿は、聞きしにまさる麒麟児だと、そう感じながらたずねた。

### 三

助氏は、親房卿の部将たちを、ねぎらうために、表の書院へ出て行った。  
和田の当主、高家は、二人の弟と共に、五百の兵を従えて、正行の  
麾下にあつた。そして、瓜生野、天王寺の戦後は、中河内の往生院  
に陣を構えていた。で、三人の甥が、そろつて不在だったから、助氏  
は、この槇尾城と岸和田の防備を、一人で指揮しなければならなかつた。  
ところへ、北畠勢が吉野から、援兵としてきてくれたことは、ありが

たかった。この城は北畠勢にまかせて、自分はおつばら、岸和田を衛りうるようになったからだ。

助氏は、親房卿の気色も、すぐ直ったようだし、虎夜叉には深く心服していたから、案ずることもあるまいと思つて、その場を辞したのであつた。助氏が去つても、親房卿と虎夜叉の問答はつづいた。

親房卿のそばには、後室が侍つていた。虎夜叉のそばには梶丸が坐つていた。

「それは領ける」

と、親房卿は、さかづきを、高杯において、

「衛ることに不安があつては、進撃が鈍るという——それは妥当の論じゃ。なれど、この正儀。なるほど不敗の位置に立つことだけは出来ようが、果して、進撃が可能かとなると、予は悲観せざるを得ないのだ。敗れずに、衛りおゝせたにせよ、それは勝つたことにはならぬし——」

太息がもれた。

「御悲観なされますな」

と、虎夜叉が云つた。

「師直、師泰の軍勢は、およそ、どれほどであろう？」

「およそ、十万と申します」

「おゝ十万！」

「うち八万は、南下すると思われまする」

「八万の大軍に押寄せられては。お許ははげましてくれるが、悲観せずにはおれぬぞ。進撃はおるか、いかにして拒ぐかじゃ。——

八万は確実の数かな？」

「ほとんど確かと存じます」

「すると、未曾有の大動員じゃ。——お許に防禦の成算が、あるのか？」

親房卿は、今さらのように不安をおぼえた、来寇すべき賊軍の兵力が、予想の倍以上でもあつたからだ。

「吉野の防禦が、覚束のうござります」

と、虎夜叉が答えた。

「もし、御遷幸を仰げるとせば？」

と、親房卿が問うた。

「仰げるとせば、充分に成算が立ちます、のみならず逆に、進撃して敵の背後をおびやかす、やがては京都をも占領し得るかに考えられます」

「なに、京都を占領し得ると？」

「錦の御旗を京都に進めて、朝敵を畿内のそとへ、追い散らせましようぞ」

「おゝその言は壮烈じゃ。聞くだけでも、心がおどる。たゞし、それは理想だ。否、空想じゃ。我々のいまの力ではのう——そうありたいという夢ましい望みに過ぎまい！」

親房卿は、やゝ老衰のたゞよう顔を、うれわしげに曇らせた。そして眼をふさいで、嘆息を、いくたびか洩らした。

「准後の卿、けつして夢ましい望みではござりませぬぞ」

と、虎夜叉が云つた。だが、親房卿は、かしらをつつて、

「我々は、南山を衛り得れば、それでよいとせばなるまい。心ひそかに予は、朝敵のうちわに内乱が起るであろうことを待っていた。しかるに師直は、十万の兵を動員して、八万の大軍を戦線に送るといふ。師直にその力があつては、予の期待は、空頼みであつた。——つねに北闕をのぞむ、と仰せられた先帝の御霊を、あゝ我々はついに安んじ奉ることが、出来ないのだ！」

涙の粒が、燭に光つて、はらはらと直衣の胸へこぼれ落ちた。

「おゝ！ 北畠の卿、お心強うあらせられませ。幕府の内訌は、遠からずきつとおこります。師直が、直義、直冬と争う時こそ、我々が大きい朝敵を破り得る時でござります。そして直義、直冬が、師直に勝つて、さらに尊氏、義詮父子と相闘ぐとき——その時こそ、我々が、京都から逆賊を追落し得る時でござります」

虎夜叉の声に、ふしぎな力づよさを、親房卿は感じた。

「正儀——。そうした内証さえ、起つてくれたらばのう！ 北闕の回復も、あなたがち夢想ではあるまいに」

「鳳輦を、大内裏へ、還御あらしめ参らせんがためには、敵に勝たねばなりません。敵に勝たんがためには、たゞいま申したような内証を、かならず起らしむることを要します。しかも、その内証——その内乱を必至ならしむべき手段が、さいわいにも、かく申す虎夜叉にござりまする」

「なんと？ お許に、その手段が？」

驚異の目を、みはらずにはいられない親房卿であつた。

後室は、わが子をながめていた眼を、親房卿の驚きの顔へうつして、それから又すぐ視線を、わが子へ戻した。

（やんごとない准后の卿の御前で、それほど断然と云えるなら、よほどの自信があるにちがいないが——。たいどんな謀計なのだろう？

親房卿にだけは、ごくあらましかでも申し上げるつもりなのであるうか？）

そう、後室が思つたとき、虎夜叉は、

「ござります、謀計が」

と、答えた。

「お、さような謀略が？」

「それがしをお信じ下さりませ。——謀計の仕組みは、わざと申し上げませぬ」

「うむ」

と、親房卿がうなずいた。

「なにとぞ結果を、御期待あらせらるゝよう！」

「うむ」

と、ふたゝび親房卿が、さも満足そうに頷いた。そして、  
「正儀——。予はお許に、ふかく期待するぞよ！ 謀略の規模は、聞

かずともよい」

そう云うと、虎夜叉は頭をさげた。

「かたじけないお言葉でござります」

虎夜叉は、親房卿の器のおゝきなことを思つたし、親房卿は虎夜叉が、はるか超凡な、俊髦の材であることを感じて、異常な頼もしさをおぼえた。

（亡き正成は、智謀の人でもあつた。正行は、父の純情は遺憾なく享けついでようだが、智略は嗣子に伝わらずに、末子正儀に遺伝したらしい。いま、足利に内乱を、必至ならしめると断言したが、——とても尋常な手段で出来よう筈のないことを！）

「お酌させて頂きます」

と、後室が瓶子をとつた。

「寒さには酒が何より」

杯をほして、後室につがせながら、

「すぐれた子を、持たれたのう」

と、親房卿がいった。

「父に肖ぬ子でござりまする」

後室が、そう答えたとき、虎夜叉が、

「准后の卿——」

と、呼びかけて、

「兩三年のうちには、きつと京都を回復することはかないましようが、果して長く保ち得るや否やは、予想がつきかねます。もし京都を保ちがたくば——その暁には、恐れおゝいことながら——」

「うむ！」

と、親房卿は高杯に、杯をおいた。

虎夜叉はつゞけて、

「ふたゝび南へ行幸を仰いで、第二段の策を講ずるほか、あるまじと存じまする」

と、云った。

「む。して第二段の策とは？」

と、親房卿がたずねた。

「京都を捨て去る時に、北闕より、萩原の法皇はじめ持明院御統のおん三方を、南方へ移しまいらせませする」

「おゝ！」

おもわず叫んだ親房卿だった。そして、

「北闕の御三方を、こなた方へ！」

「南へ、御遷座あらしめば、こなたは非常なる強味を加えましようぞ。」

「む、それこそ、まさに最上策！」

「しかる後に、あるいは戦い、あるいは折衝仕らば、南と北の御両朝を、本然のおん態に御合体なさしめ奉ることも、あえて不可能ではなかるうかと考えられまする」

虎夜叉正儀は、はじめて自分の、遠大な抱負を披瀝した。

「おゝ偉大なる念願じゃ！」

と、親房卿は、双眸をかゞやかせつゝ、

「あゝ正儀っ！」

ふかい感銘の声であった。

後室も、心のなかで、

（おゝ！）

と、叫んだ。にわかには、わが子の顔が、崇高くながめられた。

## 師直出陣

淀から、西へ京街道を、また八幡からは南へ、高野街道を、朝まだきには太い霜ばしらを踏みくだき、陽がのぼってからは、その霜のつけ水にぬれかゝった土と枯れ草を、武者草鞋にふませ、午後は泥をはねあげ、はねとぼしつゝ、だが霜はとけても北河内と大和の国境の山脈から、吹きおろす寒風に、鼻を赤々とそめて、戦うことよりは露宮の冷さと、女の不自由さとを、よけいに頭においたりして、雑兵や下郎は、侍烏帽子に、半頭を頬にあてたり、額鉄のついた鉢巻をしたり、みんな胴を着て、鞘巻を提げ、草摺だけは、ひとかどの兵なみに鳴らして行進した。兵が、弓隊、薙刀隊、長巻隊、槍隊と、それぞれ隊伍をくむ大部隊もあつたが、それらの武器をこつちやにかついだ小さな部隊も多くまじり、兵の間あいに土が挟まり、矢種や、楯や、幕、雨覆、兵糧、水樽というような軍需品をはこぶ馬と、輜重の卒がつゞき、そして名の聞えた士が騎馬で進み、部隊々々の将は、兜、鎧、乗馬の鞍などに好み好みを見せ、一陣の大將は、ひととき遅しい馬にまたがり、郎従の兵にかこまれ、旗士に旗差し物をかゝげさせ、あとから乗換え馬をひかせ、唐櫃や胡牀、敷皮のたぐいは、役夫になわせ、陣鉦、太鼓、法螺貝の役侍を従えて、各陣がやゝ間隔をとつたり、とらなかつたり、陸続と前進するのだった。

京街道を、淀の川水と共にくだるのは、師泰を総大将とする二万の大軍であった。

ゆくては渡辺、天王寺、住吉。まず堺浦を扼して、楠の作戦の根拠地である東条を、側面から衝こうとする遊撃軍が、それであった。

高野街道を、中河内へむかつて南下するのは、師直を総帥にいたたく五万の大軍であった。むろん、これが南方攻めの本軍だった。

十一月二十六日午前、瓜生野合戦は、山名軍が全滅にもちかい負け方をしたし、午後の天王寺合戦には、細川軍が、仲秋八月、開戦の

初っ端に菅田の森で夜討ちを喰らって、惨敗したその恥を雪ぐために、瓜生野からの敗兵、赤松、佐々木隊をも糾合して、こゝを先途とたゝかったが、楠兵は和田助氏の新手で死傷者を補って、鋭鋒はますますするどく、ついに細川軍はやぶられて渡辺の川へ、追おとされ、中之島の岸は死骸で埋まり、渡辺橋は痛手負いの躰でふさがってしまった。この午前午後二度の大敗、戦死者無算、兵衆逃散のしらせで、京都は色を失って震撼した。いまにも楠兵が攻めこむような流言蜚語が、とびまわり、毎晩、どこかで火事があり、十二月十日の夜は、仙洞御所にちかい持明院北大路の、松殿忠冬卿の館が焼けたし、その翌晩は武家の屋敷のおゝい六条が焼けた。高師直は、東海、東山、北陸、山陽の四道から、兵を京に集めていた。兵馬が、あまり夥だしく洛中に入りこんだからの、火災でもあったのだ。寺という寺には、祈禱の声のみちみちた。ついに歳の暮もおし迫った二十四日に、師泰は先発して淀に陣どつたし、師直は翌々二十六日、嚴寒の暁を冒して京都を發つた。そして男山に陣を構えた。で、淀川の兩岸には、兵と馬と軍需品があふれた。師直兄弟は、こうして陣中で越年したが、あけて正平は三年、あら玉の正月二日という今日、いよいよ南下の大行軍となつたのであつた。

安芸国の武田氏信が、男山へ着到したのは、きのう元旦の夜がふけてからだったし、きょうもなお、參陣の途をいそいでいる將兵さえも少くなかつた。まったく、この高兄弟の大行軍は、兵力の実数から云つて、十三年前に尊氏兄弟が九州から押し上つた時のいきおいをも凌いでいた。

偵察隊の隊長の馬が、馳せてきた。

師直は、馬上で、

「敵は？」

と、きいた。

偵察隊長は、馬の首をめぐらして、総帥の乗馬の馬腹に併行させつゝ、

「は。細作の復命に候う。敵將正行の本陣は、依然、往生院より動きませぬ。麾下の兵数は、わずかに一千五百」と、云うと、師直は大きく頷いた。

「む、動かぬか」

「平岡莊司、丹下兵衛らの別隊とて、五百にたりませぬ」

「東条の、正儀は？」

「城より動く気色すら見えませぬ」

「北畠の伊勢の兵は？」

「親房卿に従つて吉野から、和泉、槇尾山へ参つて、和田の兵を援けて城を、かためておりまする」

「隆資卿は、どこじや？」

「四条卿は、大和路の竜田にあつて、僧兵、山伏、野伏を率いてござります。暗峠をふさぐ心と見えまする」

「暗峠に、楠兵はおるか？」

「吉野衆、初瀬衆、十市、十津川、熊野などの野伏ばかり、烏合の徒輩でしかござりませぬ。正行正時の陣の附近には、たゞ飯盛の城に、恩智の三百が籠りおるのみで、枚岡から彼方、富田林までに、敵は一兵の影もみせませぬ」

「よろしい」

偵察隊長は、会釈をのこして、馬を前方へ駆けさせた。

師直の乗馬のすぐあととは、稚児を乗せた馬で、そのあととは、三挺の塗輿だった。三人の愛妾がのつていた。兵馬控働のあいだにも、女をそばから離し得なかつたのである。輿のあとには、股肱の重臣、上山修理亮高元がいた。この修理亮は、年齢はすこし下だったけれど、容貌、体格が、師直に非常によく似ていて、うっかりすると見わけがつかなかつた。

うしろをふりむいて、師直が、

「上山つ」

と、呼んだ。

修理亮は、馬を、師直の馬側にすゝめた。

「なんとかいいう寺があつたな、飯盛山の下に？」

「はい。慈眼寺と申す」

「その寺に、わしは陣どる。すぐに伝令を走らして、武田に、――

氏信ではないぞ。甲斐の、信武の、命をあまり惜しがらん奴らに、平場の陣割をな。それから河津と、高橋を、さつそく城へかゝらせい」

「飯盛攻めでござりまするか？」

「そうじゃ。敵に後詰めさせるのだ。おびき寄せせるのだ。県は、城攻めには加わらずともよいが、陣だけは山の南尾崎にとらせろ。それから――佐々木の道管に、生駒の西ふところまで、進めと伝えさせい」

「は」

上山は、馬をとめて、後ろへ叫んだ。

「伝令っ」

## 二

飯盛城の守将、恩智興武は、山頂にたつ城の櫓から、脚の下の、くろい闇のなかにきらめく篝火のほとんど無数の光を、ながめおろしていた。

葉が茂っていたら、視野をさえぎるであろう樹々も、冬枯れの丸坊主だった。とおい原から、ちかい麓にかけて、幾重にも、横だけでない、また縦にも幾条ともなく篝火の列がたらなつて、ちかいほど火影が、あかく、おゝきく、一ばん近い西尾崎の、城の大手への登り口と、搦手の南尾崎とでは、まるで山火事のように燃えさかつて、裸の雑木ばやしや、杉森を背負つた民家やを照らしたし、そこに露営を張つた陣の、幕や旗の紋所までが、おぼろに見えそうでさえあつた。

櫓の梯子を神宮寺正徳が、のぼつてきた。

「うしろは、峰つゞきで室池をひかえている。水に心配はないの」

そういう、正徳は、千早城をあずかる太郎兵衛正房の弟で、この飯盛山守備の副将だった。

「ないとも。兵糧は充分だし、先殿の御智謀に倣つて、巖石は、うんと集めてあるし――」

と、興武が答えた。

「兵は三百でも、強いぞつ！」

正徳は、無数の篝火にむかつて呶鳴つた。

「だが、心にかゝるのは、往生院に在す館じやて、のう正徳」

楠の老臣、恩智左近満一の次男の、その子が、興武であつた。祖父も、父も、すでにこの世にいなかった。満一の嫡孫、すなわち興武には従兄にあたる正一は、紀州小沢の城主で、去年の暮からは東条につめていた。

神宮寺の弟らしく、正徳が、

「恩智――。勇んで在そうぞ、館は」

と、鋭くいった。

けれども、興武は、かぶりをゆすつた。

「まさか、この譬えようもない大軍を、野つ原で、むかえ撃たれもなされまい。先だつての瓜生野、天王寺の時とくらべたら、敵の兵力は、十倍か二十倍かわかりはせん」

「しりぞいて、千早と東条をまもるほか、ないと云うのか和殿は？」

「そのとおり」

「ふ。一死尽忠、先との後、追わせらるゝお覚悟は、すでに去んぬる桜の頃に定まつたのだ」

「正徳――。だから心にかゝるのじや」

興武は、年は二十一歳でも、気持は老成していた。

憂え顔は、闇のなかでも、正徳に感じられた。と、正徳自身も、たまらなく、愁わしくなつてきた。

ふたりは、黙々と、梯子を下りた。そして土を盛りあげた胸壁や、

立木を板囲いでつらねて矢狭間を設けた防牆などの、側を通りぬけて、兵舎へちかづいた。

兵舎の前には、篝が炎を夜嵐にゆるがしていた。篝のぐるりの地べたは、きびしい余寒のために白く凍っていた。そこには、武器や、いろんな籠城用材が、雑然とつまれていた。兵はみんな張りきった顔で、切迫した防戦の支度にいそがしかった。物頭の士に喚かれたり、てんでどなり合ったり、搦手の方へ物をはこんでゆく者もあれば、闇のなかで何か叫んでもいた。

「睡りが足らんでは、闘えない。——正徳、おぬしから一言、籠城の心得を申しわたして、はやく兵を寝かすようにしてほしい」

興武は、そう云いすて、兵舎の奥へ、暗澹とした気持で入って行った。

「物頭の者、あつまれっ」

と、正徳が呶鳴った。

組々の頭たちが、並んだ。誰れかど、

「砂囊組っ」

と、呼ばわった。どこかで、

「石組っ」

と、叫ぶ声があった。

やがて、もれなく物頭はそろった。正徳が、心得を訓示した。

「この城は、むろん千早ほどの要害ではない。だが、城に籠って闘うつよさは、我々の誇るべき伝統だぞ。明日にも敵は寄せるだろう。寄せたら、岩石を落す。近づいたら、砂囊で目潰しを喰らわす。大兵を怖れてはならんぞ。正成の殿は、天下の大軍を、千早の城ただ一つでふせがれた。いま我々は決して孤立の城を守るのではない。千早、榎尾という要害のほかに、東条の堅い城がある。安んじて闘うがいぞ。戒しむべきは意気の沮喪だ。わかったか？ わかったら、兵に、ぐっすり睡らせる。終わり」

正徳は、申聞かせをすまずと、自分も兵舎の奥へ入って行った。

兵糧庫のそばに、城将と自分とが起臥する小さな建物があった。

火桶のなかは、さっき二日分の炊出しをやった薪の、焚き落しだったから、もう灰ばかりにとぼれていた。その火桶の前に、興武はまだ具足のまゝ坐って、うす暗い切燈台の灯を、みまもっていた。

「脇楯をぬごうか？」

と、正徳がいった。

興武は、それには答えずに、

「おぬしは、いずれのお気持へ、頭を下げる？ もちろん、一時の感情からはなれて、冷静に考えてだ」

と、いった。

だが今度は、正徳の方が答えずに、じいっと相手をみつめた。

「どうじゃ？」

しばらくしてやつと、

「おれは、冷静にかんがえる余裕などは、ないぞ」

「感情からは、さもあるう」

興武は、そういって、餅と勝栗の載った三宝へ、手をのぼした。ほんの形ばかりの床に、注連飾りが戦時匆忙の松の内を寿いでいた。勝栗をつまんで、

「虎夜叉の殿と、おぬしの兄者は、こりやとてもそり、が合わん。おぬしとて、乙殿へは、含むこともあるう。だがの——」

「恩智っ」

と、神宮寺がさえぎった。そして俄かに眼をかゞやかせて、

「おれは、尾根づたいに生駒に出て、往生院の御陣へ、参じようと思うのだ」

「この城を棄てるか？」

「城は、和殿がおる」

「おぬし一人で行くというのか？」

「いや。百人ほど兵がほしい」



「兵は遣れん。一兵たりとも遣れん」

「なに？」

と、正徳は、きつとなった。

「わしには、この城を守る責任がある」

齡は若くても、城将だった。

「恩智っ！ 一人二人が馳せ参ったとて、お役に立つか？」

と、正徳が叫んだ。

「しずかに申せ」

「えっつ、館御一期の大事だぞっ！」

がぜん、亢奮が顔色を蒼白にした。

「お役に立つ立たぬからいえば、この城を、空にして参ったとて、お役には立たん。しかし飯盛の城が、かくいう恩智自身の城ならば、たといお役には立たぬまでも、この興武、兵をこぞつて馳せさんじもしよう。だが、わしは、楠館から城をあずけられているのだ。のう神宮寺。おぬしとても、やはり同じ立場ではないか？ みだりに城を脱して、それを潔よしとするのか？」

「むー！」

正徳は、口をもぐもぐさせたが、自分の気持を云いあらわすべき言葉が出なかつた。

葉が出なかつた。

興武は、憂鬱な表情で、勝栗をかんだ。

## 往生院訣別

### 一

夜は、寒々とふけていた。

だが、東条城内、玄々寮は、明るく燈火の入っている室が、おっかつた。でも、その明るい室々には、ほとんど人がいなかった。

近習の梶丸は、まだ自分の寝部屋に退がらずに、中河内の地図面を、熱心にみていた。

と、母屋からの廊下に足音がきこえた。梶丸は、図面から顔をもち上げて、火鉢のふちに手をおいた。

この寮専属の使番だった。

「梶丸どの。往生院御陣から只今、このお手紙が——」

状笥を、梶丸はうけとつて、

「館さまよりのお手紙か？」

「さようでござる」

「持参の使いは、御返書をお待ちであるであろうの？」

「いえ、お使者はすでに、還つたと申します」

「む。では、退がってよかろう」

梶丸は、広縁から、衆妙房の次の間の入側まで入って行って、低い声で、

「もし。幾波どの」

と、呼んだ。そして少し間をおいて、やゝ高く、

「幾波どの」

襖があいて、幾波があらわれた。

「只今、往生院御陣より、館さまのお手紙が到来いたしました」

そういうつて、梶丸が状笥を、幾波にわたしたとき、

「御陣から、お手紙？」

つぶやきつゝ、虎夜叉が出てきた。そして、

「開けい」

と、差しのべた手へ、幾波は、笥から出した手紙をのせた。

正儀は、それをひらいた。

目が書面を走るうち、頬の筋肉がびりびりつとふるえた。幾波と梶丸は、呼吸をとめて、正儀の顔をみつめた。

さつと、あきらかに顔色が動いた。正儀の蒼くなつたのを、ついぞ見たことのない幾波も梶丸も、突嗟に、

(あつ！)

なにかは知らぬが、二人とも真つ青になつて、ぶるぶるふるえだした。読みおわつても、虎夜叉は、まるで目を吸いつけられたかの態に、じつと書面を見つめたまゝでいた。

「との！」

「殿っ！」

二人は、おろおろ声で呼んだ。

けれども虎夜叉は、なおも無言の凝視をつゞけていた。

本当に物事に驚いた顔、真から困つたという顔を、おみせになつた例のない(わが殿が!)と思うと、幾波は怖しくなつた。

(——高師直が男山へ出馬したとお聞きなされて、さつそく往生院の御陣へ、兄ぎみをお訪ねになつたのは、暮の二十八日のこと。お帰りあそばして、あゝこれで、俺も安堵ができたぞと、そうおっしゃつたのに。——それからわずか六日目のきよう? もつとも昨日は、師直の五万とやらの大軍が、大海嘯のように飯盛山のふもとまで寄せてきた。でも、とのは、さまで御屈託も、おありなさらぬかにお見うけ申した。それが——?)

幾波が、そんなふうを考えわづらつた時、正儀は、口のうちで重苦しく呻いた。そして、

「あゝ！」

と、歎息の声をもらした。

## 二

居間の手文庫に、兄の手紙をしまつと、虎夜叉は、  
「鑑下」

と、幾波にいった。

「あれ！」

「持つてこい」

「はい」

幾波は、納戸へ走つて行つて、みだれ箱の一つをかかえてきた。

虎夜叉は、臥所着の小袖をぬいだ。

「梶丸。——小具足をもて」

「はあ」

梶丸も、納戸へ走つて行つた。

よろい直垂を着せかけながら、幾波が、

「あの——御出陣でございませるか？」

うかざうと、虎夜叉はうなずいた。

袴の紐をむすぶと、菱烏帽子をかぶつた。そして小具足を運んだ梶丸へ、

「出陣の鐘を鳴らすように」

と、言いつけた。

大変なことになつたと、顔をすっかり硬ばらせて、梶丸は廊下へ走り出た。

虎夜叉は、小具足をつけ始めた。幾波のあたまのなかは、五万の敵、おゝ津波のような大敵、ということばいでたつたし、胸のうちの早鐘は、城の櫓で出陣の鐘がなる前にもう、はげしく鳴りはためていた。

「殿！」

そのとき、入側から顔を出したのは、折鶴と、伽羅作だった。梶丸の足音で、眠りをさましたのである。伽羅作は、きよう日が暮れてから、この女々寮へ、住吉に殺到した師泰の大軍についての情報をもつて来たのだつた。

折鶴が、幾波へ、

「夜も更けましたのに、そのお支度は？」

と、きいた。

「折鶴どの。殿には、御出陣じゃぞえ」

「えゝつ？」

「え、御出陣とは？」

と、唐土屋も、愕然と虎夜叉の身支度を見なおした。

近習の一人の、何か叫んでいる声が聞えてきた。寂とした寮も、にわか騒めきた。

梶丸は、邸の母屋の廊下をはしりぬけて、城の大広間へはいった。もう真夜中だというのに、あかるい燭をいくつも灯して、炭火の赤々とした火鉢をとりまきつゝ、城内の重立った人々が二十人ほど、おききな声で、想像も出来ぬほどの大軍が来襲したことに、しきりに語り合っていた。たれも湊川の合戦は知らないから、五万の敵兵と口には云つても、どれくらい夥だしいものかとても実感には来なかつた。けれども、北河内から中河内への原野は、兵馬と劍戟で埋まっていた。にちがいなと思うと、とても睡れそうになかつたし、往生院の陣払いが、明日にのびたらしいので、そのことも気がかりだつた。いまの使者は、それに関わつた報らせをどけたのだということだけは想像されたけれど、さてどういふわけから、後れたか？ 話の題目はそれであつた。

「御出陣でござる。即刻、御出陣でござりますぞつ。高櫓の鐘を鳴らせという、お申付けでござるぞ」

そう梶丸がいうと、恩智正一が、

「おゝ、御出陣！」

と、叫んで突つ立った。みんなが突つ立った。

「御出陣、御出陣っ！」

おもわず喚く安西九八郎の声に、

「わあーっ！」と、人々の声々が和した。

「鐘だ、鐘だっ！」

と、香月権太が広間から廊下へ、走つて行つた。

### 三

東条の城の高櫓で鳴らす早鐘のおとは、この櫓を中心に、およそ半里の半径でえがく円周のうちがわにある城と出城と砦へひびいた。そして出陣を知らせる非常召集のこの鐘の音きいた上、下、両赤坂の城、若山の出城、夫山、榎の砦、竜泉の城、甘南備の柵、桐山、光明寺の塞——それらはまた各自に、太鼓をうった。法螺貝を吹いた。

鳴りひびく太鼓と貝は、附近在郷の士の屋敷へ、兵卒の家ごとへ、出動をうながした。たちまちのうちに、南河内の寒夜は、深更のしごまを破りつゝざわだつた。下郎は物具をつけて卒となつた。下士は胴巻に得物をとつて兵となつた。上士は、甲冑、馬にとびのつて、武者となつた。そして武者の馬の尾に、兵と卒とがついて、柵へ、塞へ、砦へ、城へと走つた。

城から、砦から、塞から、柵から、将が兵卒を従えて親城、東条へ、東条へと集まつた。集結は、わずかの時刻でおわつた。三千五百の兵が、城の内と外とに群れた。大手には大篝火がもえたつた。

墨の石と、墻壁の土と、空濠の柵材とが、篝の火影にうつつて、黒い闇から浮いた。馬がいなく、人が叫んだ。

城内の会所の大広間に、将が居ならんだ。——恩智正一、橋本正意、志貴右衛門、矢尾新太郎、宇佐美成時、香月、安西、生方など。

「いやに重かつたぞ、乙殿のお尻は。だが、やつと火がついたのう」  
聞えたらなおいゝという、大声で、上赤坂の城からきた志貴が云つた。

「火をつけたのは、誰れかな？」

と、下赤坂からきた宇佐美が笑つた。

「それは敵だ。師直の大軍だ」

と、若山の出城の将、矢尾が応じた。

「ちがうぞ。やはり館じや。館の殿が、火をおつけになつたのだ」

志貴右衛門がそう云うと、宇佐美が、  
「後詰めに、出渋ったのが、間違いじや、敵を見て怖れるということは、  
楠魂いの冒流だ」

と、急に気おい立って叫んだ。志貴が、  
「正成の殿の御精神へ、反逆するものだつ」と、競うようにどなった。

「百万騎の敵といえども、われ行かん！」

負けぬ気で、矢尾新太郎も叫んだ。

「方々つ」

「亢奮が過ぎるぞつ」

橋本と、恩智が制したとき、

「なに？ 何が過ぎるつ？」

志貴が、むき直った。恩智が、

「変化自在、その機に應じて進退するのが名将だ」と、  
虎夜叉を支持した。

「買い冠るなつ」

宇佐美が、わきで呶鳴った。

#### 四

「それがしは是非々々！」

「手前はあくまで！」

「拙者だけは、せめて！」

「乙殿つ」

「どの！」

「この方は——」

「湊川のお弔い合戦に——」

「え、許さぬ、許さぬと申すに！」

と、虎夜叉が叫んだ。

「この正儀、兄上から裁量を委されておる。各々、よく聞けよ。いま  
命じた部署を、かたく守って動かぬことが、畏きあたりの御軫念を安  
んじ奉るべき筋じや。——恩智、おぬしは富田林の辻を固めて、もし  
も兵を進めんとするものあらば、容赦なく遮れ」

「は。承わった」

「橋本、おぬしは、水分へ参つて、我々が敵に追われつゝ退いてきても、  
母上には御懸念、あられぬように申し上げて、それから寛弘寺の北坂  
を衛つてくれ」

「畏まってござる」

「やあ乙殿つ」

と、志貴右衛門はよばわつて、

「退くとは？ 我々とは？ 何事か、何人を指す？ 誰れを指さるゝ  
のじや？」

「志貴、哮ぶな！ 我々といつたは、館の兄上と次郎兄、ならびに  
虎夜叉がことじや」

「いかでいかで。決死の覚悟に在せばこそ、五万の大敵が、二里の間  
近にせまっても、自若として往生院を動かたまわす」

「それを動かすために、戦線を石川礮、菅田の森以南の線まで退かす  
ために正儀が行くのだ」

「そう力づくよく言いきつてから、  
「兜」

梶丸が、銀の虎がしらの兜をさゝげた。

虎夜叉は、それを被った。

五

往生院の、小書院の濡縁の柱に、もたれつゝ正行は、生駒山の頂き  
をながめていた。

室内は、ともし灯で、夜のまゝに照らされていた。庭はまだ真つ暗

だった。霜の白ささえ見分けられなかった。風はなかったけれど、空気は膚を凍らすように冷たかった。容易にこなかった黎明が、北東の連山のむこうにやっと近づいた。その、ほのかな、払暁の色を、正行はみつめているのであった。

次郎正時が入ってきた。

「飯盛の西尾崎が、もう一晌も前から、ひしめいておると申す」

「師直は動くかな、今日？」

「さあ、今日は？」

「動かば、雌雄を決するのみじや」

と、正行がいった。

「動かずば？」

と、正時が問うた。

「明日を待つて、こなたから挑む」

と、正行が答えた。

正時は、眉を昂めて、颯爽とうなずいた。

こんどは兄が問うた。

「虎夜又は来るであろうか？」

「参りますとも。よほど御用心がのうては、此間のように彼の壺へは

まりますぞ」

「彼の考え方、彼の言葉には、おそろしい魅力がある。彼には魔法使いのようなところがある。すくなくとも俺には、そんな気がする。此間も、話しているうちにいつかしら、魅惑されてしまった。だが、もう大丈夫じゃ。昨日まで六日間、あらゆる見方から、あらゆる考慮をついやした結果、昨夜の手紙を書いたわけゆえ、どんな魔法を虎夜又が用いようと、もはや動かぬ」

そういった時、襖の彼方で、大塚惟正の声がした。正行が、

「呼んでおるぞ」

と、弟に云うと、正時は出て行った。大塚は、楠の和泉守護代であった。

正行は、いま弟が話のあいだに押し近づけた火鉢に、手をかざしつつ、ふたゝび生駒の峯へ目をやった。山の背の空が、だいぶ暁めてきた。

生駒の背後は北大和の平野だ。おなじ大和でも、吉野は南の山峡だから、ずいぶん距離があるのだが、ふと正行にはその距離の觀念が消えて、すぐその峯のそとが吉野のように感じられた。正行は、かたじけなくも、天顔に咫尺し奉りえたありがたさに、しみじみと心を浸した。参内したのは十二月二十日であった。師直の動員した兵が京の内外に充満すると聞いて、おん暇乞いの意で、吉野へ赴いたのである。優渥なる、勅諭を頂戴した正行は、感泣した。心ひそかに、禁裡に永訣しまいらせてから、先帝の御陵に参拝して、素懐をとぐべき日も近いことを、冥々に申し述べた。それから蔵王堂に詣つて、過去帖に、共に戦死すべき宗徒の人々の姓名を、自分と正時の名の下に書きつらねさせた。そしてその奥書きに、「返らじとかねて思へばあづさ弓なき数にいる名をぞとむる」と詠んだ歌を、書きとめた。親房卿はずでに、和泉の和田助氏の城に迎えられた後だったが、四条卿とは膝をまじえて、暗峠の大和口の防備なども協議した。日野邸をも訪ねて、弁内侍が悲恋のうれえは癒すべくもないけれど、まだ世も捨てずに寂しく宮仕えしつゝあることを告げられた。——正行は今、そうした吉野の一日を、おもい泛べていたのであった。

(あの——過去帖に書きとめたことが——)

正行は、やゝ自分をあざわらうように、苦笑いを洩らした。というのは、もし、虎夜又の言うことをきいて、この大敵と逢いながら退いて命をながらえたなら、蔵王堂での行為はまったく無意味だけでなく蔑まるべきである、そう思われたからだ。

「兄上」

正時が、また入って来た。

「太郎兵衛が参った」

「おゝ来たか」

広間から、特徴のある大きな声が聞えた。

「館っ！ 神宮寺は、泣けましたぞや！」

幅ひろい肩を、がく、がくと傾けながら、大跛が小書院に現われた。湊川の生記念が、第二の湊川で身を死記念にするために、千早から、闇夜の路をいそいで、日の出前に早くも着いたのであった。正行の前に手をついて、

「うれしくて、泣けまする！ 正房は、正房は今日の日を、どれほど待ちましたことか！」

傷痕、痛ましくも醜い顔に、太い泪のすじが匍つた。

「昨夜夜中にお知らせを、いたゞいたその喜ばしさ——御推量下されい！」

「太郎兵衛、その脚でも、闘う心か？」

正行も眼に、熱いものをたゞえながら云った。

「殿つ。脚がなかるうと、手がなかるうと、戦さは出来る」

「む。よく言ってくれた！ その気魄なくば、五十倍の敵とは戦えない。

正行は、必らず師直の首を討ちとるぞつ！」

「おゝその御気慨、その御気慨つ！」

主従の見合わず眼と眼に、泪と泪が光りあつた。

「湊川の戦さ闘ってきたおぬしに、合戦の案内、頼むぞよ」

「及ばずながら」

太郎兵衛が、そう答えた時、生駒の峯のいたゞきが、ぎらぎらつ、と輝やいて、むらさきがかつた紺いろへ、黄紅と赤が、あかるくまじつた。正月四日の朝陽が、暁天の一角にさしのぼつたのである。

## 六

庫裡の奥の間では、和田新兵衛尉高家が、直垂の袴をくゞつて、脛当てをつけながら、

「この源秀。いまの正忠の話では、また乙殿が、来られるかも知れぬ

というが、迷惑千万だな」

と、いった。新發意源秀は、高家の弟で、兄と二つちがいの二十四歳——ひどく若い入道だった。

だが、六尺にちかい巨漢で、筋骨のたくましい荒法師だ。法師といつても寺入りをしたわけではない、感ずるところがあつての入道で、黒の法衣に、黒革づくめの小具足、黒鉄黒皮黒糸おどしの大鎧をきて、どっかりと大胡坐をかいていた。

「館が、お懲性もなく、お手紙などを遣られるから、よくない。命の惜しい者を相手にしておる場合ではないのだ。死にたくない人間に用はないはずだ」

「源秀。そう一酷にも云えぬぞ。あとの事もある」

「後なんどは、野となれ山となれだ。虎夜叉と助氏、鬼に鉄棒か、鉄棒に鬼か、とにかく強いことだろう」

「源秀、助氏叔父も細川を、天王寺から渡辺橋へ追つた時は、勇敢だったというぞ。また乙殿にも、菅田の森の働きがある。あれで、どちらも相当、精兵をもつておられる。」

「精兵かも知れん。だが、正義の、正しいという字の正兵ではない。」

「妻烏帽子に白絹の鉢巻をした新五郎正朝が、入つて来て、

「兄者たち。南尾崎の県下野の陣で、鬨の声があがっている」

と、いった。

この三兄弟は、湊川で死んだ和泉守正遠の子で、楠兄弟とは再従兄弟であった。

新發意が、つゞけて、

「乙殿にしる、我等が叔父の助氏にしる、大きな信念のもとに戦う人間が、どのくらい戦い得るかということ、を、てんで考えようともしない。彼等は、小理窟の亡霊にとつ憑かされている。小敵なら、勝てるから戦うが、大軍には、とても勝てぬゆえ戦わない。そんなことで大義が行えるか？」

「源秀。それはおぬしの云う通りじゃ。だが乙殿は伶俐者じゃ。たいした智者だぞ」

「智者かは知らねど、おれに云わすれば馬鹿だ。後世の嘲われ者になる。兄者——。楠家もこんどが忠義の仕納めだ」

「うむ。そうかも知れぬ」

「あとは、誰れか他で志しを、継いでくれるだろう。われわれ千五百人が、館のお供をして討死せば、楠魂だけは、永えに遺る。」

「源秀。正忠は、乙殿びいきのようだよ」

「そう新兵衛がいうと、わきから末弟の新五郎が、

「新屋敷には、庄五郎どこのという乙殿かぶれの青臭いのがおるから、そのかぶれが正忠にも伝染ったのでござろう」

と、云った。

「冥土の弥四郎殿が、お気の毒じゃ」

と、源秀がいったとき、大塚惟正と、関地良田が、もうがっちり武装して、室へ入ってきた。

新兵衛がまず言葉をかけた。

「良田——。よく睡れたか？」

「寝すごした」

「士気は？」

「旺盛でござる。将が熟睡できるほどゆえ、安心してござるわい」

## 七

朝日が、信貴山の肩にのぼったとき、虎夜又は、昨夜だしておいた騎兵斥候が、街道を馳せもどって来たのと出逢った。

恩智興武のこもる飯盛城へ、敵が夜明けまえから行動をおこしたというの、斥候の報告だった。

すると、生駒山の西麓まで進んできている佐々木道誉隊や、野崎の原に陣どった武田信武隊なども、南へ、往生院へ、いまにも、いや、

もうすでに、動きだしたかも知れぬ、と思ったので、  
「続け」

虎夜又は、鞭をあげた。

たちまち馬は、先行の数騎を越した。梶丸の馬だけが、追従した。越された供の騎馬武者たちも、おくれじと馬足を煽った。ひずめは霜

をけちらし、人と馬の呼気が白く、白くながれた。虎夜又はの長槍をもった兵と、弓をもった兵とが、せい一ぱいに駆けたけれども、徒歩では馬の速力におよぶべくもなかった。その他の兵は、なお後れた。騎と

兵の、へだたりは、見るまに増していった。

馬蹄のひびきに、路傍の、農民の住いでは、驚ろいて戸をあげた。とび出して眺めもした。虎夜又はの容姿を、それと認めて、歓声をあげ

もした。百姓や農夫どもは、大きな、もの凄合戦のちかづいたことを感じて、おびえたり、悲しんだり、憂えたり、だがさすがに楠の領内の住民ほどあつて、多くは勇みたつて、勢んだ。

虎夜又はの馬は、たてがみを、十三峠の朝嵐しに靡かせながら北へ、中高安から鏡塚を、はせ越して、下六万寺で街道から、右へ折れた。坦々として真っ直ぐにつづく街道すじとは違つて、右へ曲つてからの路は、

でこぼこの登り路だった。馬は、汗をたらしつゝ、そこを駆けのぼった。

この路の突当りは、生駒の前山である暗峠の南裾で、その山ふところ

が往生院であった。

路ばたに、ぼつぼつ兵が立っていた。

門前には、騎馬武者が、何十人かの兵と共に衛っていた。

往生院の境内は、樹木の幹に陣幕や、雨覆いが、張りわたされていた。空地という空地に、ぎっしり俄かこしらえの仮小舎がたっていた。あまり

大きくない堂や庫裡のぐるりに、それらの仮小舎から出てきた武装、半武装の兵が、犇めいていた。前衛は下六万寺村の、街道むこう

に宿っていたし、第二、第三隊は、上六万寺村の瓢箪山に陣どっていたが、本陣七百の将兵は、この広からぬ寺に、すでに一カ月も起臥し

ていたのであった。

寺の門をはいって、虎夜又が、梶丸と一しよに馬からおりと、兵は白眼でむかえながらも、色代した。

## 八

「いや、死ぬるべき機会じゃ。またとあるまじき機どきだ」

と、正行が云った。正時も、声をはげまして、

「正儀——。北と西、両路七万の逆賊が来寇したことは、湊川以来の大難であるぞ」

と、いうと、和田新兵衛尉が、

「乙殿つ。よし我々がごとごとく東条、千早にしりぞいて籠らばとて、敵は大軍、自由自在に、思う存分に、兵力を割いて、もつたいなくも吉野の宮居を、冒すことも出来ましようぞ。逆臣中の逆臣、師直のこつだ。不敬不倫をかえりみずして、軍馬を、宮闕に進めるかもしれない。さぬ。さ、怨敵師直の来襲に、一矢もむくはず、一剣も血ぬらず、指をくわえて、菊水の旗まいて、館の殿に水分へ、御退陣あれよと言わろのか？」

と、はげしい語気で、つめ寄った。

新兵衛尉高家のとなり、新発意源秀がいた。新五郎正朝がいた。楠弥一郎正忠がいた。次郎正時の下座には、神宮寺太郎兵衛がいた。大塚掃部助惟正がいた。関地良田がいた。後室久子の方の甥の、南江朝隆がいた。鹿路ガ原で働いた野田四郎と石擲丸がいた。築音寺の後陣から来た平岡荘司がいた。丹下兵衛次郎が、吉野衆の青屋刑部と私語しつつ、楠弥一郎のうしろにいた。その他の部将たちがいた。みんな鎧をきていた。書院じゆうに苛立たしい緊張が、みなぎっていた。

虎夜又は、和田へ、

「師直の来襲は、いわば館が招かれたのだ」

と、答えた。源秀が、破れ鐘声で、

「え、去年の四月、戦われよと云った御身自身を、おわすれかつ？」

と、どなった。

「御病症、御容態、やむを得ずとおもったゆえ、尚早、時機ならざる開戦にも同意いたした」

「や、や、夜又どのつ！」

激昂に、えたえぬように叫んで、神宮寺が指の欠けた拳を、空へ突きだしつつ、

「お手前が、お手前が同意しながら、招かれたとは？ 館が招かれたとは？ これ如何につ？」

と、曲らない脚をふんばって、拳を一度、わきへ引つ込ませてまた突き出した。

だが、虎夜又は、それを尻目にかけてのみで、正時へ、

「次郎兄——。年の暮れの二十八日にも、参ってそれがし、言葉を極めしことながら、館の兄上のお病患も、さいわい頼みに治らせられて、この分ならば憂うるに足らず。東条を楯として、千早に抛り、水分の山峡を固くまもって屈せずば、やがては京都に内乱がおこらずにはまい」

「虎夜又。またもそれ云うか。敵の内乱も久しいものじゃ。もうその言葉あきあきだぞ」

「いや近い将来に、かならず起る。鏡にかけて見るようだ」

「容易には京をはなれ得ぬはずの師直師泰が、げんに七万の大兵をひっさげて、迫ってきたではないか？」

「無理押しじゃ。そこが面白いのだ」

「なに！ 面白いとは？」

「細工はりゆうりゆうとやら、仕上げを御覧あれ」

「え、つ、今日は戯れ口、ゆるさんぞつ！」

正時はかっとなつて、弟をにらみつけた。

「戯れ言どころか、この虎夜又は、粒々、惨澹の苦心をその細工にか



けております。面白いとは、この場合、怖ろしくないという意味にもなる」

「怖ろしくなくば——なぜ戦わぬ？」

「そこでごさる。退いて衛り守らば、怖ろしくにあえて足らずと申すのだ」

「よしや水分は保ち得ても、——吉野を、吉野を、いかにして衛るか？」

正時は、逆徒の来寇に対して、行宮の地を、どうして警衛するかというのを、真つ向にふりかざした。

けれども虎夜叉は、ひるまなかつた。

「もちろん、それには、手段なくてはかなわぬことだ。たゞしかし、

此処では申さぬ」

自ら信ずるところありげに云った時、正行が、

「虎夜叉——」

と、よびかけた。

正儀は、仲兄から長兄の顔へ、視線を転じた。なにか言おうとした正行は、やゝ少時、口をつぐむようにして、季弟の眼をじつと注目した。

正儀もするどく、瞳をむけた。

「水分御退陣のお願い、いかゞござろうや？ 願うは——御退陣を願

うは、もとより一身の為めならず。また一家一族の為めにあらず。ひとえにこれ、至尊皇室のおんため、諸国勤王義軍のため、永久の長計

を策せんとする意にほかならず。——意、あまつて、語、たらざるを

憾みますぞ！」

だが、正行の唇は、きゆうつと結はれたまゝであつた。

正儀の兜を持って、書院の入側にいた梶丸は、内心ひそかに、嗚呼わが主虎夜叉の至誠は、なんでこれほど通じないのだろうと、泣きたい気持ちに浸るのだった。

「兄上」

うながすように虎夜叉が云つてから、なお、しばらくして正行は、

「生は滅する。かならず滅するものを執つて、永劫に不滅なるものを

棄てんとするのは、惑いだ」

と、答えた。

ふたゝび、はげしく瞳がぶつかった。正行が、かさねて、

「父上のお言辭に、現し身の限りある命を、われからぢめて、百千歳のながきに生き、後世、末代、国家非常時のつど、人の心をふるいたしめ、大君のおん為めに嚮うべき道を知らしめるのだ、とあつた」

そういうと、虎夜叉はすぐに、

「明らかならず、また暗からず、歴々として、また玄妙なり。あなたが父上の御解釈と、御実践とのみに即さずとも、道は考え得られましようぞ」

「いやいや」

と、正行は強く否定した。

「わしは父の志を継がねばならぬ。正行がめざすは大虚だ。空劫障礙なく、微塵私欲なき境地じや。そこへはたゞ、一筋、至善の道が通じておのみだ。至善すなわち尊王、尊王すなわち至善。わしは朝廷の

武臣として、この至善を行わんがために、朝敵足利、逆賊師直の大軍と決戦するのだ」

そういつて、正行は、末弟の顔を凝視した。

虎夜叉は、眼をつぶつて、うなだれた。

（あゝ！ 兄者は、兄者の道へ——）

しばらくの間、誰れも、何も云わなかつた。

その沈黙を、新発意源秀のふとい声が破つた。いきなり、蔵王堂の過去帖にしろされた歌を、朗々と歌つたのである。

「返らじとかねて思へばあづさ弓、なき数にいる名をぞとむる」

虎夜叉が、目をみひらいた。

「兄上——。お差向いで話したいことがござる」

正行はうなずいた。

「参れ」

座を立った。

## 九

小書院には、室一ぱいに朝陽が、射し入っていた。正行と虎夜又は、濡縁に出てむかいあった。虎夜又は、兄の顔色が、歳晩の二十八日の夜みたときにくらべて——否、たったいま隣室の広間でみたよりも一層いきいきとしていることを感じた。

(光線のせいかしら?)

見直したが、見直すほど澁刺としていた。

(だめだ。とても兄の決心を、覚悟を、ひるがえすことは不可能だ!)  
生気の躍動を、はつきりとみとめたとき、虎夜又はそうあきらめた。広間での最後の言辭で、すでに断念して目をつぶったのであったが、こうして近ぢかと対いあつてみて、いよいよ、兄の心にもはや二念あるべからざることを悟った。

黙って、兄弟はしばらく、たゞ顔を見合っていた。

清らかに澄んだ正月の陽光が、正行の大鎧の小札の金色をきらめかした。菱烏帽子の額金の金糸が、さんさんと光った。まさに朝敵を斬らんがために鞘走ろうとしている太刀の、柄の金象眼もまた、かゞやかに映えた。

「兄者びと！」

「正儀！」

虎夜又は、黒鉄小札、紫紺洗革のひどく地味な鎧をきていた。

「兄者の魂いは、いまや赫耀と大きな光明に照り映えている。おん身のお心は、滾々とわく大きな歓喜にひたっている。虎夜又ははや、拒えませぬ。阻みませぬ。御本懐を、とげられませ！ 決して、お妨げは仕らぬぞ！」

「お、その言葉——正行は心嬉しく聞くぞよ！」

「師直を討つか、討たるゝか、二つに一つを——闘われよ！」

「闘う！」

隣室の広間から、亢奮にうわずった声々が聞えてきた。

「お旋毛まがりだつ、何を言い出さるゝかわからんぞつ！」

「旋毛まがりならまだしもだつ！」

「そうだつ、利をもつて誘われたら足利の、軍門に降るかも知れん！」

「源秀、そこまでは云うなつ！」

「え、え申す、朝敵にも降参するつ！」

「黙れつ！」

制した声は、正時の声であった。

「新屋敷の殿、あくまで拗ねられたら、何とさっしやる？」

神宮寺太郎兵衛の声だった。

「軍神の血の贄だつ！」

新発意源秀が叫んだのだ。

「咄つ！ 馬鹿を申すなつ！」

ふたゝび正時のどなった声であった。

「次郎殿つ！」

「正時の殿つ！」

「御家門のためだつ！」

「新屋敷どのつ！」

「ちえ、血惑うかつ！」

と、三たび正時の叱咤がひびいたとき、正行は起つて、室の出口の闕きわまで行つて、

「静かにせよ！ え、静まれいっ！」

そう喚わり捨て、濡縁へ戻った。そして、しみじみと、

「虎夜又——吉野の典葉頭から、労咳の症ときいたとき、弁内侍に水分の屋敷まで後おわれたその夜、ついに血を喀いてお許の介抱をうけたとき、わしは、この不治の病いゆえに、時来るを待ち得ずして戦わなくてはならぬかと思つと、わしは、桜井駅に父上と訣別してよ

り十二年、あらゆる努力をかけてきた朝敵討伐の大計も、あゝこの病いゆえに失わるゝかと思うと、体熱一時に凍つて眼も心も昏むかとおぼえたのだ。が、さいわいにも病魔は次第にわが身から、遠ざかりゆくかの形ある今、この大敵をむかえ撃つことの出来るというのは、さても何と仕合わせか。のう正儀——。わしはあえて病の牀にたおるゝを怖れてのみ、死をいそぐのではない。正行は、病弱ゆえでなく、聖くして戮き信念のために、なお長らうべくもある身を、自ら求めて殺すのだ。尊王すなわち至善の道を、ひたすら歩まんがために返らじと、かねて思うことが出来たのだ。虎夜叉、よろこんでくれ」

「よろこびます。——その点、兄上のためによろこびますぞ」

「わしのよろこびはそれに竭きない。おぬしという弟をもつたので、後顧の憂えもほとんどなしに万死の戦線へ、突進できるのだ。吉野の行宮におわします、大君への、御警衛——宮居を護り奉るべき重き任務をも、安んじて、お許に委ねつゝ正行は死に得ること——それが癖ばしいのだ。わしは、お許の才能、お許の手腕、謀略には、言葉につくせぬほどの信頼がつけぬ。かならずやお許は、正行亡き後は、正行が生きてあろうよりも遙かによく、敵を禦ぎもし、また撃ち破つても行くであろう。その縦横無碍の機略を、心おきなくめぐらすであろう。畏れおゝいことながら、帝のおんためには、現世的にも、この正行は死ぬる方がよいのじや」

「兄者びと」

虎夜叉は、複雑な情操がこもこもと去来する眼ざしで、兄の面を見入りながら、

「それがしは、たびたび兄上が、澄みとおつた無常觀を地上現世の欲望につながるゝことを、希い願つた。しかし弁内侍の恋をさえしりぞけて、人欲を剥ぎひしがれた兄者は、ひたむきに父上の志しを追わせるゝ。楠の嫡男として、いかにも華々しい死に方、即ち生き方をえらばれた。それがしとて今は、兄上よ天晴れ、永遠の生に不朽なるべき、

尊王精神に生きたまえ、と申す。虎夜叉残つて、力かぎり、現世的にも、大君への忠功を上げみする。兄上とともに次郎兄、和田、大塚、神宮寺ら、精兵二千を失わば、失つただけ吉野の防衛は困難をますでござらう。なれど、それがしに言わしむれば、吉野は、かしこくも先帝以来宮闕の所在とは申せ、仮りの行宮の地、万やむなくんば、御遷幸をも奏請したてまつり、不可侵の地に御動座を仰ぎます。やがて虚夜叉、不敗の地歩に立たば、そのときこそ菊水の旗を京都に進めて、足利を追い落し、一天万乗のみかどを、大内裏におん迎えまいらせましよう。さりながら、それがし如何に謀略をつくすとも、河内和泉二国の力をもつて、ながくは京師を保てますまい。要は一旦の大勝利を、最も効あらんがように働かせ、御分裂あるべからざるに分れたる非理を匡して、たとえば天に二日あるがごとき不祥事を、本来のおん姿に返しまいらせ、南と北、御両統のおん合一を図ること——そのことこそ、かく申す正儀が畢生一期の大事業、ありとある心血をそゝぐべき大奉仕と、ふかく、かたく信じて疑いませぬぞ」

と、熾烈な誠心が、眉宇に上つて、躍動した。

「おゝ虎夜叉！ 南北のおん合一を！ 御合体を！」

正行の声には、感動の旋回のはげしさがあふれた。

末弟が、心に抱く理想を、正行ははじめて聞くことが出来たのだ。それは決して正行にとつて意外なものではなく、そうあるべしと期待はしていたことだったが、今、力強く、明らかに表白された言葉は、さらに一段と正行の後顧の念を軽くした。そして末弟への信頼を、一きわ深めた。

（あゝ自分は、ほとんど心おきなく、死んで行ける！）

正行が、そう思つたとき、正儀が、

「御合体のためには、まず朝敵に対して、徹底的に勝たねばなりません。すくなくとも足利を、京都から、畿内から、駆逐しなければなりません」と、いった。

「いしくも云うたぞ正儀！ 現世的には、それ以上おおいなる忠節はあり得まい！」

「さらば、兄者びと！ 行かれよ！」

「さらば、弟！ 残つてくれ！」

死して大義をのべんとする者と、生きて大忠をいたさんとする者とが、互いに昂ぶった感情の搏動する手と、手を、かたく把つて、——じいっと眼をみつめ合つた。

涙が、両者の睫毛にかざやいた。

「正儀——。母上に、三人分の孝養を頼んだぞよ！」

と、正行がいった。

「次郎兄とも、こゝで、兄上の前で、訣別いたしとうござる。および下されい」

と、虎夜又がいった。

## 四 条 躰 合 戦

### 一

高軍の山手の先陣、佐々木道誉隊は、生駒山の西ふところまで進んで、四日の夜は辻子谷に夜営した。山の北尾根、辻子峠の中腹にある興法寺にやどつた大將道誉入道は、睡り不足で、不機嫌だった。

「ねむい！ 無闇とじやんじやん鳴らしおつて、うるさいではないか」

「殿！ 鉦を無闇には鳴らしませぬぞ。敵が行動を起したのでござる」

「敵が？ 裏の峠からでも来たというのか？」

「いえ、さようではござらんが——」

「なら、狼狽くな。暗峠からは、一旦ふもとの枚岡まで下りずば、路

はない」

「いえない、暗峠の敵は、根が生えております」

「白痴め、なら寝ている。まだ夜明け前だ」

「いえ、もう明けております」

「明けたにせよ、俺の知つたことか」

「殿！」

「うるさいな」

「ともかくお出ましを願いたい」

「どこへ？」

「戸外へ」

「寒い」

「動き出したは楠勢らしゅうござるが、なに分にも、ちと変挺子で、解せませぬでな」

「うるさい奴じゃ」

道誉は舌打ちしたが、寝袋から出て、

「どう間違おうと楠兵が、武田に尻を曝し、横つ腹を仁木に見せて、

この山へかゝるものか。寝ぼけ眼で、なにを見て騒ぐことやら」

そう云いながら、部将のあとから本堂前へ行つてみると、武者や兵が一ぱいに立っていた。

「あれあれ御覧じろ、あの通り」

目の下には、味爽の中河内平野がひろがっていた。太陽はまだ昇らなかつた。丘陵一つの起伏すらない真つ平の広野のはては、暗く空に接していた。荒涼と厳寒に乾いた原に、白い煙が、霧のようにたなびくのは、おびたゞしい陣地で朝飯を焚くのであった。平場の先陣は、恩智川の西岸、古水走の社の前に露営していた。第二陣は箱殿の島のなかにあつた。英田の躰にならぶ陣もあつた。元田の凹地に宿つた陣もあつた。寝屋川畔に陣どつた部隊もあつた。この谷への入口に近い神並の松林にも陣が敷かれていた。中垣内の原、野々宮の森、茶ノ木

の堤から彼方一帯は、四条の村、雁屋の雑木林まで、およそ一里四方が、ことごとく陣地だった。先陣から、師直の慈眼寺の本陣への距離は、二里もあった。飯盛山の城は、幾重にも取巻かれていたし、その包圍陣から、こゝ辻子越えまでの山の腰も、いわば陣所の珠数つなぎであった。

だが無論、そうした陣地の大観をながめて貰うために、部将は、睡い、寒い、という大将を引つ張りだした訳ではなかった。

「む。何だ、あれは？」

と、道誉入道は、眉をひそめた。

「蟻の行列のようにしか見えませぬが、あれで確かに人が動いておるので——」

「む。たゞの人ではない。兵だな」

「な。たしかに兵でござる」

「む。よくは見えぬが、だいが馬もおるようじゃ。む。たしかに訝しい」

「な。たしかに変わて、こでござろう？」

「む。味方の筈はなし——」

「な、楠勢と見たは僻目か？ たゞし、解せますまいが？」

「む。いずこをめあてに進むのかな？」

「彼処は、出雲井鳥居の土手と申します」

「馬鹿。土手のことか」

「土手から、川向うの街道を突つ切れば、二里半先きが玉造、その先二里で天王寺、右へ曲れば渡辺川、中之島でござる」

「馬鹿。その先は海だらう」

「目ざすは川尻。さなくば、住吉。堺浦」

「およそ二千——往生院の敵の本隊全部が——はて、どこへ？」

「住吉の、わが西軍の虚をつく策戦、ではござるまいか？」

「阿呆」

「あ！ 殿っ！」

「何だ？」

「折れた、折れた、折れましたぞっ」

「折れたと——何が？」

「楠が」

「え、楠？ どこに？」

道誉入道は、寺の境内をきよろきよろ見廻して、

「いつこう楠らしい樹は、見あたらんがな」

「わはゝゝゝ！ 殿の方が、こりや——わはゝゝゝ！」

「これこれ何が可笑しい。何を笑う？」

「えひゝゝ！ こりや殿の方が阿呆じゃ、馬鹿殿様じゃ」

「えゝ無礼者！ 佐々木佐渡判官道誉を、愚弄いたすかっ」

「愚弄は仕らん。正直に申した」

「だまれ！」

「そう御立腹なされずと、まあ御覧じろ」

「ちえ、何を見よというのじゃ？」

「あれを」

と、指さす先は、出雲井鳥居の土手を西へ真っ直ぐにすゝんでいた

楠勢らしいのが、川向うの河内街道とよばれる道路へ、右折して、い

まや北進の姿勢に変じていた。

「や、北へ、北へ行く」

「な。北へ、楠が折れました」

「白痴！ 曲つたと申せ」

河内街道は、高野街道と、約一里の間隔で併行していた。そして

恩智川と寝屋川とが、その両街道のまん中を、やはり道と併行しつゝ

流れていた。高野街道と川の間には、高の大軍の右翼十隊一万五千の

兵が充満していた。また高野街道と国境山脈の間は、左翼十隊おなじ

く一万五千人で埋まっていた。だから師直の麾下一万の本陣をつかん

がためには、この左右両翼二十陣を撃破しなければならぬのみなら

ず、ほかに山手に備えている一万の軍勢とも戦って、これを破らないかぎり近づけない。それは、二千の楠兵、いかに勇猛でも、至難なわざだった。そこで、楠勢は、河内街道を迂回して、高軍右翼の側面を、半里の距離で、まっしぐらに駆け抜けて、直ちに師直の本陣へ迫ろうとしたのであった。

「やあ、走る走る。本陣へかゝる気だ。平場の輩は、あれに気づくのかかな？」

と、道誓入道が云った。

「こゝは高所の見物でござるけれど、平場からは、よくは見えますまいてい」

と、部将が答えた。

「呑気なことを申すでない。こりや武田隊の怠りからじゃ。小敵とあなどつて、斥候も出しておかなかつたと見える。甲斐の山猿め、なんのための先陣と心得る」

「殿。我々山手の先陣に、責めはござらん。我々は、暗峠の吉野勢に備えてさえおれば——」

「よいとも参らん。はて——報せてはやりたいが、ここから山路を一里麓まで下るのでは間にあわぬな」

「そのうちにどの陣かで、誰かゞ気づきましようし、よしんば気づかなんだにしろ、慈眼寺めがけて本陣へ斬り込めば、いかなる寝坊でも目をさます」

「いやに落ち着いたぞ。やいのやいのと人を叩き起しおつた癖に」

「正体見たり化け柳、それと知れたらもう安心でござる」

「阿呆め」

「ほい、また阿呆か、辛うござるのう」

「その方は、楠の強さを知らぬから多寡を括るのだ」

「いえいえ、知らぬどころか、去年さんさんな目にあつた六角判官殿御家来から、耳にたこほど聞かされてはおりますが、どうした果報

やら御陣は山の手、先鋒とは真の名ばかり、敵手は青公家、隆資卿が御大の、紀州と吉野の、山伏や、坊主や、野ぶせりの、雑炊粥みたいな寄合い勢では、箸をとるにも気が楽でござる」

そう云つたとき、麓の、平場の先陣、二陣あたりから響きたる鉦、太鼓の音が、たちまち後陣の警鐘をも誘つて、はじめは微かであつた鳴り音が、次第に、たかく、大きく、暁天の下に凍る原に、畠に、かわいた田圃に、川に堤に、畷に林に、谷に、そして山に木魂した。

と、同時に、まず右翼の諸隊が動揺して、ある隊からは逸早く、河内街道へ向つて、楠兵をさえぎるべく走りだした兵があつた。

## 二

枚岡神社のわきまで、おりて来たとき、隆資卿は、にわかには響く陣鉦太鼓をきいた。

佐々木の部将は、根が生えたといつたし、道誓入道は、甲斐の山猿、斥候も出さぬかとのゝしつたけれど、その佐々木隊みずからの偵察が又、いかにもいかさまだつた。というのは、暗峠で根を生えさせた吉野勢の大將、大納言隆資卿が、すでに峠を下つていたのである。

丹下兵衛次郎が、馬をとばせて、馳せ寄つた。

「大納言の卿、——折角の御出馬ながら、今日の合戦は楠一手にて師直と、雌雄を決すべく候うまゝ、卿にはなにとぞ、峠より彼方、大和路をお衛り下さるようにとの事にござりますぞつ」

「おゝ。して左衛門督どのは？」

「敵の右翼を迂回して、高の本陣へと、もはや突進いたされました」

「あゝ、さればこそその、あの鉦太鼓——敵陣にて響くは合戦、始まつたと覚えたり。してして後詰めは？ 東条よりの後詰めは兵は幾許か？」

「後詰めは、皆無、一兵もなし。さらば、隆資の卿、早や早やお退き下さりませ。御免候え」

「あ、暫し！ 丹下兵衛、しばらく！」

呼びとめたが、後をも見ずに、馬を走らせた。丹下の兵は、仁木頼章の兵と、すでに闘っていた。だから将、兵衛次郎は、大納言の卿と長語しは、交わす暇がなかった。丹下の兵と平岡の兵は合わせて五百。——正行の麾下を敵帥の本陣へ殺到せしめるために、わざと出雲井鳥居の土手に残留して、十倍の敵へ、牽制の血戦をいどもうとしているのだった。

大納言が、紀州の湯川莊司へ、

「やはり後詰めはない。一兵もないという。楠の突進を、何と解くと、たずねた。」

「さあ。一押し押して、東条へ、退陣さるゝことゝばかり思いしに、何とも案外なことでござりまする」

「無謀もはなはだしい。二千たらずで——」

「東条の虎夜叉殿の気持も了解に苦しみまするのう」

「兄を兄とも思わぬ男らしいでの」

「日ごろは仲がお悪くとも、五万の大敵を——」

「ことごとくに意見が喰いちがうのじや」

「ともあれ、楠の殿は、お危うござりまするぞ」

「万死の危険へ、挺進せずともじやがのう」

「まことに！」

湯川の莊司が、そう云った時、

わアあつと、辻子谷で、鬨の音があがった。

そしてそれが三度繰り返えされ、太鼓の音がそれに和した。

佐々木道誉隊が、大納言の率いる軍勢を見つけて、挑戦の鬨をつたのである。

### 三

恩智川が、寝屋川へ流れ込む出合の堤に、菊水の旗を立て、もう

二た响もっていた。(早く!)と、将も兵もあせっていたが、戦線は固定して、動かさそうもなかった。

正行は、堤の上に立った。非理法権天と縦に書いた文字の上に、紋どころを配した差し物——それをかゝげた旗士は、橋内であった。橋内は、棹を抱えたまゝ尻をついて、汗をぬぐった。

「退き鉦つ」

と、正行が叫んだ、堤の下の鉦役が、退き鉦を鳴らすと、菊水の小旗と、摩毘両天王の差し物とが、正時と共に、追撃をやめた。ふか追いは、右に迫ってきている敵に、正行との連絡を断たれる怖れがあったのだ。

「鬨つ！」

兵が、正行の脚もとで、鬨をつくと、正時の兵が退きながらそれに和した。だが、声がほとんど出ないくらい疲れていた。

正時が、兵を顧みて、

「楯を忘れるなつ」

と、どなった。枯れ草の上に、死骸の上に、散乱した武器の上に、動けぬ重傷者の間に、霜でむくれた土の中に、一旦すてた楯を、血に染まった楯を、毀だらけの楯を、兵は拾って、得物と一しよにかついだり、重そうにぶらさげたりして、堤の下へ引上げてきた。正行が、

「苦戦だったな。」

と、弟に云った。

「何の！」

「顔に、血が出ておるぞ」

「掠られた」

正時は、兜をすこし傾げて笑いつゝ、忍緒を解いた。

「兵に川の水を飲ませて、休ましてくれ」

正行は、そう云ってから、川縁へむかって、

「集れつ」

と、声をかけた。

川の端は、給水場でもあり、休憩場でもあった。

そこには、神宮寺の兵が、薙刀や刀を洗ったり、砂礫原に仰向けになって、軀を休めたりしていた。太郎兵衛は、丈夫な方の脚を斬られて、傷口を布で結かせていた。

正時の兵が、神宮寺の兵と、川端へ入り替った。

「その脚で——馬が斃れたら？」

と、正時が云うと、

「坐ったまゝ闘う」

と太郎兵衛が答えて、二人は声を合わせて笑った。

「鉦だっ！」

また、叫ぶ正行——。いまや、この堤と野々宮の森の中途で、和田の兵が猛烈な白兵戦の最中だった。空馬が、武者や将をおき去りにして、駆け戻った。

和田の芥子茶の旗。

源秀の髑髏の差し物。

それが、敵の左巴と、直達の旌旗の間を、幾十流かの差し物と入り乱れつゝ動いていた。

再び退き鉦が鳴った。いや、退き鉦は、すでに二十数回、鳴らされたのだった。そしてその回数だけ、楠兵は敵と白兵戦を闘ったのである。だが敵は、あとから後から新手が戦った。楠兵は、野々宮の森を、何度も占領しながら、その度ごとに放棄しなければならなかった。

「大塚っ。追って来る奴を、駆け散らせ」

と、正行が命じた。

大塚の兵が、和田の闘っている方へ走って行った。

正時の兵は、すこし川上で水を飲んで、川下で血を洗った。そして胡籐にかついだ兵糧を出して食い始めた。

それを見て、正行は、

「神宮寺。——敵が、川の後ろへ廻ったら、兵糧をつかう間がなくな

るぞ」

と、云った。

#### 四

野々宮の森から、師直の倚せかゝりの輪違いの旗まで、五六町しかなかった。

やっとこの森まで進み得た菊水の旗は、だが四方八方から敵に包囲されることになった。しかし、わずか五六町とはいえ、そこは敵の総帥麾下の堅陣であった。師直に迫るには、そこを突破しなければならぬ。「残兵は、どのくらいかの？ 六百か？」

と、正行が云った。呼吸がみだれていた。

「七百」

と、正時が答えた。源秀が、

「湊川では、最初から七百きりだっ」

と、叫ぶと、太郎兵衛が、

「それで七十余合、闘われた」

と、応じた。

正行は、この森をうばうために、自身でも剣をふるって、かなり多くの敵を斬った。乗馬が斃れたので、徒歩で闘った。入神の剣技は、鹿路方原で矢板将監を斬った時よりも、どのくらい冴えたか知れなかった。気魄において第一の相違があったし、健康において第二の相違があったし、悟入において第三の、また安神において第四の相違があったからである。だから勝れた指揮者であったと同時に、精神な闘将でもあった。馬が斃れたとき、敵のなかへ落馬したにもかゝらず、微傷数カ所を負ったのみで、起ち上ることが出来た、あまり隔たらぬ場所であつていた正時は、これが労咳を病んだ人であろうかと、おどろきもしたし又、これほどまでに健康をとり戻しながら、虎夜叉のすゝめを斥けた心持に対して崇高を感じもしたのであつた。



正行は、源秀が、湊川では最初から七百きりだと云った時、  
(師直は——討てる！)

と、思った。

けれども、六百乃至七百の残兵はみな、自分の血と敵の血と土埃とで、全身を朱黒にそませていた。武者は、鎧の袖を、兵は草摺を、棄てたり、切ったりしていた。下着も籠手も、脛当も裂けていた。ちぎれていたり。疲れがひどくなると、兜は重荷だったが、棄てたものは眉間を割られたり、顛鬚を射られたりして、痛手にあえいでいた。兵に重傷の多いのは、半頭や額鉄だけで兜をかぶらないせいもあった。とにかく兵も将も、一様に咽喉のかわきに苦しんでいた。先刻までは川があった。しかし今は、それを見捨て、来たのだ。森は昨夜の陣泊のあとなので、水の容器は残っていたけれど、生憎とみんな空だった。兵も武者も将も、滝のように流した汗のために、体内の水分をすっかり持ち去られたようなおもいで、肩で呼吸をした。口のなかも、咽喉もねばりついて、息の氣道さえがひからびたかの感じで、もうないとわかった水樽を、ゆすったり、のぞいたりする者もあれば、一滴も残っていない胡録錢や腰の竹筒を未練らしく取り上げて、吸ってみてから、自棄に地べたへ投げ捨てる者もあった。

「湊川では、一番怖ろしい敵は、暑熱だったというが——嘘だ」

と、一人の兵がつぶやいた。

「どうして？」

と、一人の兵が云った。

「嘘だから、嘘だ」

「なぜさ？」

「暑熱ではなくて、咽喉渴きじゃ」

「同じことだ」

「ちがう。閏五月、夏の真盛りだからと思ったところが、違った」

「む、なるほど」

「冬でも、この通りだ。おれはもう参った」  
別な兵が、

「そのくらい声が出たら結構だ！」

と、顔を、しゃちこ張らせながら云った。

森の周囲を、やゝ遠巻きに、だが十重二十重に押つとりこめた敵は、さかんに示威の鬨をあげて、陣鉦、螺、太鼓を、打ち鳴らした。

わーあつ。わーあつ。ぼーう。

どん、どん、じゃんじゃん。どん。

金鼓のひびきが、次第に圧倒的になって来たとき、正時は、兄へ、  
「最後の突撃を——？」

と、諮った。

正行は、うなずいた。

敵が、ぐるりから、矢ごろをだんだん近づけてきた。矢は、だいぶ森へとどき始めた。防ぐべき楯は、一枚もなかった。みんな背後に棄てたなり進んできたのであった。

正行が起ったとき、森の西側にいた兵が、わーあつと声をあげた。

正行も、正時も、和田兄弟も、そちらへ眼をやった。

恩智川の岸の方から、千葉介貞胤の陣の真只中を、突風のようにつ

きぬいてきた血みどろな四五十名の兵があった。それは、丹下兵衛次郎とその残兵だった。

「おゝ丹下！」

「丹下っ！」

五百が十分の一に減ったけれど、そしてもう一人の将、平岡は戦死したが、出雲井鳥居の牽制の戦線から、ついに本隊へ合することが出来たのだ。

## 五

午前は晴れておった空が、にわかに、暗澹とくもって、今にも雲が

おちて来そう——雲低くたれた飯盛山の麓へ、野々宮の森と茶ノ木堤にいだかれた原がつきようとするあたりは、土煙濛々、血煙、乱舞、馬の悲啼、人の悲鳴、わめく声が、さけぶ声に交錯し、唳号が雄たけびを包み、斬ったのか、斬られたのか、兵が、兵に、重なつて倒れ、起きて、突き、薙がれて、転び、斃れた馬へ、落ちた将へ、倒れかゝる馬を、支える兵へ、刃を浴びせる武者が、落馬した将の刃で、高腿を払われた時、将は、うしろから組付かれて、横から、脇から、刀で、鎧通しで刺されて死物狂いにもがきつつ哮びたつと、前の方からも二人、三人と躍り込んで、ねじ伏せて足をつかむ、手をおさえる、兜の鍔の下へ刀を入れて首を掻切つたとたんに、「神宮寺の仇っ！」と瞋恚の眼ものすごく、絶叫しつゝ、首をとった武者の手を、ざつくり腕を、肘から斬落したまゝ、傍目もふらず突進する徒歩の大將の側を、後を、武者と兵が、衛り包んで、呐喊の声々すさまじく、劍を、太刀を、柄の折れた短い薙刀を、ひらめかし、菊水の旗、非理法権天の差物を、血なまぐさい風におし摩け、密集の一団となつて疾駆すると、「後るゝなつ！」と、その右側を、摩毘両天王の差物と、決死の白刃にまもられた大將が、おなじく徒歩で突進するのと併行して、芥子茶の旗と、大將と武者が、兵が、左側を、さらにその外側を、髑髏の差物と將兵が、競いつゝ、猛りつつ、旋風のようないきおいで突貫したので、ぶつかられた兵は、あつと思つ間に、倒され、傷つき、踏まれて叫び、逃げて斬られ、ひざまずいて転げるのを乗り越えられ、跳び越えられたし、逃げる心算のない武者も雪崩れを喰らつて押しつぶされ、ふせいだ騎馬の将は、またゝく間もなく叩き落されたし、はげます声の力では、将棋倒しを支えきれずに、ついに足利斯波高経の二引両の旗が、後ろに退り、見る見る横へ、横へと動いて行つたし、高遠江次郎師繼の輪違いの旗が、地に倒れて朱に染まつたし、師繼は、馬からとびおりて闘つたが——はげしく闘つたが、黒ずくめの武装を、ぎらぎら血糊で光らせた阿修羅のような、源秀のために、斬り伏せられた。

獐猛な突貫であつた。

凄愴、鬼神哭す肉迫であつた。

師直の旗本は、動揺した。

「師冬。おどろいたの！」

「呆れ申す！」

と、師冬が、師直へ云つた。

「人間わざでは、ないな」

「神憑りになつては、危い」

「何憑りかは知らぬが、人間というものも、さて強いものじゃ」

と、師直が云つた。

「楠は別誂えてござる」

「金剛山七郷の、水と米が異うのかの」

師直の一子、今年明けて十二歳の、武蔵五郎丸師夏が、蜀紅のあでやかな浮線綾の直垂に、金色まばゆい小桜の小鎧をきて、金覆輪の鞍

おいた月毛の小馬を走らせて、駆け寄つた。

「父上！ 師繼どのが、討たれましたぞっ」

「何に、師繼が？」

「討たれたと？」

「和田源秀に」

「む、和田に」

師冬が、

「武州つ」

と、叫んで、

「こゝは危いっ！」

「む。退こう！」

師直は、胡床から起つて、

「上山つ」

と、呼んだ。師冬が、日ごろ自慢の大音声で、

「退却っ」

と、どなると、五郎丸師夏も、

「退却っ」

と、声変りのしかけた半黄色い声を、張りあげた。

この五郎丸は、関白太政大臣二条公の妹姫の腹からうまれた、師直の愛子で、やんごとなき氏の、美しい母の血を伝えて、容貌のまことに秀麗な美少年ではあったが、気性は父に肖て豪放だった。やつと十二という小冠者ながらも、

「退却っ、退却っ！」

と、続けざまによばわりつゝ、麾下の陣中を、右往左往に、月毛の駒を乗り廻した。

## 六

大刀が真向、脳天に打ちおろされた。

ぱつと、火花が散った。

強力の強襲に、正行は兜の鉢を割られて、目くるめいて前へ、どつとのめった。だが、体を地へのめした時は、すでに必殺の剣は、充分に伸びていた。銚は敵将の兜の忍緒の下へ、喉笛へ、ふかく突き込まれた。

河辺石掬丸が、走り寄って、のけ反り倒れた敵将の首を、搔いている間に、正時が、闘っていた敵を捨てて、のめった正行のそばへ馳せて来た。

「兄者っ！」

正時に、追いつがった敵は、土岐周濟房であった。

「おのれっ！」

周濟房の大刀が、正時の鎧を裂いて、背先を傷つけた。

だが正時は、敵の総帥師直を突いたと同時に兄が、脳天を割られたものと思つたので、歓びよりも、まず驚きと悲しみが先立って、わが

身の危険をかえりみる暇もなしに、

「傷は？」

と、抱き起した刹那、

「えっっ！」

周濟房の二の太刀。

それは兜の八幡座をくだいたが、下の烏帽子と髪の毛と皮肉を裂いたのみで、頭蓋骨へはとどかなかつた。そして三の太刀は、関地良田に組みとめられたために、空に流れた。

「兄上！」

「弟か。斬った、討った、師直を討ったぞ！」

「御本望！ だが、お傷は、お傷は？」

「斬られはせん」

「おっ！」

正時は、兄が起きあがつたので、思わず歓びの叫びごえを立てた。

石掬丸が、

「師直の首！」

と、渡すのを、受取って、

「師直っ！」

正行は、そう叫びつゝ、地に尻をついたまゝで、その生首を、さも嬉しげに、宙に投げ上げて、落ちて来るのを手に受けては又、投げ上げた。

生首を、手玉について、正行がよろこぶ間に、良田は、周濟房に組み敷かれながらも、下から鎧通しで、脇楯の隙を胸へ刺して仕留めたし、ちようどそのとき雑賀次郎右衛門尉を斃した和田源秀は、重傷のためにもはや虫の息になった兄の高家を、小脇に抱えつゝ、その巨軀を運んできた。

「館っ、よくも討たれたぞ！」

「おっ源秀——。お許なら、まだ声が立つだろう。わしに代わって、

喚わってくれ」

と、正行は、生首を渡した。

源秀は、それを、大刀の鉞にさし貫いて、精一ぱいにかゝげた。六尺の身長で、刃渡り四尺の長剣だったから、首は、高く宙に上った。

いかに源秀でも、生身だから、朝からの激戦苦闘のすえに、もはや持ち前の大声は、出よう筈もなかったが、でも渾身の力を声にこめつゝ、「やあやあ遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて眼にも見よ、天人俱にゆるさざる、逆賊の巨魁、高武蔵守師直が首、楠正行が討取つたり！」

と、よばわつた。

大塚掃部助、野田四郎などが、四十人ほどの兵と一緒に、噓れはてた声を、しばつて、歓びのわめきを立てながら、集まつて来た。

「館っ！」

「館アっ！」

## 七

歓喜が、大きかっただけ、落胆もまた大きかった。

獲た敵帥、師直の首！

と、思つたのは、束の間の夢であつた。

正行が討取つたのは、師直ではなくて、身代わりの上山修理亮高元であつたのだ。

倚せかゝりの輪違いの旗の下で、「われこそは高師直なり」と、名乗つて、真の師直と肖た兄弟よりも更らによく肖た上山が、はげしく闘つて討死する間に、高の本陣の首脳部は、馬をとばして、こゝ四条から、北へ、北条村へと、退却してしまつたのであつた。

「無念っ！」

と、次郎正時は、またも叫んだ。

だが、正行は、

「もう、哮ぶのをやめい」

と、制した。

こゝは四条の、窪い畷だった。

見まわせば、四周は敵兵の重圍であつた。

金鼓は耳も聾するばかりに、鳴りはためいた。前後、左右から、数百人ずつの弓隊が、徐々に矢ころをつめて来た。

「矢攻めは、凌げんぞつ」

と、源秀が云つた。

たちまち、矢が、まるで驟雨のようにそゞがれた。死屍累々とよこたわる原頭の畷に、防ぐべき物陰一つ持たぬ正行主従四十人は、びゅーん、びゅーんと高鳴りつゝ集注される矢の中に、たゞ立ちすくむだけであつた。

申の刻——午後四時頃でもあつたらう。夕暮近い曇り空に、暗雲がしきりに来まして、生駒嵐は飯盛山の、麓をかすめて、この畷へ、吹き荒んだ。そして、裂けて、血と泥に染みつゝも、なお倒れずにいた菊水の旗と、非理法権天の差物とを、つよくゆらがせた。見る間に旗も、差物も、矢の雨に射ぬかれ、射縫われる態は、まさしく悽慘の極わみだつた。

旗は、石搦丸が、すでに斃れた旗士に代つて、持つていた。差物をかゝげとおした橋内は、ほとんどもう死にかゝつていた。

どんなに刀をふるつたとて、防げるような矢ではなかつた。幾万本かかず知れない矢攻めであつた。

「弟、もう最後だ！」

「兄上！ 三十余合、闘いぬいた。たゞ遺憾は、師直を逸したこゝだ！」

「いや、遺憾はないぞ」

正行は、非理法権天の差物を、眺めつゝ、

「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は天に勝たず」そう云つて、枯れ草の地べたに、落矢の上に、どつと胡坐した。そして、

「弟、刺し違えて死のう！」  
と、云った。

正時は、うなずいて、兄の前に、やはり胡坐した。

兄は、膝口三カ所と、右の頬先と、左の眼尻を、篋深に射られていたし、弟は、唐胴の引合せと、眉間と、喉のはずれを射られていた。

「館つ。この源秀は、斃れるまで、師直を追いますぞつ。さらば！」

和田源秀は、そういゝすてゝ、走り出した。

「それがしも。大塚も！さらば！」

と、大塚掃部助が、源秀のあとに続いて、敵のなかへ走って行った。

## 四 条 畷 の 敗 報

### 一

「うむ、四条畷で——。次郎兄と刺し違えて、——湊川さながらの御最期か」

暗然と、虎夜又正儀は、

「さぞかし、御本望！」

と、つぶやいた。

そして、目をつぶった。

臉の下からもれた泪の幾粒かゞ、朝の光りに、きらり——。

そばで、恩智正一が、

（さすがに、乙殿も！）

そう思いながら、自分の眼がしらからもわき出る暗涙を、手の掌でおさえた。あちこちに、すゝり泣きが聞こえた。広敷には、およそ百人ほどの将士が、詰めていた。

虎夜又は、密偵へ、

「御陣没の直前には、師直の本陣へ突入して、倚せかかりの輪違いの大将旗を、お倒しなされたと申したの？ もっと詳しくは？」  
と、たずねた。

「は。上山修理亮高元が、われこそは高武蔵守師直なりと名乗って、館の殿と刃を交え、手痛く闘うその隙に、まことの師直は、危く遁れたということでごさりましたぞ」

「おゝ、影武者か。——ひどく似ていて、やゝもすれば見わけがつかぬそうな」

「館の殿は、上山をお斃しなつて、師直の首、討取った、討取ったりと、その偽首を、手玉のように宙へ、投げあげ、投げあげ、お歎びなされましたとか申しまする」

「兄上には、師直を討ち洩らせしことを、知つて御自害、なされたであらうかな？ それとも？」

「いゝえ。偽首だ、上山修理亮の首だ、と敵兵どもが、わめき知らせたとやら、申しまする」

「む。せめて——のう！」

喜怒哀楽を、めつたには現わさぬ虎夜又ではあつたけれど、今や陰沈と表情を曇らせた。

やゝ少時、悽愴な沈黙が、人々を支配した。密偵は、四条村附近の水呑百姓に身をやつして、合戦直後の敵情を探つて来たのだ。正行、正時兄弟が、二千の兵と共に、決死玉砕の戦を、いかに闘い、いかに悲壯な戦死をとげたかということに慥かめて来たのだ。密偵は、虎夜又の昵近の郎従、与茂平だった。

与茂平は、敵軍の戦後の夜営地から、死骸が累々と、あるいは算をみだして横たわる血腫さい、鬼気と屍臭とが、切々と充ちみなぎる新戦場を、真夜半にとおりぬけて、八里の路の闇を韋駄天ばしりに、こゝ東条の城へ駆けもどつたのであつた。

「与茂——」

「は」

「幾人くらい、最後まで闘いぬいて、睨で黄泉へのお供、仕ったぞ？」

「和田の高家どの、関地良田どの、丹下兵衛どの、野田四郎、河辺石掬丸、お旗持ち橋内など、三四十名であつたとやら——」

「うむ。——神宮寺は？」

「野々宮の森と茶ノ木堤の間で、討たれたという噂でござりました」

「あの片輪の体で、よくも闘った。——源秀や、大塚は、判らなかつたか？ それから、正忠はいかゞいたした？」

「弥一郎どの、御最期は判りませぬが、源秀どのと大塚どの、館御自害のお供には加わらずに、なお敵陣へと斬り込まれました」

と、与茂平が答えた。

## 二

「猪武者だけに、頑張ったな」

虎夜又の口元を、頬を、もちまえの薄笑いがかすめた。もはや冷静をとりもどしていたのだ。

上赤坂の城将、貴志右衛門が、

「咄！ 乙殿」

と、よばわつた。

「貴志。なにか？」

「この際に、猪武者とは——耳に障り申したぞ！」

若山の出城の将、矢尾新太郎が、

「同感だっ！」

と、叫んだ。

けれども虎夜又は、ちらりと微かに苦笑いを洩らしたきりで、

「与茂——。猪の最期を語れ」

「は。大塚掃部助どの、敵の副将師冬を目ざした甲斐もなく、雑兵

ばらに押し取り籠められまして、無残な斬り死をいたされた由にござります」

「では、源秀は進めたのか？」

「大豪無双の源秀どのゆえ、阿修羅のように師直のまじかまで、迫つたということござりました。しかし惜しいところで、本宮太郎左衛門のために、組み止められ——」

「なに、本宮の奴に！」

「無念な御最期を遂げられました」

「さようか。それは一入、口惜しかったであろう」

本宮太郎左衛門というのは、紀州湯浅の郷士で、建武以来、楠の旗下についていたのが、去年の春のころ、師直の好餌に釣られて京都へ降参をした裏切者だつた。

虎夜又は、静かに源秀の無念を悼んだのみであつたが、貴志、宇佐美、矢尾などの宗徒の諸将の間には、たちまち亢奮が渦をまいた。

「おのれ本宮の白癩め！」

「先館の御恩顧を、そうした仇で返すとは、ちえゝ外道め思いしらすぞ！」

憤りの声々と、呪咀の言葉が、入りみだれた。そのとき与茂平は、報告をつづけた。

「本宮に組みとめられて、烏漕がましやと捻じふせたのでござります、敵が大勢落ち合ひまして、滅多斬りの白刃の雨——。黒鉄のようなお体も、ついにずたずたになり、朱をそゝいだ両の眼をかつと見ひらきながら、につつき本宮が喉笛に、喰いついたまゝ、源秀どの、首を掻かれたと申します。じつに物凄首の取られ方であつたと、話すものが身の毛を、よだてゝおりました」

貴志右衛門が、

「おゝ、なんという悲壮な戦死だろう！」

と、声をわなゝかせた。

「楠瑰いの亀鑑だつ！」

そう叫んだのは、下赤坂の城から来た宇佐美成時だった。

「あっぱれぞ、和田源秀つ！」

矢尾新太郎が、讃仰すると、

「源秀つ！」

「源秀どのっ！」

人々が、声々が、それに和し、それに同じた。

喧騒が静まらぬうちに、

「乙殿」

と、呼んだのは、恩智正一であった。

「恩智」

虎夜又は、ふたゝび苦笑しながら、

「猪に人気があるのう」

と、云うと、正一が起ち上つて、

「静まれい！」

と、どなった。

人々はびっくりして上座の方を見たが、正一はすぐ坐つてしまった

し、虎夜又は与茂平へ、

「御苦勞であつたぞ。退つて憩むがよい」

と、ねぎらつていた。

会釈して与茂平は、広敷から侍溜りへ、退つて行つた。

### 三

「さて、如何なさるゝ？」

と、正一がいつた。

だが、虎夜又は、空間のある箇所に視線をとどめたまゝ、黙つていた。

しばらく待つても応答がないので、正一はうながした。

「虎夜又どの」

「わしは、予定どおりの道をゆくだけだ」

「なに、御予定の道とは？」

貴志右衛門が、気色ばんで、

「いかなる道か、承わろう！」

と、叫んだ。

「聞け」

虎夜又は立つて、重臣たちを、ぐるつと見廻してから、

「両兄すでに亡し。今日この正儀が楠の宗を継ぐぞ。したがつてもはや

昨日までのように命令が二途に出ずることはない。もし、わしの統制

を乱す者あらば、容赦はせぬぞよ」

むしろ、無造作にそう云い渡した時、

「乙殿つ！」

矢尾新太郎が、語気あらく喚びかけた。

と、虎夜又は微笑しつゝ、

「呼び方を、改めて貰おう。にわかには呼びにくかるうし、また

そう呼びたくない者もあるう。なら、虎夜又とか、正儀とか申せ」

「む。なら、虎夜又どの。おん身は、おん身は——」

いきみながら、にじり出て、

「壮烈な昨日の合戦をも、よその戦でも観るかのように後詰めを怠り、

たゞ手を拱ぬかれた。優柔不断、逡巡退嬰、城にばかり、こびりついて、

後生だいに命を偷むことが、おん身の道か——いやさ、それが御辺

の忠義でござるか？」

宇佐美成時が、

「後詰めをしたら、かならず、師直が首、討てたのだつ！」

と、わめいた。一旦しずまった広敷に、喧騒が、縊を戻した。みんな

蒼い顔をして、頭の平調を狂わしていた。昨夜は一睡もしなかつた

神経の疲労が、悲痛極まりない四条畷の戦況をかきされて、異常に刺

戟をうけたために、病的な亢ぶりに変わつて、体がふるえたり、眼が

熱くなったり、呼吸がはずんだりするのだった。

きのう午前中は、斥候の兵によって戦況が、刻々に注進されたのだが、午後になると、乱戦、また乱戦で、だんだん敵陣地の奥ふかくで闘われることになったから、どんな模様か、知りたくも、知るべき方法がなかった。暗い雲がしきりに低迷して、雲をはらみ、寒風が蕭々と鳴りつゝ、日は陰惨と暮れて行つた。やがて負傷した敗兵たちが、ぼつり、ぼつりと戦場から、この東条へたどりついた。夜がふけるにつれて、そうした敗兵の数は、ふえて二百にも達した。二千のうち、一割の二百が、いわば死にそこねて戻つたのだ。実際、逃げてきたと云つてはあたらぬ。彼等は、討死の機を、はずしてしまつたのであつた、それはともかく、彼等には、挺進軍のその後の戦況のわかるう筈もなかつた。で、東条の将兵は、味方の全滅を想像するだけだつた。だが、聞かねばならぬことを聞くまでは、むろん、眠れなかつた。重立つ將と士とは、広敷や、溜りに群れ、兵は、城の大手、搦手で、さかんに篝火を焚き、きびしい寒気と、興奮と、不安とで、肉体も、心も、こちこちにふるえ、硬張らせながら夜を明かした。そして今、広敷の人々は、挺進軍の最後をたしかめ得たことから、別な、新らしい危惧と、焦燥とを感じさせられ、それが虎夜叉への不満となつて迸走りだつた。

#### 四

「宇佐美。わしが、おぬしらを率いて昨日、後詰めをしたなら——」

虎夜叉は、冷静な声音で、

「敵將師直のほんとうの首も、とれたかも知れぬ。だが、その代り、我々の首も六条河原にさらされる。我々が、こゝ南河内の根拠へ、四条畷から生還できなかつたら、誰れが、何人が、吉野の朝廷を守護し奉るか？ 師直を斃し得ても、五万の大軍を破ることは、野戦においては、とても不可能だ。のみならず、住吉には、師泰の三万が、われわれの

側面をつこうとして、虎視眈々と待機しているではないか。——のう貴志。矢尾もきけよ。兄上は、ひたすら理想を追うて、戦死をえらばれたが、わしは避けがたい現実を、じいっとみはつて、こうしてこの城から一兵をも、あえて、動かそうとはしなかつた。兄者正行は、父上正成にならつて、尊王の精神を、永く後世に布かんがために、身を殺された。次郎兄と、和田の三兄弟が、千八百の精兵とともに、湊川のたゞかいを、もう一度四条の原で繰り返した。しかしかくいう虎夜叉は、あくまで生き残つて、現世にあつて、今日が日において、報国尽忠の実を、はげみ挙げなければならぬのだ」

そう云いおわつて、正一を顧みた。

「恩智。わしは、榎尾城まで行つてくるぞ」

「榎尾の城へ？」

「留守をたのむ」

「きょうのうちにも敵軍が、この東条へ寄せてまいらば——？」

あやぶむように、正一がいうと、

「輪違いの大將旗が、倒れたほどだ。押し寄せるには、すくなくも両

三日の間はあろう」

虎夜叉は、そう答えて、広敷から縁側へ出た。

雲か雪かと思われた空が、夜のまに、からりと晴れて、冷えびえと澄んだ紺色を、朝陽に玲瓏とかゞやかしていたが、前庭には霜柱がうすぎたなく踏みくだけかれ、木戸口には篝火がまだ燃え残つて、白々と炎をたてゝいた。

「香月——」

と、虎夜叉は、後ろからついてきた香月権太へ、

「水分の館へ参つて、兄上御陣没の顛末を、母者人にお告げ申せ」

「はあ」

「いそげ」

権太が、武者溜りへ走つて行くと、虎夜叉は、



「梶丸。馬をひけ」

と、云いすて、奥へ入った。

容易には動かないけれど、動くとなると、突風のように行動する虎夜叉であった。

愛馬に鞭うって、城の西門を出たのは、それから極めて短時間の後だった。

「それ、後るゝな！」

と、つゞいてゆく扈従の面々は、骨が折れた。徒歩の郎従たちは、たゞもう闇雲に、精かぎり走ったし、近習の梶丸や、部将のひとりの安西九八郎や、その他、騎馬の士の馬どもは、呼吸を白く吹きなびかせつゝ疾駆した。

## 五

滝谷不動を右に、嶽山の麓を、東高野街道に出て、南へ折れ、石川の西の岸に沿うて長野まで遡り、そこで金胎寺山をうしろにして、天野山の峠にかゝる。

巨利、金剛寺から、南面利。

金剛寺までは河内だ、南面利は和泉である。で、そこから峠つのが、槇尾山の険岨だ。南面利の谷では、虎夜叉も、従者も、みんな下馬した。そして馬と並んで、槇尾寺への急坂を登って行った。

城は、寺の背後の、山の頂上にあつた。

この城の主は、和田助氏だった。千早城にもさまで劣らない要害であるこの槇尾城のために、楠氏の和泉における防備は、鉄壁の感じがあつたのだ。

当時、楠の領土は、河内の国の三分の二、すなわち南河内郡と中河内郡、それから和泉の国の大部分と、紀伊の伊都、那賀両郡の一部分と、大和の宇智郡の若干とに跨っていて、およそ一万五千貫——一貫を仮りに十石と換算すれば、十五万石。面積から考えても後世の十五万石

から二十万石くらいの封土に相当するようだが、この領土をまもるための武力の根拠は、東条を中心に、千早とこの槇尾を右左の両翼として、前衛は飯盛の城、そして後衛は、穴生の城であった。つまり飯盛は中河内を、千早は南河内を、槇尾は和泉を、穴生は大和と紀州にある領地を衝る城だつたといえる。

師直の軍、五万が、河内へ侵入し、師泰の軍、三万が、和泉を襲うことになつたので、吉野から北畠准后が、伊勢の相可と熊野郷の兵をひきいて、この槇尾へと出馬した。それは去年の十二月のなかば過ぎのことであつた。兵の数はわずか千五百だつたが、でも吉野方としては相当な兵力だし、年があらたまつた正月二日、准后は、興良親王を行宮からこの城へ、迎え入れまいらせながら、准后親房の出馬というだけでなしに、勿体なくも親王を、宮將軍として戴くことの出来た和田助氏の将兵は、昂ぜんと士気をたかめた。

だが、昂まつたその士気は、たつた五日しか保てぬように運命づけられていた。

「えゝつ！ 御兄弟が刺し違えて！」

と助氏が、さつと青くなりつゝ叫んだ。

「四条畷の露と消えられた」

と、虎夜叉がいった。

正行の一軍が全滅したと聞かされて、助氏は、闇澹と嗟歎の太息を洩らした。

「昨日か、おそくとも今日あたりは、往生院から御陣払いあるべしと思つていたのに！」

たちまち泪が、頬へ、ばらばらつとあふれこぼれた。

「虎夜叉どの。おん身の力で、なぜにお支えなされなんだ？」

語尾が、嗚咽にまじつた。

「泣くな、助氏！ わしの力では、及ばなかつたのだ」

虎夜叉は往生院での、兄正行との訣別を物語つた。

## 六

「——おそらく、こうなるのは、不可避な約束事だつたと思う。——歳晩の二十八日には、兄上のお気持をひるがえし得たと感じて、わたしは安堵して往生院から戻つたのだが、三日の晩のお手紙で——噫、兄者は、兄者御自身の道を行かれるほかないだろうと、そう考えた。だが、二千の兵を失うのは、現実たまらない痛事でござるからのう——わたしは、夜明けも待たずに駆け参じて、言葉をつくした次第は、今お身の耳に入れた通りじや」

助氏がうなずくと、虎夜叉は、

「それゆえ、歎いている時ではないのだ」

と、云つた。

横尾の将士は、愕然と、一斉に生気を失くした。城の主將の助氏には甥にあたる、高家、源秀、新五郎の三兄弟が、五百の手兵をつれて、正行の麾下にあつたのだから、全滅の悲報にぎくりとなつたことは当然だつた。この城の人たちにとっては、昨日の合戦は、およそ寝耳に水だつた。戦場から遁れてきた敗兵は、みんな手負いだったので、一人残らず東条に收容されたため、そうした物凄い戦のたゝかわれたことを告げる者がなかつたのである。

「芥子茶の旗と、鬮腰の差し物とが、一番強かつたという」

和田の兵がどんなに奮戦したかを、そして新発意源秀がいかに悍猛に闘つて、最後の一人になるまで師直に迫つたかを、虎夜叉は話した。

助氏が、

「まことの師直の首、搔かせたかつた！」

と、そう歎じると、虎夜叉が頭をふつた。

「いや、討ちもらした方が、よかつた」

「え？ なんとおっしゃる？」

「師直は、生かしておく方が、よいと申すのだ」

「ほ！ 異なお言葉を聞く」

ますます驚ろいて、助氏は眼をみはつた。

「わしも、一たんは、せめて師直を斃せたのなら——と、思わずにはおれなかつた。身代りになつた影武者の、偽首を、兄上が手玉にとつて喜ばれたことは、さつきも和殿に話したが、この虎夜叉とて、感情からいえば——肉親の兄が、それを偽と知つた時の無念さを思うと、おぼえずほろりとなつた」

「はて——？」

助氏は、不審げに、顔をかしげた。

「では、理性から言われますと？」

「静かに考えると、偽首で——むしろよかつたと云える」

「もし！ 今日、お戯れ口でもござるまいに——」

と、苦笑すると、

「冗談どころか」

と、虎夜叉も微笑して、

「わしは、急ぐのだ。早う准后にお目にかゝろう」

そう云いつゝ起つた時、

「しばし」

「まあ後で——」

「御冗談でなくば、理由が聞きたい」

「理由は簡単じや。たゞ師直の生存が必要なのだ」

「ほう、師直の生きておることが——？ 賊軍の大將の命が——？」

と、額をしかめながら、助氏も起つた。

「いづれ、和殿のうなずける時が来よう」

虎夜叉は、そう答えて、客殿の方へ歩きだした。

## 七

「この親房も、ひそかに、危ぶまぬこともなかつたが、大切な、恢復

の機運が、ようやく動こうとする時に、まさか——と思ひ直しておつたのに、さりととは逸まったのう！」

「しかし、それは兄の最善の道でござりました」

「おことも、そう信ずるのか？」

「そう信じます」

「病勢が、とみに昂じでもしたのか？」

「いえいえ、健康は、ふしぎなほど回復いたしました。兄は決して、病いゆえに、死をえらんだわけではござりませぬ」

「と？ 五万の大軍にむかつて——」

准后は、虎夜叉を見入って、

「一戦に雌雄を決した意図は？」

と、たずねると、

「日ごろの素懐を、実践に移すべき機会を、昨日の合戦に求めたのでござりまする」

そこは、城内の客殿であつた。

書院の上段の間には、さらに上置を置き、そのうえに厚い茵を敷いて坐っておられるのは、宮將軍、興良親王で、その傍らに、准后親房卿が、茵だけを敷いていた。

虎夜叉は、下段の間に伺候しているのだ。うしろには、助氏がひかえた。

そして、その下段の間の左右には、権左中弁と、木工頭信重とが坐っていた。権左中弁は、親王の扶であつたし、木工頭は、准后の諸大夫だつた。

「日ごろの素懐とは、湊川の死をならうことか？」

と、親房卿は、正行の四條畷の討死が、氣に副わぬものゝように云つた。「それが、兄にとりましての、理想でござりました。現身を、朝敵と戦うことによつて殺して、忠の精神を永劫に生かす。後世、末代——國家が、非常の時にあうたびに、人の心を、ふるい起たしめまする為に——」

「待たれい虎夜叉。——兵庫湊川の合戦の際と、現在とでは、場合形勢が違ふぞ」

「いえいえ、異いませぬ」

虎夜叉正儀は、きつぱりと抗弁して、

「尊き親王の御前をも、憚らず申し上げまするならば——」

と、慇懃に頭をさげた。

興良親王は、かしこくも今上の帝の、おん弟宮にましまして、おん歳は、十六歳でおわした。御生母は、准后親房卿の姫ぎみであつた。おん父帝はすなわち、後醍醐帝で、そして御外戚は親房の卿であるから、そのお天稟の英邁なのは、まことに故あることだつた。

だからこそ親房卿は、宮將軍としてこの槇尾の城に奉じ迎えまいらせたのであつた。

虎夜叉は、准后を仰ぎみて、言葉をつづけた。

「尊氏直義が、九州より攻め上つた際は、その勢十万と号しました。なれど実の兵力は、七万を超えなかつたと聞いております。このたびの師直師泰の軍勢は、確実に八万を算します故、まともに防いで、不可抗なる点、あの折も今度もまさしく同様にござりまする。あの時には、亡父正成の献策が、廟議によつて斥けられたと、そう仰せあるやも知れませぬが、もし亡父に、奇兵を用いる心算さえござりましたなら、如何ようにも手段ありしものと思われまする、御遷幸、御動座の議が、坊門卿のために一旦は御沙汰やみ、と相成りましても、時の勢いは、おのずから御動座を、おん余儀なからしめたではござりませぬか。さすれば、亡父におきましては、あくまで献策し、あくまで奇兵をも用いて敵にうち勝つ、という熱意よりも、正兵をもつて敗れ死すまで戦うということに、はるか烈しい情熱を感じたものに相違ござりませぬ。さればこの度、兄正行が、正兵をひつさげて往生院より動かず、ついに昨日、四條畷で討死つかまつた心は、さながら父正成の心にひとしいと、それがしは心得まする」

「なるほど」

と、親房卿はうなずいて、

「いかにもお許らしい、うがった観方じゃ」

そう云つて、しばし思案の面持ちであつたが、

「虎夜叉。お身とても極力、とめ支えたではあるが——兄殿の決心、堅きを知つて、求むる道を踏ましめたというわけか」

「さようござりまする」

と、正儀が答えた。

准后は、ふたゝびふかぶかとうなずいて、

「では——去年の暮に、お許の城で、親しく談合いたしおいた事を

——いそぎ運ばずばなるまいかの？」

そうたずねると、

「なにとぞ！」

虎夜叉の眸は、俄然かざやいた。

「正儀。——御遷幸を仰ぐだけの、時日の余裕が、ござろうかのう？」

「それは充分に、ござりましょうぞ」

准后の眼には、大きな決断が光つた。

「さらば、即刻、吉野へ戻り参つて、御動座を奏請し奉ろう——お許、東条を何日も、離れ得るかな？」

「は、両三日ならば——」

去年の暮、十二月十八日の夜、親房卿は、吉野からこの榎尾城へ出馬の途中、東条の城に一泊した。虎夜叉が、行在御遷徙に関する重大な策を、准后に献じたのは、その時であつた。

それは——先帝後醍醐のみかど以来、十年の行在所だつた吉野から、丹生川の上流、穴生へ、行宮を移しまいらせ、いかなる大軍の来寇にあつても、なお不敗の地に立つて戦い得るように備える、ということだつた。勿論これは、極めて思いきつた、姑息な心胆なら忽ち寒くなるような提案にちがひなかつた。けれども親房准后は、それを立ちど

ころに容れた。

親房卿は、その時が初対面であつた楠の末の弟に、非凡、俊髦の器を觀てとつた。じつさい、虎夜叉が准后にその夜初めて謁したということは、遅すぎた憾みがあつた。しかし正行と正時という二人の兄をもつ、三男の、二十歳の虎夜叉としては、それに長兄の正行さえ、やつと昇殿を許されたばかりの、楠の乙としては、当然だつたともいえた。とにかく、相見るまでは、准后も、この虎夜叉については、むしろ悪い噂ばかり聞いていた。秀才ではあるが、素行が成っていない。頭脳は明敏でも、人格が下劣だ。武芸は出来ても臆病で腰ぬけだし、わがまゝで、ひねくれていて、意地まがりだ、冷淡だ。不肖の子だ。不似合いな弟だ。正成の位牌と、正行の顔に、泥をぬる。というような評判だつた。ところが——。

聞くと見るとでは、大変な違ひだつた。

先帝の遣し給うた吉野朝の家宰、聡明で練達な、五十六歳の准后、北畠一品卿が、弱冠二十歳の虎夜叉に対して、一見旧知のごとく親しめたばかりか、ほとんど傾倒するような氣持にまでなれたのであつた。

「准后の卿。さぞかし、御説得には御骨折れのことござりましょうぞ」

と虎夜叉が云つた。

「む。二条、花山院——洞院、冷泉——あまり樂ではなからうの」

と准后は答えた。

——第一巻 終——